風が吹いたら恋をしよう。

虹色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風が吹いたら恋をしよう。

【Ｎコード】
Ｎ９９２６Ｘ

【作者名】
虹色

【あらすじ】
恋人に裏切られて傷つき、「もう恋なんてしない！」と決心している紫苑（しおん）と、紫苑に幸せな恋をもたらす使命を持つ“恋風（こいかぜ）”のユウ。人を好きになることが怖くて、仕事も友人関係も充実していることに満足している紫苑に、ユウが新たに出会わせたのは、笑顔のカワイイ優斗。優斗の登場で、同僚の龍之介との関係も動き出し・・・。恋も手先も不器用な紫苑は、こんどこそ幸せな恋にたどりつくことができるのか？　そのときユウは・・・？　ほんのり甘くて、ちょっぴりせつない、紫苑と誰かさんのおはなしです。　毎日

更新の予定です。

1　ユウ

――　紫苑（しおん）。紫苑。泣かないで。

「・・・誰？」

――　僕だよ。今、生まれた。

「生まれた？」

――　そうだよ。僕たちは、人間が悲しい恋をしたときに生まれる。

「どうして？　何のために？」

――　その人間を幸せにするために。

「幸せに？」

――　うん。幸せな恋をしてもらうのが、僕たちの仕事。僕は紫苑が幸せな恋をするための手伝いをするよ。

「幸せな恋・・・。」

――　そうだよ。だから、泣かないで。

「もう、恋なんてできない。」

――　そんなことない。僕には分かってる。

「うそ。信じられない。」

――　紫苑。幸せな恋の相手はたった一人だけじゃないんだよ。

「え？」

――　人間には幸せになれる相手は、けっこうたくさんいるんだ。でも、気付かないだけ。

「それじゃ・・・“運命の人”　っていうのは、デタラメ？」

――　気付いたことが運命だって考えれば、デタラメとは言えないけど。

「ああ・・・そうだね。」

――　僕は紫苑が幸せになれる相手と出会うきっかけを作るのが仕事。

「きっかけ？」

――　そう。チャンスを作る。

「チャンス・・・。」

――　それを活かすかどうかは紫苑次第だよ。

「“これがチャンスだ”　って分かるの？」

――　それも紫苑次第。

「じゃあ、いつも気を付けていなくちゃいけないの？」

――　たぶん、無理。

「どうして？」

――　僕たちが人間と話せるのは夢の中に限られているし、その夢も、人間が目を覚ましたら忘れてしまうことになっているから。

「・・・じゃあ、何もないのと同じだね。」

――　紫苑の頭の中ではね。だけど、僕がついているから、幸せな恋のチャンスはほかの人間よりも多くなるよ。

「ふふ。なんだかキューピッドみたい。」

――　笑ったね、紫苑。その方がいいよ。でも、僕はキューピッドではないよ。人間の心に影響を与えることはできないから。

「じゃあ、あなたはなあに？　守護霊・・・とか？」

――　そんなに強力な力もないよ。まあ、ちょっとした風みたいなものかな。僕たちは自分たちを『恋風（こいかぜ）』って呼んでる。

「『恋風』・・・。」

――　うん。きっかけを作るときに、風を使うことが多いから。そ

れからね、僕たちを生んだ人間に名前を付けてもらうんだよ。

「名前？　じゃあ、あなたにはあたしが付けるの？」

――　そう。

「名前・・・。」

――　紫苑の心の中に浮かんだ名前。

「あなたの名前は・・・・・ユウ。」

――　ユウ・・・。好きだな、この名前。ふんわりして、優しい。ありがとう。

「よかった。ユウはどんな人・・・どんな恋風なの？」

――　僕たちは、自分たちを生んだ人間に幸せになってほしいと思うだけの存在。

「子ども？」

――　一緒にいる人間に合わせて変わって行くよ。いつも紫苑と同じくらいと思ってて。

「じゃあ、中学生だね。・・・これからずっと、あたしに付いててくれるの？」

――　紫苑が幸せになることが確実になるまで。

「でも、あたしはユウのことは覚えていない？」

――　夢の中で会ったら思い出せるけど、僕もいつでも自由に夢に入り込めるわけじゃないんだ。

「そう・・・。でも、一緒にいてくれるんだね？」

――　そうだよ。紫苑が幸せになるまで。

「じゃあ、一人じゃないんだ・・・。」

――　うん。紫苑は一人じゃないよ。

「ありがとう、ユウ・・・。」

・　・　・　・　・

あれ？

寝ちゃってた？

机に突っ伏して・・・泣いたまま寝ちゃったんだ。

泣いたまま・・・。

隆くんがあんなこと言うから。
内緒で話があるって言うからドキドキして行ったのに、隆くんが言ったのは
「俺、三崎のこと好きなんだ。頼む！　協力してくれよ！」
だった。
三崎真由ちゃん。
おとなしくて女の子らしい、あたしの親友。
幼馴染みの隆くんのこと、ずっと好きだったのに。
あたしの気持ちには気付かないで、真由を選んだ。
「いいよ。」
って言うことしかできなかった。
それだけじゃなくて、
「真由を選ぶなんて、目が高いね！」
なんて、冷やかしてみたりして。
隆くんと真由なら、きっとうまく行くだろうな。
スポーツなら何でも得意な隆くんと、手芸部で女の子らしい真由。
お似合いだ。
二人とも優しくて、思いやりがあるし。
あたしは気が強いだけで、いいところなんてない。

だけど・・・。

幼稚園のときから一緒だった隆くん。
一緒にいるのが当たり前だと思ってた。

好きだって気付いたのは6年生のとき。
あのときから、バレンタインのチョコは本命だったのに。
男の子は子どもっぽいから、あたしの気持ちに気付かないんだと思ってたのに　――　いつの間にか、真由のことを見ていたんだね。

なんとか家まで泣くのを我慢して帰って来た。
みんなと笑いながら話して帰って来たって、すごくない？

家に付いてからは、玄関から自分の部屋に直行して、そのまま泣いた。
たくさん、たくさん。
タオルが涙と鼻水でぐちゃぐちゃになるほど。
絶対に夕飯なんか食べられないし、明日は学校に行きたくない。そう思った・・・のに。

今はなんだか落ち着いてる。
お腹も空いた。

たくさん泣いたから？
それとも、眠ったのがよかったのかな？

隆くんのことは仕方ない。

人の心を操ることなんてできないんだから。
それに、あたしは嫌われたわけじゃない。
隆くんがあたしに協力を頼んだのは、あたしのことを信用してるから。・・・幼馴染みの友達として。

大好きな隆くん。それに、大好きな真由。
二人が仲良くなれるように協力するよ。

あたしは・・・次に誰かを好きになったときには、その人に自分を選んでもらえるような、ステキな女の子になるよ！

1　ユウ（後書き）

お楽しみいただけたら嬉しいです。

どうぞよろしくお願いします。

2　紫苑（1）

――　紫苑。高校の制服、よく似合うよ。紫苑のために、僕、がんばるよ。

・・・さて。

この学校で紫苑が幸せになれる相手は、今のところ1、2、3・・・・・16人か。
出会うタイミングも重要だよね。
それに、お互いに“この人だ！”って気付くかどうかわからないし。
とりあえず、一番最初は・・・だ、れ、に、し、よ、う、か、な？

うーん、彼か。
親切が服着て歩いているみたいな男の子だね。
同じクラスだし、入学した日にちょっとしたきっかけがあるのはいいかも。

「ええと、・・・谷村さん、だっけ？」

「あ、はい、そうですけど？」

「髪に葉っぱが絡まってるよ。」

そうそう、いい感じ。
柔らかくて長い紫苑の髪は、いつもみんなに褒められてるもんね。
「え？　うわ。何でこんなに？　しかも、葉っぱっていうより、草？！」
「草むしりしてるところを通ったりした？　それか、原っぱででんぐり返しをしてきたとか？」
「してないよ！　やだ～、取れない！」
うん。
それを一緒にとりながら仲良く・・・。
「もういいや！　このまま帰る！」
え？
「え？」
「お腹空いたし、どうせ歩いて15分だから。田中くん、教えてくれてありがとう。じゃあね。」
ああ・・・。
彼、自分が嫌がられたんじゃないかと思ってるよ・・・。
もう少し愛想よくできなかったのかな。
それとも、髪にくっつけた草が大量すぎた？

・・・・・・

高校生活にも慣れてきたし、そろそろ次のきっかけがあってもいいよね。
なんだか沈んだ顔をしてるし。
飛んで行ったものを拾ってくれた人っていうシチュエーションはどう？
紫苑の手に持っているそれ。

「あ！」

「・・・？」

やった！　うまく拾ってくれたよ。
これでお互いに視線を合わせて・・・。

「見ないでっ！」

え？

「ぷ。」

彼、笑い出した？

「谷村紫苑さん？」

「だめっ！」

紫苑、ひったくったりしたら失礼なのに。
でも、彼、笑いっぱなし・・・？
あ、お礼も言わないで走り出すなんて。

「やだ、も～！　名前まで見られたし！」

うーん。
１５点のテストじゃ、相手を観察する余裕なんてないか・・・。

・　・　・　・　・

どうもうまく行かないな。
僕がまだ経験が浅いせいかもしれないけど。

あ。
よくあるパターンだけど、転がって来たボールを渡すっていうのはどう？
ほら紫苑、このサッカーボール。
取りに走って来た彼は、候補者の中では一番の運動神経の持ち主・・・そんなに近付いてから蹴っちゃダメだよ！

「！！」
「あ。」

倒れちゃった・・・。
顔面直撃だもんね。

しゃがむのが面倒だからって、いきなり蹴るなんて。
彼、無防備な状態だったから、避けられなかったんだよ。
あーあ。
鼻血出ちゃってるし、みんなの前でやられたってところで、もう紫苑にいいイメージを持ってもらうのは無理だね・・・。

・・・・・

よし、今度こそ！
タオルならぶつけられても怪我しないし。
球技大会で活躍してる彼の・・・。

「あの、タオル落としましたよ。」

よし、うまく行った！

「ああ、ありがとう。」

うん、いい感じ。
そのままにっこりと・・・って、紫苑、そっちの彼じゃないよ！
どうして隣にいる方に見とれてるの？！
もう！
紫苑がそんなに見た目重視だとは思わなかったよ・・・。

・・・・・

――　紫苑。がっかりしないで。
「・・・誰？」
――　僕。ユウ。
「ユウ？」
――　覚えてない？　紫苑に名前を付けてもらった恋風。
「・・・・・あ、そういえば。」
――　失恋しちゃったね。

「あの人、あんなに浮気者だったなんて。・・・そういえば、ユウって、あたしの恋のきっかけを作ってくれるんじゃなかった？」

――　そうだよ。

「全然仕事してないよね？」

――　そんなことないよ。

「でも、ちっともチャンスなんて巡って来ないし、今日なんか失恋しちゃったよ。」

――　チャンスは何度か作ったよ。それに、今回のはそもそも紫苑が間違えたんだよ。

「間違えた？」

――　僕が選んだ相手の隣にいた人を紫苑が好きになっちゃったんだから。

「ええ？　そんな！　ちゃんと分かるようにしてくれないと。」

――　無理だって。普段、紫苑は僕のことは忘れてるし、僕たちは人間の心に影響を与えることはできないんだから。

「役に立たないなあ。」

――　失礼な！

「ねえ、チャンスを作ってくれた相手って、誰？」

――　それを訊いてどうするつもり？

「その相手となら、幸せになれるんでしょう？　今度は自分で頑張ってみる。」

――　無理だよ。目が覚めたら忘れてるんだから。

「そうか・・・。でも、誰？　知りたい。」

――　がっかりするかもよ。

「それでもいいよ。」

――　同じクラスの田中くん。

「え？！　ものすごくいい人だけど。」

――　そうだよ。初日に紫苑の髪に葉っぱがついてるのを教えてくれただろ？

「もしかして、あれがユウの？　葉っぱじゃなくて、草があんなに・・・。」

――　うん。紫苑は面倒くさがってさっさと帰っちゃったけど。

「初日でどんな人か分からなかったからなあ。もったいないことをした・・・。それだけ？」

――　2年の寺田聡っていう・・・。

「その名前、聞いたことがある・・・。」

――　すごく勉強ができる人だよ。数学の全国大会とかに出たって。

「そんな人と接点なんか・・・。」

――　作ったんだよ。紫苑の答案用紙を飛ばして。

「ん・・・？　まさか、あの１５点の？！」

――　うん、そう。もう少し落ち着いてお礼を言ってれば、勉強を教えてもらえたかもしれないのに。

「無理でしょうね、そんなことは。呆れられただけだと思う。」

――　あとは、サッカー部の・・・、

「まさかあのとき？！　あたしが蹴ったボールで鼻血出しちゃった・・・？」

――　そうだよ。紫苑がちゃんと手で持って渡してあげてればね。

「・・・そんなことくらいで仲良くなれるとは思えないけど。」

――　まあ、あくまでも“きっかけ”　だから。

「なんだか、小さすぎるような・・・。インパクトで言えば、あたしの反応の方がよっぽど・・・。」

――　じゃあ、相手に強い印象を与えるっていう役には立ってるじゃないか。きっと、紫苑のこと忘れられないよ。

「意味が違う・・・。」

――　大丈夫だよ、紫苑。まだ何人もいるから。

「本当に？」

――　うん。それに、僕もだんだんチャンスを作るのが上手くなるから期待してて。

「期待って言ったって、忘れちゃうんでしょう？」

――　ああ、そうだった。

「まあ、いいや。なんだか、失恋したことも気にならなくなってきた。」

――　よかった。紫苑は元気に笑ってるのが一番いいよ。

「ありがとう。ユウ。」

・　・　・　・　・

「紫苑先輩。今までありがとうございました。」

「やだ、あたしが泣いてないのに、みんなが泣いちゃうなんて変だよ。」

「だって、先輩が卒業しちゃうと思ったら淋しくて・・・。」

「何言ってんの。部活を引退してからずいぶん経つのに、今さら淋しいなんて言わないでよ。」

「凹んだボウルや歪んだ泡立て器たちを見る度に先輩を思い出します。」

「ああ・・・。女の子らしくなれるかと思って家庭科部に入ったけど、あれほど向いてないとは思わなかったわ・・・。」

「でも、とても楽しかったです！」

「たしかに見ている人は楽しかったでしょうね。」

あっという間の三年間だったね、紫苑。
入学初日に同じクラスの男の子ときっかけを作ってあげてから僕もだいぶ成長したと思うけど、未だに紫苑は幸せになる相手とまとまらないまま、今日、高校を卒業する。
紫苑は入学したころに比べると、ずいぶん落ち着いて、しっかり者になったよね。

不器用なのはどうにもならなかったみたいだけど。

僕は紫苑をずっと見て来た。
紫苑が友達関係や勉強、部活をがんばってきたことを、僕はちゃんと知ってる。
だから、紫苑に幸せになってほしいって、前よりもずっとずっと強く思ってる。

だけど・・・紫苑は恋についてはあんまり敏感じゃないね。
僕が選んだ相手が紫苑に興味を持っていたこともあったし、僕とは関係なく紫苑のことを好きになった子もいたのに、紫苑は気付かないか、失敗するかで、どれもうまくいかなかった。
僕が慰めるために紫苑の夢に入り込んだのは2回だっけ？

まあ、まだ18歳なんだから、これからいくらでも相手は見つかるからね。

――　一緒に頑張って行こう、紫苑。

3　紫苑（2）

――　紫苑。心配いらないよ。大丈夫だよ。

「・・・ユウ？」

――　そうだよ。お母さんの病気、ちゃんと治るから。

「本当に？」

――　少し時間がかかるかもしれないけど、大丈夫。

「・・・よかった。」

――　紫苑は大学の勉強と家事で、忙しくなるね。

「でも、お母さんが元気になるなら頑張れる。妹と弟も手伝ってくれると思うし。」

――　僕は見守ることしかできない。

「それでもいいよ。一緒にいてくれれば。」

――　いつも一緒にいるよ。

「ありがとう。ユウ。」

・・・・・・

いつも頑張り屋の紫苑。
お母さんが倒れてから1か月。
家事も早起きも得意じゃないのに、妹の椿ちゃんと弟の蓮くんのお弁当を作って。
お母さんの病院に毎日のように通って。

きみの心の支えになるような人と出会わせてあげたいけれど、今はそれどころじゃないね。

紫苑?

きみ、もしかして桜井先生を・・・?

あの人はだめなのに。
ああ、どうしよう?

お母さんの主治医だから会うのをやめさせることはできない。
それに、優秀で優しい人だよ。

だけど・・・紫苑の相手じゃないんだよ。
あの人とは幸せになれないよ・・・。

ねえ、紫苑。
ほかの人を見て。

・・・・・

「谷村花江さん、退院おめでとうございます。」
「桜井先生・・・。たいへんお世話になりました。」
「一週間後に外来の予約が入っていますから、忘れずにいらしてください。」
「はい。ありがとうございます。」
「それから、あのう・・・。」
「はい、何でしょう？」
「お嬢さんを・・・紫苑さんを食事にお誘いしてもいいですか？」
――　え？
「は？　紫苑を・・・？」

「さ・・・桜井先生?!」

「はい。紫苑さんとお付き合いさせていただきたいのですが。」

「・・・紫苑?」

「あの・・・、はい、お母さん。わたしも先生が・・・。」

――　ああ、お母さん!　だめだって言って!

「まあまあ、こんな子がいいだなんてわたしには分かりませんけど・・・ふふ。桜井先生でしたら、喜んで。ふつつか者ですけど、よろしくお願いします。」

――　お母さん!!　だめ!

「ありがとうございます。」

・・・・・

紫苑。

僕はどうしたらいい?

どうしたらきみを傷つけずに、桜井先生と別れさせることができるんだろう?

僕がきっかけをつくっても、きみの周りにいるほかの相手は、きみの目には入らない。
僕はただ、きみを見ていることしかできない・・・。

・・・・・

「紫苑が大学を卒業したら結婚しよう。」

「・・・本当に？」

「うん。あと一年後。今の仕事が一段落したら、指輪を買って、両方の家にあいさつをしよう。」

「ありがとう・・・。とても幸せです。」

・・・・・

――　紫苑。紫苑。泣かないで。

「いや！　誰とも話したくない！」

――　紫苑。・・・ごめん。

「・・・だれ？　どうして謝るの？　謝らなくちゃいけないのは、あの人だけ。なのに・・・。」

――　紫苑。僕は・・・そばにいたのに、何もできなかった。

「そばにいた・・・。ユウ？」

――　そうだよ。僕はいつもきみのそばに。

「あの人は・・・。」

――　紫苑。きみはあの人とは・・・桜井先生とは幸せになれないって決まっていたんだ。あの人は愛情で結婚する人じゃないって・・・。

「決まっていた・・・。」

――　だから僕は、きみとほかの誰かを引き合わせようとしたんだけど・・・。

「あたしは、あの人だけしか見ていなかった・・・。」

――　うん・・・。

「あの人、あの話が来たら、すぐに心を変えてしまった。」

――　・・・そうだね。

「あたしより、医者としての将来を取った。それとも、院長先生のお嬢さんって魅力的な人？」

――　全然。わがままなお嬢様だよ。紫苑の方がずっと可愛くて魅力的だよ。

「・・・ユウ。いつの間にお世辞なんか覚えたの？」

――　紫苑。僕は紫苑と一緒に成長してるんだよ。僕の成長は、紫苑の成長と同じ。

「あたしと一緒に・・・。ユウ。」

――　なに？

「ずっと一緒にいてくれる？」

――　うん。紫苑の幸せが絶対確実になるまで。

「あたし、もう誰も好きにならない。」

――　え？

「心変わりする人間なんて、いらない。ユウが一緒にいてくれればいい。」

――　そんな・・・。

「あたしが誰とも幸せにならなければ、ユウはずっと一緒にいてくれるんでしょう？」

――　・・・そうだよ。

「だったら、それでいい。ユウだけいてくれれば。」

――　紫苑。僕はここでしか会えない。それに、目が覚めているときには紫苑は僕のことは知らないんだよ。

「それでいい。・・・ユウ。」

――　なに？

「あたしの幸せが確実になったら、ユウはどうなるの？」

――　僕は・・・消える。

「消える？」

――　うん。いなくなる。

「だめ！」

――　でも。

「だめ。いや。ユウがいなくなったら、一人になっちゃう。」

――　ならないよ。そのときは紫苑は誰かと幸せに・・・・。

「そんな人、いらない。人間の愛情なんて、信じない。」

――　紫苑。

「ユウがいればいい。ずっと一緒にいて。」

――　・・・ずっと一緒にいるよ。紫苑が誰かの愛情を信じられるようになるまで。

「それはきっ　と、あたしの一生と同じ・・・・。」

・　・　・　・　・

紫苑。

きみの悲しい気持ちが僕に流れ込んでくる。

誰も信じられないという、今のきみの気持ちはよくわかる。

誰のことも好きにならないという決心も。

だけど。

僕はきみの現実ではないんだよ。

目覚めているときには話すことも、触れることもできない存在。
・・・存在することすら忘れている。
だから、紫苑、一人ぼっちと同じなんだよ。

それにね、紫苑。
僕たちはあんまり長く一緒にいない方がいいみたい。
あんまり長く一緒にいると、僕たち恋風が・・・その人間を愛するようになってしまうから。
そうなると、僕たちは仕事をするのが辛くなってしまう。自分がその人間から離れたくなくなって。
その人間が相手を見つけられなければ僕たちは一緒にいることができるけど、その人間の現実は・・・淋しいよ。

もちろん、世の中には一生一人の人もいる。
だけど、紫苑はそれを今、愛情が信じられないからと言って決めてしまってはだめだよ。

紫苑。

僕はこれからも、紫苑が幸せになれるように、仕事をするよ。
きみの心の傷がふさがるまで、ちょっと時間がかかるかもしれない。
でも、僕が慎重に計画を練る時間があった方がいいから、きっとちょうどいいね。

それまでは、紫苑が淋しいときに、夢の中に会いに行くよ。

――紫苑。待ってて。

4　秋のかおり

ふわ、と、少し甘い清々しい香りが風に乗って通り過ぎる。

あ。

何だっけ、これ？

ほら、毎年、秋の最初に香る花。

いつの間にか咲いて、一週間くらいで、あっという間に終わってしまう。

朝の交差点。

信号待ちで先頭に並んだまま、懸命に思い出そうとする。

あれだよね、オレンジ色の小さい花がいっぱい咲くやつ。

雨が降るとその花が一気に落ちて、木の下がオレンジ色に・・・。

「金木犀（きんもくせい）・・・。」

それだ！

・・・・・あれ？

あたしの疑問に答えるように右上からそっと聞こえた声は、自分のものであるはずはなく。

隣の男の人・・・？

！

やばい！

目が合っちゃった！

慌てて下を向きながら、ほんの一瞬目に映った相手の顔が、ビル群の隙間から覗く青空を背景に頭の中で再生される。

きれいな弓なりの眉と二重瞼の目、あまり高くない鼻と気まずそうに唇を噛むように結んだ口。セットしていないようなふわふわした髪型で、どちらかというと可愛い感じ？

そうっと窺うような様子は、たぶん、あたしも同じだったはず。

その直後、信号が青に変わり、その人の脚が先に動き出す。

ダークブルーのスーツ姿は、あっという間に同じような後ろ姿の波に紛れてしまう。

・・・びっくりした。

あんなにピッタリのタイミングで聞こえるんだもの。

まるで、あたしが考えていたことが分かったみたいに。

だけど、独り言だったんだよね？　あんなに気まずそうな顔をして。

見たりして、悪いことしちゃった。

勤務先のビルに着くまで、その人の顔を何度も思い出してしまう。

若い人だったから、独り言を聞かれたりして、すごく恥ずかしかっただろうな。

でも、隣で同じことを考えていたなんて、なんとなく可笑しい。

くすっと笑いそうになって、慌てて顔を引き締める。
思い出し笑いって恥ずかしいよね。

「おはようございます。」

「おはよう。」

それぞれの部屋に向かう廊下で女子社員たちが明るくあいさつを交わす声が、朝らしい雰囲気を醸し出す。

「谷村さん、そのカーディガン、綺麗な色ですね。」

パソコンのスイッチを入れたあたしに話しかけて来たのは、右隣の席の金子美乃里さん。
2年後輩で、今年の春に就職したばかり。
よく気が付く明るい人で、あたしはとても助かっている。

「ありがと！　気に入って衝動買いしちゃったの。」

薄紫と水色の中間くらいの色。淡い青紫？
今日は白いブラウスとチャコールグレイのスカートに合わせてみた。

「谷村さんの雰囲気にピッタリですよ。そのせいですか、楽しそうなのは？　それとも、何かいいことありました？」

「いいことって言うか、面白いことがね・・・。」

交差点でのできごとを話し始めると、またもや「金木犀」という言

葉が出てこなくて焦る。
あたしの頭、すでに老化が始まっているのでは・・・？

「えー・・・と、あの、ほら・・・金木犀！　あー、よかった！」
ほっとしたら、またあの男の人の顔が浮かんできて、思わず「ぷっ。」と笑ってしまった。

「谷村さん、面白い話って、話す本人が笑ってたら、聞く人はあんまり面白くなくなっちゃうんですよ。」

ちょっとつまらなそうに拗ねた顔をする金子さんはとても可愛い。
色白で、少し目尻の下がった大きな目に小さな鼻と口、柔らかいクセのある髪を背中の中ほどまで伸ばしている。
仕事中は一つにまとめているこの髪は、ほどくと肩から下のあたりがくるくると巻いて縦ロールみたいになるのだ。
今はショートボブにしているあたしの真っ直ぐなコシのない髪とは大違い。

大違いといえば髪だけじゃない。
あたしはあごのとがった小さめの顔に、端がきゅっと上を向いた口元がチャームポイントだって言われたことがある。
でも、それがきっぱりして頑固な性格を表してるって言う人の方が多い。
金子さんは柔らかい印象どおり、穏やかで素直な性格だ。
それに体型も、金子さんは緩やかなカーブを描く女らしい体型だけど、あたしは痩せ型で全体的に真っ直ぐな感じ。

「本当にびっくりしたよ、あんまりタイミングがよかったから。もしかして、自分が声に出して『ええと、ほら。』とか言ってたんじ

ゃないかって、慌てて思い出してみたりしてね。」

「谷村さん、声に出さなくても、そんな顔をしていたんじゃないですか？」

「え？　まさか、そんな・・・。」

人がいっぱいの交差点で、自分がジェスチャー混じりに首をひねっている姿が目に浮かんでくる。

「やだ！　いくら何でも、それはないよ！」

「うふふ。冗談です。でも、相手の男の人、どんな人でした？」

「どんなって・・・普通の。」

「普通？」

「あたしに独り言を聞かれたから何とも言えない表情をしていたけど、短い髪でスーツ着た若い男の人だった。」

「・・・たくさんいそうですね。」

「うん。あっという間に人込みに紛れちゃった。」

「なあんだ、残念。」

「どうして？」

「もしかしたら、谷村さんの運命の出会いだったかもしれないのに。

ただの“普通”の印象だなんて。」

ギュッと心臓をつかまれたような気がした。
あたし、おかしな表情をしてないだろうか？

「そんな・・・ことが、その辺に転がってるわけないでしょう？
さあ、仕事仕事。今日も忙しいよ。」

パソコンに向かいながら、胸がドキドキしている。
気付かれないように深い呼吸を何度も繰り返して、自分を落ち着かせる。
歯を食いしばりそうになるのをこらえると、じわりと目頭が熱くなる。

・・・あれから3年も経ったのに。

大学時代の桜井先生とのことは、自分の中ですでに解決済み。
だけど、あれ以来、あたしは恋をすることをやめた。
やめた、というよりも、怖いのだ。
誰かを好きになると考えただけで、桜井先生に裏切られたときの記憶がよみがえってしまう。

記憶・・・というか、そのときの状態。
胸が痛くなって、動悸が激しくなって、目まいがして、涙が出そうになって、手が震えて・・・。
こんな状態では、万が一、誰かに恋をしても、その間中ずっとその記憶につきまとわれることになる。
うまく行っても、自分がいつ捨てられるかとビクビクしながら過ご

すことになる。
精神的にも、身体的にもキツ過ぎる。
だから・・・もう、誰のことも好きにならない。
すっきりして、いいじゃない？
嫉妬とか、三角関係とか、面倒なことは何もない。
仕事は面白いし、友人には男女を問わず恵まれている。今の生活に大満足！
恋をできる人はすればいい。
でも、あたしには無理。あたしは恋なんてしない。

午前中に急ぎの仕事が入って、仕上がったのがお昼休みが終わると同時だった。
課長が「悪いね。」と労ってくれて、急がないで昼休みを取っていいよと言ってくれた。

・・・どこに行こうかな。

お昼休みを過ぎた時間帯だから、いつもは混んでいる店でもＯＫだ。
秋のさわやかな晴天が気持ちよくて、まわり道をして公園の中を抜けていく。
オフィス街のまん中だけど、緩やかな起伏のある芝生の原っぱとちょっとした林、無造作に咲いているような季節の花に囲まれた遊歩道があるかなり大きな公園。

コンビニで買って、ベンチで食べるのはどうかな？
うーん、一人じゃちょっと恥ずかしいか・・・。
遊歩道をぶらぶらと歩きながら考える。
気持ちが良くて、足取りはゆっくり、視線は空へ　――　。
あ！
こんなにのんびりしてたら、お昼を食べる時間がなくなっちゃう。
行かなくちゃ。
いつも混んでいて入れないカフェに決めて、足を速める。
前を歩く男の人を追い抜いた瞬間。
「紫苑。」
「え？　は、はい！」
つぶやくように後ろから名前を呼ばれて振り向くと、そこに目を丸くして立っていたのは“金木犀”の男の人だった。

5　秋の花

今朝の人に間違いないよね？
知り合いだったんだ。
でも、・・・誰だろう？

大急ぎで記憶をたどる。

顔では分からない。年は同じくらいだと思うけど。
今朝見たとおり、普通のスーツ。
学校時代の知り合いでは・・・ないと思う。
持っている黒いビジネスバッグも普通によく見かける感じだけど、
もう一つの大きな薄いケースは、何か図面が入っている？　ってこ
とは、設計とか、不動産関係・・・なの？

だめ。
思い出せない！

慌てているあたしの前のその人は、目をぱちくりさせたまま、あた
しを見ている。

こんなに驚いてるってことは、ものすごく久しぶりってこと？
それとも、ここで会うことが予想外だったから？
でも、こんなに一瞬で、あたしのことがわかったなんて・・・。
もう、訊いちゃった方がいいや！

「あのう・・・、ごめんなさい。どこでお会いしたのか思い出せな

いんですけど・・・。」

「え？」

あたしの質問にハッとして、その人は何度か瞬きをした。

「え、ええと、・・・今朝？」

・・・今朝？

え？

ってことは、やっぱり初対面・・・だよね？

「え？　あれ？　あの、名前を今・・・？」

しかも、下の名前だよ？！

なに？！

もしかして、ストーカー・・・？

「名前？」

あれ？

首をかしげてる？

・・・やだ！

もしかして、聞きちがい？！

みっともない！

「ごっ、ごめんなさい！　わたしの聞き違い・・・・・。」

そのとき、その人はふっとあたしから目を離し、あたしの肩の後ろの方を見て、何かを了解したように明るい表情をした。
それからもう一度、あたしを見て。

「紫苑さん？」

今度は聞きちがいじゃない・・・よね。

「・・・はい。」

うなずきながら返事をする。
間違いなくあたしの名前だけど、何故知っているのか納得できない。
やっぱりストーカーでは・・・？
爽やかな普通のサラリーマンに見えるけど、見た目だけじゃ、どんな人かはわからないもんね。

もう少し距離を取ろうと足を動かしかけたところで、その人がにこにこしながら、もう一度、あたしの肩越しに何かを見たことに気付いて振り向くと　――　。

紫苑の花が揺れていた。
遊歩道から少し下がったところにたくさん。
細い緑の茎の先に薄紫色の花びらの小さめの花をいっぱい咲かせて、ゆらゆらと風に吹かれて。

「驚かせてすみません。僕、独り言を言うクセがあって。」

恥ずかしそうに頭をかきながら、その人は下を向いてそんなことを

言う。

独り言・・・。
つまり、名前を呼ばれたと勘違いしたのはあたし？

恥ずかしい！
しかも、ストーカーの疑いまでかけたりして！

「あのっ、こちらこそ、すみません！　ただの独り言に反応したりして・・・！」

慌てたあたしは不用意に「ただの独り言」なんて言ってしまい、その人はまた今朝みたいな気まずい顔をする。

ああ、もう！
あたしって、どうしてこうなんだろう？！
他人に聞こえるような独り言って、恥ずかしいに決まってるのに、わざわざ声に出して言っちゃうなんて。

「あ、あ、あの、ごめんなさい！　失礼しました！」

もうこれ以上は無理！
ごめんなさい！

頭を下げて、振り向いて走り出す。

ごめんなさい！
一日に2回も気まずい思いをさせたりして！
きっと、もう会いませんから大丈夫です！

「・・・というわけで、ダッシュで逃げて来たの。」

「ははは！　紫苑らしくて笑える！」

社内の友人たちと来ている居酒屋。
テーブルの向かい側で龍之介が大きな声で笑う。

「紫苑って、感覚器官と口が直結してるみたいだもんな。」

「・・・何よ、それ？」

「つまり、見えたり聞こえたりしたことに対して、脳を通さないで口が動くってこと。」

「何言ってんの？　ちゃんと返事とか会話になるんだから、脳で反応してるに決まってるじゃん！　むしろ、反応が速いってことでしょ。」

「紫苑の場合、ちょっと惜しいんだな。反応する前に、“言っていいことかどうか考える”っていうのがないと、大人とは言えないよなあ。」

「ふん！　龍之介だって、自慢できるのは体力だけのくせに！」

龍之介　――　高木龍之介は同期入社の友人。
入社時から不思議と気が合って、お互いに遠慮なく何でも言い合える間柄。

なぜか最初から、あたしのことを名前で呼んでいる。だから、あたしもそうしている。

“龍之介”　なんて文豪と同じ名前でありながら、まるっきり体育会系人間で、忙しい毎日でも筋トレやジョギングを欠かさないらしい。

背が高いし、今みたいにワイシャツ姿になっていると、がっちりした体格であることがよくわかる。

ツンツン立てた短い髪と、切れ長な目のちょっと精悍な顔つきは、サバサバした性格とよく合ってると思う。

「わたしは谷村さんに“運命の出会い”　じゃないかって言ってるんですけど、谷村さんは笑い飛ばすだけなんですよ。」

午後にあたしから話を聞いていた金子さんは、隣で不満げな口調。肩からくるくると胸元にかかる長い髪と、からし色のリボンブラウスが女の子らしくてとても可愛い。

「紫苑にはそんなのあり得ないな！　あったとしても、紫苑の性格じゃ、出会った途端に、相手がびっくりして逃げて行くだけだろう。」

ガハハ、と豪快に笑って否定されたことに「失礼な！」なんて怒ったようなふりをしながら、心の中でほっとする。

普通の女の子の金子さんがロマンティックなシチュエーションに憧れるのは当然で、あたしもある程度は普通の女の子の反応をしなくちゃいけない。

でも、本当にそんなことが起こるのはイヤ。怖い。

考えただけで、ドキドキして、手が震えそうになる。

だから龍之介が、あたしにはあり得ないと保証してくれたことが、あたしにはとても有難いのだ。

「だけど、珍しいね、男で植物に気が付くのって。」

斜め向かいで一年先輩の真鍋さんが口を開く。

「俺なんか、チューリップとかひまわりとか、ありきたりの花しかわからないよ。だいたい、紫苑っていうのが花の名前だってことも、今さら気付いたくらいだから。」

「まあ、花屋さんでメインになるような花じゃないですから。」

「谷村さんのこのカーディガンみたいな色の花なんですよ。ああ・・・きっと、金木犀さんには、紫苑の花を背景に立っている谷村さんのことが、花の精みたいに見えたに違いありません！」

金子さん・・・。

夢見る女の子全開！　って感じ？

胸の前で手を握り合わせて目をキラキラさせてると、あなたの方が妖精みたい。

あんまり可愛らしくて、あたしも思わず微笑んでしまう。

一緒に来た男性陣も見惚れてぼんやりしちゃってるし。

だけど。

「“金木犀さん”　？」

「はい！　あたしが名付けました。また会いそうな気がするので、その時のために。」

「ふうん。」

いくら何でも、そんなに偶然は重ならないでしょうね。

「あ。この香りだよ。ほら、金木犀。」

あたしの住むマンションへの道を歩きながら、龍之介に教えてあげる。

「え？　どこ？」

鼻をくんくんさせながら左右に顔を向ける龍之介の様子が可笑しい。

「龍之介、しかめっ面になってるよ！」

あたしが笑っても、龍之介は平気な顔で「全然わからないな。」と言った。

飲み会で一緒になると、龍之介は必ずあたしを送ってくれる。
これは、ちょうど2年前にあたしが一人暮らしを始めてから、ずっと習慣になっていること。

2年前、引っ越して半月ほど経ったころの飲み会がたまたまいつもより長くなり、電車の中で、あたしはうっかりしていた自分を心の中で叱っていた。

その何日か前に、残業で駅に着くのが１０時過ぎになったとき、途中で男にあとをつけられたのだ。
気が強いあたしでも、さすがにそういうのは恐い。
住宅街のそのあたりはその時間帯になると人通りが少なくて、塀に囲まれた家が続いている道は、逃げ場所がない気がした。
マンションまでついて来られるのが恐くて、少し手前の街灯の下で勇気を出して振り向いたら相手が逃げ出してくれたので、その隙にあたしも走って帰ったのだった。

これからは残業も早めに切り上げようと思っていたのに、その日は先輩の瑠璃子さんの結婚話というおめでたい話題で盛り上がって、遅くなってしまった。
振り返られて慌てて逃げるような相手だからもう出るわけないよと自分を励ましているときに、乗り換え駅で、龍之介が一緒に帰ると言ったのだった。

「この時間だとバスの本数が少ないから、そっちから歩いて帰った方が早いんだ。」

どれほどほっとしたことか。

引っ越し先がその部屋に決まったとき、龍之介が近くに住んでいるとは聞かされていた。
そのときは「ふうん。」くらいしか思わなかったけど、こういう状況になってみると、本当にありがたい。
龍之介はあたしのマンションよりもう少し奥まったところに家族と住んでいて、こっちの駅からだと、あたしのところをまわって徒歩２０分くらいだということだった。
通勤では、二つ先の乗り換え駅までバスで一直線に出ているけれど、大学まではこちらの路線を使うことが普通だったそうで、このあた

りの地理には詳しい。

その日、ほっとしたあたしは、龍之介に対するいつもの気安さで、帰り道であとをつけられたことをペラペラとしゃべってしまった。それからずっと、お酒の会で一緒になったときには、龍之介はあたしを送る役割を引き受けてくれている。

何度か、もう大丈夫だからと断ろうとしたけど、

「何かあったら寝覚めが悪いし、どうせ通り道だから。」

と言って。本当は少しまわり道らしいのだけれど。

はじめは、龍之介に期待されてたりしたらちょっと困るな、と思ったこともあった。

でも、何度か送ってもらったあとも龍之介の態度が変わらなかったから、あたしは龍之介の親切をありがたく受けることにした。

龍之介があたしを送るのを知った職場の人たちがそれを当然のことと受け止めていて、変に気を遣ってきたりしなかったので、大人の世界ではこれが当たり前なんだと納得した。

そして、2年。

送ってもらうのは、いったい何回目だろう？

いつものとおり、マンションの前で、あたしが2重のガラスドアを通り抜けるのを見届けてから、軽く手を上げて龍之介は帰って行く。

そういえば、まだ龍之介には好きな人はできないのかな？

彼女ができたら、さすがにこれはお終いにしなくちゃね。

6　≪波紋≫（前書き）

サブタイトルが単語１つの回は、ユウが登場します。

6 ≪波紋≫

――　紫苑。

今日、僕はきみの人生の池に小さな小さな石を投げた。
紫苑の小指の爪くらい小さな石だけど、それは小さな波を作って、
だんだん大きくなる輪を何重にも描きながら広がっていく。

桜井先生のことがあってから今までの間にも何度か試してみたけど、
紫苑は気付かないか、気付いてもずっと無視してきたね。
紫苑が“誰のことも好きにならない”って、固い決心をしていたから。

だけど――。

時間は悲しみを抱えた心に優しい。
それに、紫苑はいつも優しい人たちの中にいただろう？
そういう日々の中で、紫苑は少しずつ変わってきている。

今は、誰かを愛せるはず。
その人を信じることができるはず。

紫苑はそれに気付かないだけ。

僕は紫苑のことをずっと見ていた。

家族を心配させないために悲しい心を隠して、お母さんを手伝っていた紫苑。

大学でも笑顔を絶やさなかった紫苑。
・・・大学の友達はみんな、紫苑と桜井先生のことを知っていたから辛かったよね。
就職して、紫苑の過去を知らない人たちに囲まれるようになったときには僕もほっとしたよ。

お母さんが健康に太鼓判を押されて、一人暮らしを始めた紫苑。

職場の同僚からの何気ない「彼氏は？」という質問に、辛い気持ちを隠して、明るく返事をしていた紫苑。

はきはきした受け答えで、電話の応対ではいつも褒められている紫苑。
苦手だった事務機械の扱いも頑張って、今ではみんなに頼られるほどになったもんね。

素直で、親切で、他人の苦手なことをわかってあげることができる優しい紫苑。

たくさんたくさんいいところがあって、素敵な女の子になった紫苑。

僕が投げ込んだ小石。
波紋が広がっていくよ。とても小さいけれど、何重にもなって。
今までに投げ込んだ小石にもその波がぶつかって、また新しい波も生まれるはず。

僕はもう少し頑張るつもり。
紫苑がちゃんと気付くように。
ちゃんと気付いて、選べるように。

頑張るって言っても、昔みたいに闇雲にではなく、慎重にね。
僕だって、紫苑と一緒に成長しているんだよ。

――　紫苑。

僕の大切な紫苑。

僕はこれを最後のプレゼントにしたいんだよ。
最後で最高の　――　。

そうじゃないと、僕は・・・。

だから、紫苑。

ちゃんと気付いて。

人を愛することを怖がらないで。

僕の、大切な、大切な紫苑。

紫苑が幸せになる日まで、僕はずっとそばにいるよ。

そして、紫苑が淋しい日には、夢の中に会いに行くよ。

7　秋の月

朝の通勤時間帯の駅は、人の流れに乗るのがたいへん。
もう2年半も同じ駅で降りているのに、未だに人とぶつかったり、前の人の踵を踏んでしまったりする。
自分がそういう人間だって分かっているから気を付けてはいるんだけど、それが却ってよくないのかな？
それとも、そういう運を持って生まれて来ているんだろうか？

改札を通るために、バッグからパスケースを取り出したところで、前を横切った男の人の腕が勢いよく手にぶつかった。
その勢いで、パスケースが手から離れて飛んでいく。

「あ。」

急いで振り向いて地面を見たら・・・ない？
落としてもすぐに目に付くように、鮮やかな水色を選んだのに？
どうしよう？！　改札から出られない？！
混雑する改札口の前で邪魔になっていることが分かっているから、頭の中が軽いパニックを起こしかける。
そのとき。
「はい、どうぞ。」

声とともに、差し出された水色のパスケース。

「よかった！　ありがとうございます！」

差し出されたパスケースを握りしめ、心からお礼を言って顔を上げると・・・金木犀さんが微笑んでいた。

あれ？

あれから何日か経ってるのに、あたし、しっかり覚えてる・・・。

「おはようございます、紫苑さん。」

金木犀さんの声は、きりきりと引き絞った弓のようなイメージ。ちょっと軋んだように硬い、それでいて軽やかな明るい声。

くすくす笑って、改札口を並んで抜けながら、金木犀さんが続ける。

「ぽーんと飛んで来たんです。ちょうど僕のところへ。ナイスキャッチ、でしたよ。名前が見えて、紫苑さんがきょろきょろしているのが見えたので。」

あらら・・・。

けっこうな勢いで当たって行ったもんね、あの人。

それにしても、なんていう偶然なの。

「ありがとうございました。」

もう一度、あたしがお礼を言うと、金木犀さんは「いえいえ。」と爽やかに笑った。

目尻に笑い皺ができるその笑顔に親近感を覚えて、心の中がほっこ

りする。

前方の信号が点滅するのを見て、金木犀さんは「じゃあ、お先に。」と、横断歩道を走って渡って行った。

その後ろ姿を見ながら、なんとなく楽しい気分になっている自分に気付く。

何人かの頭を越えて宙を舞う水色のパスケースが目に浮かんで、笑いそうになった。

本当に、なんていう偶然！

職場に着いてから、金子さんに「今朝ね、」と、いつもの失敗談を話すのと同じように話し始めてから気が付いた。

彼女のことだから、また“運命の出会い”を持ち出すに違いない。

でも、金木犀さんのことは、そんな風に言われたくない。

だから、拾ってくれたのは知らない男の人ってことにした。

・・・

他人の傘も気になる。
たまに傘を横向きに握って持っている人がいて、階段でそういう人の後ろを歩いていて、顔をつつかれそうになることがあるから。
それに、混んでいる電車の中で、隣の人が床に立てたつもりの傘が、あたしの足の上だったっていうこともあった。
すぐに謝ってくれたけど、パンプスを履いていて、足が靴に覆われていない部分だったから、ものすごく痛かった！

だから、傘を持ち歩かなくちゃいけない日は嫌い。

雨のお昼休み。
金子さんと外でお昼を食べたあと、一人で銀行のＡＴＭコーナーに寄った。

いつものとおり、やっぱり傘の扱いがギクシャクして、操作する間、ＡＴＭに立て掛けておいた傘が倒れそうになったりする。
お財布にお金を入れるのに気を取られて忘れた傘を、次に並んでいた人に呼び止められて渡された。

あーあ、もう。
雨の日に、銀行になんか寄るんじゃなかった。

濡れている床で滑って転びそうになったことを思い出して、足元を見ながら慎重に出入口に向かう。

と。

数歩前に立っていた人のスーツの足元に、はらはらと一万円札が何

枚か・・・。

あれ？

あたしみたいな人って、ほかにもいるんだ。

その人はすぐにしゃがんでお札に手を伸ばす・・・と、今度はしゃがんだせいで、腕にかけていた傘がはずれて倒れた。あたしの前に。

あらら、気の毒に。

こういうことって、よくあるよね。

こっちを気にしてると、あっちがダメ、ってね。

自分と重ね合わせながら、転ばないように気を付けて、倒れた傘を拾い上げる。

「あ、すみません。」

という声でその人に目を向けたら、

「「あ。」」

・・・金木犀さんだった。

お互いに顔を見合わせて、少し驚きながら立ち上がる。

またしても、こんな偶然。

「あの、どうぞ先にお金をしまってください。」

「あ、はい。」

金木犀さんが大きな封筒を腕にはさんで一万円札をお財布に入れながら、

「傘を持ってると、どうもうまく動けなくて。」

なんて、恥ずかしそうに言い訳してる。それから荷物を持ち直して、

「ありがとうございました。」

と、あたしから傘を受け取った。

「わたしも雨の日は、よくお金を落としそうになります。スーパーで小銭をまき散らしたこともあるし。」

金木犀さんの照れた様子に楽しい気分になり、ポンと、そんな言葉が出てしまう。

言ってしまってから、こんな風に話をするような間柄じゃないんだっけと思ったけれど、もう遅い。

かと言って、今さら気まずい顔をするのも変だよね？　このまま無邪気な顔をしていた方がいい・・・？

ほんの一瞬の間に、そんな思いが駆け巡る。

「そうなんですか。僕だけじゃないんですね。」

金木犀さんの言葉は、あたしの心配を簡単に払いのけるような楽しげな笑顔と一緒。

よかった、気にしないでくれて・・・。

ほっとしたら、昼休みの残り時間が気になって。

「じゃあ、失礼します。」

小走りに職場に向かいながら、自分が微笑んでいることに気付く。
こんなに偶然が続くなんて、なんだかちょっと面白い！
でも、近くの会社に勤めているなら、こういうのって普通のことか。

・・・

でも、本当にくっきりと明るい月。
きれい。

「よう。お疲れさま！」

後ろから追いついてきた龍之介の元気な声。
風流とはまったく縁がなさそうだよね。

「あ、高木くん。お疲れさま。」

知佳ちゃんは龍之介のことを「高木くん」と呼ぶ。美歩は「龍之介くん」だ。
この呼び方を聞くたびに、二人の性格がよく出ているなと思ってしまう。

知佳ちゃんは何事も節度をわきまえている人で、職場では良好な人間関係を築き、お酒の席でも乱れることがない。
だからと言って、ただ真面目なのかというとそうではなく、あたしたち気を許し合っている間ではけっこう毒舌だ。
ただ、その毒舌も、他人への恨みや妬みがこもっていないから、笑って聞き流せるところがいい。

美歩はグラマーな美人で、男の子にちやほやされるのが好き。
だけど、自分から誰かに色目を使うわけじゃなくて、単に男の人に褒められるのが嬉しいのだ。
美人だから合コンの誘いはたくさん来るし、たくさん参加している。
でも、決まった彼氏はいない。

そのまま４人で話しながら駅へと向かう。龍之介の隣に美歩、その

後ろから知佳ちゃんとあたしが並んで、女の子3人が龍之介を取り囲むような状態で。
あっという間に、お月さまの話題はどこかへ追いやられ、噂話や美味しいものの話で盛り上がる。
気さくな龍之介は、女子3人の中に入っても全然平気。
龍之介の少しハスキーな低い声に女の子たちの笑い声が重なって、けっこう賑やかな集団だ。

「あ、もう来てるな。」

改札口が見える場所まで来たとき、龍之介がつぶやいた。

「待ち合わせ？」

「ああ、うん。」

ん？
なんとなく上の空に見えるのは、もしかして？

「ねえ、彼女？」

どの人だろう？
待ち合わせっぽい人はたくさんいるけど。

「違うよ。まったく、すぐにそういうことを言うんだから。」

呆れた顔をされて、あたしたち3人とも“なーんだ”と目で囁きながら顔を見合わせる。
その横で龍之介が笑いながら言った。

「大学の友達。なかなかイケメンだけど、紹介してほしいか？」

「え？　イケメン？　龍之介くんの友達なのに？」

美歩が遠慮なく突っ込む。

「俺の友達はイケメンぞろいだぞ。俺を含めて。」

そんなやりとりをしているうちに、すでにその相手の前まで来ていたらしい。

「女の子に囲まれて登場なんて、派手だなあ、龍之介は。」

笑いを含んだテノールで話しかけて来た人。

龍之介のうしろから覗いたら・・・あらら、本当にかっこいいかも。

龍之介と同じくらい背が高くて（ってことは１８５ｃｍくらい？）、濃いグレイのスーツ。ネクタイは黄色に何か小さな模様。

きちんと整った髪に黒縁のメガネは頭が良さそうで、姿勢がいいせいか、持って生まれたものか、上品でお金持ちっぽい雰囲気。

医者とか弁護士とか・・・そういうお仕事の人？

顔が、とかいう問題じゃなくて、全体がひとまとまりにかっこいい人。

知佳ちゃんと美歩が驚いて黙った。

あたしも、龍之介とはまったくイメージが違うお友達の登場に驚いた。

「龍之介は大学でも、よく女子に囲まれてたじゃないか。」

あれ？　この声・・・？

「こっちのメガネが原田諒（りょう）で、もう一人が秋月優斗（ゆうと）だよ。」

龍之介があたしたちに友達を紹介してくれている。

もう一人？　・・・と思いながら、さっきの声で浮かんだ引き絞った弓のイメージに、鼓動が大きくなっている。

まさか、だよね？

いくらなんでも、そんな偶然・・・。

あるわけないよ！

と、龍之介のうしろから出て、声の方を見る。

「あれ？　紫苑さん？」

見つめ合った相手は・・・・・やっぱり金木犀さん。

秋月優斗さんっていう名前なんだ・・・。

8　木枯らしの吹く日（1）

あっという間に11月になって、きのうから木枯らしが吹き始めた。朝、マンションを出ると、冷たい風がビューっと吹いて、髪の毛をかき乱す。
街路樹や公園の木々の落ち葉が、あっという間に飛ばされて行く。

今日の夜、龍之介たちと出かけることになっている。
龍之介たち・・・龍之介と原田諒（りょう）さんと秋月優斗（ゆうと）さん、それから知佳ちゃんと美歩とあたし。

先月、原田さんと秋月さんに初めて会った日は、ご挨拶だけでお別れした。・・・秋月さんとは“初めて”じゃないけど。
龍之介も、ほかのみんなも、あたしと秋月さんが顔見知りだと知って、ものすごく驚いていた。

そのあと、誰から言い出したのかはよくわからないけど、龍之介が飲み会を設定すると言って来た。
“飲み会”っていうよりも、“合コン”に近いような気がする。合コンにしては、ちょっと人数が少ない？
でも、知佳ちゃんか美歩が、3人（一応、龍之介もね。）の中にお目当ての人がいるんだったら、協力してあげないとね。

あたしは、秋月さんと話ができたら楽しいかな、と思っている。
決して恋愛感情的な意味ではなく、普通にお友達として。

あれからも、秋月さんとは何かとよく出くわす。
秋月さんの勤め先が入っている建物がうちの会社が入っているビルの3軒先だから。
9月に勤め先の設計事務所が移転してきたと言っていた。
それがきっかけで、先月、龍之介たちと久しぶりに集まったそうだ。

朝は利用している電車があたしと同じらしくて、週に3、4回は改札口のあたりで会う。
お昼を食べに行ったところで隣に座っていたこともあった。このときは、一緒にいた金子さんに秋月さんを紹介した。
仕事で外出したときにすれ違うこともあったし、一度は仕事帰りに乗り換えの駅で買い物をしていたらバッタリ・・・ということもあった。

最初は会う度に二人して驚いていたけれど、最近はもう慣れた。
朝は急ぎ足で話しながら歩くこともあるし、それ以外では「こんにちは。」と声を掛け合うとか、ただ会釈して通り過ぎることもある。
でも、まだゆっくり話をしたことはない。

だから、今日はちょっと楽しみ♪

お昼休みにあたしの席の後ろにある打ち合わせ机で、金子さんと二人で、近所のパン屋さんで買って来たクロワッサンサンドを食べているところに龍之介がやって来た。

龍之介がうちの課に来るのはよくあること。
仕事の用事でももちろんだけど、昼休みや帰り際にちょっと来て、

愚痴を言ったり、ただのんびりしていたりする。
たまに空いている椅子がないと、あたしと金子さんの席の間にあるスチール製のゴミ箱に腰かけていることがあって、うちの係長に「高木が座ったせいで、そのゴミ箱が歪んだ。」とからかわれている。
今日も龍之介は、あたしたちの向かい側にさっさと腰かけて、用件を切りだした。
「年末、スノボに行かないか？　真鍋さんとか竹田あたりと話が出てるんだけど。」
あたしと金子さんの両方に言っているらしい。
「年末？」
「うん。今年は土日が入って仕事納めが早いから、休みに入る12月27日の朝早く出て2泊3日。」
真鍋さんも竹田くんも、あたしたちがよく一緒に飲みに行く人たちだから、メンバー的には問題ないけど・・・。
金子さんと顔を見合わせてから、龍之介に向き直る。
「あたし、スノーボードはやったことがないんだけど・・・。」
「スキーは？」
「一度だけ。高校のスキー教室で。でも、全然できないのと同じ。」
「ふうん。金子さんは？」

「わたしはスキーは家族で何度か。スノーボードは大学生のときに2度ほど。」

「あ、じゃあ、金子さんは行っておいでよ。あたしは無理だから、絶対。」

すると、慌てた表情で金子さんはあたしを見て、

「谷村さんが行かないなら、わたしもちょっと・・・。」

なんて言い出した。

そんなに引っ込み思案な子じゃないと思っていたのに。

まあ、さすがに泊りじゃ、一人は無理か。

「滑れなくても、紫苑には俺か誰かがついて教えるから大丈夫だよ。」

龍之介があたしにこにこと勧めてくれるけど、その笑顔を信用していいものかどうか・・・。

なにしろ、あたしは手先が不器用なだけじゃなくて、運動を含めて、道具を使うものが全部苦手なのだ。たぶん、体の使い方が下手なんだと思う。

龍之介も今はこうやって親切に言ってくれているけど、実際にその場になってみたら、あまりの酷さに愛想をつかして放り出されるような気がする。

「あたし、本当に無理だと思う。高校のときだって、スキーを履いて立ってるのが精一杯で。」

「立てるんなら大丈夫だよ。それに、どうしてもダメだったら、温

泉でのんびりしててもいいし。」

「え？　温泉なの？」

「うん。真鍋さんが何度か行ったことがある宿屋なんだ。民宿だからホテルみたいな設備はないけど、安いし、温泉には一日中入れるって。」

「スキーをやらなくても、温泉と部屋でのんびりしてればいいのか・・・。それならいいかな。」

隣で金子さんが嬉しそうな顔をする。

本当は行きたいのね。
スノーボードが好きなのかな？

「どうやって行くの？　バスとか？」

「車2台か3台で。」

「車で行くんだ？」

「うん。そこの宿屋だと、車の方が便利なんだって。俺も車を出すから、紫苑は自宅前で拾えるぞ。」

温泉にのんびり入れて、しかも自宅からの送迎付き。
魅力的・・・。

「行きましょうよ、谷村さん。」

金子さんが可愛らしく小首を傾げてあたしを見る。
「・・・そうだね。でも、滑るかどうかはわからないよ。」
「大丈夫ですよ！　あたしでもできるんですから！」
うーん。
普通の人と一緒に考えてはダメなのよね、あたしの場合。
「よし。じゃあ、紫苑と金子さんは参加な。」
「谷村さん、せっかくだからウェアを買いに行きましょう！」
「え？　レンタルとかじゃ・・・？」
「ダメですよ！　板はいいですけど、レンタルウェアでみんなと同じだと、困ってるときにお友達に見つけてもらえないですよ！」
「え？　それは困るかも・・・。」
「それに、帽子とか手袋も必要だし。」
「そうか・・・。」
あたしたちのやりとりを聞いて、龍之介がくすくす笑う。
「紫苑。なるべく目立つウェアを選んで来いよ。トラ縞とか。」
「あり得ない！　そんなのしかなかったら、行かないもん。」

「すごく可愛いのを買いましょうね、谷村さん！」

金子さん、気合い入ってるね・・・。

「金子さんなら何を着てもかわいいと思うけど・・・。」

「大丈夫です！　わたしが谷村さんにピッタリなウェアを見立てますから！」

「うん・・・、よろしくね。」

大丈夫かな？
ものすごく高いものになって、そのうえ、もう二度とやりたくなくなったりしたら困る・・・。

「紫苑。今日、大丈夫か？」

立ち上がりながら龍之介が尋ねる。

「ああ、うん。」

「じゃあ、7時半に店の前で。」

そう言い残して龍之介が帰って行くと、金子さんからさっきの勢いが消えて、ポカンとしていた。

「どうしたの？」

「え？　あ、ああ、いいえ。」

金子さんは、机に置いていたパックの野菜ジュースのストローをくわえながら、ぼんやりと黙っている。

どうしちゃったのかな？
さっきまで、あんなに楽しそうだったのに。

とりあえず、手に持ったままだったパンを食べ始めたら、金子さんがこっちを向いた。

「あの、谷村さん？」

「はい？」

「あの、今日は高木さんとお出かけなんですか？」

「・・・今日？　あれ？　言ってなかったっけ？　龍之介たちと飲みに行くこと。」

「いいえ・・・。」

そうか。
秋月さんにはお昼に会って紹介したけど、そのあとに出た飲み会の話はしてなかったんだ。

「あのね、この前会った龍之介のお友達と飲みに行くことになってるの。」

「お友達・・・？」

「うん、ほら、この前、お昼に会った秋月さんともう一人の原田さ

ん。あと、あたしの同期の知佳ちゃんと美歩なんだけど、金子さんも行く？　龍之介に言えばたぶん・・・。」

「あ、いえ、いいんです。ふた、その・・・みなさんで行かれるんなら、あたしは、その。」

なんだろう、この何か引っかかるような慌てぶりは？
やっぱり原田さんに会いたいのかな？
この前、金子さんの前ですごく褒めちゃったもんね。

「ねえ、龍之介に言ってあげるよ。」

携帯を出そうとバッグを持ち上げたら、金子さんに必死の形相で止められた。

「いいんです！　いいんです！　あの、何でもありませんから！」

「そう？」

「はい！　全然、大丈夫です！」

「そう・・・？　じゃあ、もし、次があったら声かけるね。」

「あ・・・ありがとうございます・・・。」

恥ずかしそうに下を向く金子さん。
かっこいい人に会いたいって、べつに変なことじゃないし、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに・・・。

9　木枯らしの吹く日（2）

秋月さんたちと会うのは、いつも乗り換えで使っている駅近くのビルの地下にあるワインの品ぞろえが自慢だというお店だった。
比較的カジュアルなイタリアンレストラン。

知佳ちゃんと美歩は、普段よりもお洒落をしている。
浮くと困るから、あたしも少し。

知佳ちゃんは紺のノーカラージャケットに同色のふわりとしたシフォンのスカート。アクセサリーは小さなペンダントだけでシンプルで上品に。
美歩は黒のパンツスーツにラメ入りのインナーを合わせているだけなんだけど・・・。小さめに作られているジャケットのボタンを閉めると胸元がきつそうで、立派なサイズの胸が強調されるように計算されているんじゃないかと思う。アクセサリーが小さいピアスだけだから、ますます視線が・・・。
あたしは・・・、とりあえず、あたしらしく。襟元でリボンを結ぶほぼ白に近いグレイのストンとしたワンピースに桜貝色の薄手のカーディガン。
実を言えば、あたしは胸の開いた服を着られない。肩から胸にかけて肉がないので、襟ぐりが大きく開いた服を着ると、屈んだときに首のところからお腹までのぞけるほどなのだ。
そんな服を着ていたら、向かい側に座った人がびっくりしてしまうと思う。

男の人たちは普通にスーツ姿で、特に変わったところはないかな？

原田さんがお洒落なカフスをしているのが見えたけど。

こうやってじっくり見ると、こんなに雰囲気の違う3人が、どうして仲良しなのだろうと不思議になる。
龍之介は見た目も中身もスポーツマン。
原田さんは知的でクールなイメージ。
秋月さんはにこにこと優しい雰囲気。
知り合ったきっかけは、学園祭の実行委員だと聞いている。

見た目のイメージが違う3人でも、話しているところは息がぴったり。
お互いに名前で呼び合っていて、いろいろな話題が途切れなく続き、あたしたちのテーブルは笑いが絶えない。
中でもクールそうな原田さんは、高校の理科の先生だった。
見た目とは裏腹に実はたいへんな笑い上戸で、教育実習で苦労したというエピソードを面白可笑しく話してくれた。
生徒がわざと原田さんを笑わせようとして、いろんないたずらを仕掛けてきたのだそうだ。

「中でも大変だったのは、一番前の席の女の子が、左右色違いの靴下を履いてたときでね。」

「色違い？」

「そう。白と紺の靴下を右と左に片方ずつ履いて、机の下に足をぽんって投げ出して座ってたんだよ。本人は何も言わないで平然としてるのが、もう可笑しくて可笑しくて・・・。」

話していてその場面を思い出したらしく、あはははは・・・と笑いな

がら、ワイングラスに手を伸ばした。
たしかに変だ。
そんないたずらを考え出して、実行しちゃうところが高校生らしくていいよね。
ワインを一口飲んでちょっと落ち着いてから、原田さんが話を続ける。
「その日は担当の先生のほかにも何人かの先生が教室の後ろで見ていて、笑うわけにはいかないし、だけど、笑いをこらえてる自分がどんな顔をしてるのかと思うと余計可笑しくて。可笑しいのに恐ろしいっていう、強烈な体験だったね。」
「最終日に告白してきた子もいたって言ってたよな？」
「龍之介！　それはべつに。」
やっぱりね。
かっこいい教育実習生って、そういうことありそう。
「一人じゃなかったんだぞ。プレゼントもいくつもあったし・・・。」
「龍之介！」
龍之介と秋月さんの大きな笑い声と、あたしたちの控え目な笑い声が重なる。
コホン、と原田さんが咳払いをして。

「全部、昔の話です。今は私立の男子校ですから心配はありません。」

「男の子だって、危ないんじゃないですか？」

美歩が色っぽい流し眼でつぶやくと、原田さんがすかさず

「安全です。」

と断言した。

「秋月さんは？　学園祭の実行委員を一緒にやったそうですけど？」

知佳ちゃんが秋月さんに話題を振る。

こういうところ、ソツがない。

「ああ、あのとき・・・。大変でしたよ、忙しくて。」

秋月さんは、学園祭が近付いて忙しくなった実行委員会のメンバーが、大学の近くだった秋月さんのアパートに勝手に泊りに来るようになった話をしてくれた。

「最初は諒と龍之介だけだったんですけど、それが広まって、先輩たちも来るようになっちゃって。」

あら。

「僕が部屋を出るときに先輩が寝ていたりするし、カギを誰かに貸したらどうなるかわからなから、結局、ずっと開けっぱなしになったせいで、ますますみんなが勝手に・・・っていうことになってた

んです。」

「ああ、思い出した！　そうだよ、あのとき！　びっくりしたよな。」

原田さんが手を叩いて笑いだす。

「あるとき、夜中に諒と一緒に帰ったら、女の子が寝てたんです。」

「女の子？！」

「はい。僕の部屋は布団やら食べ残しやらでものすごい有り様だったんですけど、そういうものを隅に寄せて、真ん中で毛布にくるまって、実行委員の女の子が寝ていたんです。」

「そうそう！　茶色っぽい毛布だったから、まるででっかいサナギみたいで、もぞもぞ動いたときには驚いたのなんのって！　あっははははは！」

原田さんの笑いが止まらない。

でも、カギがかからない部屋で一人で寝てるなんて、よっぽど疲れていたんだね・・・。

「仕方がないから僕たちは大学に戻ったんですけど、次の日にその子に訊いたら、『実行委員の休憩用の部屋って聞いた。』って言われて。そのうえ、ゴキブリが出たって怒って、『自分の部屋ならもっときれいにしておきなさいよ！』って、すごい剣幕で文句言われちゃって。」

「そうそう！　あのとき優斗が言い返さなかったのを見て、ものす

ごく感心したよ。」
笑っている原田さんの隣で龍之介が言った。
「相手の剣幕に驚いたっていうのもあるけど、あのときはみんな殺気立ってたから仕方ないな、と思って。」
「まあ、それも優斗らしいよな。」
やっぱり、雰囲気のとおり穏やかな人なんだ。
それから話してくれた龍之介や原田さんと一緒にやったといういたずらや失敗の数々には驚いたし、たくさん笑った。
お酒に強いのかな？　けっこう飲んでも全然変わらない。

ワインの勉強を始めたという知佳ちゃんが、お店の人に訊きながらいろいろ頼んでくれて、少しずつだけど、何種類も飲んだ。
たしかに一杯ずつ比べてみると、どれも違うのがわかる。
でも、そろそろあたしは止めた方がいいかな？
あたしの場合、ワインで酔うと、頭がぐるぐるするのだ。飲みすぎると、いわゆる千鳥足になってしまう。
龍之介はいいとして、秋月さんや原田さんの前では、そんな姿は晒したくない。
そろそろペースを落とさないと・・・。
「紫苑さんは大学では何かやってたんですか？」
ぼんやりして油断していたあたしは、秋月さんの質問に、真っ先に

桜井先生のことを思い出してしまい、胸が苦しくなる。

「い・・・いえ、あの、母が具合が悪かったので、家事で忙しくて。」

「あ、家事っていえば紫苑って、高校のとき、家庭科部だったんでしょう？」

「あ～！　知佳ちゃん、それは黙っててって言ったのに！」

「俺も初耳だな。どうして秘密なんだよ？」

「・・・だって、家庭科部だって言ったら、あたしが料理とか得意だって思われちゃうでしょ？」

「何言ってるの！　お母さんの代わりにやってたんでしょう？　ちゃんとできるんじゃない。」

美歩。

フォローしてくれるのはありがたいんだけど・・・。

「そりゃあ、普通の料理ならどうにか作れるよ。だけど、本当は苦手なの。あのときは弟も妹も、文句タラタラで・・・。」

今、思い出してもため息が出ちゃう。

「やっぱりな。どう見ても、紫苑と料理は結び付かない。」

「龍之介にそう言われると、なんだか腹が立つ。」

「だって、その性格だからな。」
「性格のせいじゃないよ！」
手の使い方の問題なんだよ！
「ケーキとか、絶対に作れないだろう？」
う・・・悔しい！
そんな馬鹿にしたような顔をして！
「つ、作ったこと、あるもん。」
見た目はイマイチだったけど。・・・味も、かな。
「お、そうなのか？　じゃあ、今度、俺にも食べさせろ。判定してやるから。」
しまった！
あたし、墓穴掘った？！
「よし、決まり！　まあ、練習する必要があるだろうから、３か月以内ってことにしてやろう。」
なんで、そんなに偉そうなの？
「イヤって言ったら？」
「逃げるのか？　弱虫だなあ。」

やっぱり悔しい！

「じゃあ、美味しかったらどうするのよ？」

「紫苑に対する態度を改める。」

「え？　ホント？」

「うん。ちゃんと女性として・・・。」

「ああ。今までは、やっぱりそういう扱いだったんだね。いいよ。認めさせてあげるから。」

「よし！　3か月以内、約束だぞ。」

ん？

よく考えたら、なんとなく変な気がするけど・・・？

ふわふわした頭ではそれ以上考えるのは面倒で、周囲で続いている会話や笑い声の心地よさで、ふとよぎった疑問はかき消されてしまう。

まあいいか。

そのあとも、賑やかに楽しく時間が過ぎた。

楽しい余韻に浸りながらビルの出口へと向かう足取りが軽い。

後ろから聞こえてくる知佳ちゃんと原田さんの笑い声に、龍之介が冗談を言う声が重なる。

外への出口は2重のガラス扉。
気分良く1つ目を通り抜け、2つ目のドアを押すと・・・。

ゴオッと音がして、押し開けたドアが冷たい風に押し戻される。

「う、わ。」

戻ってくるドアの重さに耐えきれず、一歩後ろに下がったら、とん、と誰かにぶつかった。

「あ、ごめんなさい。」

支えるように右腕に手がかけられて、左の肩の上からドアを押さえるために手が伸ばされる。
覆いかぶさられるようなその近さに、振り向こうと思った動きが止まってしまう。

「いいえ。きのうから風が強いですよね。どうぞ。」

頭の上で聞こえたその声は・・・秋月さん。

「あ、ありがとうございます。」

どうしてこんなに小さい声しか出ないんだろう？
ドクン、ドクンと、自分の鼓動ばかりが大きく聞こえる。

大丈夫、大丈夫、大丈夫。

何でもない、何でもない、何でもない。

秋月さんだからドキドキしてるわけじゃない。
相手が誰だって、あんなに近付いたらドキドキしちゃうよね？！
頬が熱いのは、きっとワインのせいだよ。

10　木枯らしの吹く日（3）

「楽しかったねえ。」

電車を降りて、龍之介と二人で改札口に向かう。

飲み会のあとの、いつもと同じ帰り道。

「原田さんも、秋月さんも、面白い人だねえ。」

龍之介の顔をのぞき込むようにして言うと、龍之介が笑いながら尋ねてきた。

「紫苑。いつもよりたくさん飲んだ？」

「え？　そんなことないよ。」

そんなふうに見えるのかな？

「あのねえ、ワインはちょっと酔い方が違うんだよ。頭がふわふわするっていうか。」

「ふうん。」

「だけど、ちゃんと歩いてるでしょ？」

「うん。」

「だったら、大丈夫。飲み過ぎじゃないもん。」

うふふ、と笑ったら、龍之介も笑って

「そうだな。」

と言った。

そうだよ。

改札口を抜けて外に出ると、木枯らしがひゅうっと吹きつけてくる。冷たい風が火照った頬に気持ちいい。

龍之介がボタンをはめずに着ていた黒いトレンチコートが、強い風にバタバタとはためく。

暗闇の中、その黒いコートがマントのように見えて、背の高い龍之介はまるで・・・。

「龍之介。吸血鬼みたい。」

くすくす笑いながら言うと、龍之介が可笑しいのに笑いをこらえているような顔をする。

あたし、変なこと言った？

だって、面白いんだもん！　黙ってたら、もったいないよ！

「やっぱり、けっこう寒いな。」

もう一度冷たい風が吹くと、龍之介が首をすくめてつぶやいて、コ

ートのボタンを留め始めた。
その様子を隣で見ながら、２つ目のボタンを留めているときに、ふと気付く。

「ねえ。持っててあげる。カバン。」

手を出すと、龍之介はちょっと驚いた顔をしてから微笑むと、あたしにカバンを差し出した。

「ありがとう。」

自分のバッグを左の肩にかけ、右手に持った龍之介のカバンをぶらんぶらんと前後に振りながらのんびりと歩く。
相変わらず木枯らしが吹いて、道路わきの小さな公園の木から落ちた枯れ葉がカラカラと音を立てる。
あたしはコートの上からショールを巻いているから、冷たい風も気にならない。
空は黒くて、その真ん中に欠けはじめた月が明るく輝いている。
その月をかすめながら、薄い雲が風に乗って流れていく。　・・・
月を見るのは好きだな。

そういえば、あのボタンって、いくつあるのかな？
女性用のコートだと５個くらいだよね。
龍之介は背が高いから、もっとたくさんついてるのかな？

・・・訊いてみなくちゃ。

龍之介の前に出てくるりと振り返り、後ろ向きに歩きながら尋ねてみる。

「ねえ。それって、いくつあるの？」

「え？」

「そのボタン。」

「・・・7個くらいかな。」

「ふうん。」

やっぱり、いっぱいあるね。

「ありがとう。」と言って手を差し出した龍之介にカバンを返して、そのままコートを観察する。

「ねえ。そのコートって、着るの大変そうだね。」

「そんなことないけど？」

「だって、ボタンがたくさんついてるよ。ほら。」

一つずつ指差して教えてあげる。

「肩でしょ、ポケットでしょ、それにここ・・・。あと、後ろにもあるよ。」

龍之介はパタッと立ち止まって、あたしをまじまじと見た。

それから、さっと拳を口元に当てると一度あたしから目をそらし、咳払いをしてからこっちを向いた。

「全部、飾りだよ。」
「でも、酔っ払ってると、間違えちゃうかもよ。」
龍之介がくすくす笑ってる。
「酔っ払ってるって、今の紫苑みたいに？」
「あたしは酔っ払ってないもん。ちゃんと歩けるんだから。」
「・・・そうか。」
「うん。そうだよ。」
あたしは自分でちゃーんと飲む量を管理できるんだから！

あたしの住むマンションまでは7、8分。のんびりてくてく歩くのが心地いい。
道路の端に積もった落ち葉を踏んでみたら、カサカサと音がする。
蹴散らしてみようとしたら、靴が脱げそうになってやめた。
「もう2年、だな。」
「んー？」
つぶやくような龍之介の言葉に、素早く反応ができない。

「こうやって紫苑を送るようになってから、2年経ったんだな、と思って。」

「ああ・・・そうだよね。」

本当に、早いものだよね。

「いつもありがとうございます。お陰さまで、毎回、安心してお酒が飲めます。」

深々と頭を下げてから、起き上がって龍之介を見たら、またくすくす笑ってる。

龍之介、楽しいんだね。

あたしも楽しくなって、一緒にふふふ、と笑ってしまう。

「いいよ、どうせ帰り道だから。・・・でも、たまには違うお礼があってもいいかもな。言葉じゃなくて。」

「ああ、そうだよね。何か欲しいものはある？」

「べつに、特別な物が欲しいわけじゃないけど。」

龍之介が喜ぶものって何だろう？

何か、龍之介にピッタリのもの。

「うーん、何がいいかな？」

今みたいにふわふわした頭じゃ、あんまりよく考えられないや。

「今度、考えておくね。」

横から龍之介の顔をのぞき込んで言うと、龍之介はまたくすくすと笑ってうなずいた。
龍之介がもらったらすごく嬉しいものって、何だろうね？

「さむ・・・。」

相変わらずひゅうひゅうと吹き付ける風に、龍之介がいかにも寒そうに首を縮める。
短いツンツン頭は、耳も首も本当に寒そう。
風邪を引いたりしないといいけど。

じっと見ていたあたしと目が合うと、龍之介は、今度は笑わずに目をそらして前を向いた。
それから。

「こういうときって、普通、『寒いからコーヒーでも。』とか言ったりするらしいよ。」

こういうとき？

ああ。
寒い日に送ってもらったときってこと？
一般的に、そういうことになってるの？
知らなかった・・・。

「そんなことしたら、帰るのが遅くなっちゃうのにねえ？」

龍之介がぱっとあたしを見た。
その顔は・・・困ってる？　驚いてる？　でなければ、何か情けない・・・？
それから、笑った。
とても楽しそうに。

「うん、そうだな。」

話している間に、そこはあたしのマンションの前。
そのまま立ち止まって、龍之介と向かい合うように立って、顔を見上げる。

「それに、早く帰ってあったかいお風呂にでも入る方がいいよね？」

「うん。たしかにそうだよな。」

龍之介のこういう笑いを見るのは好きだ。
あたしも楽しいよ。

立ち止まっているあたしたちに、また木枯らしが吹き付けて、龍之介がまた寒そうに首を縮める。

ああ、そうだった。
龍之介はいつも、あたしが中に入るまで見ていてくれる。
あたしがいつまでもここで話をしていたら、龍之介は帰ることができないんだ。

「じゃあ、またね。いつもありがとう。気を付けて帰ってね。」

手を振って、急いで玄関の一つめのガラスのドアを通り抜ける。
そこで振り返ったら、玄関のあかりが届くぎりぎりのあたりでポケットに手を突っ込んで立って、こっちを見ている龍之介。・・・やっぱり寒そう。

そうだ！

すぐにドアを開けて引き返し、不思議そうな顔をしている龍之介を見上げる。

「龍之介。ちょっとちっちゃくなって。」

言いながら、自分の肩に掛けていた白黒の千鳥格子のショールをはずす。
それを、かがんだ龍之介の頭に、えいっと被せた。

「え？　いいよ。」

恥ずかしがって体を引こうとする龍之介を、「いいから。」と、被せたショールの左右を握って阻止。

「電車に乗って帰るわけじゃないでしょ？　それに、この時間だから、外を歩いてても誰にも会わないよ。」

そのままぐるぐると首にもショールを巻き付けて、はしっこを結ぶ。
出来上がった姿を見たら、そんなに変じゃなかった。

「・・・あったかい。」

恥ずかしそうな顔をしたまま、龍之介がぼそりとつぶやく。

「でしょ？」

ほらね。

あたしだって、龍之介の役に立てるんだから。

嬉しくなって思わず笑顔になると、龍之介も笑顔になった。

そのまま、龍之介はすっと屈んであたしと間近に顔を見合わせると・・・コツン、とおでことおでこがぶつかる。

「？！」

頭突きされた？！

なんで？！

「痛いよ。」

驚いて文句を言うあたしを、立ち上がった龍之介が笑ってる。

意味分かんない！

「ありがとう、紫苑。」

もう一度屈んでささやくようにそう言うと、龍之介はくるりと背を向けて、軽く手を上げて歩き出す。

「うん。じゃあね。」

その背の高い後ろ姿を見送って、あたしもマンションの玄関へ。

・・・でも。

エレベーターを待ちながら、何となく、違う、と思った。

なんだろう？

バッグはちゃんと持ってるし。

エレベーターが到着して、扉が開き始めたとき、視界の隅で何かが動く気配。

つられて入り口の方を見たら・・・龍之介がにこにこと手を上げて合図した。

あたしが被せてあげたショールは頭からは取り払われて、首と肩だけにしか掛かっていなかったけれど。

あたしも龍之介に手を振る。

そうだ。

これだ。

これが正解。

あたしと龍之介のバイバイは、いつもこうだよね！

11　お菓子作りの本

仕事帰りに大きな本屋さんに来た。
お菓子作りの本を探すため。

先週、秋月さんたちと会ったとき、龍之介と約束した・・・っていうか、意地になって挑戦を受けて立ってしまったケーキ作り。
黙っていたら龍之介も忘れてしまうかな、と思っていたのに、きのう、わざわざ言われてしまった。
にやっと笑って、

「3か月以内の約束だからな。」

って。

高校のとき、家庭科部で作ったことはある。
文化祭で部の出し物として売ったし。
だけど・・・あたしの作ったものを売るわけにはいかなかった。
スポンジケーキやシューの皮はふくらまないし、クッキーの上に絵をかいたりすることすら上手くできなかった。
不器用なのと、泡だてたり、かき混ぜたりするときのちょうどよい“今だ！”　が、よくわからないのだ。
だから、文化祭用のお菓子を作るのはほかの部員の役目で、あたしは売り子専門だった。
料理の方はまだいい。

味付けは分量を間違えなければいいのだし、切り方が多少不揃いでも、盛りつけてしまえばどうにかなるから。
それに、大学生のときにお母さんの代わりをして経験値がアップしているから、今では自分でちゃんと自炊できる。・・・きちんとした料理は作れないけど。

だけど、今回は・・・。

自信はない。
でも、意地がある。
龍之介の挑発に乗った自分は愚かだったと思うけど、それを受けて立ってしまったからには負けたくない。
もしかしたら、料理が少しできるようになっている分、お菓子だって上手くできるようになっているのかもしれないし！

自分を励ましながら、お菓子の本のコーナーへと毅然とした足取りで向かう。
何事もやってみなくちゃわからない。

実用書のコーナーを、案内板を見ながらいくつか通り過ぎ、『料理・菓子』と表示のある棚へ通路を入る。
４人ほどの人が棚の前でカラー写真の載った本を見ている。１人は男の人だ。
書棚の手前側にはお惣菜の本が並んでいる。お菓子の本はもっと奥かな。

その人たちと後ろの棚を見ている人の間を通り抜けながら、棚を順にながめて進む。
“ケーキ”　というキーワードが背表紙に並ぶ場所を見つけて、先

に本を見ていた人たちの間で立ち止まり、本のタイトルを順に追ってみる。

シフォンケーキ、パウンドケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキ、シュークリーム、パンケーキ、スポンジケーキ、カップケーキ・・・・。

ケーキの種類だけでも選ぶのが大変！

しかも、それに“おいしい”、“簡単にできる”、“レンジでできる”、“混ぜるだけ！”、“初めて作る”なんて、いろいろな枕詞がついている。

どうしたらいいの？！

とりあえず、高校のときに作ったことがあるスポンジケーキの本を取り出してみる。

中を開いて・・・・・ため息が出た。

スポンジケーキは飾り付けが重要だ。

不器用なあたしには、とてもじゃないけど、他人に見せられるようなものが出来上がるとは思えない。

シュークリームは飾り付けはいらない・・・けど、膨らまないとすべてが無駄になることを思い出してやめる。

カップケーキ？

簡単そうだけど、泡立て器で混ぜている写真を見て嫌になった。

“レンジでできる”は、何となく龍之介に自慢ができない気がする。

お店でセットになって売っているものを利用したことはあるけど、

結局は泡立てるのが大変だったし、やっぱり龍之介が手抜きだとか言いそうだ。
どうしよう・・・？
「はあ・・・・・。」
また、ため息が出た。
隣にいた男の人が、あたしの方を見た気配。
そんなに大きなため息をついたつもりじゃなかったけど、聞こえちゃったかな・・・。
あーあ。情けないな・・・。
「・・・紫苑さん？」
ん？
この声は。
見上げると・・・やっぱり、秋月さん。
こんなところでため息をついているのを見られるなんて。
・・・っていうか、秋月さん、お菓子の本？
秋月さんが見ていた本をちらりと覗くと、やっぱりお菓子の本。
「秋月さん、お菓子作るんですか？」
お仕事は・・・設計士さんだったよね？
「就職してからの趣味なんです。簡単なものしか作りませんけど。」

にこにこと穏やかに、でも少し恥ずかしそうな笑顔で答える秋月さん。
簡単なものって言ってるけど・・・。もしかして、ここは頼ってみるべき？

「あの、どんなものを作るんですか？」

「飾り付けがいらないものがいいな、と思って、オーブンで焼いたら終わりっていうのが中心で・・・、」

おお！
まさに、あたしが探しているものかも？！

「チョコレートケーキとかアップルパイとか・・・。」

それって・・・どうなんだろう？

「あのう・・・、あたしでもできると思いますか？」

「え？」

「ええと、その、この前、龍之介と約束した・・・。」

「ああ！　あのとき。」

「はい。わたし、不器用で、デコレーションとか泡立てるとか、そういうところが無理なんです。」

秋月さんが少し考えてから言った。

「それだったら、僕が作っているみたいなものがいいかもしれないですね。オーブンに入れたら、あとは待つだけですから。」

「その前の部分は・・・？」

「僕の印象としては、分量を量って並べた段階で半分終わった感じがしますね。」

分量を量っただけで半分終わり・・・。
それって、すごいような気がする。

「あの、そのレシピって、ここにある本の中にありますか？」

秋月さんはにこっと微笑んでから、棚を見てくれた。

「ああ、これです。」

差し出された本は、アップルパイと、ナッツを使ったタルト、それにチョコレートを使った焼き菓子が載っている本だった。
写真はどれも美味しそうだし、手順の途中の写真も載っている。
さらに、レシピの最後が「〇〇度のオーブンで〇〇分焼く。」で終わっているものが多い。
これならどうにかなりそう？

「これからはりんごが美味しい季節だから、アップルパイがいいかも知れないですね。」

アップルパイか・・・。

「あたしでもできるかな・・・？」

「一度で成功させる必要はないんじゃないのかな？」

「え？」

「たしか3か月って言ってましたよね？　だから、練習すればいいんです。」

「そうか！　そうですよね？　」

休日にやってみればいいんだ。

「ありがとうございます。そうします。教えていただいて、助かりました。」

「いいえ。お役にたててよかった。」

優しい笑顔でさわやかにそう言うと、腕時計を見て、「じゃあ、お先に。」と、秋月さんが去っていく。

その後ろ姿に、心の中でもう一度お礼を言う。

さて。

まずは家に帰って、じっくりとこの本を見てみよう。

作るものを考えなくちゃいけないけど、とりあえず、この本の写真を見ているだけでも満足しそうな気がする。

もう一度、本の中を見ると・・・うん、美味しそう。

これなら龍之介も文句のつけようがないよね。・・・成功すれば。

帰ってから、夕飯の支度をしながら、早速、本を開いてみる。
アップルパイ3種、チェリーパイ、ナッツ類のタルト2種、チョコレートケーキとブラウニー。
どれも写真が美しい。
見ているだけで、幸せな気分になってくる。
こういうのを誰かが作ってくれたらいいよね・・・。

ふと、秋月さんが作ってる姿が目に浮かぶ。
カフェエプロンをかけて、ボウルと泡立て器を持って・・ふふ、似合いそう。

ああ・・・そうじゃなくて、今回はあたしが作らなくちゃいけないんだっけ。
どれどれ。

パイは何層にも重なったパイ生地ではなく、めん棒で丸くのばした生地をパイ皿に広げて作るようになっている。
中に切って下味をつけたりんごを入れて焼いたら終わり。
うん、いいね。

タルトは生地を焼いて型を作り、その中にキャラメル味やブラウンシュガーのソースとナッツを入れて焼く。

チョコレートケーキとブラウニーは、材料を混ぜて、焼く。

うん。
たしかに、全部“焼いたら終わり”だ。
粉砂糖をかけるくらいはあるけど。

とりあえず、今度の土日にやってみようかな？

夕食とお風呂を済ませて、どれを作るかじっくりと検討してみる。
秋月さんが、りんごが美味しい季節だからアップルパイがいいって言ってたっけ。
材料は？

・・・・あれ？

よく考えたら、食材も必要だけど、それ以前に道具がないよ！
ボウルだって一人暮らしだから小さいのしかないし、粉ふるいとか、パイ皿とか、めん棒とか・・・。
まずは、こっちを買いに行かないと。
意外にお金がかかりそう？

もう！
龍之介があんなこと言い出すから！

・・・違うか。
拒否すればよかったんだよね。
べつに、龍之介を感心させる必要なんてないんだから。
それとも、あたし、秋月さんたちの前で、少しは女らしいところを見せたかったのかな・・・？

仕方ない。
土曜日に買いに行くか・・・。

12　お菓子作りの道具

こんなにあるなんて・・・。

土曜日の午後。
さまざまな趣味の用品を揃えている大きなお店に来ている。
・・・秋月さんと。

秋月さんはブルージーンズにグレイのパーカーと黒のダウンベスト、赤と茶のチェックのシャツの襟と裾をちょっとずつ覗かせている。
いつものスーツ姿よりも、“カワイイ”　度がアップしている。
待ち合わせ場所で会ったとき、ドキッとした。
ドキッとしたのは、その服装がいつもと違うということだけじゃなくて。

あたしが赤に茶の入ったタータンチェックのウールのワンピースの上にグレイのパーカーと赤のダウンベストを着て来ていたから。

おそろいではない！　決して！

・・・でも、見るからにおそろいに見えてしまうので恥ずかしい。
本当のカップルでも、ここまでおそろいみたいな人たちなんて、いないんじゃないだろうか。
待ち合わせ場所で会ったとき、お互いに顔を見合わせて笑うしかなかった・・・。

そもそも、どうして一緒に買い物に来ているのかというと。

本屋さんでばったり会った翌日、いつもみたいに朝の駅で一緒になって、「何を作るか決めましたか？」と尋ねられた。
道具がないので買わないといけない、という話をしたら、秋月さんは「そうでしたね。」と思い出したように言って、選ぶのを手伝いましょうかと申し出てくれた。

「お薦めしたときに気付かなくちゃいけなかったんですけど、あの本で使う型って、少しサイズが違うんです。」

「え？　その辺のお店では買えないんですか？」

「ああ・・・すみませんでした。思いがけないところで紫苑さんに会ったので慌てちゃって・・・いえ、その。」

ああ。
お菓子作りに興味があるってこと、あんまり知られたくないのね。

「僕が買ったお店をご案内します。」

「あ、いえ、場所だけ教えていただければ・・・。」

「そのお店だと品物の種類が多いので、たぶん、選ぶのが大変だと思います。僕が見た目で選んで失敗したと思っているものもあるし。」

・・・というわけで、今日、秋月さんと一緒にこのお店に来ている。
おそろいみたいな服装をして。
偶然だけど、恥ずかしい・・・。

たしかに、このお店の品物の種類はすごい。
ボウルだけでもステンレス、ほうろう、耐熱ガラス、強化ガラス・・・などなど、材質もあれこれあるし、大きさも何種類もある。
ザルとセットだったり、柄がついていたり、注ぎ口がついていたり、泡立てるために底が斜めになっていたりするものもあった。
パイ皿も、タルト型も、ケーキ型も事情は同じようなもの。

秋月さんのお薦めグッズや使いにくいと感じたものの理由を聞きながら、本からメモしてきた紙を見ながら順番に選んでいく。
“順番に”　と言っても、“順調に”　というのとは違う。
とにかく迷う！
それに、必要なもの以外にも変わった道具がいろいろあって、売り場をまわりながら立ち止まることも度々。
秋月さんと二人で首をひねったり、笑ったり、感心したりして、結局、そのフロアに2時間近くいた。
そのあいだに、お互いに口調が親しいものに変わる。そもそも同い年なんだものね。

だけど、

「秋月さん、これ便利そう。ほら、見て。」

「え？　そんなもの、邪魔になるだけだよ。」

なんていう会話は、まるっきりキッチン用品を仲良く物色しているカップル（しかも、結婚間近の）そのものだ。
何度も気を付けなくちゃと思うのに、並んでいる商品の面白さに、ついそんなことは忘れてしまう。

秋月さんが嫌な顔をしないでいてくれることが有難い。

買ったものを袋に入れてもらったら、かさばるものばかりで、荷物が二つになってしまった。
その一つを秋月さんが持ってくれて、申し訳ないな・・・と思ったところで、服がおそろいみたいに見えることを思い出して、また焦る。
これじゃあ、ますます他人の目には・・・。

困るよ！
っていうより、秋月さんに申し訳ない。
あたしは恋愛はしないって決めているからいいけど、秋月さんは、誤解されたらチャンスが減ってしまうかも。
だから、早くさよならしたほうが・・・。

「ちょっと疲れたから、一休みしようか。」

・・・え?！
一緒にってこと?！

「え?　あの、ええと・・・。」

「あ、紫苑さん、急いでる?」

「いえ、特に用事はないけど・・・。」

「じゃあ、コーヒーでも一杯。」

「うん・・・。そうだね。」

いいのかな？
秋月さんは何も気にしてないみたいだけど・・・。

まあ、いいか。
うん。
お友達どうしで出かけることだってあるもんね！

下の階にあるカフェで椅子に座ったら、思いのほか疲れていたことに気付いた。
二人ともケーキも注文することにして、一緒にメニューをのぞき込む。

「あ～。ブドウのタルトと桃のタルトで迷っちゃう。」

決められなくて思わず口に出すと、秋月さんが笑う。

「両方頼んじゃえば？」

「さすがにそれは食べきれないよ。」

「じゃあ、僕が片方を頼むから、半分ずつ食べる？」

「え？　それじゃ、申し訳ないから・・・。」

「僕はいいよ、紫苑さんとなら。」

ドキン、と心臓が跳ねた。

自分が驚いた顔をして秋月さんを見ていることに気付いて、急いでメニューに視線を戻す。
視線はメニューに・・・、でも、視界から何も読み取ることができない。

――「紫苑さんとなら」って・・・。

・・・待て待て待て。慌てるな。
気にし過ぎだよ。
何も意味なんかないんだから。

ほら、もしも相手が龍之介だったら？　・・・無理矢理でも一口もらっちゃう。

そうだよ。
つまり、お友達の範囲内で、こういうことって“あり”ってことだよね！
秋月さんとは一緒に出かけるのが初めてだから、少しびっくりしただけ。

「あたし、桃のタルトにする。」

顔を上げて伝えながら、自分の態度がいつもと変わりないかどうかが気になる。
ドキン、ドキン、と鼓動がこめかみに響いている。

「じゃあ、僕はブドウの方を。」

秋月さんがにっこりして言う。
そのちょっとカワイイ笑顔にほんの1秒、見惚れてしまった。

カスタードクリームの上に山盛りに果物が載ったタルトはとてもきれいだった。
秋月さんがあたしの前の桃のタルトに、先に「味見。」と言って手を出したので、あたしも遠慮なくブドウのタルトをいただく。
クリームの甘さと果物の甘酸っぱさ、それにタルト生地の適度な硬さが絶妙なバランスで混じり合う。
こういう美味しいものを食べると、自然と笑顔になってしまう。
あたしが作るものでも、こういう顔をしてくれる人はいるんだろうか？

時間を割いてくれたお礼に、ここの支払いをさせてほしいと言ったら、秋月さんは承知してくれなかった。

「僕もここの地下で買うものがあるから、ついでだったんだよ。」

と言って。

「ここの地下は食材もたくさん売ってて面白いよ。粉とかスパイスもいろいろあるから、紫苑さんも行ってみない？」

そう言われてついて行ったら、本当にいろんなものを売っていた。
お菓子用のものだけじゃなく、料理に使うものも、お酒類も、それに外国のインスタント食品なんかも、高級品から格安のものまでいろいろある。

「近所で売ってないものが欲しいときは、ここに来るといいよ。」
秋月さんは迷わず製菓材料の売り場に進んで、細かく仕切られた棚を物色している。
何を売っているのかとよく見たら、チョコレートだった。
棚に貼られた商品名はどれもよく似ていて、まるで間違い探しみたい。
通路の向かい側は粉類で、白い粉が棚に何種類・・・いや、何十種類も。
全部、小麦粉？
ああ、薄力粉と強力粉があるのか。
お菓子用もシフォンケーキ向きの粉とクッキー向きの粉など用途によって違うし、小麦の種類も違うようだ。
あたしも選ばなくちゃいけないのかな・・・？
「粉は、最初はいつも家で使っているので間に合うよ。」
呆気に取られていたら、いつの間にか秋月さんが隣に来ていた。
「そうなの？」
「うん。ここで買った粉を使っているときにどうしても上手くいかない部分があって、自分が下手なのかと思ってたんだ。でも、たまたま足りなかったときに、家にあった普通のを使ったら上手く行ったんだよ。」
へえ。
そんなことがあるんだ。

何でも本格的だからいいってわけじゃないのね。
一緒に売り場を一回りしながら、お互いの料理の失敗談で笑う。
秋月さんは大学のときからの一人暮らしで、料理はかなりできるらしい。
アルバイトで中華料理のお店にもいたことがあるそうだし。

「見よう見まねで。」

なんて笑うけど、見て、真似をするだけでできる人っていうのは、たぶん料理のセンスがあるんだと思う。
あたしなんて、ガッチリ教わってもイマイチなんだから。

駅でお別れするときに、やっぱりお礼がしたいと言うと、秋月さんは微笑んで言った。

「じゃあ、紫苑さんの試作品ができたら食べたいな。」

「ええ?！　美味しいかどうかわからないのに?」

物好きな人だな・・・。

「大丈夫。きっと美味しくできるから。」

「そんなプレッシャーをかけないで・・・。」

「他人の意見を聞くのは大事だよ。」

「聞いても、あたしにはどこを直せばいいのかわからないと思うけど。」

「うん。たぶん僕もわからないから、気にしなくてもいいよ。」

なにそれ？

なんだか変な会話・・・。

「どんな味でもいいよ。僕が紫苑さんの作ったお菓子を食べる第一号ってことなら。」

・・・・え？

「じゃあ、予約したからね！　さよなら！」

改札口を抜けていく秋月さんの後ろ姿を見送りながら、心臓の音が大きく聞こえてくることに気付いた。

あたしは・・・誰のことも好きにならない。

人を好きになるのは苦しいし、怖い。

この鼓動は単に驚いたせいであって、特別な意味なんてない。

特別な意味なんて・・・・・。

13　お菓子作りの道は険しい

秋月さんとお菓子作りの道具を買いに行った土曜日の夜、小学校のころからの親友　三崎真由から電話がきた。

「来週、紫苑のところに泊りに行ってもいい？」

真由はあたしが一人暮らしを始めてから、こうやってときどき遊びに来る。

あたしが実家に住んでいたころは、一緒に出かけたり、お互いの家に遊びに行ったりするのは当たり前だったのに、今では電話で話すのが普通になってしまって寂しいかぎり。

その分、来た時には夜更かしをしてたくさん話す。

「うん、あたしも予定がないからどうぞ。あ、ちょうどよかった。」

「何が？」

「来週ね、アップルパイを作る予定だったの。」

真由は高校卒業後、調理の専門学校の製菓コースを出て、地元のケーキ屋さんに就職している。

真由が来てくれれば百人力だ！

「アップルパイ？！　紫苑が？！」

驚くのも無理はない。

あたしの腕前はもちろん承知のことだから。

「うん。もう本を買って、道具も揃えたんだよ。」

「お菓子作りなんて無理だって言ってたのに、いきなりどうしたの？　もしかして、誰かにあげたいとか？」

「あげたいんじゃなくて、あげなくちゃいけなくなっちゃったんだよ。来週はその練習なの。真由が手伝ってくれるんなら、うまく行くこと間違いなしだもんね！」

喜ぶあたしに真由は

「じゃあ、土曜日に作ろう。失敗しても、日曜日にもう一度やり直すことができるからね。」

と真面目な声で言う。

もしかして、ちょっと気合いが入ってる？

「絶対に失敗しないように、しっかり見てあげる。」

という頼もしい言葉に、心からほっとした。

これなら、せっかく買う食材を無駄にしなくてすみそう・・・。

次の一週間は、秋月さんに会っても、土曜日にアップルパイを作ることは言わなかった。

だって、試作品をあげるってことになっているのに、食べられるようなものができなかったら困るから。

それらしい話題が出るたびに、あたしはさりげなく話を逸らし続け

た。

そして、一週間後の土曜日。
朝の9時ごろに真由が来た。お泊り用の荷物とエプロンを持って。
どうせ泊るんだからゆっくりでいいって言ったのに、あたしがパイを作るのに何時間かかるかわからないからって。

子どものころから女の子らしい服装が好きだった真由は、今日も小花柄のスカートとロングブーツにポンチョ風の上着、髪は左耳のうしろで一つに束ねて可愛らしい。
色が白いから、明るめの茶色の髪がよく似合う。

久しぶりの挨拶もそこそこに、真由は本と道具とあたしが仕事帰りに買いそろえておいた材料を厳しい目でチェックする。

「けっこう本格的な感じだね。」

「え？　そうなの？」

本格的かどうかもよくわからないほど、あたしは何も知らないってことか・・・。

「うん。でも、手順は難しくないし、焼いたら終わりっていうのは本当だから、紫苑にもなんとかなると思うよ。」

よかった～。

「それに、これだと美味しくないわけがないよ。」

「本当?!」

「うん。まあ、見た目はどうなるかわからないけどね。じゃあ、まずは材料を量るところからね。」

そう言って、真由がエプロンをする。

「うん!」

本を見ながら動き出したあたしの横から、真由は腕組みをして2歩下がった。

・・・あれ?

「真由。一緒にやってくれないの?」

「なんで? 紫苑の練習なんでしょ? あたしは見るだけだよ。」

「そんな! 手伝ってくれないの?!」

「あたしが手を出したら、最終的には全部やることになっちゃうよ。中途半端より、全然やらない方がいいんだよ。」

「・・・エプロンしてるから、手伝ってくれると思った。」

「だって、これやっておかないと、紫苑がどこまで粉を飛ばすか分からないから。」

「ああ、そうですか。冷たいなあ、親友なのに。」

「何言ってんの？　親友だから、こうやって教えるんだよ。さあ、ビシビシ行くからね。」

「口だけ？」

「まあ、手で見本を見せるくらいはするけど。」

中学時代は内気なところが可愛らしかった真由だけど、大人になるにしたがってしっかり者になった。
実家に住んでいたころは隆くんも交えて会うことがあって、そういうときは、真由が隆くんを操縦している様子にいつも驚いたものだ。
そんな真由に、あたしが敵うわけがない。

「・・・わかったよ。」

真由は厳しかった。
調理学校の先生って、こんな感じなんだろうか？

用意した道具や材料を置く順番にもこだわるし、あたしが手順に迷っていても、見ているだけで教えてくれない。
そりゃあ、真由がついていてくれるのは今回だけで、次は自分でやらなくちゃならないことは分かってるけど。
だけど、少しくらいいいじゃない！

材料を量る、と、下準備。

けっこう大変だった。

特にバター。
切ろうとすると、ナイフにくっつく。
さわると手がべとべとになる。
真由が
「脂分はキッチンペーパーでぬぐった方がいいよ。」
と教えてくれた。
材料が多いから、量るものもたくさんある。
秋月さんが“量り終わったところで半分終わったような感じ”
と言った意味がわかった。
粉をふるうとき、粉ふるいに小麦粉を入れようとして、あたりにぶわっと粉が飛ぶ。
真由がエプロンをしたときに言った言葉のとおり。
「次回は大きいスプーンですくって入れたらいいかもね。」
もっと早く気付いてくれればいいのに・・・。
それからも、やっぱり大変だった。
「もっと、縦に切るように混ぜるんだよ。」
「そんなふうにボウルを揺すったらダメだよ！」
「手早く、手早く。」
「それじゃあ、二等分とは言えないよ。」
「りんごの皮をそんなに厚くむいたら、パイの中身が少なくなるよ。

」
「左右の力が違っちゃってるから、この辺が薄くなってる。」
何かをやるたびに、真由の指摘が飛んでくる。
それでもどうにか生地を伸ばしてパイ皿に敷こうとしたら、もともと真ん丸にはなっていなかった生地がビローンと伸びて、半分くらいまで千切れてしまった。
「どうしよう？」
また丸めてやり直し・・・？
「今日はとりあえず、切れた部分を少し重ねて敷き込んでみたら？　次にやるときはラップを使って持つか、パイ皿を逆さまにして生地の上に乗せてひっくり返したらいいかもね。」
よかった。
今日のところはやり直しは免れた。
半分の生地を伸ばして敷いた中に、切って砂糖やスパイスを混ぜたりんごを入れ、残った半分の生地を伸ばしてその上にかぶせる。
「・・・ふたの方が、真ん中に置けなかったみたい。」
丸い型の一方はかぶせた生地が端っこぎりぎりで、反対側はたくさんはみ出している。
「うーん・・・。ずらすと切れそうだから、今日はこれでいいことにしよう。」

真由、ありがとう！

「じゃあ、端を波型にしてみようか。紫苑。指先に粉をつけて。」

真由にさんざん笑われながら、パイの周りのあまった生地をきちんと・・・には見えないかもしれないけど、どうにか波形にする。溶き卵を塗って、温めておいたオーブンに入れて、温度と時間をセットして・・・あれ？　終わり？

うわー！
すごい。
本当に、オーブンに入れたら終わりだ！

「ほら、今のうちに片付けよう。」

真由に言われて使ったボウルやらなにやらを洗う。

「必ず、よく乾いてからしまうんだよ。」

はい、わかりました。

粉が飛び散った床には掃除機をかけて、テーブルも床もきれいになると、あとは焼き上がるのを待つだけ。

そう。
待つだけだ。

ただ“待つだけ”　なんて、すごく贅沢な時間！

オーブンをのぞいてみると、表面にうっすらと焼き色がつき始めて、パイの端の2か所からはぐつぐつと煮えたつ中身が流れ出している。縁のあたりの生地からじゅわじゅわと細かいあぶくが立っているのは、生地に混ぜてあるバターが溶けているのかな？

「こうやって外側は焼いて、中のりんごは煮てるんだねえ・・・。」

感心してつぶやくと、真由が隣からのぞき込んで、頷きながら

「いい感じだね。」

と言ってくれた。

やった！

それから真由はエプロンをはずしながら、あたしに向き直った。

「さあ、紫苑。どうしてこんなことをするつもりになったのか、詳しく教えなさい。」

「え？　・・・やっぱり知りたいの？」

「当たり前だよ。」

「べつに面白くないよ。」

「そうやって隠すってことは、何かあるんだね？」

そういうことになっちゃうの？

「さあ、紫苑。今、話すか、夜に話すか、どっちにする？」

「話さないっていう選択肢はないんだ？」

「ないよ。」

引きさがらないつもりだ。

夜までちくちくやられるよりは、さっさと話しちゃった方が気が楽かな。

「わかったよ。今、話す。でも、真由が期待してるような話じゃないと思うよ。」

１３　お菓子作りの道は険しい（後書き）

アップルパイの作り方は、平野顕子著『ニューヨークスタイルのパイとタルト、ケーキの本』（２００８　主婦と生活社）を参考にさせていただきました。

１４　お菓子作りの理由

「もともとは、家庭科部だったことがバレたのが原因なんだよ。」
真由が淹れてくれた玄米茶にフーフーと息を吹きかけながら説明する。
部屋中にりんごとシナモンとバターの香りがほんのりと漂って、いかにもお菓子ができるのを待っているという感じがする。
なんだかすごーく楽しみ！
お菓子作りがこんなに楽しいなんて、初めて！

「同期と龍之介のお友達と一緒に出かけたときに、だいぶ前に話したことを覚えてた友達が、『そう言えば』って言い出してさあ。黙っててって言ってあったのに。」

「ねえ、龍之介くんっていうのは、紫苑がよく話す人でしょう？
そのお友達と一緒に出かけたの？」

「うん。今月の初めごろに、龍之介がその人たちと・・・2人なんだけど、うちの会社の駅前で待ち合わせしてて、あたしと友達2人がたまたま会ったんだよ。その一人がすっごくかっこいい人でね。」
秋月さんとあたしの偶然の縁については、ちょっと言い出しづらい。
このまま黙っていよう。

「で、そのあと、一緒に飲みに行こうっていう話が出たらしくて、3対3で行ったの。」

真由が身を乗り出す。

「それって、誰かが誰かを、ってこと？」

「やっぱりそう思う？　あたしも、もしかしたらって思ったんだけど。」

「だけど？」

「全然わからなかった。」

あたしの答えを聞いて、真由がクスリと笑う。

「紫苑って、そういうこと、相変わらずわからないんだね。」

「仕方ないじゃん。みんな隠すのが上手いんだよ。」

「もしかしたら、紫苑が狙われてたりして。」

ズキン、と心臓が響く。

「真由。」

真由の前では、あたしは自分の気持ちを隠さない。
きっと、今はうろたえた顔をしているはず。

「・・・まだ辛いんだね。」

悲しそうな顔をする真由。

「・・・ごめん。真由。」

「紫苑が謝ることないよ。あたしが無神経に言ったのが悪かった。ごめんね。」

いいんだよ。
こんなことをいつまでも引きずっている自分が情けないのは本当なんだから。

「ええと、それで？　家庭科部の話が出てどうなったの？」

真由が明るく話を促す。
そうだよね。
せっかく久しぶりに会ったんだから、楽しく過ごさなくちゃ！

「家庭科部に入ってても料理は苦手だって言ったら、龍之介が『やっぱりな。』って言ってね。腹が立って言い合ってるうちに、売り言葉に買い言葉で、龍之介に手作りのケーキを食べさせるって約束しちゃったの。」

「プ・・・。」

真由がこっそりと吹き出す。

「龍之介ったらさあ、威張っちゃって、練習も必要だろうから3か月以内でいいぞ、とか言うんだよ。」

「相変わらず、龍之介くんとは言い合ってばっかりなんだね。」

真由には、あたしの話にたびたび登場する龍之介はずっと前からの知り合いのようなものだ。

「本当。どうしてだろうね？」

ため息をつくあたしを、にこにこと見ている真由。
昔と変わらない、安心できる笑顔。

「今でも紫苑のことを送ってくれるの？」

「龍之介？　うん。帰り道だからね。」

「そう。いい人だね。」

ピピピピピピ。

オーブンの音。

心配になって、思わず真由の顔を見る。
なのに、真由は「あ、鳴ったね。」なんて、平気な顔をしてる。

仕方ないか。
真由は毎日、お菓子を作ってるんだから。
珍しくもなんともないよね。

オーブンを開けてみると、ツヤツヤときれいに焼けたアップルパイ。
・・・まあ、形はちょっと、いや、だいぶ不格好だけど。

焼いている間に流れ出たパイの中身が天板でぐつぐついっている。
真由に言われて竹串で刺してみると、ひっかからずに底まで行くようなので、焼き上がりだと判断することにした。
ただ・・・天板ごと出すのが重い。それに、熱い。怖い。
ここで落としたりしたら、午前中の努力がすべて無駄になると思うと、ますます緊張する。
真由に見守られながらガスコンロの五徳の上までどうにか運んでほっとした。

「ねえ、真由。切ってみてもいい？」

わくわくしながら言ったら、真由は呆れた顔をした。

「ダメだよ、紫苑！　冷めてからじゃないと。」

「え？　熱々のは食べられないの？」

「今、切っても、熱くてさわれないよ。それに、紫苑の本にも書いてあったけど、二日目、三日目の方が味が馴染むんだよ。」

「そんな～。味見もできないなんて・・・。」

「ほら、この流れ出たのをスプーンで味見してみたら？」

真由になぐさめられながらスプーンを持って来て、天板に貼りついているべとべとをすくって舐めてみたら・・・美味しい！
爽やかな甘酸っぱい味とシナモンの香りが口の中にふわっと広がって、なんだか幸せな気分になってくる。

もしかしたら、お店で買うのよりも好きな味かも。

「美味しいよ、真由！」

驚いたのと嬉しいので、思わず叫んでしまう。

「信じられない！　こんなに美味しいなんて！　あたしが作ったのに！」

「だから、美味しくできるって言ったじゃない。」

真由がにこにこしながら言う。

これなら龍之介だって、なんにも言えないよね！　・・・見た目以外は。

天板の上のアップルパイをながめながら、大きな満足感を味わう。

あたしにも美味しいお菓子が作れた！

「真由のおかげだよ～！」

嬉しくて、真由に抱きついてしまう。

そんなあたしを真由が笑う。

「よかったね。形は何度か練習すれば、少しはマシになると思うよ。」

それから真由は、ふと不思議そうな顔をした。

「ねえ、紫苑。よくアップルパイなんて思い付いたね。」

「え？」

「だって、普通、“ケーキ”って言われたら、クリームが塗ってあるやつとか、カップケーキとか、そういうものを考えない？
それがアップルパイなんて、まあ、紫苑には向いてるみたいだけど、普段やらない人は思い付かないような気がするけど？」

「あ・・・、それは、その・・・。」

やだな。
どうしてここで言葉が詰まっちゃうんだろう？

「ん？　何？　怪しい、紫苑。」

真由の目がきらーん、と光った気がした。

「ええと、ブレーンがいて。」

「ほほう。どんな？」

「あの、龍之介の友達の一人なんだけど・・・。」

「え？！　一度、会っただけで、ケーキの相談をするほど仲良くなったの？！」

「あ、いや、一度じゃないんだよ・・・ね。」

「・・・どういうこと？」

「・・・まあ、座ろうよ。」

アップルパイの香りが漂う中で、あたしは真由に、金木犀の香りに始まる一連の偶然の話をした。
真由は目を丸くして聞いていて、最後には「すごいね。」と感心していた。

「でも、本屋さんで会ったところまでは偶然かもしれないけど、一緒に道具を買いに行ったのは、秋月さんの気持ちだよねー。」

意味ありげな目つき。

「それに、毎朝同じ電車に乗ってるのだって、偶然とは言わないんじゃない？」

もう・・・真由。

「真由は電車通勤じゃないから分からないかもしれないけど、普通、みんな毎日決まった電車で通勤するんだよ。だから、会うのは当たり前なの。」

「そう？」

「それに、お買物だって、秋月さんの親切とお詫びの気持ちからなんだから。」

そう説明しながら、秋月さんとの会話やタルトを分け合って食べたことを言わないように、心の中の箱に入れて蓋を閉める。
こんなことを真由に言ったら、たちまち勘違いされちゃう。

「ふうん。でも、あのアップルパイ、けっこう大きいよね。明日、あたしも一切れもらうけど、残りは紫苑一人で食べきれるの？」

「ああ、うん。秋月さんにあげる約・・・束・・・が・・・。」

しまった・・・。

「『秋月さんにあげる約束』ね。ふううん。」

「そ、・・・そんな深い意味はないんだよ！　道具を選ぶのを手伝ってもらったお礼に・・・。」

「へえ。」

「だって、休みの日にわざわざ出てきてくれたし、その前に本も教えてもらってるし、」

「そうだよね。」

「だからお礼するって言ったら、」

「当然だよね。」

「試作品を食べたいっ・・・て・・・。」

ニヤリと、真由が笑う。

「勇気あるよね。どんなものができるかわからないのに。」

変な誤解しないで！

「でも、でも、試作品って言っても、自分が作ってるのと同じレシピだから、きっと美味しくできるって知ってて。」

「そうかもね。」

「だから、あたしが作ったお菓子を食べる第一号を予約・・・・・。」

「予約。」

・・・ダメだ。

全部話してしまった・・・。

自分の馬鹿さ加減にあきれて、ぐったりとテーブルにうつ伏せになる。

そうっと向かい側をみると、真由がニヤニヤしていた。

「あたしは何にも言わないけどね。」

言葉では言ってないけど、その表情で何が言いたいのかよくわかるよ・・・。

でも！

「真由。あたしは誰のことも好きにならないんだからね！」

「わかってるよ。」

真由はふっと表情を和らげた。
それから。
「ねえ、夕飯はあたしが作ろうか？　紫苑より少しは上手いと思うよ。」
“少し”　なんて、そうとう謙遜してるよ・・・。

15　お菓子作りのあとは・・・。

真由が作ってくれたグラタンとマリネサラダは、やっぱり美味しかった。
見た目も味も、あたしが作るものとは大違い。
片付けが済んで、のんびりと杏露酒を飲みながらおしゃべりしているとき、真由が突然言った。

「紫苑。あたし、隆くんからプロポーズされたの。」

！

幼馴染みの隆くん。あたしの初恋の人。
中学のときに真由と付き合いはじめて、そのままずっと続いていたことは知ってる。
あたしとも、普通に友達としての付き合いはある。

「真由・・・。返事はしたの？」

真由の雰囲気が、妙に緊張しているのが気になる。
“おめでとう”　って言ってもいいの？

「うん。あのね、・・・ＯＫした。」

「よかった！　おめでとう！」

本当によかった！

「よかったね！　ああ、嬉しいよ！　おめでとう、真由！」

自分のことのように嬉しくて真由を抱きしめる。

「もっと早く言ってくれれば、お祝いにシャンペンくらい用意しておいたのに。」

興奮して一気にまくしたててしまったところで、真由が泣いていることに気付いた。

「どうしたの？　嬉し泣き？」

真由から腕を離して、顔をのぞき込む。

「違う。・・・ご、ごめんね、紫苑。」

「え？　なん・・・で？」

あたしが隆くんのことを好きだったことは知らないはず。
しかも、１０年以上前の話だよ？
もう、とっくに立ち直ってるけど・・・。

「あたしだけ・・・、あたしだけ幸せになって・・・。」

え？

「紫苑は・・・あんなに辛いことがあって、今でも傷ついたままな

のに・・・、あたし・・・。」

まさか・・・、あのことで？

あたしのことが原因で、自分のことを喜べないの？

真由はあたしの肩に額を押し付けて、泣き続ける。

「あたし・・・嬉しかったの。隆くんにプロポーズされたとき、すごく嬉しかったの。すぐに『はい。』って言ったの。」

「うん・・・。うん。」

わかるよ、真由。

あたしもそうだったから。

それでいいんだよ。

「だけど・・・、だけど、あとになって、紫苑のことを思い出して・・・。紫苑はずっと辛いままなのに、あたし、嬉しくてそれを忘れて・・・自分のことだけしか考えられなくて、本当に自分勝手で・・・。」

「真由・・・。」

謝らなくちゃいけないのは、あたしの方だ。

こんなに心配させてしまって。

「気付いてから、隆くんに・・・もう少し待ってもらえないかって・・・言おうと思ったの。」

「真由！　まさかそんなこと！」

「できなかったの・・・。できなかった。もしかしたら隆くんが怒って、あたしから離れて行ってしまうかも知れないって思ったら、言えなかったの。・・・ごめんね、紫苑。あたし、自分の幸せだけしか考えられなくて・・・。」

そうじゃない。
そうじゃないよ、真由。

「違うよ、真由。そんなことない。真由は真由で、幸せになっていいんだよ。」

「でも。」

「いいんだよ。ごめんね、真由。たくさん心配かけちゃって、ごめんね。」

視界が涙でぼやけてしまう。
真由の結婚っていう、せっかくのおめでたい話題で泣きたくなんかないのに。

「あたしが弱虫だから・・・、せっかく真由が幸せになるのに、そんなふうに泣かせたりしてごめんね。」

「紫苑。」

「真由。あたし、自分のことみたいに嬉しいよ。本当におめでとう。幸せになって。」

あたしがつかめなかった幸せ。

あたしの分も。

「うん。・・・うん。ありがとう、紫苑。ありがとう。」

真由が涙でぐちゃぐちゃになった顔で、やっと微笑んだ。

それから二人で・・・また泣いてしまった。

ようやく終わったおしゃべりのあと、ベッドの下に並べて敷いたお布団から、「紫苑。」と声がかかった。

小さい明かりだけを残して暗くした部屋。

たくさんの笑いと少しの涙のあとの心地よい疲労感。

「なあに?」

「あのね、紫苑は誰のことも好きにならないって言ってるでしょう?」

「うん。」

「でもね、違うと思うの。」

「そうかな?」

「うん。あのね、誰かを好きになるときって、最初から『この人を好きになろう。』って決めてるわけじゃないから。」

ああ・・・。

「いつの間にか、気が付いたら『一緒にいたいな。』って思ったりしてて、それが“好き”っていうことなんじゃないかと思う。」

「うん・・・。」

「だから、紫苑がいくら『誰のことも好きにならない。』って決心していても、そういう相手に会ったら、心が勝手に動いてしまうと思うの。」

「ふふ。あくまでも、『そういう相手に会ったら』ね。」

「そう。『会ったら』ね。・・・ふふふ。」

真由、ありがとう。

「だからね、紫苑。そういうことが起きたら、意固地にならないで、成り行きに任せてみたらいいと思うの。」

「成り行きに任せる？」

「うん。ダメだったら、きっと『無理！』って思うし、そう思わなかったら、そのままで。」

「そのまま決めないで？」

「そう。決めないし、考えないの。」

「考えない？」

「紫苑は好きになることが怖いんでしょう？　体調が悪くなるくらいに。」

「うん・・・。」

「だから、好きかどうかは考えないの。ただ、無理だと思ったら、その時点で終わらせようっていう決意は必要だけど。」

「そうとう気の長い人じゃないと、あたしの相手は務まらないね。」

「ふふ。そうだね。」

「もしも、『決めてほしい。』って言われたら？」

「そのときに、紫苑が無理だと思ったら断ればいいんだよ。」

「無理だと思わなかったら？」

「一緒にいたいかどうか、考えてみるの。」

一緒にいたいかどうか・・・。

「『その人がいなくなったらどうだろう？』って考えてみて、いなくなっても平気だったら断るの。」

「怒るかもよ。」

「仕方ないよ。どうせ別れるんだから、いいじゃない。」

「そんなもの？」

「そんなものだよ。」

ベッドの下から「あれ？」という声が聞こえて、笑い声。

「なんか、話がずれた。」

と、真由。

「そうだっけ？」

「断る話じゃないんだよ。紫苑が、もしかしたら、誰かを好きになるかもしれないって話だったの。」

ああ、そうか。

「好きになるかな？」

「そういうのって、防げないと思うよ。」

「そう？」

「うん。だから、そういうときに驚いたり、慌てて拒否したりしないで、成り行きに任せなさいって言いたかったの。」

「うん・・・、そうか。」

「そう。それだけ。おやすみ、紫苑。」

「おやすみ、真由。」

いつもあたしのことを考えてくれて、本当にありがとう。

暗い部屋の中に微かにアップルパイの香りが漂っている。

その甘酸っぱい匂いと一緒に浮かんできたのは秋月さんの笑顔で・・・。

月曜日に、一切れ持っていかなくちゃ・・・。

16　試作品の評価

月曜日。

前の日に真由と一緒に選んだ小さな紙箱に、アップルパイを一切れ入れてきた。秋月さんに渡すため。
けっこう大きな丸いパイの中で、縁の処理が一番上手にできた場所を選んで。

朝、部屋を出るときに、やっぱり渡すのはやめようかと思った。忘れたことにしちゃうとか。
秋月さんには、この週末に作るという話はしていない。
だから、今日渡さなくても、不都合なことはない。

不味いからじゃない。
本当のところ、自分で作ったとは思えないくらい美味しかった。
日曜日に真由と食べて、自分で感動した。
真由も「これなら大丈夫。」って言ってくれたし。

見栄えが悪いからでもない。
切ってみたら、それはあまり気にならない。

なんていうか・・・、“いいのかな？”　って気がして。
手作りのお菓子をあげるって、ちょっと特別な気がしてしまう。

でも、約束したし・・・、お礼だし・・・。

だから、あげなくちゃ！

さんざん迷った末、ようやく小さな箱を入れた紙袋の取っ手を握った。

電車を降りて改札口へ向かいながら、周りを見回す目がおどおどしているのが自分で分かる。
紙袋を持つ手が震えてる。
きょろきょろし過ぎて、自動改札機にぶつかりそうになった。

――　いない。
いつもなら、たいてい改札口の前後で会うんだけど。

駅の外に出ても、初めて出会った信号まで来ても、秋月さんには会わなかった。

どうしよう？
もう、うちの会社の前だ。

・・・メールしてみる？

お買い物に行くことになったときに、連絡先は教えてもらってある。

だけど、なんだか・・・。

どうしよう？

でも、約束だし・・・。

入り口の手前で立ち止まり、少し端の方によけてぐずぐずと悩む。

ええい！

お礼なんだから、気にするな！

『おはようございます。今日、試作品を持って来たんだけど、お昼休みとか、時間はある？　谷村紫苑』

送信！

「えい！」

気合いを入れてボタンを押したら、入り口を入ろうとしていた年配の社員さんが振り向いて笑った。・・・恥ずかしい。

急いで携帯をバッグに入れようとした瞬間、着信のライトが・・・

秋月さん！

こんなにすぐ？

「あ、あ、あの、谷村です。」

『紫苑さん、おはよう。』

「あ、はい。どうも。あの。」

自分の会社の前で電話をかけてるのって、なんだか恥ずかしい！
人がいる方に背中を向けてしまうと、ますます怪しい感じがするし・・・。

『約束を覚えててくれたんだね。どうもありがとう。』

「いえ。あの、あんまり上手にはできてないけど・・・。」

『実は今日、僕、出張でね、これから新幹線に乗るところなんだよ。』

「え？　出張？！　新幹線？！」

緊張の糸が切れて、声がひっくり返ってしまう。

『うん。だから、すごく残念なんだけど、受け取ることができなくて・・・。』

「あ、じゃあ、自分で食べるから、気にしないで。うん。全然。」

ほっとして力が抜ける・・・。

『そう？　本当にごめん。今度、僕が作ったのを・・・あ、行かなくちゃ。じゃあ。』

「うん。行ってらっしゃい。」

あーあ。

なんだか疲れたよ・・・。

今日一日、大丈夫かしら。

パイの入った紙袋はそのままロッカーに入れて置くことにする。
ビルの中って暖かいけど、たぶん、大丈夫でしょう。

自分の席に座ったら、やっぱりいつもより疲れてる。
どれだけ緊張していたんだろう？
ああ、なんだか机に突っ伏したい気分・・・。

「はあ・・・。」

「朝からため息なんて、どうしたんですか？」

隣から金子さんが声をかけてくれる。
今日はストライプのシャツに黒のパンツでかっこいい・・・けど、
やっぱり可愛い。

「ちょっと、朝から緊張することがあってね・・・。」

金子さんは「そうなんですか？」と不思議そうに首をかしげる。

不思議・・・かもね。
試作品のお菓子を渡すって考えただけで、あんなに緊張するなんて。
試食してもらうくらい、何でもないはずなのに。

論理的に考えれば何でもないこと。

でも、感情が。

動揺を静めて仕事に集中していたら、午前中はあっという間に過ぎた。

お昼休みにコンビニに行く前にロッカーを開けたら、アップルパイの匂いがふわっと広がる。

あらら。こんなに・・・。

「あれ？　いい匂いがしますね。」

金子さん、気付いた？

「あ、もしかして、谷村さんですか？　開けた瞬間に・・・。」

ばれた！

「あ、これ？　ええと、」

持って来たのに、持って帰るって言ったら、変だよね？！

「お、お昼に食べようと思って。」

「わあ。何ですか？　この匂いだと・・・。」

「あの、アップルパイだよ。あとで一緒に食べようね。少しだけど。」

「いいんですか？　楽しみ！」

あたしが作ったことは言わないでおこう・・・。

コンビニから戻るときにロッカーからアップルパイも持って、職場に戻る。

いつものとおり打ち合わせ机に買って来たものを並べ、そこに、パイの入った紙箱も置く。

手が震えちゃう～。

自分が作ったものを他人に食べさせるって、怖い。

真由はよくそんな仕事ができるよね。

中がどうなっているのか気になって、自分で開けてのぞいてみた。

・・・無事だ。

そんなに下手には見えないし。

「谷村さん、それ、本当にいい匂いですね。どこのですか？」

「え？」

「どこのお店で買えるのかな、と思って。」

「あ、これ？」

びくびくしてるのに気付かないといいんだけど。

「ええと、これ、手作りなの・・・友達の。」

買いに行きたいなんて言われたら困るし、自分が作ったとは怖くて言えない。

「土日で友達が遊びに来て、作ってくれたの。」

「わあ、そうなんですか！　そういえば、お友達が来るって言ってましたよね？　見てもいいですか？」

ああ・・・真由、ごめん！

真由は、もっと美しく作れるのに・・・。

「どうぞ。持ってくる間に、少し崩れちゃったみたい。」

箱を開いて金子さんの方に向けると、金子さんが目を輝かせた。

「美味しそう！」

「うん。美味しいよ。家にまだあるの。」

これは言っても大丈夫！

買ってきたお昼を食べ終わってから、給湯室から包丁を取ってきて、パイを半分に切り分ける。

縁の部分がザクザクと音がする。

「ここの生地も美味しいんだよ。」

友達が作ったことにしたから、自慢しても平気だ。
少し余裕ができて、なんとなく楽しくなってきた。

「紫苑〜。」

廊下からハスキーなへろへろ声が聞こえてきて、声と同じようにへろへろした様子で龍之介がやって来た。

「どうし・・・」

「紫苑！　それなに?！　もしかしてアップルパイ?！」

あたしが「どうしたの?」と言う暇もないほどの勢いで、龍之介が駆け寄ってきて机に覆いかぶさるように乗り出してくる。

「どうしたの、これ?！」

あまりの勢いに思わず身を引いてしまう。

「・・・持って来たの。」

間が抜けた答えしか出て来ない自分に、ちょっと呆れる。
そんなあたしと“理解不能”という顔をした龍之介を見て、金子さんが笑いながら説明してくれた。

「谷村さんのお友達が作ったんですって。」

「手作り?！　あ、紫苑の友達って、パティシエだっていう友達か?」

「え？　ああ、うん、そう。」

ああ・・・。

真由、本当にごめん！！

「え？　本職のお友達なんですか？　わあ、すごい！　いただきます♪」

「紫苑。俺も食べたい！　俺、アップルパイ、すっげえ好きなの！　こっちの半分、ちょうだい！」

「龍之介、騒ぎ過ぎ・・・。」

子どもじゃないんだから・・・。

「だってさ～、午前中、ものすごく忙しかったんだぞ。月末が目前なのに、インフルエンザで休みの人が出て・・・。」

ああ、それで疲れた顔してるのか。

「谷村さん、これ、本当に美味しいです。」

金子さんが目を輝かせて言う。

「さすが、本職の方は違いますね。」

「ま、まあ、彼女の店のレシピとは違うんだけどね。」

買いに行くとか言われたら困っちゃう。

「なあ、紫苑。俺、午後も忙しいんだから、可哀そうだと思って、これちょうだい。」

龍之介が手を合わせて頼んでくる。

そんなに好きなのか・・・。

「わかったよ。どうぞ。家にまだ残ってるし。」

「やった！」

龍之介はそのまま手でパイをつかんで、三角形のとがった方から一気に半分くらいを大きな口でパクリと食べた。

その様子を無言で見守る。

どうだろう・・・？

もぐもぐと口を動かしていた龍之介が笑顔になった。

「紫苑。これ、すごく美味い。」

「本当？」

やった～！

嬉しいよ～！

「うん。俺、こういうの好き。特に、皮が。店で売ってるのとは違うな。」

「そうなの。普通のパイみたいに、薄い層が重なってるんじゃない

んだよ。」

だから、あたしでも作れるんだけど。

「うん。この、中身がしみ込んだ底もいいけど、こっちの端っこも美味い。」

2口で全部食べきって、龍之介は満足そう。

「ああ、美味かった。ここに顔出してよかった～。」

こんなに褒めてくれるなんてウソみたい。

嬉しいけど、なんだか、ちょっと恥ずかしいな。

あたしが作ったってわかっても、同じ感想を言ってくれるかな？

「そうだ、紫苑。」

「なに？」

「これにしてくれ。」

「は？」

「ほら、約束したケーキ。」

「あ、ああ。」

「これを友達に教わって、練習してくれよ。」

「本当にこれでいいの？」

そんなに気に入ってくれたんだ・・・。

「“これで”　って、お前、余裕だな。」

だって・・・、そりゃ、そうだよ。

「い、いや、そんなことないよ。生地を混ぜるのも、りんごを切るのも、形をちゃんと作るのも、大変・・・そうだったよ。できるかなあ？」

「多少、形が悪くてもいいぞ。この味と食感があれば、とりあえずアップルパイって認めるから。」

「うん・・・。わかった。練習する。」

「谷村さん。そのときはわたしにも食べさせてくださいね！」

「うん。・・・頑張るね。」

こんなに気に入ってくれるなんて・・・。

誰かに美味しいって言ってもらえるって、すごく嬉しい！

それに、龍之介があたしを褒めたことって、初めてかもしれない。

・・・本人は真由を褒めたつもりだろうけど。

はっ！

秋月さん、試作品を食べる第一号じゃなくなっちゃった！

・・・まあ、いいか。

よく考えたら、第一号は真由だよね。

すでに第一号じゃないんだから、そんなに気にすることないか。

一応、約束を果たそうとしたことは解ってもらえてるし。

それにしても・・・やっぱり嬉しい！

龍之介が気に入ってくれるなんて。

しかも、もう一度食べたいって思ってくれたんだよ。

ふふふ。

何も知らずにね。

見なさい！

あたしだって、やればできるんだから！

17　試作品のウソ

「紫苑さん、おはよう。」

朝の改札口。
秋月さんのいつもの笑顔。

「あ、おはよう。出張、日帰りだったんだね。お疲れさま。昨日は朝からごめんなさい。」

「僕の方こそ、ごめん。せっかく持ってきてもらったのに。」

「ううん、気にしないで。お昼に食べたから。でも、次はいつになるかわからないけど・・・。」

本当の気持ちを言えば、渡さないで済んでほっとしたっていう部分がけっこう大きい。
もしも秋月さんに渡した場合、どんな感想が返ってくるかと気が気じゃない時間を過ごさなくちゃならない。
渡したその場で食べてもらえば緊張する時間は短くて済むけど、朝渡して、感想は翌日、または翌々日・・・なんてことになったら、あたしは疲れ切ってしまう。

「うん、いつでもいいよ。でも、龍之介にあげる前がいいな。」

どっきーん！

すみません！
もう、あげちゃいました！

まあ、本人は知らないけど・・・。

「も、もし、2回目で上手にできたら、それを龍之介にもあげちゃうから、同時ってことになるけど？」

うん。
昨日の様子だと、そういう可能性もゼロじゃない。

「あれ？　その様子だと、昨日のはけっこういい出来だったんだ？
あーあ。もったいないことしたなあ。」

「あ、いえ、全然自慢できるようなものじゃなくて。」

でも、一応、味だけは合格点かな？

「そのときは、朝もらえればいいかな。職場に着いたらすぐに食べれば、絶対に龍之介よりも先だよね？」

「ん・・・、まあ、そうだね、きっと。」

どうしてそんなに龍之介にこだわるのかな？
“第一号”　っていうのは、もしかしたら龍之介のことだけを言ってたの？

もしも龍之介が秋月さんに、昨日、アップルパイを食べたっていう話をしたら・・・どっちにもウソをついてることがバレちゃうよ～。
ああ、どうか二人が絶対に会いませんように！

・・・っていうのは無理か。
あたしがこんなにしょっちゅう顔を合わせてるんだから、秋月さんと龍之介だって、けっこうすれ違ったりしてるよね？
じゃあ、せめて、二人の間でこの話題が出ませんように！
「そうだ。紫苑さんにお土産があるんだ。」
お土産？
「昨日、出張で会った人に、地元で人気があるお土産を教えてもらったんだよ。はい、これ。」
そう言って、白い紙袋を渡してくれた。
軽い。
振ってみたら、かさかさと音がする。
「最中のなかにあんこの粉が入ってて、お椀に入れて熱湯をそそぐとお汁粉になるんだって。最中の皮がお麩みたいになるって言ってたよ。」
お汁粉か。
寒くなってきたから、こういうのってちょうどいいね。
「なんだか楽しみ♪　どうもありがとう。」

夜、もらったお汁粉を作ってみた。

お椀に入れてお湯を注いだら、最中の中から松や梅の花のお麩やあられが出てきて、そのかわいらしさに感動！

携帯で写真を撮って、お礼のメールと一緒に秋月さんに送った。

そこに、真由からの電話。

一瞬、秋月さんからかと思ってドキッとしたあと、真由の名前が表示されていることに気付いてほっとする。

「ねえ、秋月さん、アップルパイのこと何て言ってた？」

電話に出た途端、あいさつもそこそこに秋月さんの名前を出されてまたドキッとする。

「あ、あ・・・アップルパイ？　ああ、あのね、秋月さんには渡せなかったの。」

「まさか、わざと持っていかなかったんじゃ・・・？」

「違うよ。秋月さんが出張で会えなかったの。」

「なんだ。どんな様子だったか訊こうと思ったのに。じゃあ、持っていった分は？」

残念そうな真由の声。

「龍之介が食べちゃったよ。」

「え?！　どういうこと?」

真由が驚く。

当然だよね。

龍之介には、もっと上手になってから食べさせるはずだったんだから。

お昼に金子さんと食べようとしたら龍之介が来たことを話すと、真由は電話の向こうで大笑いした。

「結局、龍之介くんの口に入ったんだ！　あはははは！」

「まあね。龍之介は真由が作ったと思ってるけど。ごめんね、あんなに不格好なのを真由のだって言ったりして。」

「いいよ、そんなこと。美味しいって褒められたんだから。だけど、可笑しい！　知らないとはいえ、本人に向かって褒めて、リクエストまでするなんて！　紫苑、すごいじゃない！」

「うん、そうなの。あたし、自分が作ったものを、あんなに美味しいって言ってもらったのって初めてだよ。びっくりしたけど、ものすごく嬉しい。」

「よかったね！　少しは自信がついた?」

「うん。　次も頑張ろうって思えるようになった。」

本当に、誰かに褒めてもらえることでこんなに自信がつくなんて、

思ってもみなかった。

「秋月さんは残念がったでしょう？」

「まあ、少しはね。でも、次があるから。だけどね、やたらと『龍之介より先』っていうことにこだわるんだよ。」

「ああ、やっぱり。」

「『やっぱり』って？」

「紫苑は気にしない方がいいよ。男の人は、いつまでたっても子供だってことだよ。」

「ふうん。だけどね、けっこうドキドキものなんだよ。」

「何が？」

「だって、秋月さんは月曜日にあたしが作ったものを持って行ったって知ってるでしょう？　でも、龍之介には真由が作ったものだってことになってて、しかも食べちゃったんだよ。秋月さんは龍之介よりも先に食べるってことにこだわってるし、もし秋月さんと龍之介が会ってアップルパイの話題が出たらと思うと、もう・・・。」

「そうか。職場が近いんだもんね。」

「うん。同僚に自分で作ったって言えなくて出たウソがどんどん影響が大きくなっちゃって、今考えると、あのときに本当のことを言っておいた方が簡単だったんじゃないかと思うよ・・・。」

「うん。たしかに。でも、仕方ないよ。バレたら笑って謝ればいいじゃん。」

「ふう・・・。それしかないね。」

「それに、龍之介くんは怒らないよ。もともと紫苑のお菓子を食べるつもりでいるんだから。」

「そうか。」

“褒めた言葉を返せ”　くらいは言われるかもしれないな。

「次はいつ作るの？」

「うん・・・、忘れないうちにとは思ってるけど、龍之介に褒められて安心したのか、ちょっとやる気が出ないみたいな・・・。」

「そっか。まあ、無理しないでね。作ったら、写真を送ってよ。あたしも紫苑の進歩を見たい。」

「了解。楽しみにしてて。」

それから真由は、結婚式が来年の6月の末に決まったことを教えてくれた。
幸せになれるジューン・ブライド。
これからは、新居探しや結婚式の準備で忙しくなりそう。
隆くんとは中学からのお付き合いだから親同士も顔見知りだけど、やっぱりあらためて会食とかもするそうだし。

「でも、結婚する前に、紫苑と二人で旅行にでも行きたいなあ。」

「いいね！　隆くんに取られる前にね！　あたしはいつでも暇だから、真由の日程に合わせるよ。」

そうだ。

いつも、何でも打ち明け合って、分かち合ってきたあたしたちだけど、これからは真由には家族ができる。

真由の一番はあたしじゃなくて、隆くんになるんだ・・・。

そう思ったら、ちょっと寂しくなって、胸がちくりと痛んだ。

18 ≪幸せ≫

――　紫苑。久しぶりだね。

「・・・ユウ？」

――　そうだよ。

「元気だった？」

――　うん。

「いつも、そばにいてくれてる？」

――　もちろんだよ、紫苑。僕はいつも紫苑のそばにいるよ。

「ユウ。まさか、また・・・。」

――　紫苑。僕は紫苑が不幸になることは絶対にしない。

「うん・・・。あたしはユウがいてくれればいい。それだけがあたしの望み。それだけで幸せ。」

――　・・・・・。

「真由が結婚するって。」

――　うん。一緒に聞いてたよ。

「ほかの人たちも、きっとだんだんと結婚するね。」

――　そうかもしれないね。

「あたしね、ユウ。べつに、そういうみんなのこと、羨ましいとは思わないよ。」

――　そう？

「だって、あたしにはあたしの幸せがあるもん。」

――　そう。

「そうだよ。あたしにもちゃんと信用できる友達がいて、仕事もあって、自分で生活できている。そうだ！　今度、何か習い事でもやってみようかな？　今まで興味があってもできなかったこととか。」

――　それもいいね。

「ああ、来月はスノボにも行くんだし。」

――　そうだったね。きっと楽しいよ。

「ユウは見てることしかできなくて残念だね。」

――　でも、紫苑が楽しいなら、僕も楽しいよ。

「そうなの？」

――　うん。紫苑が楽しかったり嬉しかったりすることが、僕も嬉しいんだよ。紫苑が幸せなら僕も。

「そう。じゃあ、あたし、毎日を楽しく過ごすね。ユウのために。」

――　僕のためにじゃなくて、紫苑は自分の幸せを考えて。

「そうか。目が覚めているときには、ユウのことは忘れてるんだもんね。」

――　そうだよ。

「わかった。あたし、いつも幸せでいられるように頑張るね。だから、いつもそばにいてね、ユウ。」

――　もちろんだよ、紫苑。いつもそばにいるよ。

・　・　・　・　・

紫苑。

僕の大切な紫苑。

気付かない？
きみが僕と夢の中で話せるのは、きみが淋しいときや悲しいときだけ。
きみが誰かにそばにいてほしいと思うときだけ。

だけど。

僕はきみを言葉で慰めることしかできない。
きみに触れることはできない。僕には実体がないから。
手を握ってあげることも、肩を抱いてあげることも、涙をぬぐってあげることも・・・。

紫苑。

僕は辛い。

僕ではきみを本当に幸せにすることはできない。
きみは求めているのに・・・。

紫苑。

真由の言葉もきみを導いてくれる。

勇気を出して、紫苑。
いつも、そばで見守っているよ。

19　冬のイベント

１２月に入ると、ロッカー室や昼休みの女子トイレでは、楽しげにひそひそ話をする風景がいつもよりも目に入るようになる。

告白する？
プレゼントは何？
デートコースは？

クリスマスシーズンがやって来る。

女の子同士だけではなく、同僚の男の人たちからも、嬉しそうな、恥ずかしそうな顔で相談されることもある。
あたしはガサガサした性格だからあんまり“女の子”っぽいイメージがなくて、そういう話をしやすいみたい。

もちろん、誰もが好きな人がいるわけではない。
あたしは去年も、一昨年も、そういうメンバーで集まるクリスマス・イブの宴会に参加していた。
今年もたぶん、そうだろうな。
・・・まあ、声がかからなくてもいいかな。
一人でのんびり過ごすっていうのも、悪くないかも。

１２月はクリスマスの前に、忘年会のシーズンもある。

職場の忘年会のほかに、仲良しのメンバーで行くのが毎年２つ。同期の女子会と、龍之介がいるいつものグループ。
けっこう忙しい。

まずは今日。同期の女子会。
蒸し鍋をメインにした和食のお店。
参加者１３名。
幹事は知佳ちゃんとあたし。

「知佳ちゃん、お待たせ！　遅くなってごめん。」

１階のロビーで待ち合わせをしていた知佳ちゃんに駆け寄る。
みんなより先にお店に着くつもりでいたけれど、仕事が片付かなくて、遅くなってしまった。

「大丈夫だよ、間に合うから。美歩も一緒に行くって言ってたから・・・あ、来た。」

美歩は今日もやっぱりメイクも髪型も決まってる。
もちろん、コートの中の服だって、きっとお洒落なはず。
男の子がいてもいなくても、綺麗に見えることが美歩には重要なのだ。

外に出ると、空気がピリリと冷たい。
空は真っ暗。今日は月が出ない日なのかも。
街灯やビルの窓からの明かりがたくさんあるここでは、星もほとんど見えない。
まあ、星を見上げるほど広い空ではないけれど。

予約したお店は隣の駅。
案内されたテーブルは、きちんと壁で仕切られた部屋だった。
これなら盛り上がって黄色い声で歓声をあげても、ほかのお客さんたちに睨まれないで済む。

同期の女子会はいつも賑やか。
今日もお酒が回る前から、すでに酔っ払いがいるような騒ぎ。

上司の悪口、同僚に対する苦情、困ったお客さんのこと、彼氏とのケンカ。
話題は尽きない。
辛口のコメント、同情のため息、同意の笑い声・・・。

その合間を縫って、知佳ちゃんが嬉しそうに小声でささやく。

「あたしね、今年のクリスマスは原田さんと出かけるの。」

「原田さんって・・・。」

「もしかして、原田諒さん?！　龍之介くんの友達の?」

すぐには思い出せなかったあたしに代わって、隣にいた美歩が反応する。

「そう。誘われちゃった♪」

うわ〜〜〜。
本当にあるんだね、合コンの成果って。
・・・あれって、合コンって言ってもいいよね?

「いいな〜、知佳。」
美歩がため息をつきながら言う。
「どうして？　美歩だって、たくさん誘われるでしょう？」
「誘われるけど、そういう人たちはダメなの。」
「どうして？」
「あたしの見た目だけしか見てないから。」
「そうなの？」
「そうだよ。知佳は、誘われる前に原田さんと何回会った？」
「3回・・・かな。」
「電話で話したりもしたでしょう？」
「うん。電話の方が多いかな。」
「原田さんはそうやって、ちゃんと知佳のことをわかってから誘ったんだよ。特別な日に一緒にいてもいい相手ってことで。」
「・・・なんか、そんなに真面目に言われると恥ずかしいけど。」
ちょっと赤くなってる知佳ちゃん、可愛い。
「だけど、あたしのことを誘う人って、いきなりなんだよ。」

「そうなんだ？」

「例えばね、同じ職場の人だったりしたら、仕事中に見ててくれたんだなって思うこともできるけど、全然つながりがない人ばっかりなの。」

「どんな？」

「隣の課に来てる営業の人とか。」

「少しは話したことあるんじゃないの？」

「あいさつくらいはね。でも、いきなりクリスマスはないでしょう？」

そうか・・・な。

「それから、たまたま来たお客さん。」

「「は？」」

知佳ちゃんとあたしの声が重なった。

「廊下を歩いてるときに『総務課はどこですか？』って訊かれて案内したら、その場で誘われた。」

すごいなー。

あたしにはそんなこと絶対に起こらないと思う。

「でも、それって、美歩の態度が気に入って・・・とかじゃないの？　性格の良さがにじみ出ていた、とか。」

知佳ちゃんが尋ねる。

「もしそうだったとしても、あたしはその人のことを知らないんだから、やっぱり嫌だよ。」

「一目惚れっていう可能性もあると思うけど？」

「あたしはそういうのは無理。どんな人かわからないのに好きになるとか、二人だけで出かけるなんて、ありえない。」

「美歩って、けっこう慎重なんだね。」

「そうかな？　服やメイクが派手だから、気軽に遊んでるように見えて、そのギャップでそう感じるんじゃない？」

たしかに今日みたいな席では美歩は派手だけど、仕事中の服装はいたって普通だ。

男の人が目のやり場に困るような服装はしないし、メイクだって、上手だけど、派手ではない。

そもそも美人は、どんなことをしても目立ってしまう宿命なんだよね。

「美歩は好きな人はいないの？　美歩からアプローチすれば、断る人なんていないと思うけど？」

あたしの質問に、美歩はため息をついた。

「あたしが好きになる人はみんな、別な人を好きになっちゃうんだよ。」

「美歩みたいな美人でも、そんなことあるんだ・・・。」

「あるに決まってるじゃん！　だいたいね、男の人の好みがみんな同じだったら、世の中大変なことになるよ。」

たしかに。

「紫苑はどうなのよ？」

知佳ちゃんが興味津々の顔で訊く。

「何が？」

「秋月さんと、あれから何もないの？」

え？

「そうそう。偶然の出会いからちゃんとした知り合いになって、そのあとは？」

美歩も一緒になって詰め寄って来る。

酔っ払ってるのかな？

「そんな、特別なことはないけど・・・。」

どうしてみんな、そんなに期待するんだろう？

そりゃあ、あれからお菓子作りの道具を買いに行ったけど・・・、
それって・・・？
あれってどのくらい特別なの？
うーん。
試作品をあげる話も特別？

最初はちょっとドキドキしたけど、時間が経ってみると、そのあと秋月さんと話すのも特に変わったことはないし、なんでもないことだったように思うけど・・・。

「考えてる。何かあったんだね。」

「うん。あったんだね、この様子は。」

知佳ちゃんと美歩が目を見交わして話している。
隠すと余計に怪しまれそう。

「やだな。ちょっと買い物に付き合ってもらっただけだよ。」

「出かけたの？　二人で？」

「うん・・・まあ、そう。」

あれれ？
この様子だと、勘違いされちゃうかな？

「でも、一回だけだよ。それに、どうしても必要があったんだから。」

「ふうん。」

二人とも、その目は絶対に誤解してる！
なんでもないって言ってるのに！

「ねえ、紫苑。高木くんとはどうなの？」

え？　龍之介？

「そうだよ。あたしも本当はずっと気になってるんだ。」

知佳ちゃんも美歩も、今日はどうしちゃったの？
いつもはあたしのことなんか話題にならないのに。
二人とも酔っ払ってるの？

「龍之介とは普通に友達付き合いだよ。知佳ちゃんだって、美歩だって、龍之介と仲良く話すでしょ？」

どうして、あたしだけ言われるのか解らない。

「あたしたちよりも紫苑の方が、ずっと仲がいいよ。」

ああ。
送ってもらうほど仲がいいのに、“お友達”っていうだけの関係なの？　ってことか。
みんな、何も言わないけど、そういうふうに見ているのかな？

「でも、何もないよ。」

「そうやって、誰のことも“何もない”って言うんだから、紫苑は。」

美歩が呆れた顔をしてため息をつく。

「だって、仕方ないよ。」

あたしは誰のことも好きにならないんだから。

「じゃあ、あたし、龍之介くんに頑張ってみようかな？」

え？

「え？　美歩が？」

知佳ちゃんが驚いた顔をする。

「なーんて。冗談だよ！　今さらね。」

そう言って美歩は、飲み物のお代わりを注文した。

それを隣で聞きながら、あたしは胸がドキドキしてる。

――　本当に冗談？

そう尋ねたい。

でも・・・、もうタイミングを逃してしまった。

あたし、もう龍之介に送ってもらうのをやめた方がいいのかな・・・？

20　冬の日のおでかけ

同期の女子会のあとの土曜日、アップルパイに再挑戦。
あんまり時間があくと、せっかくのコツを忘れてしまうかも知れないと気付いて、ちょっと慌てて。

今日は真由がいないから不安だったけど、実際にやってみたら意外と記憶に残っていた。
前回、真由が手を出さないでいてくれたのは正しかったとしみじみ思った。
おかげで、一人でもなんとか最後まで行き着いたんだから。
形を整えるのも、この前よりは手早くできた。まだ、上手に、とは言えないけど。

それに、龍之介に美味しいって言ってもらったことが励みになっている。
次もあんな顔して食べてくれたらいいな、と思ったら、作るのが楽しかった。
明日、食べてみて美味しかったら、これを龍之介に渡して、あの約束はおしまいにしちゃおうかな？
でも、この縁の波型がもう少しなんだよね・・・。

その前に、秋月さんにもあげなくちゃ。
美味しいって言ってくれるかな？
そういえば秋月さんは、同じものを自分でも作るんだよね？
自分のと比較されたら怖いな・・・。

焼き上がったアップルパイは、きつね色で美味しそうな匂いがする。
早く食べてみたいけど、せっかくだからもうちょっと落ち着くまで・・・明日の朝まで待とう。
前回、次の日とその次の日では、少しだけ食感とか、ずっしり感が違う気がした。
こうやって待つことも、今回は楽しみの一部になっている。

真由に写真を送る約束を思い出して、さっそく写して送った。
よく考えたら、これを一人で食べきるのは大変かも。
美味しかったら秋月さんだけじゃなくて、金子さんにも持っていってあげよう。

夜、そこそこの満足感に浸りながら形のいびつなアップルパイを見ていたら、秋月さんから電話がかかってきた。

「明日、ちょっと会えるかな？」

「明日・・・は何もないけど。あ、ちょうどよかった。」

「なに？」

「今日、2回目のアップルパイを作ったの。」

「本当？　じゃあ、明日・・・。」

「あ、待って。美味しいかどうか、わからないの。まだ食べてないから。」

「試作品をもらう予定だったんだから、それでいいよ。」
「そうかもしれないけど、あんまり不味いと恥ずかしいから、自分で食べて、大丈夫だったら持っていく。」
「だめ。明日じゃなくちゃ嫌だ。絶対にそれがいい。」
可笑しい！
秋月さん、いったいどんな顔をしてこんなことを言ってるんだろう？ちょっと口をとがらせて・・・？
「秋月さん、どうしたの？　子供みたい。」
あたしが面白がってる気配を感じたのか、秋月さんもくすくす笑う。
「実はね、僕もこの前のお詫びにチョコレートケーキを焼いたから、渡したいんだけど。」
「え？　お詫びって、何かあったっけ？」
「せっかく持って来てくれたアップルパイを受け取れなくて・・・。」
あのこと？
「でも、あれはべつに秋月さんが悪いんじゃないし、出張のお土産ももらったし・・・。」
「だけど、それじゃ、僕の気持ちがおさまらないから。」

「ええと、そんなに気にしてもらわなくても・・・。」

「ああ・・・、その、わかった、はっきり言うよ。」

はい？

「紫苑さんに食べてもらいたくて、チョコレートケーキを作りました！　どうぞ、もらってください！」

「えっ？！」

ドキン。

胸が・・・息が苦しい。

それは、つまり・・・。

「ええと、あの、あたし・・・。」

どうすればいいんだろう？

今、断るべき？

ドクン、ドクン、とこめかみに鼓動が聞こえる。

「あの・・・。」

ああ、どうしよう？

何て言えばいいの？

「紫苑さん。」

ゆっくりと落ち着いた、やさしい声。

「はい。」

「とりあえず、明日、会えないかな？」

とりあえず、明日・・・。

「僕が言ったことは考えないでいいから。」

今は何も考えなくていい？

言葉の中に、秋月さんの優しい気遣いが込められていて、肩から力が抜けた。

あたし、こんなに緊張してたんだ・・・。

「うん・・・。明日。大丈夫。」

「じゃあ、１１時に。いい？」

「うん。わかった。」

深呼吸しながら答えると、秋月さんがクスッと笑った気配。

「絶対に紫苑さんの試作品、持ってきて。約束だよ。」

優しく囁くような口調に、いつもの楽しげな笑顔がふわんと目に浮かぶ。

またもや心臓がドキンと鳴る。

「うん・・・わかった。」

とりあえず、明日。
今は何も考えなくていい。

一夜明けてみると、とてもいい天気。
窓から深く差しこんでくる光で部屋が白っぽく輝いて見える。
夜にはぐるぐると堂々巡りをするだけだった心配事も、朝の光の中では簡単に解決しそうな気がする。

――『成り行きに任せてみたらいいと思うの。』

ぽん、と真由の言葉が頭の中に浮かぶ。

そうだね、真由。
どうなるか分からないもんね。
先回りして、くよくよ考えても仕方ないよね。
秋月さんも、『考えなくていい』って言ったし。

さて、何を着て行こうかな？
・・・とりあえず、ダウンベストはやめよう。

朝食に食べてみたアップルパイは、前回と同じように美味しかった。
これなら安心して秋月さんに渡せる。
龍之介はどうしよう？
もう少しきれいにできるのを待つべき？

だけど・・・。

龍之介の喜ぶ顔が見たいな。

『美味い！』

とにこにこして、大きな口を開けてアップルパイを食べる龍之介が目に浮かぶ。

でも、形がね・・・。

まあ、いいや。
帰ってきてから考えよう！

待ち合わせはいつも乗り換える駅のホーム。
毎年大きなクリスマスツリーが飾られることで有名なショッピングモールに行く予定。

秋月さんはグレイのダッフルコートに黒いジーンズを履いて、オレンジ色のリュックを肩にかけている。
いつものちょっとカワイイ笑顔がますます大学生みたいに見える。
あたしはひざ丈の裏がふかふかのカットソーのワンピースにブーツ、

こげ茶色に白い模様が入ったニットのポンチョ。
絶対に男の人とかぶらない服を選んできた。
秋月さんがあたしに気付いてにっこりするのを見て、ちょっと照れくさくなる。

「かわいいね。」

ストレートに褒められて、ますますどぎまぎしてしまう。
悟られないように平気なふりをして、

「秋月さんは大学生みたい。」

と笑ったら、秋月さんも照れたように笑った。

アップルパイを持って来たかどうか尋ねられて頷くと、「やった！」と喜んでくれた。
何て言われるかドキドキものだけど、その笑顔を見たら、持って来てよかったと思った。

目的の駅で降りて、ショッピングモールに向かう白いタイルの遊歩道をぶらぶらと歩く。
今日は風がないから、外にいると日向ぼっこをしている気分。

「お昼は何か買って、あそこの公園で食べようか。」

秋月さんの視線の先には芝生がきれいな公園が。
ボールやバドミントンで遊んでいる家族連れから少し離れた場所に、木製のテーブルとベンチが並んでいる。

「いいね。何がいいかな？」
「温かいもの、かな？　デザートは持って来てるしね。」
「え？！　ここで食べるの？！」
やっぱり不安・・・。
大丈夫なんだろうか？
「せっかくだから、紫苑さんが僕のケーキを食べてどんな顔をするのか見たいな、と思って。」
その笑顔を見たらあたしも楽しみだけど・・・。
「あたしはちょっと心配。」
小さくため息が出た。
「僕の腕が？」
秋月さんがちょっとからかうように言う。
「まさか！　そうじゃなくて、あたしの方。秋月さんは同じものを自分で作ったことがあるんだもん。比べられたら絶対に負けるから。」
「比べたりしないよ。べつのものだと思って食べれば・・・。」
「やっぱり、同じレシピで作っても、違うものができると思ってるんだ！　こうなったら、どんなに不味くても、全部食べてもらうか

らね。」

怒ったふりをしてにらむと、秋月さんが「あはははは！」と笑った。
それを見たら、あたしもとても楽しくなって、一緒に大きな声で笑ってしまった。

１１時半を過ぎていたので、ショッピングモールの外側に並んでいる屋台でお昼に食べるものを物色。
お昼になる前のせいか、お客さんはまばらだ。

クレープ、ホットドッグ、タコス、アイスクリーム、焼き鳥、丼もの・・・・。

「うーん・・・、なんとなく決め手がないなあ。」

秋月さんがつぶやく。

あたしも同感。
何がどうなのかよくわからないけど、“これじゃない”って思ってしまう。

「向こうにもう一つあるね。あ・・・・。」

あれがいいな。

「「おでん！」」

ピッタリ同じタイミングで声が重なる。
あんまりピッタリで、顔を見合わせて吹き出した。

「そういえばね。」
笑っていたら思い出した。
あのときも、ピッタリのタイミングだったっけ。
「秋月さん、覚えてる？　初めて会ったときのこと。」
「ああ、朝、交差点で・・・。」
「うん、そう。あのときね、あたし、金木犀の名前が思い出せなくて『この花って何ていう名前だっけ？』って考えていたの。」
「ああ、そうだったんだ？」
「そうなの。秋月さんが、あたしの質問に答えるみたいに『金木犀。』って言ったから、すごくびっくりしたんだよ。だから、秋月さんのことをそうっと見てみたの。」
あのときは、本当に驚いた。
驚いたし、可笑しかった。
秋月さんの気まずそうな顔は、今でもはっきりと思い出せる。
そのあと、とても楽しい気分になったことも。
「ふふ。あのあとね、もしかしたら、自分が独り言を言ってたんじゃないかって思い出してみたりしたんだよ。」
「ははは！　でも、独り言を言ったのは僕だけだったってわけだね。」

なんだか不思議。

その人と、今こうやって一緒に歩いてるんだもんね。

21　冬の陽だまり

屋台でおでんを買うのは初めて！
夜のおでん屋さんとは違うのかもしれないけど。

コンビニのおでんよりもつゆの色が濃いかな？
その分、味がしみ込んでいるような気がする。
色の濃いつゆの中に白や茶色のおでんダネが半分隠れながら沈んでいて、なんとなくかわいい。

「たくさん買って行こう。」

秋月さんがうきうきした様子で、次々と注文する。

「大根、はんぺん、たまご、厚揚げ、それから・・・。」

「秋月さん、あたし、たまごが好きだからもう一つ。」

「じゃあ、たまごは2つ。あとは？」

「ウィンナー巻きとちくわぶと巾着。」

二人でどんどん注文したら、最後に屋台のおじさんが渡してくれた発泡スチロールの入れ物は特大サイズだった。

それを見て、二人で一緒にまた笑う。
秋月さんと一緒にいると何でも面白くて、笑うことがとても簡単。

温かいお茶を買って、さっき見えたピクニックテーブルまでのんびりと歩きながら、秋月さんが話し始める。

「あの日、お昼過ぎにも紫苑さんと会ったよね？」

「うん。あのときも、びっくりしたよ。」

「僕もだよ。独り言に、いきなり返事をされたから。」

そのときのことを思い出したのか、秋月さんが、フフフ・・・、と笑う。

「あのとき、僕は花壇の花を見ながら、前に勉強したガーデニングの植物のことを考えていたんだよ。」

「ガーデニングの勉強をしたの？」

「大学のころにね。建物の設計だけじゃなくて、庭とか公園のことも知りたかったから。」

「それで植物の名前とか、よく知ってるんだ。」

「詳しいっていうほどではないけど。」

恥ずかしそうにそう謙遜して、秋月さんが続ける。

「あの日、あそこを歩きながら、植えてある花の名前を思い出して確認してたんだよ。そうしたら、いきなり紫苑さんが返事をして振

り向いたから、全然わけがわからなくて。」

「ああ、そうそう。秋月さん、目を真ん丸にして驚いてたよ。」

「そうだろう？　本当に驚いたんだから。すぐに、朝の人だって分かったけど、なんで返事をされたのかはさっぱり分からなくて。」

そういえば、あたしもすぐに、朝会った人だって分かったんだったな・・・。

「しかも、そのあと『どこでお会いしたのか思い出せない』って言われて、思わず“朝だろ！”　ってツッコミたくなったよ。」

そう言いながら、秋月さんは楽しそうに笑った。

「実を言うとね、あたしはちょっと警戒したの。」

思い出すと、やっぱり笑っちゃうよね。

「警戒？」

「うん。だってね、朝一回会っただけなのに、いきなり名前を呼び捨てにされたから。」

「ああ、『紫苑。』って。」

「そう。どうやってか知らないけど、あたしの名前を突きとめたんだと思って・・・、怒らないでね、」

「なに？」

「あのね、ストーカーかと思っちゃった。」

「僕を？！」

「あははは！　ごめん！」

「ひどいなあ。」

「ごめん。よく考えたら、あたしを狙うストーカーなんていないよね。ふふふ。」

「そんなことないよ。紫苑さんだって気を付けないとね。でも、僕は絶対に違う。」

「今はわかってるけど。」

「まあ、あのときは仕方ないか・・・。あのとき、紫苑さんは本当に紫苑色の服を着てたよね？　ちょうど紫苑さんのうしろに本物の紫苑の花が見えて、花のイメージにピッタリの人だなって思ったよ。」

「あたしが？！」

自分と名前が似合っていると褒められたのは初めてで、驚いて秋月さんを見たら、秋月さんはにこにこしながら「うん。」と頷いた。こんなにはっきり言うなんて・・・。

「あそこにしよう。」

テーブルを目指してさっさと歩いて行ってしまう後ろ姿を見ながら、自分の頬が熱くなっていることに気付いた。

木のテーブルに向かい合って座り、真ん中に置いたおでんの大きなパックのフタを開ける。
ふわりと湯気がたって、ダシとお醤油のいい匂いが漂う。

「美味しそう♪　いい匂い。」

照れくさくて目が合わせられないことを隠すため、食べ物に集中するふりをする。
おでん屋さんが一緒にくれたお箸と取り皿も並べて、「いただきます。」と声を合わせた。

おでんはどれも味がよくしみ込んでいて、さらに外で食べるという楽しさも加わって、多いかなと思った量もあっという間に減っていく。
たまごを箸でつかめないと言っては笑い、巾着が分解したと言っては笑い、ちくわぶの煮込み具合を議論して笑う。
本当に、秋月さんと一緒にいると、あたしはよく笑ってる。

お腹がふくれたら、お日さまの光が背中に暖かくて、今度はお昼寝でもしたい気分。
テーブルに両ひじをついて手にあごを乗せたら、もう何時間でもこうやっていられそう。
秋月さんもテーブルに腕を投げ出して頭を乗せて、

「なんだか横になりたいなあ。」

なんて言っている。

しばらく何も話さずに、ぽかぽかと暖かい日差しの下のまったりとした心地よさに、フリスビーをしている家族をぼんやりと眺めていた。

秋月さん・・・？

視線だけを動かして横を見たら・・・寝てる？

さっきの姿勢のまま、気持ち良さそうに目を閉じて。

規則正しい呼吸に合わせて、肩が緩やかに上下している。

疲れてるのかな？

仕事、忙しいのかな？

額にかかるさらさらの髪。弓なりの眉。ちょっと微笑むように閉じられた広めの口。

秋月さんの無邪気な寝顔には、なぜか安心感を覚える。

こちら側に投げ出された手は指が長くて、自分の手と比べてみた。

この長い指が器用さのもとなのかな？

「いくよー！」

すぐ近くで甲高い子どもの声。

声のした方を見ると、取り損ねたフリスビーを子どもが取りに来たらしい。

「んん・・・、あれ、寝ちゃった？」
秋月さんが目をこすりながら起き上がった。
そのしぐさが子どもっぽくて、微笑みを誘う。
「ごめん。ほったらかしちゃって。」
「ううん、平気。あたしものんびりしてたから。」
あたしの答えに秋月さんはほっとしたように微笑んで、「じゃあ、」と言った。
「デザートを食べようか。」
あたしの試作品！　忘れてた・・・。

秋月さんがリュックの一番上に乗っている紙箱を出して、楽しそうにテーブルの上で箱を開くと・・・。
中に入っていたのは、ナッツが入って粉砂糖がかけられたチョコレートケーキが2切れ。
あたしが持っている本に載っていような気がする。
材料と作り方だけをながめて、どんな味なんだろうと思っていたんだよね。
「どうぞ。」
「あれ？！　フォークも持って来たの？」

なんて用意周到な人なんだろう！

「うん。天気が良かったからね。あと、少しだけど紅茶もあるよ。」

そう言って、リュックから水筒と紙コップを取り出す。

本当によく気が付く人だ。

「紫苑さんのアップルパイも出して。」

来たか・・・。

「どうしても、今？」

「うーん・・・、嫌なら持って帰って食べてもいいけど。」

そうすると明日の朝とかに感想を・・・？

「やっぱり、今、食べて。」

そうだ。

すぐに終わらせた方がいいよね。

バッグに傾かないように入れてきた箱を出して、秋月さんのチョコレートケーキの隣に思い切って並べる。

上品なチョコレートケーキの隣にあると、あたしのアップルパイは超豪快な感じ。

「きれいに焼けてるね。」

褒め言葉？

・・・まあ、焼き具合くらいはいくらでも言えるよね。

「「いただきます。」」

顔を見合わせて頷き合って、お互いのケーキにフォークを入れる。

「あ・・・。」

思わず声が出た。

秋月さんのチョコレートケーキは、表面はさくっとしていて、下に行くほど中身が詰まっている手応え。

口に入れると、チョコレートのほろ苦い甘さが広がって、噛むとナッツの歯応えと香ばしさがチョコレートの味と混じり合う。

なんて美味しいんだろう。

こんなに美味しいものを目の前にいる人が作ったのかと思うと感動してしまう。

ああ・・・なんだか幸せ。

美味しいものを食べると幸せな気分になるって、こういうことだったんだ・・・。

「紫苑さん。もしかして、美味しくなかった？」

秋月さんったら！

あたしの顔を見てもわからない？

「違うよ。あんまり美味しくて、びっくりしちゃった。こんなに美味しいものが作れるなんて。」

「やだな。褒め過ぎだよ。紫苑さんだって作れるよ。」

照れてるけど、嬉しそう。

「いつもは作ったらどうしてるの？」

「職場に持って行ってる。一人じゃ食べきれないからね。」

「こんなに美味しいものをしょっちゅう食べられるなんて、秋月さんの職場の人は幸せだね。」

「なんだか、そんなに褒められると恥ずかしいな。でも、紫苑さんのアップルパイも美味しいよ。料理が苦手だなんて思えない。」

「え？　本当？　嬉しい。」

自分では美味しくできたと思っていたけど、やっぱりほかの人から言われると違う。

しかも、同じレシピで作ったことがある秋月さんだもんね！

「僕が使ってる材料と何かが違うみたい。香りが少し・・・ブラウンシュガーかな、甘い匂いが深いみたい。こっちの方がいいね。」

「わあ、そう？　仕事帰りにデパートの地下に寄って、急いで揃えた材料なんだけど。」

「ああ、そうか。デパートで売ってる食材って、いいものが揃ってるもんね。でも、それだけじゃないと思うよ。りんごの大きさも揃ってるし、皮まで全部美味しい。大成功だよ、紫苑さん。」

「よかった〜。秋月さんにお墨付きをもらえるなんて嬉しい！」

並べたチョコレートケーキとアップルパイを二人でつつきながら会話が弾む。

微かな甘さのストレートの紅茶が、白い紙コップの中で太陽の光を受けてゆらゆらと透き通って輝く。

少し離れたところから家族連れの笑い声が聞こえる。

おだやかで優しい時間。

秋月さんとは話していても、黙っていても、安心。

それから一緒にショッピングモールをまわって、夕方には家に帰った。

別れ際、秋月さんが言った言葉。

「またね。」

それを聞いたら楽しくなった。

たった3文字の言葉にそんな効果があるなんて、今日まで気付かなかった。

22　アップルパイの行方

月曜日の朝。
アップルパイを3切れ持った。
一箱に入らなくて、2切れと1切れに分けて。

龍之介に渡すかどうかは、まだ決めていない。
秋月さんには褒められたけど、それは、持って行くときに、形がちゃんとしている部分を選んだから。
丸いパイの周囲7割は、なんとも頼りない形をしている。
他人に堂々と渡せるような状態ではない。

でも。

このパイ型は大きい。

8等分にしても、一切れあれば、朝食には十分。
昨日と今日で、朝食2回。
昨日の夜に一切れ。
そして、秋月さんに一切れあげた。
でも、まだ半分残っている。

というわけで、お昼に金子さんと一緒に食べようと思って、持って行くことに決めた。
3切れにしたのは、物好きな同僚が味見をする気になるかもしれない、と思って。

それに、もしかしたら・・・この前みたいに、龍之介がふらりと現れるかも知れない。
もしも食べてるときに龍之介が来たら、あげなくちゃね。

どんな顔をして食べてくれるかな？
「美味い！」って言ってくれるかな？
それとも、形だけを見て「下手だな！」って言われちゃう？

前回のは真由が作ったと言ってしまったから、今回は念のため、一番形がいびつな場所を選んで箱に入れた。
わざわざ下手にできている部分を持って行くなんて、なんだか矛盾してるよね。

下手でも龍之介にあげたら、もう終わり？
なんだかそれじゃ、物足りない気がする。
秋月さんにあげたときみたいに、“試作品”ってことにすれば、挽回のチャンスはあるかな？

「紫苑さん、おはよう。」

駅の改札を出たところで、秋月さんのいつもどおりの爽やかな声。
ビジネスコートを着た秋月さんを見て、“ああ、こういう感じだっけ”と思う。
それくらい、私服姿と雰囲気が違う。・・・けど、似合わないわけじゃない。

きのうは夜になってから、そういえば、おとといは誘われたとき心配してたんだよね・・・なんて思い出した。

でも、秋月さんの態度にはどこにも不安になるようなところがなくて、ただ楽しかった。
今朝も、いつもと変わらない秋月さんのまま。
つまり、今のところは何も考えないでいいってこと・・・だよね？

「きのうはごちそうさま。ケーキ、本当に美味しかった。」

お礼を言うと、秋月さんは照れた顔をした。
それから、

「龍之介に渡すことにした？」

と。

「持って来たけど、迷ってるの。見た目がイマイチだから。」

「それほどでもなかったと思うけど？」

「昨日は特に上手にできた場所を選んで持って行ったんだよ。大部分は本当に情けない状態で。」

その中でも特に情けないものを選んできたし。

「秋月さんと同じように、食べきれないから同僚に食べてもらおうと思って持って来たんだけど、自慢げに他人にあげられるような出来じゃないからなあ・・・。」

はあ・・・、と、ため息が出た。

「どうしたらいいと思う？」

「僕の意見？」

「そう。龍之介にあげても大丈夫かどうか。」

「・・・・・。」

あたしの質問に、秋月さんは無言になってしまった。

変なこと訊いちゃったかな。

・・・そうだよね。

それは、あたしが自分で判断しなきゃいけないよね。あたしが作ったアップルパイなんだから。

あたしがした約束なんだから。

「あの、」

「僕は、」

同時に相手を見て声が重なった。

秋月さんが微笑んでいないことに気付いて、急に不安になる。

もしかしたら怒ってる？

くだらないことを訊いちゃったから・・・。

どうしよう？

「僕は・・・僕も紫苑さんにアドバイスできない。」

「そ、そうだよね。ごめんね、変なこと訊いちゃって。」
慌てて弁解すると、秋月さんは何秒間かあたしの顔を見つめてから、ふっと表情をゆるめて微笑んだ。
そのやさしい笑顔にほっとする。　・・・怒ってない？
「紫苑さん、今、僕が怒ったんじゃないかと思って心配した？」
「え・・・？　うん・・・。」
そんなに分かりやすいのかな、あたし・・・？
「じゃあ、“龍之介にあげるのは、紫苑さんが納得できるまで練習してからでいいと思う”　って、アドバイスする。」
？
『じゃあ』って、どうして？
不思議に思って首をひねっているあたしの横で、秋月さんがくすくす笑ってる。
「そんなに面白い？」
今朝の秋月さんはよくわからない。
「ごめん・・・。なんだか、自分がこんなに単純なのかって思ったら可笑しくて。」
「単純？」

「紫苑さん。」

「・・・はい。」

なんとなく改まった様子に、あたしもつられて返事がかしこまる。

「本当は、紫苑さんにはさっさと龍之介との約束は完了させてほしい。」

・・・『させてほしい。』？

「紫苑さんが、いつまでも龍之介のことを考えてアップルパイを作るっていうことが・・・悔しいから。」

ん？

あれれれ？

ちょっと、話の方向が、なんだか・・・？

突然、周囲を通勤途中の人たちが歩いていることが気になり出す。

ええと、こういうところで平気な話・・・なのかな？

「でも、」

そう言ってこっちを向いた秋月さんは、ちょっと恥ずかしそうだけど、にこにこと嬉しそうで・・・。

「紫苑さんが、僕を怒らせたんじゃないかって心配した顔を見たら、ちょっと自信が持てた。」

ええ～～～～？！
なんか、それって、それって・・・。
「だから、紫苑さんが納得できるまで、龍之介のために頑張ってもいいやって思った。」
「それは、あの、あの・・・？」
あたしは何て返事をすればいいんでしょうか？
「あ、紫苑さんは気にしないで。単に僕の問題だから。」
気にしなくていい？！
そうなの？！
でも、あたしも関係あるみたいだよ？！
「まさか、自分が龍之介にやきもちを焼く羽目に陥るなんて思わなかったよ。あはははは。」
やきもちって？！
やっぱり、あたしも関係あるよね？！
だけど、そんな、『あはははは。』って・・・？
「ねえ、紫苑さん。」
「はい？」
「これからも、試作品は全部、僕に試食させてね。」

「う、・・・うん。わかった。それは構わないけど・・・。」

「じゃあね。」

いつの間にかうちの会社の前だった。

軽やかに走り去っていく秋月さんの後ろ姿を見ながら唖然としてしまう。

あたし・・・告白されたんだろうか？
あれはそういうもの？
なんだかよくわからない。
あんなに爽やかに言うからびっくりしすぎて、胸が苦しいとか手が震えるとか言ってる余裕がなかった。

うーん・・・、わからない。
どうしたらいいんだろう？

・・・いい・・のかな？
秋月さんも『気にしないで。』って言ってたし。
真由も『成り行きにまかせて』って言ってたし。

ふふ。
なんだろう？
なんとなく楽しいような気がしてきた。

でも・・・大丈夫なのかな？

「紫苑。あれ、優斗？」

「うわ！」

龍之介？！

いつの間に？！

「お、おはよう。あの、うん。よく電車が一緒になるの。」

「ふうん。」

入り口に向かって一緒に歩き出す。

「龍之介って、いつもはどの電車？」

「俺？　もっと早いぞ。今日はコンビニで時間がかかった。・・・

なあ、紫苑、それ。」

「え？」

「その紙袋、なに？」

「これ？」

どうしよう・・・。

「あ・・・、ええと、その・・・、アップルパイ・・・」

「やっぱり！　月曜だし、もしかしたらって思ったんだよ！」

そう言いながら、ガッツポーズをする龍之介。

「の、試作品。まだあげられるようなものじゃ・・・・。」

「いい、いい。サンキュー！」

龍之介がものすごく嬉しそうな顔で、紙袋に手を・・・・って、袋ごと？！

「あの、全部？」

「あれ？　誰かにあげる予定か？」

「いや、決まってはいないけど・・・・。でも、試作品だよ？　ちゃんとできてないよ？」

「味見してないのか？」

「食べたよ。」

「食べられたんならいい。もらう。」

“食べられたんなら”　って、ハードル低いな・・・・。

「あのう・・・・、形が。」

「そんなの気にすんなって！」

・・・そうですか。

「あー、楽しみー♪　あ、代わりにこれやる。」
龍之介がコンビニの袋から取り出したのは、大きなプリン。
「あ・・・りがとう。」
「じゃあな～。」
なんとなく納得できないでいるあたしを残して、大股で階段をどんどん上って行ってしまった。
・・・これでよかったんだろうか？
約束を果たしたことになるの？
でも、“試作品”　って言っちゃったし・・・。
ああ・・・またしても、よくわからない。

秋月さんも、龍之介も、二人とも『気にするな』って言ったよ。
あたしもそんなに繊細な心の持ち主じゃないけど、二人ともそうとう大雑把な性格だよね・・・。
ああ・・・もういいや。
本当に気にするのはよそう。
考えても、なにも解決しそうにないしね。

23　アップルパイのお味は？

何か言ってくるんだろうか・・・？

お昼になって、龍之介がアップルパイを持って行ったことを思い出した。
朝は“まあ、いいか。”と思ったものの、もしかしたらお昼に食べるのかも・・・と気付いて、急に恐ろしくなってくる。

気に入るだろうか？
それとも、見たとたんに笑われる？

文句を言われるにしても、褒められるにしても、“ここ”ではイヤ。なんだか困る。
ああ・・・やっぱり、どこでもイヤかも。
どうしよう？
ドキドキして来ちゃった。

外でお昼を食べれば、とりあえず昼休みは龍之介に会わなくて済む？
午後、仕事中に来たりしないよね？
ああ、でも、用があったら仕方ないけど・・・顔を合わせるのが怖い！

こんなことなら、持って来たって言わなければよかった・・・。

「谷村さん、お昼はどうします？」

ぐるぐるとキリがない後悔に浸っているあたしに、金子さんがにこやかに話しかける。

「外。外に行こう。」

そうだ。
まずは、今。
逃げちゃおう。

お昼休みを無事にやり過ごし、午後の仕事。

１２月は例年どおり忙しくて、パソコンのキーをたたくスピードも普段よりもアップする。
うっかりすると、入力しながらブツブツと声に出して読んでいることも。
何度も見直したつもりなのに、プリントアウトした資料には入力ミスが、なんてこともときどき。
自分がドジなのはわかっているから、気を散らさないようにいつも気を付けている。

だけど。

今日はそれが難しい。

もしも龍之介が来たらどうしよう？
あたしはどんな顔をしていたらいいの？

龍之介が来たとしても、仕事中にアップルパイの話はしないだろう

と９５％くらいは信じているけれど、残りの５％のために、うちの課に誰かがやってくるたびに、ハッとしてそちらを見てしまう。
向かいに座っている春山さんに、

「今日の谷村さん、目つきが鋭いよ。ずいぶん忙しいんだね。」

と、笑われた。
金子さんもときどき、こっそりと不思議そうに見ている。

ああ、もう！
これじゃあ、みんなに“何かある”って知らせているようなものじゃない！

そう思ったら、頬がかあっと熱くなってしまった。
もう限界・・・。

「トイレのついでにお茶でも買ってくる。」

金子さんにことわって席を立つ。
少し頭を冷やさなくちゃ。

あーあ、こんなこと、体に悪いよ・・・。

エレベーター前にある自販機へと廊下を歩きながらぐずぐずと考える。
疲れて落ち込んで、視線は足元へ。

こんなに大変な思いをするんだったら、最初から龍之介の挑発に乗るんじゃなかった・・・。

そう。
自分が悪いんだ。
「やあ、紫苑ちゃん。元気ないね。忙しいの？」
ま、真鍋さん！？
「すみません、気付かなくて。ええ、ちょっと・・・。」
どうしよう、どうしよう、どうしよう？
龍之介と同じ職場だもんね。もしかしたら、お昼にあれを見たか食べたか・・・。
「顔が赤いよ。大丈夫？　熱でもあるんじゃないの？」
「いえ！　あの、ちょっと暖房が効き過ぎてるのかも。あたし、暑がりなので。」
「ああ、それならいいけど。金曜日は忘年会だから、それまでは体調万全でね。」
「は、はい。」
行っちゃった・・・。
アップルパイのことは知らなかったみたい。
同じ職場で仲良しの真鍋さんが知らないってことは、龍之介はお昼には食べてない可能性が大きいね。
この建物の中で一人でこっそりなんていう場所はそうそうないし。

・・・いや、一人でこっそりなんて、龍之介には当てはまりそうにない。
社内で食べるなら、堂々とみんなの前で開けている　―――　そして、あたしをコケにしているはずだ。

つまり。
龍之介は、まだ食べてない。

そこまで考えて、ようやく落ち着いた。
自販機で冷たいお茶を買って、それからあとは、いつものとおり、集中して仕事ができた。

結局、帰る時間になっても、龍之介からは何もなかった。
仕事の忙しさと昼間の不安で身も心も疲れ果てて、どうでもいい気分になって帰ってきた。
心配事には疲れるのが一番効くみたい。

本当に疲れちゃったよ・・・。

コートだけ脱いで、ソファ代わりの大きなビーズクッションに半分寄りかかりながら体を伸ばす。

８時半か。
お腹は空いてるけど、夕飯を作るのも面倒。
買い物をするのも億劫で、スーパーにも寄って来なかった。
レトルトのカレー？　それとも冷凍グラタン？

ああ、そうだ。

明日はうちの課の忘年会だっけ・・・。
ぼんやりしていると、関連のないことが次々と浮かんでくる。
職場のパソコン、最近、動きが遅いような気がする。
洗濯物をたたまなくちゃ。
ショートブーツが一足欲しいな。
仕事納めまで、あと何日？

ブブブブブブブ・・・・。

テーブルに投げ出しておいた携帯が振動してる。
まさか・・・。

恐るおそる覗き込むと、『高木龍之介』の文字が。
やっぱり・・・。

一気に昼間の気分がよみがえる。
携帯を持った手が震えているのに気付いて、ますます緊張してしまう。

「・・・はい。」

『あ、紫苑？』

あれ？
龍之介・・・だよね？
なんだか、いつもと違うような気が・・・。

「うん。」

『もう帰ってる？』

「うん。」

『今から出られるか？』

「は？」

出る？

「出るって・・・出かけるってこと？」

『そう。車で迎えに行くから。』

「はあ？　今から？　なんで？」

『もう風呂入っちゃった？』

「いや、まだだけど・・・。」

それ、女の子にする質問？　・・・なのかな？

『じゃあ、大丈夫だな。5分で着くから。』

・・・切れたよ。

何なんだろう、あれは？
なんて考えてる場合じゃないよ！
支度しなくちゃ！
部屋着に着替えてなくてよかったよ～！

通勤用のバッグから、鍵やお財布や必要なものだけを小さいバッグに入れ替える。
お化粧は・・・一応、直して行くか。どうせ暗くてよく見えないだろうけど。
セーターを厚手のものにして、コートもたっぷりしたものを選ぶ。

うわ、もう5分経ってるよ。

ベランダから下を見ると、黒っぽい小型車が玄関の前に止まるところ。
あれかな？
龍之介が小型車っていうところがなんとなく不思議な気がするけど。

ブーツを履いて、鍵を閉めて、手袋をはめながら、エレベーターは時間がかかりそうだったから階段を駆け下りる。
玄関のガラスの向こうに、車に寄りかかってにこにこしながら立っている・・・龍之介？

一瞬、人違いだったらどうしよう？　と思って足を止めた。
いつものスーツ姿と全然違っていたから。
黒の細身のダウンジャケットに茶色のパンツ、グリーンや白や茶色

やいろんな色の細い縞模様のマフラーをぐるぐると巻いて。
でも、ツンツン頭と切れ長の目の精悍な顔はやっぱり龍之介だ。
脚が長い。知らなかった・・・。
それに・・・。

「お待たせ。」

とは言ったものの、なんとなく気後れして、歩くのがためらいがちになってしまう。
だって、なんだか、いつもの龍之介と違う。
ほんの数歩で龍之介はこっちへ来て、のろのろしているあたしの腕をつかむ。

「悪いな、夜なのに。あったかくして来た？」
しゃべったら、いつもの龍之介でほっとした。

「うん。」

「すぐだから。そっち側、ドア開きそうか？」

「あ、あたし、後ろに乗るから大丈夫。」

「え？　助手席に・・・」

「いいの、後ろで。いつもそうだから。」

いつも。
あたしが助手席に座ったことがあるのは桜井先生の車だけ。
だから、思い出さないように、助手席には座らない。

「・・・そうか。」

同じ側の前後のドアから乗り込んで、前を向いたら、龍之介がバックミラー越しにニヤッと笑った。
その笑顔で元気が戻って、運転席の背もたれにつかまって、龍之介に話しかける。

「ねえ、どこに行くの？」

「すぐ近く。」

そのまますぐに出発。
教えてくれるつもりはないらしい。
まあ、いいか。
すぐ着くって言ってるし。

「あたし、さっき帰ったばっかりなの。」

「仕事か？」

「うん。だから、まだ着替える前で、すぐに出て来られたんだよ。」

「なんだ。もうちょっと遅かったら、紫苑の色っぽい普段着が・・・。」

「何言ってんの？！　こんな寒い時期に、そんな格好してるわけな

いでしょ！」

「うわ！　そんなに耳のそばで怒鳴るなよ。あ、この先だ。まず一つ目の見どころ。」

「え？　なあに？」

「いいから、前を見てろ。」

前？

ゆるやかにカーブした道の先は・・・イルミネーション？

道の両側にずっと続いてる。

「うわ・・・すごいね。」

「このあたりの家、毎年少しずつクリスマスの飾りが増えてきて、今年は特にすごいんだ。」

「一般の家なの？」

「うん。新しい住宅街だから、みんなお洒落なんだな。」

本当にすごい。

門の前にある木にも、生け垣にも、壁にも、ベランダにも、色とりどりのライトやサンタクロースや雪だるま。

屋根からレースのようにライトが下がっている家もある。

庭で光のトナカイが首を動かしている家も。

「すごいね。」

クリスマスらしい雰囲気にウキウキしてくる。
バックミラーを見たら、やっぱり楽しそうな龍之介と目が合った。

そして、気付いた。

あたし、龍之介と電話で話したのって初めてだ。
二人で出かけるのも、私服の龍之介を見るのも。

なんだか・・・楽しいね。

24　アップルパイの食べ方

イルミネーションの住宅街を過ぎて、車は坂道を登っていく。
いつの間にか広々とした場所に出て、小さな駐車場に龍之介が車を停めた。
ほかにも2台ほど車が停まっている。

「着いた。」

「ここ？」

周りには何もなさそうだけど、ほかにも人が来てるってことは、何かあるの？

龍之介が車を降りているのを見て、あたしもドアを開ける。
外に出たら、高い場所のせいか風が強い。

「寒いから、ちょっとだけな。」

龍之介のあとについて駐車場を横切って歩く。
柵の前まで来ると、

「ほら、これ。」

と龍之介が振り向いた。

―――　景色が。

思ったよりも高い場所だった。
足元には住宅街の明かりが並んでいて、ところどころにクリスマスの飾りが光っている。
「紫苑のマンションはあの辺。さっき通ったのはあそこだよ。」
龍之介が指差す先では、道路を縁取って光が並ぶ。
「向こうに海があるんだ。だいぶ遠いけど。」
その方向に向かってだんだんと光が増えて、高い建物が多くなっていく。
サーチライトが2本、空に向かって伸びている。
ずっと遠くに、ライトアップされた橋が小さく見えた。
「きれい。」
2年も住んでいるのに、こんな場所があるなんて知らなかった。
嬉しくなって隣の龍之介を見上げたら、龍之介も笑い返す。
「このあたりでは、ここが一番景色がいいんだ。」
「そうか。龍之介の地元だもんね。」
「そう。俺の家、この裏だから。」
え？

「ええと、うちからはけっこう遠そうだけど・・・。」
「そんなことないぞ。学生の頃は紫苑のマンションのあたりもロードワークの範囲内だったし。」
「・・・そうなの？」
「いいんだ。お前は気にするな。」
なんだか・・・いいのかな？
「よし。じゃあ、食うぞ。」
「え？　食う？　何を？」
「いいから。」
龍之介に後ろから肩を押されて車まで戻る。
楽しそうな龍之介・・・。
そういえば、お腹が空いてるよ。
電話のあと、慌ててたから忘れてた。
何か持って来てくれたんなら、有難くいただきたい。
「うーん、後ろか？」
ドアを開ける前に腕組みをして考え込んでいる・・・何を？
「よし。ちょっと狭いけど、後ろだな。紫苑、乗って待ってて。」

さっきと同じように運転席の後ろの席に乗り込むと、龍之介は外に立ったまま助手席の足元から何かを取り出した。
ランタン？

「持ってて。」

明るくなった車内で龍之介がさらに取り出したのは・・・。

「そ、それ・・・、今朝の？！」

「そう。紫苑のアップルパイ。」

うそ～～～～っ？！
今？
ここで？

「なんで？！」

そうだよ！
なんで？！

あわあわしているあたしの隣に、反対側から龍之介が乗り込んでくる。

「一緒に食べようと思って。」

一緒にって、龍之介。
困るよ。
緊張する！

「あー、やっぱり後ろは狭いな。」
慌ててるあたしの気持ちに関係なく、龍之介は平気な顔で助手席を前へずらしたりして。
龍之介！
そうだ。
３つ入ってたはずだよね？
「ねっ、ねえ、もう食べてみた？」
感想があれば、それを最初に・・・。
「え？　まだ。」
ああ・・・もう！
「なんでっ？！」
つい、咎めるような口調になってしまって後悔する。
そんなつもりじゃないのに・・・。
落ち込むあたしをまったく無視して、龍之介が２つ入っている方の箱を開く。
ランタンのぼんやりした明かりで、間違いなくあたしが作ったアップルパイがますますみすぼらしく見えて、絶望的な気分になる。
「なあ、紫苑。」

「・・・なに？」

ああ・・・。

下手って言われちゃうよね・・・。

「これ作るの、大変だった？」

「・・・え？」

「なんかさあ、これ見たら、紫苑がすごく頑張ったんだなあって思って、そう思ったら、一人で食べたらもったいないなって思ったんだ。」

聞きなれたはずのハスキーな低い声が、普段と違うゆったりしたリズムで口にされた言葉で、じんわりと優しく聞こえた。

「龍之介・・・。」

そんなこと言われたら、あたし・・・。

「・・・うん。頑張ったよ。」

それだけは胸を張って言える。

あたしの少し得意気な顔を見て、龍之介が微笑む。

「そうだよな。だから、一緒に食べよう。」

龍之介・・・。

なんていうか・・・、泣きたいのか、笑いたいのか、どうしたらいいのかわからない。
何か言わなくちゃと思っても、胸がつかえて声が出せない。
どうしようもなくて、笑ってみた。
泣くよりも、あたしには相応しい気がして。

「どうした？　腹いっぱいか？」

「ち・・・違う。」

声、出たよ。
小さく咳払いして、そのまま続ける。

「だって、これ、どうやって食べるの？」

「どうやってって、手で。」

「手で？」

「なんで？　これなら大丈夫だろ？」

そうか。
龍之介だもんね。
秋月さんみたいに用意周到なわけないよね。

「うん。大丈夫・・・だと思う。」

「じゃあ、紫苑、いただきます！」

「はい、どうぞ召し上がれ。」

龍之介が大きな手でパイを取って口に運ぶところをそうっと観察する。

なんて言う？
前回と同じなはずなんだけど・・・？

ぱくっと一口かじったら、手に持っている残りのパイの中からりんごが龍之介の胸元にボトリと落ちた。

「あっ、龍之介、こぼれた！　服が汚れちゃうよ！」

急いで見回してもティッシュや雑巾などは見つからず、自分のバッグをかきまわす。
龍之介は「あーあ。」なんて言いながら、上着に落ちたべとべとのりんごを拾って、また口に入れてしまった。

「美味い。」

のんきなコメントを笑いながら、左手で龍之介のダウンジャケットをひっぱって、ウェットティッシュで汚れた部分を拭う。

「ああ・・・、染みこんじゃったかな？　カビが生える前にクリーニングに出した方がいいかもよ。」

新しいウェットティッシュでジャケットを何度も叩いてみる。
ランタンの明かりがあっても薄暗い車内では、近付いて見ないと、汚れた場所もよくわからない。

「あの・・・紫苑。もういいよ。」

「うん・・・。もう少しね。」

ありんこが来たりしたら怖いし。

・・・冬だから平気？

「とりあえず、このくらいで大丈夫かな？」

念のため、シナモンやりんごの匂いが取れたかどうか匂いを嗅ごうと顔を近付けたら・・・。

「しっ、紫苑！　あのっ、もういいから。」

聞いたことがないような上ずった声で叫ぶように言われて、同時に両手首を取られて、服から引き離された。

その勢いにびっくりして龍之介を見ると、目が合った途端に顔を背けられてしまった。

「・・・もしかして、恥ずかしかった？」

子どもにやるみたいなこと、しちゃったもんね。

「・・・俺だって、男だぞ。」

そんなこと、分かってるよ。

「はいはい。ちゃんとした大人のね。」

あたしの言葉を聞くと、龍之介はものすごく変な顔をして１０秒くらいあたしを見つめてからため息をついた。

「紫苑。夕飯は？」

「まだ。」

「じゃあ、ファミレスでも行こう。とりあえず、これを食べてから。」

そう言って、あたしが一切れ食べる間に、龍之介は食べかけともう一切れをあっという間に食べきった。

「うまかった。ごちそうさま。」

やった！

あたし、龍之介に“美味しい”って言わせたよ・・・。

じわじわと嬉しさがこみ上げてくる。

「じゃあ、行くか。」

龍之介が運転席に移ってエンジンをかける。

その背もたれの横から乗り出して、もう一度訊いてみる。

「ねえ。本当に美味しかった？」

龍之介はちらりとあたしを見ただけで、視線を前に戻す。

「うまかったよ。」

「そっか。・・・ふふふ。」

楽しくて、笑いがもれる。
美味しいって。
あたしのだって分かっても、ちゃんと。

コン！

？！
おでこが？！

「そんなところから顔出してると危ないぞ。」
龍之介に指でおでこを弾かれたらしい。

「痛いよ。赤くなってるかも。」

「いいから、ちゃんと座ってろ。」

「はあい。」

少しくらい威張られてもいいや。
あたしのアップルパイを美味しいって言ってくれたから。

アップルパイでけっこうお腹がふくれていたにもかかわらず、龍之介もあたしも、ファミレスで夕飯をガッツリ食べた。
その間ずっと、なんだか楽しくて仕方ない。

龍之介にパイを褒められたことで、テンションが上がってるのかな？
もうすぐマンションに着くというころ、ふと気付いて、バックミラー越しに龍之介に問いかける。
「ねえ。龍之介と飲み会の帰り以外で二人で出かけるのって、初めてだよね？」
質問に答える前に、龍之介と鏡を通してちらりと目が合った。
「うん。」
「やっぱりそうだよね。電話が来たときに何か変だと思ったら、電話でしゃべるのも初めてだったんだよ。」
「会社で内線で話したことはあるだろ？」
「そうだけど、」
鏡越しに会話するのが面倒で、また運転席の背もたれにつかまって体を乗り出す。
「仕事中と声が違うよ。」
「そうか？」
「うん。なんか、柔らかいっていうか。」
「ん・・・。」

「それにさあ、スーツじゃない龍之介を見るのも初めてだよ。」

「ああ・・・そうだよな。」

「すごく似合うね。かっこいいからびっくりしたよ。」

「・・・紫苑。」

「なあに？」

「近い。」

「え？」

「耳もとでそういうこと言うな。」

あれ？

恥ずかしいのか・・・。

「ごめん。」

龍之介ったら、照れちゃって。可笑しい。

マンションの前で車を降りたら、外の空気が冷たいことに気付く。
ファミレスも車も暖房が効いていたし、楽しくて笑ってばっかりだったから、体がぽかぽかしてる。
運転席の窓を開けた龍之介にお礼を言おうとかがんだら、龍之介が手を伸ばして、指の背であたしの頬をさっとなでた。
驚きながら、咄嗟にその手をつかまえる。　・・・大きな手。

「おやすみ、紫苑。」

そう言って、龍之介が自分の手をそっと引っ込める。
あたしは・・・龍之介の顔から、目を逸らすことができなかった。

「あの・・・、おやすみなさい。」

「風邪ひくなよ。」

そうだ。
帰らないと。

ひとつ頷いて、マンションの方に向き直る。
ふたつめのガラスのドアを抜けながら振り返ると、龍之介が手を振った。
それに手を振り返し、ちょうど1階にいたエレベーターに乗り込みながらもう一度手を振ると、龍之介が頷くのがわかった。

エレベーターの壁に寄りかかって、ほっと息をつく。

楽しかった。
だけど・・・。

なんだろう？

何か忘れているような・・・？

25　≪候補者≫

紫苑。

今日は一日、お疲れさま。
朝から晩までいろんなことがあって、きっと大変だったよね。

今日の龍之介、すごく頑張ったよね？

朝、龍之介が寄ったコンビニで、レジに並んだ人が時間がかかるようにちょっと細工したんだよ。
紫苑が優斗と一緒にいるところを龍之介に見せるために。
お金を落とさせたり、レシートを詰まらせたり、3人も邪魔をするのはちょっと大変だったけど、うまく行ったから僕は満足。

朝、龍之介は楽しそうに、ロッカー室でこっそりとパイの箱を覗いてた。たぶん、すぐに食べてしまうつもりだったんじゃないかな？
でも、紫苑のパイを見たとたん、真面目な顔つきで、そうっと箱のふたを閉めてしまったんだ。
お昼休みも、午後に出かけるときも、ロッカーを開けるたびに箱を覗いていたけど、いつも優しい顔をしてた。
紫苑があれを作るのにどれくらい頑張ったのか、考えていたんだと思う。

僕が龍之介を選んだのは、紫苑たちが就職して少し経ったころだっ

た。
あのときはまだ桜井先生のことから時間が経っていなかったから、紫苑に必要なのは辛抱強く待てる人間だと僕は考えていた。
大学を出たばかりの龍之介は、ただの元気いっぱいのふざけ屋に見えた。
でも、大学までずっと運動部だった彼は、下積みの努力の大切さを知っていたし、後輩の指導をする中で心の大きさも育っていた。
何よりも、僕が手を貸す前から、紫苑のことを気に入っていたしね。
それで僕は、龍之介なら、長い時間がかかっても、紫苑のことを守りながら待ってくれると思ったんだよ。
紫苑が一人で暮らすことになって部屋を探しているとき、僕は龍之介の家の近くの物件が目に付きやすいようにした。
と言っても、情報誌のページをめくっておくくらいのことしかできなかったけど。
僕の思惑に天の助けが加わったのか、紫苑はこのマンションを選んだ。

それから2年。
龍之介は予想どおり、辛抱強く、ずっと持ち場を守ってきた。
予想どおりというよりも、予想以上、だな。
紫苑に一番近い場所にいつも自分がいるように、龍之介がどれほど気を配って来たか知らないだろう？
彼は紫苑が誰かを好きになることを怖がっていることに気付いていて、それが消えるまで待とうと決心している。

この2年で龍之介は、就職したころよりずっと思慮深くて優しくなった。少し慎重すぎるほどに。

その慎重さのせいで、紫苑は龍之介の気持ちに全然気付かない。
龍之介が近くにいることが当たり前になってしまった。
初めて出会ったころの龍之介のままだと信じて。

そして、相変わらず“恋なんかしない”って言い続けて。

そして僕は・・・だんだん紫苑と別れることを考えるのがつらくなってきた。
途中で念のためと思って、2人ほどほかの候補者を試してみたけど、お互いに気付かないまま終わってしまった。

優斗が紫苑の行動範囲の中に現れたとき、僕はすぐに決心した。優斗と紫苑を出合わせようって。
優斗の笑顔と柔らかさなら、紫苑の意固地な決心を溶かすことができると思ったから。
紫苑が怖がってノーと言う前に、自然に紫苑の心に入りこめると思ったから。

・・・それとね、紫苑、もう一つ。
優斗の名前が僕と似ているから。

紫苑が幸せになる相手は絶対に僕ではない。
紫苑が声に出して、僕の名前を呼ぶことは絶対にない。
だけど、紫苑が優斗を選んだら・・・。
僕は消えてしまうけど、僕の名前だけは紫苑のそばにいられるよう

な気がして。
優斗はちゃんと紫苑のことを気に入ってくれて、彼独特の天真爛漫さと優しさで、一途に紫苑に恋してる。

もちろん、2年以上ずっと紫苑を守っている龍之介のことだって、応援してはいるんだよ。
もう無理かも知れないと思ってもいたけれど、これをきっかけに二人の関係が動き出す可能性もあるかも知れないとも思った。
紫苑の「金木犀さん」が優斗だってわかったとき、龍之介の動揺はかなりのものだったよ。紫苑が知ったらきっと驚くくらいに。
だから今朝だって・・・。

二人を同時に候補者にするなんて、恋風として無責任かな？
でも、二人ともいい人間だし、見ている僕はけっこう楽しいよ。
優斗も龍之介も、紫苑に無理なことを言ったり、困らせたりはしないはず。
二人のうちどちらを選んでも、紫苑は幸せになるよ。

紫苑は高校生のころと同じように、恋愛関係のことには鈍感で不器用なまま。
でも、それでいい。
真由が言ったとおり、誰かを好きになるのは自然な心の動きだから。
紫苑に駆け引きは似合わない。

怖がらないで、紫苑。

紫苑を傷つけるような人間は誰もいないから。

おやすみ、紫苑。

忙しくて、いつもとちょっと違っていた一日が、紫苑に安らかな眠りをもたらしますように。

26　クリスマス・イブの約束

職場の忘年会。
課長を含めて17名、中華料理店の個室で賑やかに2つの丸いテーブルを囲んで。

「谷村さん、忘年会はいくつ出るの？」

職場で向かいの席に座っている春山さんが、紹興酒で赤い顔をして隣に移動してきた。
お酒が大好きな春山さんは、お酒好きだけど、あんまり強くない。
忘年会や歓送迎会では、いつもすぐに呂律が怪しくなってしまう。

「3つです。今日で2つめ。春山さんはたくさんあるんでしょうね？」

「俺？　うん、俺はねえ、5つかなあ。あはは。」

「5つですか？　いつもより少なそうですけど？」

たしか、去年は毎日のように・・・。

「そうなんだけど、今年は奥さんがいるからね～。へへへ。」

「そうでしたね！」

春山さんは今年の春に結婚したばかり。

結婚して3か月くらいは、毎日のようにのろけ話を聞かされたっけ。
「春山さん、今年のクリスマスは奥様とご自宅でゆっくりですか？」
反対側の隣から金子さんが尋ねる。
「ふふ～ん。まあね～。クリスマスツリーを新調したんだよ。大きいやつを。雪乃ちゃんと一緒に飾ってさ～。」
雪乃さんは奥さんの名前。
新婚当初に見せてもらった写真は、名前に似合った和風美人だった。
「いいですねえ。」
金子さんと一緒に羨ましがってみせると、春山さんは嬉しそうに笑った。
「二人とも、早く結婚したらいいよ。」
「そうは言っても、相手が。ねえ。」
「あれ？　いないの、二人とも？」
あたしたちが黙っているのを見て、春山さんが不思議そうに言う。
「よく来る彼、何て言ったっけ？　ほら、よくゴミ箱に座ってる・・・」
「ああ、高木くんですか？」

「そうそう！　彼、どっちかの彼氏じゃないの？」
そう言いながら、金子さんとあたしに人差し指を向ける。
「ええ？」
「やだ！」
あたしは目を丸くして、金子さんは両手を頬に当てた。
金子さんの反応って、可愛い・・・。
こういうところで差が出るよね。
「そんなふうに見えますか？」
「うん、見えるよ。あんなにしょっちゅう来るんだもん。ほかの人も、そう思ってるんじゃないかなあ。」
知らなかった・・・。
「そうそう。谷村さんは、朝の男の子がいるよね。」
「朝？」
金子さんがさっとあたしに向き直った。
その傷ついたような表情を見て、春山さんを恨みたくなる。
どうしてこんなときに言うの？！
「毎日、一緒に歩いてるよね？　あっちが彼氏？」
「いいえ。違います。」

見られてたのか・・・。
まあ、そうだよね、通勤時間帯なんだから。
でも・・・向こうがどんな思惑かは何とも言えないけど、今のところは彼氏じゃない。
あたし自身も、秋月さんの位置づけはよく分からないけれど・・・。
金子さんにも説明しなくちゃ。
「ほら、秋月さんだよ。朝、同じ電車みたいで、よく一緒になるの。」
あたしの説明を聞いても、金子さんの表情は晴れない。
「ずるいです・・・。」
「え？」
「谷村さんばっかりモテて、ずるいです。」
「金子さん？　あたし、べつにモテてるわけじゃないけど？」
“ばっかり”　って言ったって、それらしいのは秋月さんだけで、それだってあやふやなのに。
「そんなことありません！　谷村さんのことは、みんな名前で呼ぶじゃないですか！」
あれ？

酔ってるの？
そんなに大きな声を出したら・・・大丈夫かな？

いつの間にか、春山さんはよそに移ってしまったらしい。
見回したら、部屋のあちこちでも大騒ぎしていた。
紹興酒の瓶がいくつもテーブルに載っている様子からすると、みんなかなり飲んでいるみたい。
あたしは紹興酒は苦手だからあんまり口をつけてないけど、ザラメを入れると飲みやすいから、金子さんもけっこう飲んでるのかも・・・。

「名前で呼ぶって、龍之介とか、いつものメンバーだけじゃない？」

ああ、あと秋月さんだ。
でも、名前で呼ぶからって、みんながあたしのことを好きなわけじゃないよね？

「みんな谷村さんばっかり見てて、あたしのことなんか、誰も見てくれないんです！」

どうしちゃったんだろう？
今まで何度も飲みに行ってるけど、金子さんがこんなふうになることなかったのに。
やっぱり紹興酒のせい？

「もうすぐクリスマスなのに、誰もわたしのことなんて誘ってくれない・・・。」

あらららら。
そういうことか。

「あたしだって、予定はないよ。」

「予定がなくたって、入る可能性があるじゃないですか！」

「そう？」

まあ、去年と同様、“独り者の宴会”の誘いはあるかもしれないかな。

でも、あれはぎりぎりまで話が出ないからね・・・。

あたしから見れば、金子さんの方がちゃんとした予定が入りそうだけど。

「そうですよ。高木さんだって、秋月さんだって・・・。」

「龍之介とはもう3年の付き合いになるけど、一度もクリスマスの誘いなんてないよ。」

そうだ。

昨日、初めて二人で出かけたんだ・・・。

いやいや、それより今は金子さんを宥めなくちゃ。

「金子さんの方がずっと可愛いんだから、絶対にあたしよりも人気が・・・。」

「どこにいるんですか？」

「え？」

「どーこーに！　わたしを誘ってくれる人がいるんですか？」

絡み酒？
また飲んでるし・・・。

どうしよう？

「ねえ、金子さん。今のところ、金子さんを誘ってくれそうな人はいないの？」

あたしの言葉に金子さんは一瞬、キツい目であたしを見た。

「・・・いません。」

「じゃあ、あたしも同じだから、２４日は一緒に出かけようか？」

「え？」

パッと目を大きく開けて驚いた顔をしたあと、すぐに疑り深い表情に変わる。

「そんなこと言って、直前になって、誰かと行くことになったりとか・・・。」

「そんなことしないよ！　だいたい、誘う気がある人は、もう誘ってきてるんじゃないの？　だって、あと１０日くらいしかないんだよ？　プレゼントの都合だってあるだろうし。」

「んーーーー。そうですよね。」

やっぱり、ちょっと目がすわってるかも。

「あたし、去年もおととしも、何人かで宴会があったんだ。でも、そっちは気にする必要がないから、よかったら一緒に・・・」

「行きます。谷村さんと一緒に。」

「うん。そうしようね。」

やけに真剣な顔をしているのが気になるけど。

「もし、谷村さんが誰かに誘われたら、わたしもそれについて行きますからね！」

はいはい。

わかりましたよ。

でも、金子さん。

その約束、明日まで覚えていられるの？

翌日の朝、いつものあたりで秋月さんに会って、金子さんとの約束を話したら、秋月さんは笑いながら言った。

「じゃあ、僕が紫苑さんを誘ったら、両手に花ってことだね。」

・・・まさか？

「すごく魅力的だけど、今月は忙しくて、年内はずっと残業なんだよ。クリスマスもなし。あーあ、せっかく楽しそうなのに。」

よかったー！

・・・って、どこの部分が、だろう？

「でも、紫苑さんが女の子同士でいるなら安心だな。」

「やっ、やだな、秋月さん、そんなこと・・・。」

すぐ、そういうこと言うんだから・・・。

わーん。

顔が赤くなっちゃうよ～。

「紫苑さん。」

呼ばれて見上げると、秋月さんの無邪気な笑顔。

この優しくてちょっとカワイイ笑顔には、つい見惚れてしまう。

「昨日は訊けなかったんだけど・・・。」

そこまで言ったきり、ふっ口を結んで下を向いてしまった。

昨日？

「やっぱりいいや。」

もう一度こっちを向いたときには、またさっきと同じような笑顔で。

・・・なんだろう？

何でも気軽に言う人なのに、言えないこともあるんだ・・・。

金子さんはその約束をきちんと覚えていた。
昼休み、トイレで

「楽しみですねえ。どんなお店にしましょうか？」

と、にこにこしている。
忘年会のときとは別人のように機嫌がいい。

「紫苑。楽しそうでいいわね。何の話？」

「ああ、美歩。クリスマスに一緒に出かける話だよ。」

「彼女と？　ええと・・・金子さんだっけ？」

「はい。彼氏がいない女同士ってことで。」

金子さんがウキウキと答える。本当に楽しそうね。

「あ、じゃあ、あたしも行きたい。いいでしょ、紫苑？」

「え？　美歩も？」

「なによ、ダメなの？　あたしだって、彼氏はいないんだから。」

彼氏はいなくてもモテるくせに。

「金子さんは？　美歩が一緒でもかまわない？」
金子さんは少し驚いた顔をしていたけれど、すぐに笑顔になって
「もちろん、いいですよ。」
と、言った。
「ありがとう！　金子さんとは気が合いそう♪」
金子さんと顔を見合わせて喜ぶ美歩を見ていたら、なんとなく不安になってきた。
金子さんは可愛いし、美歩は美人。
この二人と一緒にいるだけで、なんだか申し訳ない気分になる。
それに・・・。
きのうの金子さんの態度と先週の美歩の追及を思い出すと、少しばかり身の危険を感じる。
二人から変な勘ぐりで責められたりしたら怖い・・・。
「ね、ねえ。金子さんも美歩も、全員が彼氏がいないんだってこと、忘れないでよ。」
「わかってるって。」
「大丈夫ですよ♪」
「クリスマスなんだから、お洒落して行こうね！」

「はい！」

本当に、よろしくね。

27　クリスマス・イブはどうなるの？

「紫苑ちゃんと金子さんと石川さん？　楽しそうな組み合わせだねえ。」

その週の金曜日。
仲間内の忘年会で、金子さんから話を聞いた真鍋さんが笑う。

今日の参加者は7人。
女の子は金子さんとあたしのほかに、金子さんの同期の榊原知世（ともよ）さん。おっとりした、笑顔の可愛い子。
男性陣は真鍋さんと龍之介、真鍋さんの同期の嶋田さんと一年下の竹田くん。嶋田さんと竹田くんは隣の課にいるので、仕事中もよく顔を合わせる。

「はい！　クリスマス・イブは必ず3人で一緒に過ごすんです。谷村さんが誰かに誘われたら、全員で一緒に行くことになってるんです！」

金子さんが笑顔ではっきりと言い切る。

「どうして、あたし限定の話なのかわからないよ。金子さんだって、美歩だって、声がかかる可能性があるのに。」

「紫苑が一番可能性が低いのになあ。」

龍之介が横からからかう。
からかうっていっても、事実だからべつにいいけど。
「榊原さんは一緒じゃないの？　仲良しなのに。」
竹田くんの質問に榊原さんが赤くなる。
「ともちゃんは彼氏がいるもんねー。」
金子さんが代わりに説明すると、榊原さんはますます赤くなって慌てた。
なんだか可愛い。榊原さんだけじゃなくて、金子さんも。
2年若いって、こんなに違うんだ・・・。
洗面所に立った帰り、一緒になった真鍋さんにまた笑われた。
「金子さん、張り切ってるね。石川さんもお酒が入ると豪快なところがあるし、一人で大丈夫？」
他人から見ても、やっぱり心配なんだ・・・。
「実は、ちょっと不安なんです。二人とも、何か誤解してるみたいで。」
「紫苑ちゃんのことを？」
・・・あ。
「それです！」

「え？」

「金子さんが気にしてたことの一つは、あたしが名前で呼ばれてるってことだったんです。うちの課の忘年会のときに、そのことを言い出して、『ずるい』って。」

「ぷ。」

真鍋さんが遠慮がちに笑う。

「そうなんだ？　彼女、紫苑ちゃんに焼きもち焼いてるんだね。」

「まあ・・・、そうみたいです。」

「紫苑ちゃんのことは高木が最初から呼んでたから俺たちも習慣になっちゃったけど・・・そうか、ふうん。」

真鍋さんはまたくすくす笑って言った。

「じゃあ、そのくらいは何とかしようね。」

席に戻ると、真鍋さんは早速、その話題を出してくれた。

「そういえば、榊原さんって『ともちゃん』って呼ばれてるけど、何ていう名前だっけ？」

「え、あの、“ともよ”　です。」

「ああ、そうなんだ？　金子さんは？」

「“みのり”　です。　三文字で、こう・・・。」

そう言って、金子さんがテーブルにあった紙ナプキンに『美乃里』と書いた。

「へえ。美乃里ちゃんか。ちょっと古風な名前だね。」

おお！

真鍋さん、さりげなく呼んだね。

さすが。

「あ・・・、そうですか？」

あ。

金子さん、ちょっと恥ずかしそうな顔してる？

こういう表情をすると、ますます可愛いよね・・・。

「知世ちゃんと美乃里ちゃんか。ねえねえ、これからそう呼んでもいい？」

あら。

竹田くん、素早い反応。

まるで待っていたような。

「ええと・・・。」

「あ、あの、どうぞ。」

榊原さんが迷っている間に、金子さんが頬を染めて頷いた。

それを見ていて、ふと気付いた。

可愛らしい金子さんは、きっと大学でも人気者だったに違いない。
彼女にはそんなつもりがなくても、男の子たちが放っておかなかっただろう。
だけど、うちの会社はそれほど大きくないし、男性陣も穏やかで控え目な人が多い。
だから、きっと少し淋しかったんだ。
まだ大学を卒業して一年経ってないんだもんね。

あたし、もっと早く気付いてあげればよかった。
毎日、隣にいて話してるのに。

「ねえ。あたしも『美乃里ちゃん』って呼ぼうかな？　榊原さんのことは『ともちゃん』って。いい？」

「ああ、はい！　もちろんです！」

金子さん　―――　美乃里ちゃんが嬉しそうに答える横で、ともちゃんもにこにこと頷く。

「そういえば、うちの課長って、変わった名前でさあ。」

嶋田さんの言葉を皮切りに、そのあとしばらく、同僚のや友人の名前の話で盛り上がる。
『美乃里ちゃん』と『ともちゃん』も滞りなく定着して、あたしは心の中で真鍋さんに深く頭を下げた。

「龍之介はクリスマスの予定はあるの？」
いつものように送ってもらう電車の中で、思い出して訊いてみる。
去年とおととしは、同じ宴会に参加していたっけ・・・。
「ないな、今年も。」
短い答え。
「ふうん。龍之介って、モテそうなのにね。」
そう言ったら、隣で吊り革につかまっていた龍之介が、ちょっと体を引いて、気味悪そうにあたしを見た。
そんな顔しなくてもいいのに・・・。
「なんだよ、急に。」
「うん・・・、べつに。この前、あらためて見たら、そう思ったの。龍之介、かっこいいのにね。」
相手がいないなんて、不思議・・・。
あたしが考え込んでいる隣で、龍之介は無表情に窓の外を見ている。
「そういえば、秋月さんは、」
あ、しまった。
あの微妙な雰囲気を考えたら、他人に話すようなことじゃなかったよ。
お酒が入ってるし、相手が龍之介だと思って、つい気が緩んで。
あたしってやっぱり、こういうところ、うっかり者だよね。

「優斗がどうかしたのか？」

「いや、ええと、その、年末まで忙しいって言ってたよ。クリスマス返上で仕事だって。」

「・・・そうか。」

龍之介？

「どうしたの？　なんか難しい顔。」

「べつに。何でもない。」

そう言いながらニヤリと笑う。

そうそう。

その方が龍之介らしいよ。

「なあ、紫苑。次のアップルパイはいつ？」

「え？」

マンションに向かって歩きながら、龍之介が楽しそうに言う。

「だって、あれは試作品だったんだろ？　まだ練習中だよな？」

「うん・・・。」

たしかにそうだった。

「だけど、龍之介、美味しいって言ったじゃん。」

「でも、あの見た目じゃ、認めるわけにはいかないなあ。」

「え～、やっぱり・・・。」

「ほら。『やっぱり』ってことは、自分でも分かってたんじゃないか。」

「そうだけど。」

「あ。もしかして、俺のためには作りたくないとか？」

「やだな！　違うよ！　この前だって龍之介が美味しいって言ってくれるか考えながら・・・。」

あ・・・れ？

これじゃあ、なんだか・・・ちょっと・・・。

「今年中？」

「え？」

あたしの躊躇には気付かなかったように、龍之介が楽しげに尋ねてくる。

「今年中にもう一回作る？」

「う・・・。どうだろう？　土日も祝日もあるけど、やる気が出るかどうかの問題なんだよね。」

「そうか。美味いのになあ。」

そう言われると、嬉しくなってしまう。
思わず顔がニヤニヤしてしまった。

「ねえ、龍之介は？」

「え？」

「龍之介は何かやらないの？」

「何かって・・・？」

「だって、あたしだけ頑張ってるよ？」

「俺は・・・。紫苑、何か希望はあるのか？」

龍之介に？　希望？

「・・・ないや。」

「・・・ないのか。」

ため息なんかついちゃって。
ちょっと残念そう？

「うん。よく考えたら、龍之介にはお世話になってばっかりだもんね。こうやっていつも送ってもらってるし、この前は景色を見に連れて行ってくれたよ。あたしの方がお礼しなくちゃいけないんだよ。」

そうだよ。

いつも、龍之介にお世話になってる・・・。

「そうだ、紫苑。」

「なに？」

「もう買ったか、スキーウェア？」

「ああ、うん。仕事帰りに美乃里ちゃんと一緒に買いに行ったよ。」

「そうか。向こうに行ったら、俺がばっちり教えてやるからな。」

「スノーボード？」

「スキーでもいいぞ。車で行くから、両方持って行けるし。」

「そっか。ぎりぎりまで迷いそう。もしかしたら、どっちもやらないで温泉だけって方法も・・・。」

「それは却下。」

「ケチ。でも、あたしが温泉だけにすれば、龍之介はずっと自由だよ？」

「何言ってんだよ。それじゃあ、紫苑の情けない姿を見るっていう楽しみがなくなる。せっかく大笑いしようと思ってるのに。」

「あたしはアトラクションの一種ってわけ？　・・・まあ、いいけど。それなら、絶対に見捨てないって約束して。」

「当然だろ？」

「違う。あたしの場合、“当然”の範囲を超えてると思うの。高校のスキー教室の先生にも見放されたんだから。」

「うわ、それほど？」

「そう。3日間やって、立つのがやっとだったの。だから、龍之介だって、もしかしたら嫌になるかも・・・。」

「そんなことない。大丈夫だ。」

「うん。じゃあ、龍之介にまかせる。頑張ってよ。」

「俺じゃなくて、紫苑が頑張るんだよ。」

「うーん、そうかもしれないけど、やっぱり龍之介が頑張るんだと思うよ。」

「そうか？」

「そうだよ。」

首をひねっている龍之介に手を振って、マンションの入り口を抜け

る。

ウェアを選びながらも、ずっと不安が頭の大部分を占めていたけど、今ようやく、“楽しいかもしれない”と思えるようになった。

28　クリスマス・イブの前に

忘年会が一通り終わって、年末までの日々はあっという間に過ぎて行く。
平日は残業、土日は簡単な大掃除や片付け（そして昼寝）で終わってしまう。

今年は２６日の金曜日が仕事の最終日。
うちの会社は２９日からが通常のお休みだけど、その前に土日がくっついて、例年よりも2日早く仕事が終わる。
休みの初日の早朝にスキーに出発だから、最後の日には残業はしたくない。
２４日も、美乃里ちゃんたちと出かけるから、とにかく計画的に仕事を進めないとね。

２４日のお店は、美乃里ちゃんが探して予約してくれた。

「パエリヤかパスタかで迷ってるんです～。」

と悩んだ末、パエリヤが勝って、スペイン料理中心のダイニング・バーらしい。
美乃里ちゃんと美歩が、どんな服を着て行くかの相談をしている姿を何度も見かける。
そんなに楽しみにしてるのか・・・。

秋月さんは、朝会うと、疲れた顔をしていることが多い。
いつものようににこにこしてはいるけれど、元気がない。寝癖が残っていたり。

そんな秋月さんを見ていたら、何かしてあげたくなってきた。

でも、あたしにできることって、何だろう？

・・・・新しいお菓子・・・・じゃ、だめかな？
アップルパイは“試作品”という名のとおり、龍之介に作る“ついで”だもんね。
秋月さんのために何か作ってあげてもいいよね？

形はどうあれ、最初から美味しくできたおかげで、今ではバイブルのような気がするレシピ本をめくってみる。

材料を買いに行く時間があんまりとれないから、簡単に手に入るもので作れるのは？
簡単に手に入るか、少ない種類の材料でできるもの。

これは？
クルミを散らしたキャラメルソースのタルト。

タルトは初めてだけど・・・やってみよう。
材料はスーパーで手に入りそうなものばかり。タルト型は最初に買ってある。
ハンドミキサーを使う部分があるけど、アップルパイみたいに手で形を整える必要がないし。
作るのは２３日の祝日。
ちゃんとできたら、２４日の朝に渡せるように、秋月さんに連絡しなくちゃ。

喜んでくれるかな・・・？
でも、失敗すると困るから、できあがるまでは秋月さんには黙っていなくちゃね。
それに、クリスマス・イブの日に渡すのに、キャラメルのタルトってどうなんだろう？
・・・まあ、いいか。
クリスマスプレゼントっていうわけじゃないんだから。

そして。
気合いを入れた２３日。
朝９時ごろからキッチンに立つ。

やるぞ！

本を見ながら手順を確認。

まずは必要な道具を出して、材料を量って、並べる。
下準備。
先に生地を作って型に入れて焼く。
そこに鍋で作ったキャラメルソースとクルミを入れて、もう一度焼いたら出来上がり。

うん。
難しくない・・・ような気がする。

がんばるぞー！

・・・出だしはよかったんだけど。

どうしよう？！
わからない！

本のこの解説と、このボールの中のものは同じ状態なの？
これはもっとかき混ぜるべき？　それともやり過ぎちゃってるの？

手順は間違ってない。
何度も読み直した。

でも、どう見ても、同じには見えない。
写真とは色が違うし、混ざり具合も違う。
このまま進めてもいいのか、すでに失敗しているのか・・・？

どうしよう？！

ああ、もう！
一人で初めてのものを作ったりするんじゃなかった！

本当に、どうしたらいいんだろう・・・？

そうだ！
真由！

真由に電話しよう！

・・・・・出ない？

あ！　仕事中か！

そうだった。
真由はケーキ屋勤めだもん。クリスマス前のこの時期は忙しいんだよ！

ああ・・・、もう無理かも。
捨てるしかないのかな・・・。

がっくりしながらダイニングの椅子に座る。
調理台には、まだ使われていない粉やクルミなどの材料が並んだまま。
ボウルの中のねとねとのものと、あちこちに飛び散ったバターや手つかずで並んだ材料を見ていたら、なんだか悲しくなってきた。

やっぱりあたしには、お菓子作りなんて無理なんだ・・・。

ちりりりりりりん、ちりりりりりりん・・・・。

携帯の着信に使っている黒電話の音。

真由?！　気付いてくれた?！
大急ぎで携帯をつかんでよく見ないままボタンを押して叫ぶ。
「真由～～～～！　たいへんなの～～～～！」
ところが。
「あのう・・・。」
と聞こえたのは男の人の声?！
「あれっ?　やだ！　ごめんなさい！」
ひゃ～！
もう！　どうしよう?！
そそっかしくて困っちゃう！
顔が熱い。
見えなくてよかった～！
「あのっ、すみません、どちらさま・・・?」
「ええと、秋月です。あの、大丈夫?」
うわ。こんなときに・・・。
「あの・・・。」
「今、『たいへん』って・・・。」

ああ・・・。
やっぱり聞こえたよね・・・。
「あの、はい、まあ、なんとか。」
「何かやってる途中だった？」
う・・・。
途中も途中、ものすごい途中だよ。
失敗か、まだ失敗していないかの分かれ目なんだもん。
ふう・・・っとため息が出てしまった。
「紫苑さん？　本当に大丈夫？　僕じゃ相談にのれないこと？」
秋月さんの優しい声を聞いたら気持ちが落ち着いてきて、自然と言葉が出てきた。
「・・・今ね、タルトを作ってて。」
「ああ、そうだったんだ。」
秋月さんの声が、ほっとしたような明るい声に変わる。
「それでどうしたの？　火傷でもした？」
優しいよね・・・。こんなに心配してくれるなんて。
「違う。あのね、途中でわからなくなっちゃって・・・。本と自分

のが同じかどうか、分からないの。」

「ああ、そうか。」

そんな言葉一つでも、気持ちが安らぐ。

もう大丈夫。

「すぐに見に行ってあげたいけど、仕事の途中で無理だから・・・。」

「あ・・・ごめんなさい！　忙しいのに。」

「ああ、大丈夫。休日出勤で来ているだけだし、もうお昼にするところなんだ。」

お昼？　ホントだ！

もうこんな時間。

あたしって、やっぱり要領が悪いんだな・・・。

「紫苑さんが見てるのは僕が選んであげた本？」

「あ、うん、そう。」

「どこが分からないの？」

「生地を作るところ。バターと砂糖と卵を混ぜてみたんだけど、本の写真と色も混ざり具合も違うみたいなの。」

「ええと・・・そこだと、次は粉を入れるところ？」

「うん。」

しばらくの沈黙のあと、秋月さんの明るい声がした。

「たぶん、色が違うのは卵の黄身の色とか、何かそういう材料のせいかもしれないよ。混ざり具合って・・・？」

「“なめらかに”　っていうのが分からなくて。自分が作ったのはなんだかボトボトしてるみたいな感じで。」

「うーん・・・。卵がそのまま残っていないなら、粉を入れてみたらどうかな？」

「粉？　大丈夫かな？」

「もし失敗していたら粉も無駄になっちゃうけど、そのままあきらめちゃうよりはいいんじゃない？」

「ああ・・・、そうか。」

なんだか気持ちが前向きになってきた。

「わかった。やってみる。」

「うん、そうだよ。そんなに厳密に本と同じじゃなくても、なんとなく“こんなもんかな？”　っていう感じでやってごらんよ。」

「それでいいの？」

「うん。失敗したらしたで、次のときにうまくできればいいんじゃ

ないかな。」

そうか！

なにも、今日、完璧にできなくてもいいんだよね！

「そうだね！　ありがとう、秋月さん。もうちょっとやってみる。」

「よかった。元気が出たみたいで。」

秋月さんの笑顔が見えるよう。

「うん。ありがとう。」

「じゃあ・・・。」

「あ、待って。何か用事があったんじゃ・・・？」

「え？　ああ、いいんだ、べつに。ちょっと疲れたから、紫苑さんと話したら元気が出るかと思って。」

「ああ・・・、それなのに、あたしの方が励ましてもらっちゃって・・・。」

申し訳ありません！

「あはは！　いいんだよ！　紫苑さんの役に立てたら嬉しいから。それに、紫苑さんがちょうど困ってるときに電話したなんて、まるで僕に特殊能力があるみたいだよね。」

そういえば、秋月さんとはタイミングが合うことが多いな。いろん

なところで。
服がお揃いだった、なんてこともあったし。
なんだか面白い。

「秋月さんも元気出た？」

「うん、もちろん。じゃあ、今は切るね。時間ができたらまた電話してみるよ。」

「ありがとう。仕事、頑張ってね。」

なんか・・・ほっとした。
あきらめないで、やってみよう。

秋月さんに言われたように次の手順に進んだら・・・うまくいった！　まるで奇跡のよう！
タルトの生地はうまくまとまって、本に載っている次の写真とほぼ同じような状態になった。
本当に、“こんなもんかな？”　でいいのかもしれない・・・。
そのあとも、ところどころ不安な部分はあったものの、秋月さんの“こんなもんかな？”　という言葉を、お守りのように心の中で繰り返し続けて。

生地を型に敷き込もうとしたら、何故かぼろぼろして、あちこち欠けてしまった。
けど、残った生地で補強しちゃおう！

クルミを炒るって・・・まあ、このくらいでいいか！
キャラメルソースのキャラメル色ってどのくらいなの？
そうだ。きっと、お菓子会社ごとに違うよね？
じゃあ、あたし的にはこれくらいでいいかな。

というわけで、下焼きしたタルト生地にクルミとキャラメルソースを流し込んでオーブンへ。
何分か経ってのぞいたら・・・これって、いい感じじゃない？
型の中で、キャラメルソースがぶくぶく煮立ってる。
キャラメルの甘い香りが部屋に漂ってきた。
もしかしたら成功してるのかも！

焼き上がって出てきたタルトは生地の一部に亀裂が入って中身が染み出ていたけれど、あたしが初めて作ったにしては上出来といえる状態だった。
それに、なによりもこのいい匂い！
絶対に美味しいに違いない。
嬉しい！

28　クリスマス・イブの前に（後書き）

キャラメル味のタルトの作り方は、前回のアップルパイと同じく『ニューヨークスタイルのパイとタルト、ケーキの本』（平野顕子著　２００８　主婦と生活社）を参考にさせていただきました。

29　クリスマス・イブの朝

タルトは大成功・・・だと、自分では思う。

だって、美味しいんだもん。
夜、小さく切って食べてみたら、自分で作ったものなのに、あんまり美味しくてびっくりした。
びっくりしたのは、本を見ただけでは味を想像できなかったからでもあるんだけど。

でも、美味しかった。
一口食べて、幸せな気分になった。
あたしが作ったものなのに！

朝、秋月さんにあげるために切ったら、昨日よりもキャラメルソースが重く硬くなっている。
一切れ食べてみたら昨日よりもどっしりとして、クッキーのようになったタルト生地と一体感が出て、いい感じになっていた。

嬉しい。
秋月さん、喜んでくれるかな？

作る途中で心配してもらったので、できあがったときに写真を撮って、お礼のメールと一緒に送っておいた。
でも、なんの目的で作ったのかは内緒。
秋月さんの驚く顔が見たい！

メールに『また明日ね。』と書いておいたら、秋月さんからも『また明日。』と返ってきたから、今日の朝は会えるはず。

かなり甘いので小さめに切った2切れを箱に入れ・・・きれいなリボンでも買っておけばよかったな。

仕方がないので、可愛めのシールを貼ってみた。

ふと、残ったタルトが目に入る。

美味しいけど、自分で食べきるにはちょっと多い？

美乃里ちゃんと・・・もしかしたら龍之介にも食べてもらおうかな。

ところどころ厚かったり薄かったりする生地だから、切っているとあちこち崩れてしまう。

もともと割れていた部分から裏側にもキャラメルがまわっていて、裏も表もベタベタな場所もある。

それでもどうにか切り分けて、クッキングペーパーとラップに包んで2つの保存容器に入れた。

これで、多少揺れても大丈夫でしょう。

「紫苑さん、おはよう。」

いつものとおり、駅で秋月さんが見つけてくれる。

「おはよう。昨日は本当にありがとう。」

まずは昨日のお礼から。

秋月さんが笑顔で「いいえ。」と言うのを聞きながら、手に持っていた小さい紙袋を差し出す。

「これ、どうぞ。」
「え？　なに？」
不思議そうな顔の秋月さん。
驚く・・・かな？
「昨日のタルト。」
「ああ、電話のこと？　わざわざお礼なんて・・・。」
「違うの。これ、秋月さんにあげようと思って作ってたの。」
「え？」
そのまま、秋月さんは立ち止まってしまった。
後ろから来た人たちが、迷惑そうな顔であたしたちを避けて行く。
「秋月さん、歩かないと。」
あたしの言葉に2、3度まばたきをして頷くと、一緒に並んで歩き出す。
朝の通勤時間帯の歩調に合わせて、少し急ぎめで。
「僕に？」
「そう。秋月さん、最近、だいぶ疲れていたみたいだったから。でも、これを作るのに、あたしがまた迷惑かけちゃったけど。」

「いや、迷惑なんて、そんなこと。」
戸惑った表情で、なんとなくもごもごと言う。
あたしが差し出している袋はいつまでも宙ぶらりんのまま。
「もしかして、これ、好きじゃない？　すごく甘いもんね。」
好きじゃないのなら無理に渡せない。
仕方ないから引っ込めよう、と、思ったとたん。
「あー！　もらうもらう！」
と言って、あたしの手から紙袋をさっと取った。
「ねえ、本当に僕に作ってくれたの？」
紙袋を覗きながら、秋月さんが尋ねる。
「うん、そう。秋月さん、ずっと仕事が忙しそうだったし、何かとお世話になってるのに、いつも龍之介のついでじゃ悪いから。」
「ああ・・・ほんとうに嬉しいよ！」
なんて嬉しそうな顔！
こんなに喜んでくれるんだったら、もっと早く気付けばよかった。
「でも、紫苑さん。どうせ渡してくれるんなら、誰もいないところで渡してくれればよかったのに。」
くすくす笑いながら、秋月さんが言う。

「どうして？　恥ずかしい？」

だけど、朝の通勤時間に、そんな場所はないよね。

「違う。」

秋月さんがちょっといたずらっ子のような表情で屈んで。

「あんまり嬉しくて、紫苑さんを抱き締めてキスしたい。」

えええええぇ？！

そんな～～～～！！

今度はあたしの足が止まる。頭がくらくらする。

あんまりびっくりして、秋月さんの顔をまじまじと見つめてしまう。

秋月さんは、相変わらず楽しそうに微笑んで、そんなあたしを見ているだけ。

「あの、そういうつもりじゃなくて・・・。」

「わかってる。気にしないで。でも、嬉しいんだもん。」

そこまで言ってもらえたら、あたしも作った甲斐があるけど・・・。

「じゃあね～、紫苑さん！」

立ち止まっているあたしを置いて、軽い足取りで秋月さんは走って

行く。
その後ろ姿も楽しそう。スキップしていないのが不思議な気がする。
ああ・・・びっくりした。
あたしが思い描いていたとおり、秋月さんを驚かせることができたけど、自分の方がもっと驚いてるなんて。
だけど。
あたし、驚いてはいるけど、意外に落ち着いてる。
しばらく前だったら、手が震えたり、頭がガンガンしたり、苦しくなったりしていたと思うけど。
秋月さんのああいうところ、もしかしたら慣れてきたのかも。
それにしても、どこまで本気で言っているのか、よくわからないよ。

ビルの入り口の手前で、龍之介が少し前にいるのに気付いた。
こんなことって、初めてじゃないかな。
ちょどよかった。
タルトを食べるかどうか訊いてみよう。
「龍之介。おはよう。」
少し走って追いついて、あいさつしながら隣に並ぶ。
「ああ、紫苑。おはよう。」
あれ？

ちょっと元気ない？
まあ、いいや。

「ねえ、龍之介って、すごく甘いものでも平気？　これ、昨日作ったんだけど、食べる？」

ビルに入ったロビーでちょっと横に龍之介を引っぱって来て、バッグに入れてきた入れ物を一つ出す。
フタを開けて、まずは自分で確認。
・・・大丈夫かな。多少崩れてるのはもともとだし。

入れ物を龍之介の方に向けて中を見せると、あたしが何か言う前に、龍之介がすばやく一つ取って、ラップをほどこうとする。

「い、今、食べるの？」

「だって、平気かどうか、食べてみないと分からないじゃん。」

「そりゃそうだけど・・・。」

みんなが通る場所だし、恥ずかしいんですけど。

仕方なく、タルトに巻いたラップをはずそうとしている龍之介をもっと隅っこまで引っぱっていく。
ようやくラップがはずれたと思ったら、ぼろぼろだった生地が折れて、かけらが床に落ちた。

「あらら・・・。」

放置するわけにもいかず、急いで持っていた入れ物と龍之介のはず

したラップを交換して、落ちたタルトをくるむ。
その頭の上から、もぐもぐと龍之介の声がした。

「紫苑。これ、もらう。」

「あ、本当？　いいの？」

立ち上がりながら訊いたら、龍之介が指を舐めながらニヤリとした。

「俺、こういうの好き。だいぶ形はぼろぼろだけどな。」

「うん、そうなんだよね。でも、初めて作ったにしては上出来でしょ？」

「うん。美味い。」

やったよ！
美味しいって！

小さくガッツポーズが出た。

「自発的に作ったのか？　紫苑が？」

「うん。そうだよ。」

すごいでしょ？

「なんかさあ、最近、秋月さんがお疲れ気味だったから、甘いものでもどうかと思って。」

「優斗？　じゃあ、さっき渡してたのは・・・。」

「ああ、見てたの？　これだよ。そばにいたんだったら、声かけてくれればいいのに。」

秋月さんとも仲良しなのにね？

龍之介が少しふてくされたような表情であたしを見る。

そんな顔されても困っちゃうけど？

ふうっと小さくため息をついてから、龍之介がやっと笑顔になった。

「今夜、石川たちと出かけるんだろう？」

「ああ、うん、そうだよ。美乃里ちゃんと3人で。」

結局、誰も男性からのお誘いはなかったらしい。

もしかしたら、あっても断ってるのかもしれないか・・・。

「終わったら、駅まで迎えに行ってやるから連絡しろ。」

「え？　迎えにって？」

「いつも送ってやってるだろ？　今日は一緒じゃないから。」

「大丈夫だよ。龍之介が一緒じゃない日は、いつも一人で帰ってるんだから。」

そんなに過保護にされる必要はないよ。

「何言ってるんだよ？　今日は特別の日なんだぞ。変なヤツがうろついてるかも知れないじゃないか。」

え？

「そうかな・・・？」

2年前に男にあとをつけられたときの怖さがよみがえる。

「だから、駅まで行ってやる。終わったら連絡しろ。」

「でも、龍之介、今日は・・・？」

去年までは宴会に出ていたのに。

「誰かとつるんで飲みに行くのも虚しいから、特に予定は入れなかった。紫苑が終わるころには家に帰って、車で駅まで行く。」

予定を入れないのはプライドの問題か。

「でも、なんだか申し訳ないよ。」

「いいんだよ、どうせヒマなんだから。それに、紫苑に何かあったらどうするんだ？」

「変なこと言わないでよ。そういうの、本当に怖いよ。」

「遠慮とかしないで絶対に連絡しろよ。待ってるから。」

「うん・・・、わかった。」

「じゃあな。これ、サンキュー。」

タルトが入った入れ物を振ってみせながら、龍之介が大股で階段へと向かっていく。

また暗い道で変な人にあとをつけられたら・・・怖い！

あんまり甘えちゃ申し訳ないけど、絶対に龍之介に来てもらおう！

頼りにしてるからね！

30　クリスマス・イブの酔っ払い

このメンバーでお酒の会っていうのは無謀だった・・・。

いや、このメンバーでも、今日じゃなければ楽しいのかもしれない。でも、クリスマス・イブなんていう特別の日には無謀だった。絶対。

美乃里ちゃんが選んでくれたお店はお洒落な小ぢんまりしたダイニング・バーで、お酒もお料理も適度な値段で美味しい。

店内は少し落とした照明で、大人っぽいムード。

だけど・・・そういうお店だから、まわりにはカップルがいっぱい！カップルじゃないのは、あたしたちのほかにもう一組、カウンターにいる男性の二人連れだけ。もしかしたら、この人たちだって・・・？

「だいたいさあ、男って勝手すぎるのよ。わかるよねえ、美乃里？」

「本当にそうですよねえ、美歩さん。みんな外見で勝手に人の性格まで決めちゃうんですから。」

「そうそう。あたしなんか、今までどれだけ遊び慣れてるみたいに思われたと思う？　本当はすごーく純情なのに。」

「あー！　そうなんですよ！　わたしは何にもできない顔だけの女だと思われて、やたらとみそっかす扱いされたりとか。本当に腹が

立ちますよお。」

美歩も美乃里ちゃんも、もうかなり出来上がってる。
どれくらい飲んでたっけ？
メニューのカクテルを片っ端から注文していたように見えたけど・・・。

この二人の予想どおり、気が合ったのは事実。
美人と可愛い女の子だから、その外見のために苦労してきたのも事実だろう。
それは分かる。

でも！
なにも今日、ここで爆発しなくても！

美味しいお酒とお料理でいい気分になって、二人とも声が大きくなっている。
だんだんと、周りのテーブルから視線を向けられる回数が増えてきたような気がする。・・・いや、確実に増えてる！
もしかしたら、彼らに当てつけるために、美歩も美乃里ちゃんも、わざと声を大きくしているんじゃないだろうか？

しかも二人とも、服装が挑戦的というか・・・。

美歩はワインレッドのシルクのワンピース。
胸元にたっぷりとドレープがとってあって深く開いている。
スカート丈はひざより少し短いだけだけど、ウエストから腰のラインがくっきりと出るデザインで、カールした黒髪を下ろして、同色のハイヒールもなまめかしい。

美乃里ちゃんは白い、スカートがひらひらしたひざ丈のワンピース。スカートの裾と襟元が黒いふわふわした毛で縁取ってある可愛らしいデザインで、白いハイヒールを合わせている。
背中の一番上に黒いリボンがついていて、ウエストあたりまで下がっているその長い先が、動くたびにひらひらする。
髪は毛先が左耳のうしろに下がるようにアップにしてあって、上品な可愛らしさ。

どっちもよく似合ってる。
だけど、なんとなく、わざと目立つ服装を選んで来たように見える。
今日この日に、周りにいるであろうカップルたちに見せつけるために。

だって、一緒に行くことになっているのはあたしだよ？
そんな格好されたって、あたしは感心するだけだもの。
それともナンパされる気？
二人の会話を聞いてるいると、そういうのは嫌だという内容だと思うんだけど・・・。

ああ・・・、この二人といると、つくづくあたしが場違いな気がする・・・。
あたしだって、一応、それなりの服装で来たけれど、華やかさが違うし。

「紫苑はいいわよね、龍之介くんがいつもついててくれるんだから。」

うわ。
また始まった。

「そうですよ。高木さんがうちの課に来るときは、いっつも紫苑さんにばっかり話しかけて。」

はあ・・・。

今日、何度めだろう？
まだ1時間ちょっとしか経ってないのに・・・。
いくら普通の友達だって説明しても、二人とも納得してくれないんだもん、困っちゃうよ。

「なんで紫苑が、今、ここにいるのよお。」

そう言いながら、美歩は店員さんを呼び止めて、カクテルを注文した。
もうやめておいたら・・・と言いたいけど、そんなこと言ったら、ますます責められそう。

「・・・誰も誘ってくれなかったからだよ。」

さっきも言ったでしょ？

「秋月さんはどうしたのよ？」

ああ・・・。
新しい話題も危険・・・。

「あ、美歩さん、あたしも秋月さんのことは聞いてます！　毎朝、一緒に通勤しているそうですよ。」

「美乃里ちゃん！　あれは偶然なんだってば。」

「紫苑～。一緒に通勤って、どこから一緒なの？　まさか家からとか・・・。」

「違うよ！　駅で一緒になるだけだよ！　変なこと言わないでよ。」

早く話題を変えなくちゃ！

「美乃里ちゃん、美歩ってすごいんだよ。仕事中にいきなり来たお客様にも誘われたことがあるんだって。」

「美歩さんなら当然ですよねー。」

全然反撃になってない・・・。

「そうよ。しかも、見た目だけしか見てもらえない女じゃ、自慢にならないじゃないの。美乃里だって、わかるでしょう？」

「はい！　男にとって、連れて歩いて自慢できるっていう視点で選ぶから、そういうことが起きるんですよね。」

自慢されるだけ恵まれてるんじゃないだろうか？

「そう。中身なんてどうでもいいわけ。そういうのって、あたしたちを物扱いしてるよね？」

・・・そうですか。

「そうです！　わたしも大学のときにうっかりしてそういう人と付

き合ってしまって、あとから気付いて愕然としましたよ。」

「本当？　酷いわね。それでどうしたの？」

「こっちから捨ててやりました！」

「よくやったわ、美乃里！」

こんな調子で二人の“見た目が良くて損をした”　話は延々と続き、その合間合間に、あたしへの当てこすりが紛れ込む。
あたしももっと酔っ払ってしまえばいいんじゃないかと思うのだけれど、二人の状態が目に入ると、飲んでもちっとも酔いが回って来ない。
きっと、頭の中でブレーキがかかっているんだと思う。

9時近くになってお店を出たときには、二人の美しい酔っ払いが出来上がっていた。

どうしよう？
この二人、ちゃんと帰れるんだろうか？
あたしとは帰る方向が違うんだけど・・・。
タクシーに乗せた方がいい？

あたしの心配をよそに、美歩と美乃里ちゃんは楽しそうに話したり、くすくす笑ったりしている。
それだけじゃなくて、まっすぐ立っていられないみたい。
とりあえず駅がある方へ、二人を引き連れて歩き出す・・・と。

「ねえ、きみたち。一緒にもう一軒行かない？」

立ち塞がるように前に並んだ二人の男の人。
どちらもサラリーマン風のスーツとコート姿ではあるけれど、髪型や表情が、なんとなく遊び慣れた雰囲気。

なんか嫌だ。
なんとなく怖い。

「すみません。明日も仕事があるので、もう帰らないと・・・。」

とお断りしているあたしの横から、美歩が一歩前に出る。

「なによ、あんたたち？　あたしたち、ナンパ男には用がないのよ。」

美歩、やめて！
相手にしないでよ！

「ワオ！　威勢のいいお姉さん！　カッコいいなあ。」

「あの、ごめんなさい。もう帰りますから。ほら、美歩、美乃里ちゃん、行こう。」

二人連れの横を回り込もうとしたら、ニヤニヤしながらまた行く手を塞がれた。

「あと一杯くらいいいじゃん？　クリスマス・イブに女同士でこんなところにいるなんて、実は相手を探してたんじゃないの～？」

うわ。気持ち悪い！
もしそうだとしても、あなたたちは不合格です！
・・・って言ってやりたいけど、そんなことしたら逆効果だよね。
でも、ここであたしが弱気になったら、美歩と美乃里ちゃんが・・・。

「もう！　行かないって言ってるじゃないですか！」
美乃里ちゃん？！
「うわー。きみ、怒った顔もカワイイねえ。」
ああ・・・どうしたらいいの？！
とにかく、相手も酔っ払いなんだから、真面目に相手にする必要ないよね？
美歩と美乃里ちゃんの腕に手をかけて、二人連れから引き離そうと引っぱると、二人ともよろけながらもついて来た。
・・・けど、二人連れがその後ろから、あきらめずについて来る。
「そんなに警戒しないでよ～。」
「一杯だけ付き合ってくれればいいんだからさあ。」
その二人に向かって美歩があかんべえをする。
もう・・・。
挑発しないでよ。
それに、この方向に歩いていたら、駅から離れちゃう。

うっかり立ち止まったのがいけなかった。
あっという間に二人連れが追いついて、両側から挟むように立たれてしまった。

「さあ、行こう。」

美歩と美乃里ちゃんが腕をとられて引っぱられる。
二人ともあたしに身を寄せて抵抗しているけれど、男たちが諦めなければ行くしかない？
そうだ。
大きな声を出したら・・・・。

「紫苑！　美歩！」

女性の声がして、駆け寄ってきたのは。

「知佳ちゃん！」

その後ろから、原田さんが。
助かった・・・・。

「どうしたの？　何かトラブル？」

落ち着いた声で原田さんが言って、その端正な顔立ちでじろりと男たちを見ると、二人ともあっという間に消えてしまった。

「知佳ちゃん、よかった〜〜〜〜！　原田さん、ありがとうございます！」

深々と頭を下げると、両隣りの二人がふらつきながら、同じように真似をする。

「いいんだけど・・・、どうしたの？　今日は3人？」

「はい・・・。」

「そうでーす♪　あたしたち、誰にも誘われなかった女同士で飲みに来たんでーす。」

「そうでーす♪」

「く。」

原田さんが笑いをこらえながら横を向いた。

「知佳ちゃん、どうしたらいいんだろう？　二人ともそうとう酔ってるんだよ。あたしがタクシーで送って行くしかないのかな？」

「でも、美歩とは方向が違うよね？　金子さんは？」

「方面的には同じだけど、もう少し遠く。」

「とりあえず、一人ずつタクシーに乗せちゃったら、あとは自分で帰れるんじゃないの？」

「そうなのかな？」

「えー？　いやです！　一人でタクシーに乗るのは怖い！」

「紫苑。あたし、もう歩くのイヤ。ああ・・・、なんだか気持ち悪い。」

知佳ちゃんと相談している横で、美乃里ちゃんと美歩が自分勝手なことを言い出している。

それを見て、知佳ちゃんはため息をついた。

「あははは！　これじゃあ、紫苑さん一人の手には負えないね。」

原田さん。

笑いごとじゃないんですけど・・・。

「誰か頼める人はいないの？　龍之介は？」

「今日は用事はないって言ってましたけど・・・。」

「ああ、じゃあ、電話してみようか。」

そう言って、原田さんはさっさと龍之介に電話をかけてくれた。

31　クリスマス・イブのドライブ

「あ、龍之介？　お前、ヒマなんだって？」

原田さんが携帯で龍之介と話してる。
それをあたしたち４人が取り囲んで・・・という状態。
美歩と美乃里ちゃんは、今度は原田さんを肴に盛り上がっている。

「今さ、お前の同僚がたいへんなことになってるぞ。・・・え？
知佳じゃないよ。」

あー。
知佳ちゃん、原田さんに『知佳』って呼ばれてるんだ。
知佳ちゃんを見たら目が合って、知佳ちゃんは恥ずかしそうに微笑んだ。可愛いなあ。

「紫苑さんと美歩さんと、ええと・・・、」

「美乃里でーす！　えへへへ。」

美乃里ちゃんが原田さんの携帯に向かって叫ぶ。

「だって。こういう状態なんだよ。さっきはほかの酔っ払いに絡まれてて。・・・え？　だめだよ。俺はデート中。」

すみません・・・。

「ああ、紫苑さんは大丈夫そうだよ。替わろうか。」

差し出された携帯で恐るおそる呼びかける。

「龍之介？」

『何やってんだよ？』

やっぱり怒ってる？

「ごめん。二人が飲みすぎちゃって、一人で帰れるのかどうかわからないの。どうしよう？」

『タクシーは？』

「美乃里ちゃんは一人でタクシーに乗るのは嫌だって言うし、美歩は気持ちが悪いって・・・。あたしが一緒に乗って行けばいいのかな？」

『二人を送っていくのか？　時間も金もかかりすぎるぞ。』

それは厳しい・・・。

でも、今の状態じゃ、仕方ないかも。

電話の向こうから、龍之介のため息が聞こえた。

『そこ、K駅だっけ？』

「・・・うん。」

『じゃあ、二人を連れてM駅まで来い。４駅くらいなら移動できるだろう？　そこから俺が３人とも車で送ってやるから。』

「え、そんな！　それじゃ悪いよ！」

「どうしたの？　なあに？」

横から美歩が携帯を持つ手を引っぱる。

「もしもし～。龍之介くん？」

取り戻そうと思っても、美歩の力が意外に強い。

酔っ払いの馬鹿力なの？　さっきの気持ちが悪いっていうのはお芝居？

「うん。・・・うん。わかった。紫苑と美乃里と一緒にM駅に行くよ。お迎えよろしくね～ん♪」

「りゅ、龍之介？」

ようやく携帯を取り戻して、呼びかける。

『もう決まったから。紫苑、M駅まで頑張れよ。』

「ホントにごめん！」

『いいよ。M駅はタクシー乗り場の横に送迎スペースがあるから、そこで。じゃあな。』

本当に、ごめん！

K駅の改札口までは、原田さんと知佳ちゃんがついてきてくれた。
そのあいだ、美歩と美乃里ちゃんは上機嫌。

「龍之介くんが送ってくれるんだって！」

「まるで紫苑さんみたいですねえ！」

・・・そんなにあたしのこと、羨ましかった？

「紫苑。頑張って。」

知佳ちゃんが励ましてくれる。

「さっき、龍之介にもそう言われたよ。」

相変わらずくすくす笑って千鳥足の二人を女性専用車へと追い立てるように乗せて、４つ目の駅、M駅へ。
タクシー乗り場・・・の隣。
何台か停まっている車の中に、龍之介の小型車はいない。

「まだみたいだね。ちょっと待・・・あ、来たかな？」

ロータリーに入ってきた黒っぽい小型車が近付いてきて、運転席の龍之介が見えた。
前に止まった車に向かって、美歩と美乃里ちゃんがきゃあきゃあと手を振る。

「紫苑が最後だから奥に乗れ。あとの二人はどっちでもいいぞ。」
美乃里ちゃんが美歩に助手席を譲り、運転席の後ろに座ったあたしの隣に美乃里ちゃんが乗り込む。

「しゅっぱ～つ！」

美歩が自分の住所をカーナビにセット。駅の近くは多少混んでいたけれど、それ以外はノンストップで進む。
美歩が車のステレオにセットした曲を、美歩と美乃里ちゃんが熱唱する。車の中はまるでカラオケボックス。
あたしはそれを笑いながら聞いているけど、本当は龍之介に申し訳なくて、心の中でひたすら謝っている。
龍之介はまったく気にする様子もなく、二人を見て笑っているけれど。

美歩を送り届けたあと、美乃里ちゃんがナビと道案内のために助手席に移った。

しばらく3人で話しているうちに、気付いたら美乃里ちゃんはすやすやと眠っている。
あれほど羨ましがっていたのにね・・・。
予定地の近くで美乃里ちゃんを起こし、ようやく家の前で下ろしたときには、時計はすでに11時に近かった。

「迷惑かけちゃってごめんね。」

しょんぼりしているあたしに、龍之介はバックミラー越しに笑った。

「いいよ。あの二人があんなに酔っ払った姿を見る機会なんて、そうそうないだろうからな。」

「ほんとだよね。一緒に行くって決まったときに、二人が『気が合いそう』って言ってたんだけど、本当に盛り上がっちゃってさあ。」

「紫苑は？」

「二人とも、見た目が良すぎて損をした話で盛り上がってたから、あたしが出る幕はなかったよ。」

わはははは・・・と龍之介が笑う。

「それにね、二人ともお店の中でも服装で目立ってるし、だんだん声が大きくなってくるしで、気が気じゃなくて、飲んでも全然酔わなかった。」

「そうか。たいへんだったな。絡まれたって？」

「うん。お店を出たところで、二人連れにね。相手がしつこくて困ってるところに、ちょうど知佳ちゃんと原田さんが通りかかって助けてもらったの。」

「たいへんだったな。」

「まあね。」

かなりドキドキものだったな・・・。

「・・・ここ、どこ？」

窓の外に、キラキラしている景色が見える。

「ああ、ちょっと海の方にまわってみた。」

「ふうん。きれいだね。」

「うん。海の手前に大きな工場があるんだよ。あれは工場の明かり。」

へえ。こんな夜なのに。

建物なのか、太い煙突なのかよく分からないけど、小さい明かりがたくさん点いている。ところどころに赤い光も。

もっと前方には高い建物がいくつかあって、そのてっぺんに赤い光が点滅している。

暗い空。

暗い海。

暗い車の中。

聞こえるのはエンジンの音だけ。

「・・・龍之介。」

「ん？」

「ありがとう。」

それしか言葉が見つからなかった。

「うん。」

龍之介も余計なことは言わなかった。

途中のコンビニで缶コーヒーと肉まんを買って一休み。
お店の前に立ったまま、ほかほかの肉まんを食べる。
コートのポケットに入れた缶コーヒーが温かい。

もうずいぶん遅かったけれど、コンビニは明るくて、こんな時間でもクリスマスケーキを売っている。
お客さんも意外に多い。
やっぱりクリスマス・イブだから？

・・・そうか。
今日はクリスマス・イブだ。

クリスマス・イブに龍之介と一緒にいる。
予定外のドライブで、きれいな景色を見て。
もともと駅まで迎えに来てもらうことにはなっていたけれど。

「龍之介。あたし、龍之介に何も用意してなかった。」

「何が？」

「クリスマスプレゼント。いろいろお世話になってるのに。」

「今朝、手作りのお菓子をもらったぞ。」

「あれはプレゼントとは違うもん。」

あんなぼろぼろのタルトじゃ申し訳ない。

「んー・・・。じゃあ、ここに。」

そう言って屈んだ龍之介が、自分の頬をトントンと指差す。

それって・・・“ほっぺにチュッ”ってこと？

「やだな、龍之介！　そういうのはちゃんと相手を選ばないと。」

まったく、ふざけてばっかり！

子どもみたい！

可笑しくなって笑ってしまう。

そんなあたしに、龍之介は笑いながらヘッドロックをかけてきた。

「苦しい～。降参、降参。」

ホントに子どもみたい！

龍之介の「着いたぞ。」という声でハッとした。あたし、眠ってた？

「ごめん！　送ってもらってるのに寝ちゃうなんて！」

申し訳ない・・・。
よだれとか垂れていないだろうか・・・？
「いいよ。ちゃんと歩けるか？」
龍之介、責めないんだ・・・。
こんなふうに気遣ってくれるなんて、ちゃんと女の子扱いされてる？
うわ。
変なこと考えちゃった！
なんだか、焦っちゃうよ。
慌てて車を降りると、全開にした運転席の窓から身を乗り出して、
龍之介が紙袋を差し出す。
「これ、今朝もらったお菓子の入れ物。美味しかった。サンキュー。」
そんなに素直に褒められたら照れくさいな・・・。
何も言えずに頷いて受け取るとき、ふと、運転席のデジタル時計が
目に入った。
［１２：００］
日付が変わる。
クリスマスの朝。

咄嗟に屈んで、龍之介の頬に唇で触れる。

「じゃあね、龍之介。メリー・クリスマス。」

急いでひと言残し、マンションのガラスのドアを通り抜ける。
胸がドキドキして、顔を上げることができないまま。

エレベーターの前でそうっと振り向いたら、龍之介が手を振った。
それを見て、あたしも。

部屋に帰って、すぐにお風呂をセット。
コートはハンガーへ、携帯をバッグから出して、明日は何を着て行こうかな・・・？

・・・・・・。

洋服ダンスの扉に頭をもたせかけてため息をつく。

キビキビ動いてみても、実は何も考えていない。
さっきの自分の行動を考えないために、体を動かしているだけ。

でも、考えても分からない・・・。

ダイニングテーブルに置いた紙袋。

タルトを持って行った入れ物・・・洗わないとね。
美乃里ちゃんも、通りかかった係長も褒めてくれたタルト・・・よかった。

キッチンへ持って行きながらフタと本体を両手でつかんで一気に開けると。

「うわ？！」

・・・なに？！　なんか飛び出した！
龍之介！　どんないたずらよ？！

びくびくしながら床を見たら・・・花束？
短く切ったピンク色のガーベラとチューリップがレースのリボンで結ばれて。
小さなカードがその近くに落ちている。

『Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ　ａｎｄ　Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ！　龍之介』

いかにも龍之介らしい金釘流の文字が並ぶカード。

「くふふ。」

思わず笑いがもれた。

龍之介ってば。
いったい、どんな顔して花なんて買ったんだろう？

でも、ありがとう。
お礼は“ほっぺに・・・。”で、ちょうどよかったかな？

32　≪拍手！≫

龍之介。

きみにそんなスタンドプレーができるとは思わなかった！
ちょっと見直したよ。

朝、ちょっぴり強引に紫苑を迎えに行くことを約束させたところは、
まあ、いかにも龍之介らしい方法だと思った。
優斗だったらきっと、「クリスマス・イブに一緒に過ごしたい。」
って、はっきり言っただろうけど。
龍之介はやっぱり慎重過ぎるね。

まあ、そのひと言が二人の仲を壊してしまうかもしれないって心配
する気持ちはわかるよ。
そもそも紫苑が人を好きになることを怖がっていることを知ってい
るしね。
でも、あんまり慎重過ぎて、タイミングを逃してしまうってことも
あるんだよ。

・・・だけど。
それだけじゃなくて。

龍之介は超照れ屋さんだね。
もし誰かにそう言われても、絶対に認めないで、“紫苑を不安に
させないため”って言うのかな？

その慎重さと照れ屋さんの組み合わせだと、あの優斗に対抗するにはよほどの決意が必要だよね。
だけど、あの入れ物に花束を入れて返してくるなんて、けっこう気障だと思うよ。

今のところ、龍之介と優斗、どっちが優勢かはよくわからない。
積極的で、素直に自分の気持ちを口に出してしまう優斗の方が、一歩リードしてるかもって思ってた。
軽いデートもしてるし、優斗といるときの方が、紫苑はよく笑ってる。

でも・・・・。
龍之介は回数が少ないけど、紫苑を驚かせるようなことをするね。

紫苑。

ゆっくりでいいからね。
あわてないで、ちゃんと確かめながら進むんだよ。

龍之介も優斗も、紫苑を急かしたりしないから。
二人とも、紫苑のことを一番に考えてくれるから。

いつも見守っているよ。

僕はいつも、紫苑のそばにいるよ。

33　クリスマスでも仕事です

寝不足だ・・・。

昨夜は帰るのが遅かったし、そのうえ・・・あれこれ考え過ぎてしまって、なかなか眠れなかった。

あれこれ。
あんなことや、こんなこと。

秋月さんのこと。
美歩や美乃里ちゃんの言葉。
それから、龍之介のほっぺに・・・という自分の衝動的ともいえる行動。

結局、考えても答えは出なかった。

そのうち、真由の『成り行きに任せてみたら』という言葉がふっと浮かんできて、急に落ち着いた。
・・・と思ったら、朝だった。

朝の忙しい時間に悩んでいる暇はない！
昨夜の疑問が頭に浮かんだ途端に、自分の中で結論が出た。
“ほっぺに”　は　“お酒のせい”　だったんだ。
美歩と美乃里ちゃんに気を取られていたときは酔わなかったけど、

実際には飲んでいたもの。
龍之介に送ってもらって安心して、あそこで一気に酔いが回ったに違いない。
その証拠に、今はこんなに冷静。
お酒の影響ってすごいね。
今日、龍之介に、もう一度よくお礼を言わなくちゃ。

「よう、紫苑。」
龍之介？
乗り換え駅のホーム。
気付くと隣に龍之介がいた。

「おはよう。」
黒いトレンチコートに黒いスーツ、黒い手袋、黒いバッグ・・・黒ずくめの龍之介がニヤリと笑ってる。
昨夜のことを思い出して、一瞬、鼓動の間が空いたような気がしたけれど、その笑い顔を見たら、なんだか安心した。
「おはよう。昨日はどうもありがとうございました。」
丁寧に頭を下げてお礼。
「本当にごめんね。あたしが二人を押さえられなくて、あんなに長距離をまわってもらうことになっちゃって。」

ああ、そうだ。

「それから、お花もありがとう。びっくりしちゃった。」

ホームに電車が入って来て、人波に乗って乗り込む。

「そうか？」

「うん。」

混んではいるけれど動けないほどじゃなく、龍之介と並んで通路に場所を確保。

距離が近いのは仕方ないか、通勤電車なんだから。・・・でも、ちょっと恥ずかしいかも。

「空っぽだと思って、こうやって、両手で一気にフタを開けたら、中から飛び出してきてね。思わず悲鳴をあげちゃったよ。」

龍之介がくすくす笑う。

「いかにも紫苑らしい。」

「そう？」

「ガサツっていうか・・・。」

どうせね。

「そういえば、今日はどうしたの？　いつもはもっと早い電車って

言ってなかった？」

「寝坊した。」

あ。

「ごめん。昨日、遅くなっちゃったもんね。」

「いいよ、べつに。間に合うんだから。」

「うん。ホントにありがとうね。」

龍之介がまたニヤリと笑い、話題は次へ。

「27日・・・もうあさってだな、朝の4時半ごろ迎えに行くからな。」

「あ、スキーのこと？　4時半？　そんなに早く？」

起きられるだろうか？

「向こうで午前中から滑りたいからな。真鍋さんたちとは途中で合流する予定だよ。」

「じゃあ、今日と明日で荷造りしないとね。」

「そう。で、明日は早く寝ろよ。」

「わかってる。龍之介の車は、あたしのほかには？」

「嶋田さんと竹田を途中で拾って行く。ちょっと狭いかもしれないけど我慢してくれ。真鍋さんが金子さんと榊原さんを迎えに行くことになってる。」

ふうん、そうか。

「隙間に落ちるなよ。」

降りるときに龍之介に言われた。

電車とホームの間のこと？

いくらなんでも・・・いえ、実は毎日、かなりびくびくものなんだけどね。

どうしてわかったのかな？

「あれ？　龍之介？」

改札の手前で、いつもの秋月さんの声。

でも、今日は龍之介と会ったことが不本意だと声が告げているようで可笑しい。

「よう。」

龍之介のあいさつのようなものには返事をせず、にこにこと笑いかけてくる秋月さん。

「紫苑さん、おはよう。」

「おはよう。」

秋月さんが龍之介とは反対の隣に並ぶ。

あ。

もしかして、こういう状態を“両手に花”と言うのでは？

龍之介って意外にかっこいいし、秋月さんはカワイイ系。

周りから嫉妬のまなざしを向けられていたりして！

改札口を抜けながら、さりげなく周囲を見回してみる。

・・・みんな忙しそうだな。年末だもんね。

つまんないの。

「紫苑さん、タルト美味しかったよ。ありがとう。」

「あ、ああ、本当？　よかった。」

「あのタルトって、食べると心が和むよねえ。」

うーん。

秋月さんの笑顔も心が和むなあ・・・。

「たしかにうまかった。紫苑にしては上出来だったよな。」

「龍之介？」

秋月さんが眉間にしわを寄せて龍之介を見た。そのあと、問いかけるようにあたしを。

龍之介は知らん顔。

「え・・・えと、食べきれないから、うちの職場と龍之介にあげたの。」

「ふうん。」

一瞬、不満そうな顔をしたけれど、秋月さんはすぐに機嫌を直して言った。

「でも、僕のためにつくってくれたんだよね？　ついでじゃなくて。」

まったく、もう。

そんなことにこだわるなんて、笑っちゃう。

「はい、そうですよ。」

「じゃあ、いいや。」

満足そうな顔。

「ふん。」

龍之介は不満そうな顔。

面白いなあ・・・。

二人の様子を見比べて密かに笑っていたら、秋月さんが龍之介をチラッと見た。

また何か・・・？

「そういえば、紫苑さん。次のアップルパイはいつ作るの？」
その話題？！
けっこう爆弾な気がするけど？！
背中がヒヤッとして、額には汗が・・・。
「アップルパイ？」
龍之介が秋月さんじゃなくて、あたしに問いかける。
ああ、もう！
二人でてきとうに話し合って決めてくれたらいいのに！
「つ、次・・・はね、まだ決めてないよ。あの、・・・年末年始は忙しいから。」
龍之介の視線には気付かないふり。
「そう。次の試作品も楽しみにしてるよ。」
秋月さんも、龍之介のことは無視することに決めたらしい。
「うん・・・。」
顔を上げられない。
はじめっから、全部ほんとうのことを言っておけばよかった！
「龍之介くん！」

後ろから声がしたと同時に、女の子が二人・・・美歩と美乃里ちゃん。
走って追いかけて来たらしい。二人とも息が切れている。
たぶん、昨夜のお礼でも言いに来たんだろう。
それにしても、なんてタイミング良く出てきてくれたんだろう！
「おはよう、紫苑、秋月さん。」
「おはようございます。」
二人はあたしたちにも声をかけてから、そろって龍之介に向かって頭を下げた。
「「きのうはお世話になりました！」」
「ああ・・・べつにいいよ。」
「そんなことない。本当に申し訳ないことしちゃって。」
困った顔をして歩き出した龍之介に二人が並ぶ。
あたしは秋月さんと並んでその前を歩く。
「何かあったの？」
秋月さんの小声の質問で、昨日の二人を思い出して笑ってしまった。
「昨日ね、あたしとあの二人で食事に行ったんだけど、」

「ああ、そう言ってたね。」

「そこでね、あの二人が飲み過ぎちゃって、最終的に、龍之介を呼んで、送ってもらうことになっちゃったの。」

「え？　タクシーで送るとかじゃなくて？」

「うん。まあ、いろいろあってね。原田さんにも助けてもらったんだよ。偶然に会って。」

「諒に？」

「そうなの。原田さんは知佳ちゃんとデート中だったんだけどね。ああ、ごめんなさい。あたしはここだから。続きはまた」

勤め先のビルの前で、いつものとおり、手を振ろうと・・・。

「あ、紫苑さん。今日、お昼の予定はある？」

早口に尋ねられて、その勢いに押されて首を横に振る。

「じゃあ、一緒にどう？　タルトのお礼。」

「お礼なんて、」

「と、僕の息抜き。」

息抜き・・・。

「ここのところ、お昼もコンビニで買って仕事をしながらだったか

ら、クリスマスくらいは職場から出たいなと思って。」
「ああ・・・、うん、そういうことなら。あたしとでいいの、かな？」
「うん。紫苑さんといると楽しいから。」
ああ、この笑顔で言われると、断れないよね・・・。
それに、あたしが秋月さんの役に立てるなら嬉しい。
「じゃあ、息抜き用の楽しい話を考えておくね。」
「ありがとう。じゃあ、お昼にここで。何かあったらメールするから。じゃあね！」
そうだ。
美歩たちは・・・？　後ろにはいない？
ビルに向かうと、ロビーで美歩と美乃里ちゃんに手を振って階段を上って行く龍之介の後ろ姿が見えた。いつの間にか追い越されてたんだ・・・。
二人はそのまま立ち止まって、どうやらあたしを待ってくれているらしい。
「紫苑～。昨日は迷惑かけちゃって、ごめんね！」
「紫苑さん。調子に乗り過ぎてしまって、すみませんでした・・・。」
ロビーに入ったところで駆け寄られて、美歩には抱きつかれ、美乃

里ちゃんは平謝り。

「うん、大丈夫だよ。ちょっとびっくりしたけど。」

少しは覚悟もしていたし・・・。

「二人とも、ちゃんと覚えてるんだ？」

「ちゃんとじゃないんだけど、まあ、かなりね。」

美歩が舌を出しながら言った。

その隣で美乃里ちゃんが神妙な顔をして頷く。

「あのときはどうなるかと思ったけど、今になってみると、面白かったよ。ふふ。まあ、無事だったから言えるんだけど。」

二人とも、あんなに愚痴り屋だったなんてね。

「知佳ちゃんにも謝って・・・、あ、知佳ちゃん。」

ロッカー室の前で、出てきた知佳ちゃんを見つけた。

「昨日はごめんね～。」

口々に謝るあたしたち3人に、知佳ちゃんはまるでマドンナのような微笑み。

「いいのよ。やけ酒を飲みたくなることもあるわよね。」

なんていうか、“幸せいっぱい”な感じ？

ほっとした顔でロッカー室に入って行った二人と離れて、知佳ちゃんに身を寄せて訊いてみる。

「原田さんと、あれからどうだった？」

「やだ、紫苑！　ちゃんと帰ったわよ！」

「え？」

あたし、そんなこと訊いてないよ？！
こっちが赤面しちゃうじゃないの・・・。

「すごーく楽しかったの。幸せなんだもーん。」

「そう・・・。知佳ちゃんだけでも幸せでよかったよ。」

「ありがとう、紫苑。」

うふふ、と笑っている知佳ちゃんは、まるでふわふわと宙に浮いているように見える。
お友達が幸せな姿って、いいものだね・・・。

「紫苑もちゃーんと幸せになれるわよ。じゃあね～♪」

踊るような足取りで自分の職場へ向かう知佳ちゃんは、まるで光り輝いているように見えた。

３４　クリスマスなのに・・・

美乃里ちゃんは二日酔いだった。

朝は龍之介やあたしに謝らなくちゃと思って頑張っていたようだけど、職場の机についたとたん、両方のこめかみをグーで押さえつけている。

机の上にはペットボトルのスポーツドリンクが２本。

「頭が痛くて、のどが渇くんです・・・。」

よく見ると、目の下にクマができているみたい。

「だいぶ飲んでたもんね。」

「いえ、あれだけじゃなくて・・・。」

美乃里ちゃんが辛そうに訴える。

「昨日、帰ったら、ちょうど姉がデートから帰ったところで・・・。のろけ話を聞かされながら、ワインに付き合わされて・・・。」

あの時間から？

それじゃあ、辛いかもね。

「二日酔いがこんなにつらいなんて・・・。」

情けない顔でため息をついている。
それでもやっぱり可愛らしいけど。

「昨日はどうだった？」

隣の課の竹田くんが、通りすがりに美乃里ちゃんに声をかけた。

「・・・・・。」

ぼんやりと竹田くんを見上げる美乃里ちゃん。
答える元気もないらしい。

問いかけるようにこちらを向いた竹田くんに、美乃里ちゃんの机の上のペットボトルを指し示す。

「え？　もしかして二日酔い？　美乃里ちゃんが？」

驚いた竹田くんの意外に大きな声に、美乃里ちゃんが慌てて立ち上がる。

「ちっ、違います、違います！　二日酔いなんて、そんな・・・痛い・・・。」

みんなには知られまいとしていきなり動いたのがいけなかったのか、すぐに頭を抱えて椅子に座り込む。
課内の視線を逆に集める結果になってるし。

「だいぶ酷そうだね。」

向かいの席の春山さんがくすくす笑う。

「すみません。あたしも一緒にいたんですけど。」
「谷村さんのせいじゃないよ。もう大人なんだから、自分で気を付けないとね。」
「はい・・・。」
美乃里ちゃんがしょんぼりと返事をした。
「こんなに弱いとは思いませんでした・・・。」
そうじゃなくて、飲んだ量がすごかったんだってば！

廊下で行き会った美歩は元気だった。
「ちょっとちょっと。」と言いながら、あたしをトイレに引っぱって行く。
トイレの中で周囲を見回す様子がなんとなく怖い・・・。
「紫苑。さっきは美乃里がいたから言わなかったけど、あなた、龍之介くんと外で会ってるでしょう？」
え？
なんでいきなり龍之介の話題？
それに、“外で”って・・・？
「外でって、飲み会の帰りとは意味が違う？」

「もう！　何をとぼけてるのよ?！　それ以外のこと！」

・・・あ！

「ええと、うん。この前、一回だけ会ったよ。」

この前だけじゃなく、ゆうべの“ほっぺに・・・”も思い出してしまった。

困っちゃうな。

もしかして、あたし、顔が赤くなってる?

こんな反応したら、美歩に勘違いされちゃうかも・・・。

“勘違い”　でいいんだよね・・・?

「やっぱり。」

美歩。

もしかして怒ってる・・・?

「どうして分かったの?」

「きのうの夜、紫苑は龍之介くんがどんな車で来るか知ってたみたいだから。」

「あ。」

そうだった。

あのときは必死だったから。

「よ、よく気付いたね。だいぶ酔っ払ってたみたいなのに。」
「今朝、思い出して気が付いたの。紫苑ってば、それでも龍之介くんとは普通の友達って言うの？」
「美歩・・・。」
そんなこと言われても・・・。
あたしと龍之介はそういう付き合い方をしてきたんだよ。
それ以外に、なんて説明したらいいの？
困り果てて美歩の顔を見ていたら、美歩は大きなため息をついた。
「ごめん、紫苑。」
「美歩が謝ることはないけど・・・。」
美歩がさびしそうにあたしを見た。
そして。
「違うの。」
違う？
なにが？
「あたしね、龍之介くんのこと、ちょっと本気だったの。」
「美歩。」

「だから、紫苑に焼きもち焼いてるの。」

「あの、あたし・・・。」

「それで、ちょっと紫苑に意地悪なことを言ってみたの。」

美歩・・・。

「でも、もういいや。」

え？

「もともとあんまり望みはなかったんだし、そのうえ昨日、あんなところを見せちゃったからね。」

えへへ、と肩をすくめてみせる美歩。

「あんなことくらいで、龍之介は美歩のことを嫌いになったりしないと思うよ？」

「んー、そういうことじゃないの。」

「そう？」

「そう。あたしじゃダメなのよ。要するに、そういうこと。紫苑とは関係なく、ね。」

あたしとは関係なく。

「もし紫苑がいなくても、龍之介くんはあたしを選ばないよ、きっ

と。」

「・・・そう、なの・・・？」

美歩・・・強いね。

「でも、今日のお昼は龍之介くんを借りるからね。」

美歩ってば。

「“借りる”　って、べつにあたしの所有物じゃないよ。きっと、龍之介も文句言うよ。」

「そう？　まあ、そういうことにしておきましょう。」

「いや、そういうことそのものだから。」

美歩が笑う。

その笑い方はやっぱり綺麗で華やか。

「ランチ？」

「そう。美乃里と二人で、お詫びにランチをおごるって約束したの、今朝。」

ああ、なるほど。

「美乃里ちゃん、ものすごい二日酔いだよ。」

「え？　本当？」

「通勤の間は我慢してたみたいだけど、机に座ったら頭痛がひどいみたいで頭抱えてた。それにペットボトルを2本持って来てて。」

「だらしないなあ。これから鍛えてあげなくちゃ。」

「きのう、帰ってからまた飲んだらしいよ。」

美歩が呆れた顔をする。

「でも、きっと美歩に鍛えられたら酒豪になるかもね。」

二人で笑い合って、楽しい気分で手を振る。

龍之介とあたしって、本当にどういう関係なんだろう・・・？

あ、そうだ。

「美歩！」

追いかけて囁く。

「ねえ、昨日のこと、秋月さんにも話していい？」

「秋月さん？」

「今日、一緒にお昼を食べるの。仕事で疲れてるって言うから、楽しい話をしてあげようと思って。」

「二人でランチ？　いいの？」

心配そうな顔。
1対1でいいのかってこと、だよね？
「だめ、なのかな？　秋月さんはいつも『気にしないで』って言うから。」
それに、お休みの日に一緒に出かけてるよ。
「そう・・・。まあ、秋月さんがそう言うならいいのかもね。で、ゆうべの話をしたいわけ？」
「うん。面白いから。一応、許可をとろうかと思って。」
「もう・・・。いいよ、べつに。だって、原田さんだってその場にいたんだもん。紫苑が話さなくても、龍之介くんとか原田さんから聞いちゃう可能性があるでしょ？」
ああ、そうか。
「うん、ありがとう。じゃあね。」
秋月さん、きっとたくさん笑ってくれるね！
だけど・・・。
あたし、龍之介と自分のこと、もっとよく考えなくちゃいけないのかな・・・。

35　クリスマスのランチで焼くものは

お昼休みに急いで待ち合わせ場所に行くと、ちょうど秋月さんもやって来た。

「今日はなにがなんでも出ようと思って頑張ったよ。ああ、やっぱり休憩中に外に出るのはいいよねえ。」

そう言いながら、気持ち良さそうに伸びをする。

「同僚に訊いて、美味しいランチの店を予約したんだ。この先にあるホテルの2階。」

「もしかして、よく雑誌に載ってるお店？」

「そうかも知れない。ビーフシチューのランチが有名なんだって。予約でそれを頼んじゃったけど、大丈夫？」

「うん。」

ちょっと高いお店かも。

まあ、クリスマスだし、いいか。

「何軒か教えてもらったんだけど、その中ではここしか空いてなかったんだよ。」

お店に入りながら秋月さんが言う。

そうだろうな。
入り口の黒板には『限定ランチ　２，５００円』。
値段が高いから空いてたんだと思う。

店内はテーブル同士の間が広くとってあって、他人の話し声が気にならない。
本物の木を使ったクリスマスツリーには赤と金を基調にした飾り。
テーブルクロスも赤に白を重ねて、クリスマスらしい色使い。

「ランチだとお酒が飲めないのが残念だね。」

「お酒を飲むって言えばね、昨日、」

ふと、秋月さんが、あたしの肩越しに入り口の方に視線を移した。
そして、にっこり笑って片手を少し上げて合図。

「誰か知ってる人がいた？」

「あ、振り向かないで。」

あ。
面倒な人・・・かな？

「僕の友人なんだけど・・・紫苑さんは知らない方がいいよ。」

知り合いにならないほうがいい人？
そんなに変なお友達もいるのか・・・。

それにしちゃ、秋月さんは楽しそうに笑ってるなあ。

オルゴールバージョンの楽しげなクリスマスのメロディが流れる店内で、情報どおり絶品のビーフシチューをいただく。

なんて贅沢なランチ！

秋月さんの優しい笑顔ときりりとした明るい声の会話も和やかで心地いい。

昨夜の酔っ払い騒ぎも、秋月さんと話していると、微笑ましく感じる。

龍之介とじゃ、こうはいかないね。

・・・って、何故、龍之介と比べてる？

「そうだ。紫苑さんにプレゼント。」

食後のコーヒーを飲みながら、秋月さんがスーツのポケットから取り出した小さめの白い紙の袋。この袋だと、和菓子を想像しちゃうけど・・・ふわふわしてる？

「ありがとう。開けていい？」

「もちろん、どうぞ。」

にこにこして嬉しそう。

留められていない袋の口を開けて覗いてみると。

「お守り？」

３つも入ってる・・・。

テーブルに並べてみると。

『身代り御守』、『厄除御守』、『交通安全御守』？

「紫苑さん、もうすぐスキーだよね？　怪我しないように。」

うわ・・・。

なんてよく気が付く人なんだろう。

「ありがとう。嬉しい。でも、３つも？」

「そう。仕事で外出したときに、お寺とか神社の前を通ると買いたくなっちゃって。」

ん？

ってことは、裏は・・・全部違う！

そんなにいつも気にかけてくれて・・・？

「あの・・・、どうもありがとう。」

「いいえ。スキー、楽しんでおいでね。」

「うん。・・・あたしは何も用意してないんだけど。ごめんなさい。」

「あ、いいんだよ！　気にしないで。それに、昨日、タルトをもらったよ。」

「ちょっとだけだよ。」

「でも、作るの大変だったよね？　そういうのは買ったものとは違うから。・・・そろそろ戻ろうか。」

１２時５０分。
お昼休みはあっという間だ。

お店を出るとき、秋月さんが会計で席札を出すと、店員さんが「ありがとうございました。」と頭を下げた。
・・・それで終わり？

「お会計は・・・？」

「先に済ませたよ。」

いつの間に？
すごいスマートだね。
秋月さんて、本当に何でも行き届いてる気がする。

でも。

「あの、秋月さん、あたしの分を・・・。」

お店を出ながら支払いを申し出ると、秋月さんはいつもの笑顔で答えた。

「今日は僕のおごり。」

「いえ、でも、それじゃ申し訳ないよ。」

ここ、高いんだし。

「うーん・・・、紫苑さん、気になる？」

返事の代わりに頷く。

「じゃあ、千円だけもらおうかな。そのくらいなら、おごられてくれる？」

残り１，５００円。
そのくらいなら・・・まあ、いいのかな？
あんまり意固地になるのも失礼な気がするし・・・。

「はい。では千円。ご馳走さまでした。」

頭を下げながら千円札を差し出す。

「何やってんだよ。」

わっ？！　なに？！

振り向いたら・・・龍之介？

その後ろから美歩と美乃里ちゃんが急ぎ足でやってきて、両側から腕を掴まれた。

「ほら紫苑、お化粧直さないとね。早く行こう。秋月さん、失礼します。龍之介くん、お先に。」

「あ、うん。秋月さん、ご馳走さまでした。」

「うん、またねー。」
にこやかに手を振る秋月さんとふて腐れた顔をした龍之介を残して、美歩と美乃里ちゃんに引きずられるように職場への道を走った。

「あんなところでニアミスしちゃうなんて、ホントに焦った。」
洗面所の鏡の前で口紅を塗りながら、美歩がしみじみと言う。
「お詫びだからと思ってちょっと高いお店にしたら、そこに紫苑たちがいるんだもの。」
「本当ですよ〜。お店に入ったとたんに高木さんがお二人に気付いて、足が止まっちゃって。」
さっきのレストランに、二人も龍之介を連れて行ったのだった。
今日になってから予約ができるようなお店は限られているから。
「全然気付かなかった。」
あたしが言うと、美歩が呆れた顔でうなずいた。
「それは、お店を出たあとの紫苑の様子を見て分かった。でも、秋月さんは気付いてたんだよ。あたしたちがお店に入ったとき、龍之介くんに手を振ったんだから。」
あのときか！

振り向いていれば・・・。
いや。
振り向かなくてよかったのかも。

「秋月さんが“見ないほうがいい”、みたいに言うから、てっきり顔を覚えられたりしたら困るような人なのかと思った・・・。」

実に上手い言い回しをしたよね。
ものすごーく秋月さんらしい感じがするけど。
まるで、龍之介に“あかんべえ”をしているような、子どもっぽい感じ。
相変わらずそんなふうに、龍之介に対抗意識を燃やしてるんだから。

「“顔を覚えられたら困る人”って、紫苑さん、素直に信じたんですねえ。」

美乃里ちゃんが感心してる。

「だって・・・。」

「秋月さんは、紫苑のそういう素直なところがいいのかもねー。」

「美歩！」

そんな風に言われると・・・本当にそうなのかも知れないけど・・・。

あ。
秋月さんのことをこんなに普通に考えられるなんて、ずいぶん慣れてきたんだなあ。

「高木さんはもう、ずーっと落ち着かなくて。」
「そうなの。うっかり紫苑たちが見える方に龍之介くんを座らせてしまってね。」
「わたしたちとお話ししていても、紫苑さんの方ばっかり気にしてて。」
「そう。それでしかめっ面しちゃって。ねえ？　あたしたち、気が気じゃなかったわよ。」
美歩と美乃里ちゃんが顔を見合わせて頷き合う。
「その話、誇張してない？　でなければ、二人の勝手な解釈が混じってるとか。」
絶対にそうだ。
「そんなことありませんよ！　ねえ、美歩さん？」
「そうよ、紫苑。ウソじゃないもん。」
・・・まあ、たしかに最近、ちょっと優しいかも・・・ん？
でも、あくまでも“ちょっと”だよ！
「あーあ。いいですねえ、紫苑さん。二人の男性に想われて。」
「まだ、そう決まったわけじゃ・・・。」

どうやら一人はかなり確実な感じではあるけど・・・。
あ。
ほんとうに、秋月さんのことには慣れてきたんだなあ・・・。
「あ、もう時間ですよ。」
腕時計を見た美乃里ちゃんのひと言で、大急ぎでトイレから出る。
そういえば、あれから龍之介と秋月さんはどんな会話をしたんだろう？
・・・知らない方がいいか。

36　クリスマスに出かけよう

隣の課に龍之介が来ている。
仕事中は普通にしているけれど、体が大きいから目立つ。声も大きいし。

お昼休みのこと　――　あたしと秋月さんのことよりも、美歩たちから聞いた龍之介の態度　――　を、自分の中でどう片付けたらいいのか迷っているあたしとしては、龍之介とは顔を合わせにくい。
年末で仕事が忙しいってこともあるし、気付かないふりをしていよう・・・と思ったのに、龍之介がこっちに来る。
どうか、あたしに用事じゃありませんように！

「紫苑。ちょっと。」

ああ・・・。

「なに？」

座ったままくるりと椅子を回して、龍之介を見上げる。
ここだったら、龍之介だって言いがかりをつけたりできないはず。

「ちょっと、いい？」

そう言って、廊下の方を視線で示されてしまった。
今までこんなことなかったのに。
美乃里ちゃんが気を遣っている様子が感じられて、このままでは無

理か、とあきらめた。

龍之介のあとについて行きながら、何を言われるのかとびくびくしてしまう。まるで、先生に呼び出された中学生みたい？

・・・けど、あたし、何も悪いことしてないよね？

「紫苑、今日、飲みに行こう。」

「は？」

お昼のことを何か言われるのではないかと警戒していたから、違うことを言われて、一瞬まごついた。

「今日の夜、予定あるか？」

「明日は定時に帰りたいから、今日のうちに少し残って仕事しようかと・・・。」

「じゃあ、そのあと。俺も残業するから、終わったら連絡しろ。」

「・・・なんで急に？」

あたしの問いに、龍之介が視線を逸らす。

「・・・ちょっと。飲みたい気分だから。」

・・・普通だ。

当たり前の答え。

なーんだ。

心配して損しちゃった。
そうだよね。
龍之介は、昨日みたいな日に出かけられなかったんだもんね。
「いいよ。行こう。」
あたしの返事に龍之介はほっとした顔。
「その様子だと、何か嫌なことでもあったんでしょう？　仕事で失敗した？」
ニヤニヤしながら言うと、龍之介もニヤッと笑った。
「わかるか？」
「わかるよ。」
もう3年近くの付き合いなんだから。
「たぶん7時過ぎには出られると思う。」
「わかった。じゃあな。」
龍之介が階段を駆け上がって行く。
いつも仲がいい真鍋さんにも言えないこともあるんだね。
二人で飲みに行くのは初めてだけど、あたしと龍之介は友達だもん。
今までそういうことがなかったことの方が不思議なんじゃない？

席に戻ると美乃里ちゃんが心配そうにしているので、一応、「龍之介と飲みに行くの。」と話しておいた。
それを聞いても、美乃里ちゃんは相変わらず心配そう。
もしかしたら、あたしが龍之介からランチのことで何か言われるんじゃないかと思ってるのかも。
龍之介は、そんなこと全然覚えてないみたいだったのにね。

7時過ぎ。

そろそろ終わるとメールをしたら、龍之介からあたしのいる階のエレベーター前で待つという返事。
少し急いで仕度をして、廊下の角を曲がると、エレベーターの前にもう龍之介がいた。
朝と同じ黒づくめの服装で、エレベーターの横にある大きな窓から暗い景色をながめて。

一瞬前までは元気に動いていた足が、その後ろ姿が目に入ったとたんに止まる。
言おうとした「お待たせ。」という言葉が、口の中で行き場を失って、ぽん、と消えてしまった。

――――　なんか、恥ずかしいな。

・・・あれ？
うそ？

あたしが？
龍之介に？

龍之介が振り向く。
リラックスしたいつもの笑顔で。

どうしよう？
緊張して来ちゃった。
なんだかドキドキする・・・。

龍之介の後ろの窓ガラスには、暗い外の景色の中に、キャメル色のコートを着たあたしが映ってる。
その距離では、自分がどんな表情をしているかはよくわからない。

「お疲れ。行くか。」

かけられた言葉にこくりと頷く。

どうか、声が出ないことに気付かれませんように！
どうか、顔が赤くなっていませんように！

自信のないちょこまか歩きで龍之介の隣に並んだけれど、どうにも恥ずかしくて顔を上げることができない。

どうして？
相手は龍之介だよ？！

今までにも帰りに一緒になったことは何度もあったよ。
しょっちゅう、帰りに送ってもらってるよ。

でも。

こんなふうに待ち合わせてって・・・初めてなんだもん。
なんだか、いつもと違うよ・・・。
困ったよ～。

ドス。
うわ！

「照れてんじゃねえよ。」

肘で押されて、ちょっとよろける。
驚いて龍之介を見たら、ニヤッと笑った龍之介と目が合った。・・・
と、思ったら逸らされた。

・・・もしかして、龍之介もちょっと照れてる？

なんだか、ちょっとだけ安心した。

「ポーン」と音がして、エレベーターが到着。
扉が開くと、先客が3人。上の方の階に入っている会社の社員さんだろうか。

乗ったら、今度は隣に立った龍之介と肩が触れているのが気になっ

てしまう。
けど、離れたら、“龍之介のことを意識しています”って言っているみたいだよね？　それともやっぱり近過ぎる？
離れたほうがいい？　いや、やっぱり・・・。
そんなことを考えている間に、エレベーターはたちまち1階に。
「ふぅ・・・。」
気付かれないように深呼吸。
たったこれだけで緊張してしまうなんて、いったい今日のあたしはどうしちゃったんだろう？
通用口の守衛さんにあいさつしながら外に出たら、冷たい空気が気持ち良かった。
頭が冷える。落ち着く。
隣を歩く龍之介を見上げてみる。
就職してからずっと仲良しだった龍之介。
安心して一緒にいられるお友達。
・・・そう。
誰が何を言っても、龍之介はあたしの大事な友達だ。
ずっと、ずーっと・・・。
「なんだよ？」
視線に気付いた？
もしかして、また照れてる？

「龍之介といると安心だなあ、と思って。」

「安心？」

「うん。龍之介と一緒にいれば・・・きのうみたいに変な人に絡まれたりすることなんか絶対にないもんね。」

ちょっとだけ、話をすり替えて。
だって・・・本当のことを言うのは照れくさい。

「俺は魔除けか。」

「うん、そう。怖い顔が役に立ってくれて、本当に有難いよ。」

「ふん。どうせ優斗みたいな顔じゃないよ。」

秋月さん？
龍之介ったら、秋月さんの外見に対してコンプレックスでも持ってるわけ？
知らなかった！

「龍之介、秋月さんのこと、気になるんだ？」

可笑しい。
龍之介と秋月さんは、まったく違うのに。

「ふん。」

拗ねた顔をして前を向いている龍之介。
あらら・・・。

「ねえ？」

横から顔を覗くように見上げて。

「龍之介は秋月さんとは違うのに。龍之介はかっこいいって、あたし、言わなかったっけ？」

なだめるように言うと、龍之介がちらりとあたしを見た。

でも、すぐに向こうを向いてしまう。

・・・もう。

自分で秋月さんの話題を出しておいて、自分で拗ねちゃうなんて。

困ったもんだ！

駅の入り口で、テーブルを並べてケーキやアクセサリーを売っている人たちがいる。

その前を通りながら、最後のテーブルの上の一つが目に留まった。

「ねえ、ちょっと待って。」

どんどん歩いて行きそうになっている龍之介の腕に手をかけて引き留める。

「なんだよ？」

テーブルに並んだ革製の動物たち。

その中の一つが龍之介にそっくりだ。

「これ。」

うす茶色で、背中と尻尾と鼻の先がこげ茶色のシェパード。

店番のお姉さんにことわって手にとってながめてみる。

立体的に作ってあって、きりりとした凛々しい立ち姿がかっこいい。

赤い首輪から鎖でキーホルダーの金属の輪につながっている。

「・・・欲しいのか？」

あ。

あたしがおねだりしてると思った？

そうじゃない。

逆だよ。

「違う。あたしが買うの。」

くすくす笑いながらお姉さんにお金を払い、値札をはずしてもらう。

可愛らしい紙袋に入れてもらったキーホルダーを受け取って、改札口に向かって歩き出す。

龍之介、まだ拗ねてるのかな？

そうっと横からのぞいて見ても、無表情でよくわからない。

でも、“無表情”ってこと自体が、機嫌が悪い証拠じゃないだろうか？

「りゅーうーのーすーけ？」

改札口を抜けたところで立ち塞がるように立って、ちょっとふざけて呼んでみる。

「・・・なに？」

「これ。クリスマスプレゼント。」

さっきの紙袋を差し出すと、龍之介が困ったような顔をしてあたしを見た。
でも、ちょっと嬉しそう？
いきなり嬉しい顔をするのが恥ずかしいから、困った顔をしてみせているだけだね、きっと。

「いらない？」

「・・・いる。」

そう言って、紙袋を受け取った。

「それね、龍之介にそっくり。」

「・・・犬？」

キーホルダーをぶらぶらさせて左右から覗き込むように見たあと、疑り深い目をあたしに向ける。
何か面白いことを言った方がいいのかな？　・・・ううん、違うね。
今日はクリスマスだもの。

「龍之介ってシェパードのイメージがあるよ。強くて、きりっとし

てて、でも優しい感じ。」

褒め言葉の大盤振る舞いだよ。

これで機嫌を直してくれる？

「・・・ふん。」

また横を向いちゃうの？

「・・・サンキュ。」

まったく。

世話が焼けるよね？

37　クリスマスの夜に行く店は

「ちょっと汚い店でもいいか？」

そう言って龍之介が連れて行ってくれたのは、乗り換えで使う駅から7、8分歩いた裏通りにある小さな小料理屋・・・って言うんだろうか？

入り口の看板には『月うさぎ』。かわいらしい名前。

「大学時代にバイトしてた店なんだ。」

へえ。

こういうお店でバイトか。

ちょっと似合ってるかも。

のれんをくぐって引き戸を開けると、左側のカウンターに沿って席が８つほど、通路を挟んで右側の座敷に４つのテーブルが縦に並んでいる。

席は半分くらい埋まっていて、お客さんは３０～５０代くらいのサラリーマン風な人ばかり。女性は２人？

「いらっしゃい！　あれ？　龍之介？」

「信一さん、こんちは。」

カウンターの中には藍染めの服と帽子の板前さんらしき若い男の人。

龍之介の口調だと何才か年上みたいだけど、こんなに若くてお店を切り盛りしてるなんて、すごいな。

「あら、龍ちゃん！　いらっしゃい。」
奥からお盆に料理を運んで出て来たのは、朱色の和服に紺の襷をかけた、ふっくらした優しげな女性。
お母さんくらいの年代かな？
こちらも龍之介と仲良さそう。
「千代子さん、こんばんは。」
「クリスマスなのに、うちの店なんか・・・あら、お嬢さん連れなの？」
あ！
あたしもあいさつしなくちゃ！
「え・・・と、こんばんは。」
慌てて頭を下げる。
隣で龍之介があたしのことを説明しようとしてどもっているのを聞きながら。
「あ、ええと、同じ会社の・・・谷村、さん。」
やだな。
龍之介に“谷村さん”　なんて言われたの、何年振り？
ものすごく変な感じ！
また恥ずかしくなっちゃう。
「いらっしゃい。龍ちゃん、いつものとおり、カウンターでいいの

？」

千代子さん（と呼ぶようにご本人に言われた。）の言葉にうなずいて、リラックスした様子でコートを脱ぎ始める龍之介。

本当に常連さんなんだ・・・。

「紫苑、コート。」

声をかけられてあわてて脱いだコートとマフラーを、龍之介がさっさと持って行ってハンガーに掛けてくれた。

こういうお店は初めてで、どうしたらいいのかちょっと迷う。

カウンター席のまん中あたりに並んで座ると、千代子さんがおしぼりと一緒にビールとグラスを出してくれて、

「今日はクリスマスだから、1本サービスなの。」

と微笑む。

「みなさん、こんなお店じゃなくて、もっときれいで豪勢なところに行かれるでしょう？　そんなときに、わざわざうちに足を運んでいただいたお礼なの。ほほほ。」

笑い声が可愛らしい。“鈴を振るような”っていうのは、きっとこういう声のことを言うんだろうな。

お店はたしかに古い感じだけど、きちんと整った雰囲気が気持ちいい。

千代子さんも板前の信一さんも、親しみやすい人たちで。

「千代子さん。俺たち会社から直接来たんです。腹減ってるから、早くできるものがいいんですけど。」

龍之介が千代子さんと相談しながら料理と“いつもの”冷酒を注文し、お酒に詳しくないあたしは、よくわからないときに頼むことにしている梅酒をお願いする。

「クリスマスなのに残業か？　忙しいんだな。」

カウンターの中でテキパキと手を動かしながら、信一さんが龍之介に話しかける。

龍之介がビールを2つのグラスに注ぎながらそれに答えて。

「今年は仕事納めが早いから。」

乾杯。

いただきます。

「そうか。それでデートなのにこんな店しかないってわけだな。」

デート？！

あやうく吹き出しそうになったビールを思いっきり飲み込んだ。

・・・う。胸が痛い・・・。

比喩じゃなく、リアルに。

塊が食道を通り抜けて行く・・・。

「し・・・、信一さん、違います。こいつは、」

「まあまあ、いいから。龍之介が女性を連れてくるなんて、初めてだもんなあ。」

「いや、べつに、その、」

うう・・・苦しい。
早く通り抜けて・・・。

「あら、龍ちゃん。連れの女性に興味がないなんて言うのは失礼よ。ねえ？」

お酒とつみれ汁をお盆に載せて来た千代子さんが、あたしに向かってにっこりする。

「はあ・・・。」

苦しかった・・・。
ようやく痛みが治まって、ため息とも返事とも言えるような声でうなずく。

龍之介の様子をうかがうと、困った顔。
今日はこんな顔ばっかりしてるね。せっかく一緒に来たのに。
しょうがないな。

「失礼だって、龍之介。今日はあたしのこと、たくさん褒めなさいよ。」

あたしの言葉に、龍之介が目を見開く。

どうして驚くの？

だって、あたしたちって、いつもお互いに遠慮なく言い合ってきたじゃない？
そりゃあ、最近はちょっとだけ、いつもと違うこともあるけど。

「お。はきはきしたお嬢さんだねえ。」

信一さんが笑う。

「“はきはきした”　なんて、信一さん、こいつの場合、気が強いだけなんですから。」

「ほら、それが失礼なの。」

あたしの指摘に千代子さんと信一さんが楽しそうに笑い、龍之介は複雑な顔をした。

龍之介。
そんな顔しないで、楽しく過ごそうよ。
今日はクリスマスなんだから。

お料理はどれも美味しい。
イワシのダシと生姜が効いたつみれ汁。
すり身から全部自家製という、揚げたてのさつま揚げ。
焼きたてでふわふわの厚焼き卵。
ぶりの照り焼き。野菜の串揚げ。海老だんごの葛餡がけ。生姜の混ぜご飯。

一品出てくるたびに、美味しさに感嘆の声を上げてしまう。

信一さんと千代子さんが、それを聞いてにこにこする。
千代子さんは信一さんはお母さんなのだそうだ。

「俺がバイトしていたころは親父さんが仕切ってて、信一さんはよその店に修行に出てたんだよ。」

龍之介が教えてくれた。

「2年前に親父さんが急に亡くなって、信一さんがあとを継いだんだ。」

「まだ未熟者だけどね。」

信一さんは恥ずかしそうに笑った。

「ねえ。龍之介もああいう格好でカウンターにいたの？」

見た感じ、似合いそうだけど。

「まさか！　それは親父さんだけだよ。俺は向こうの端で皿洗ったりテーブル片付けたりしてただけ。」

そりゃそうか。

食べ物に合わせてお酒もすすむ。
梅酒を2杯飲んだあと、リストに並んだ名前が楽しくて、いつもは飲まない焼酎の飲み比べのセットを頼んでみた。
面白かったので2セット目を頼もうとしたら、

「平気か？」

と心配そうに龍之介が訊く。
「大丈夫だよ、さっきのも美味しかったし。苦手な味だったら、龍之介に飲んでもらうから。」
と答えると、
「飲み過ぎじゃないかって訊いてるんだよ。」
と呆れた顔をする。
「大丈夫。」
どうしてそんなこと言うのかな？
お酒を飲むってこんなに楽しいよ。
それなのに、龍之介は疑わしそうな顔。
もう！
「だって、龍之介が送ってくれるもん。」
「龍ちゃんが送ってくれるなら安心ねえ。」
カウンターから千代子さんが合の手を入れてくれる。
「そうなんです。龍之介がいれば、いつも安全に。」
「俺はセキュリティ・サービスか？」

「うーん・・・セキュリティって言うより、番犬？　あ、ねえ、さっきの見せて。」

「え？」

「ほら、さっきあげたやつ。」

龍之介がバッグから小さな紙袋を出す。
革製のシェパードは、やっぱり龍之介にそっくり！

「千代子さん、これ、龍之介にそっくりだと思いませんか？」

「あら、ほんとね。ふふ。」

「さっき、龍之介にあげたんですけど、返してもらおうかなあ・・・。」

「どうして？　プレゼントじゃないの？」

「番犬として持っていようかと思って。」

「紫苑。」

「なに？」

「それは俺がもらっておく。」

「どうして？」

「首輪に鎖がついているその犬を紫苑に持たれてるのは、何となくイヤだ。」

「ぷ。」

「くくく。」

カウンターの中で千代子さんと信一さんが笑いを噛み殺している。

「えー。すごく効果がありそうなのにー。龍之介のケチ。」

「紫苑には俺がちゃんとついてるからいいんだよ。」

うーん。

「わかった。よろしくお願いしますよ、高木セキュリティ・サービスさん。」

「了解。」

「ほんとに仲良しさんねえ。」

千代子さんがにこにこと、龍之介とあたしにお酒を渡してくれる。

「そうなんです！　龍之介とあたしは仲良しなんで～す♪　かんぱーい。」

カウンターの中で笑っている千代子さんと信一さんに、さつま揚げをもう一皿注文したら、龍之介がため息をついた。

「龍之介。もしかして、お金の心配してるの？」

「はあ？」

「あたしが飲んだり食べたりし過ぎだって思ってるんでしょう？」

「違うよ。」

「いや、その顔は心配してる顔だ。」

「・・・紫苑。やっぱり飲み過ぎだ。」

「ほら、やっぱりお金の心配してる。大丈夫だよ、あたし、ちゃんとお金持って来たもん。」

「俺の話、通じてないな。」

そんなことないもーん。

「あれ？　龍ちゃん？」

やって来た顔の赤いおじさまたち3人は、どうやら2軒目の人たちらしい。

「あ、沼田さん。お久しぶりです。」

「おー。なんだ、龍ちゃんか。」

「こんちは。」

3人とも龍之介の知り合い？

昔の話をしているってことは、龍之介のバイト時代からのお客さんってことだよね？

うーん、無視して食べたり飲んだりしているのも悪いかなあ。

「あれえ、こちらはの人は？」

「龍ちゃんの彼女？」

「ああ！　クリスマスだもんなあ。」

あーらら。
やっぱりそうなっちゃうんだねえ。

「いや、あの、」

龍之介ってば。
酔っ払いのおじさまたちに、真面目に説明しようとしても無駄だよ。
それとも、そんなに嫌なの？

・・・それは許せない気がする。

「こんばんはー。初めまして。」

にこやかにごあいさつ。
酔っ払いのおじさまたちには、こういう感じが一番受けがいい。

「・・・紫苑？」

龍之介がうろたえる。

うーーん、頭を下げたら、ちょっとぐるぐるする。
隣で龍之介があたしを支えようと身構えた。
もしかしたら、あたしもちょっと酔っ払いか・・・？

「いやあ、可愛いねえ。」

「お邪魔しちゃ悪いから、おじさんたちはあっち行くねー。」

「バイバイ、龍ちゃん。」

おじさまたちに応えて手を振ってカウンターに向き直ると、龍之介がまた困ったような顔であたしを見ている。
まったくもう。

「どうしてそんな顔してるの？　あたしが彼女って言われるのがそんなにイヤなわけ？」

脅す調子で小声で言うと、龍之介がまばたきをして動き出した。

「い、いや、そんなこと・・・ないけど。」

「そう？　どうせ説明しても信じてくれないよ。千代子さんたちだってそうだよ。面倒だから、誤解されたままでもいいじゃない？」

「・・・紫苑がかまわないなら。」

素直だね。
あたし、よっぽど怖い顔してた？
素直な龍之介なんて、めったに見られないよね！

おもしろい！

「いいよ～。今日だけ龍之介の彼女になってあげる～♪」

「・・・そりゃどうも。」

ほら、龍之介。

笑ってないで、飲もうよ。

38　クリスマスのごっこ遊び

「ああ、美味しかった！　ごちそうさまでした。」

お店の前で千代子さんにお礼を言うと、千代子さんは例の綺麗な声で笑った。

「ほほほ。またいらしてね。」

「はい。またさつま揚げを食べにきま～す。」

「ええ。紫苑ちゃんには特別にサービスしますからね。」

「はい。」

答えながら足がふらつく。

うーん・・・。やっぱり飲み過ぎなの？

龍之介につかまっててもゆらゆらするんだけど？

「龍ちゃん。ちゃんとお送りするのよ。オオカミになっちゃだめよ。」

千代子さんが龍之介と話している。

・・・オオカミ？

「龍之介。犬よりオオカミの方が強そうだよ。そっちの方がいいん

じゃない？」

「あらあら。言葉が古かったかしら？　若いお嬢さんには通じないみたいね。ほほほほ。」

千代子さんが笑い、龍之介は今日はもう何度目かという呆れた顔をした。

・・・どうして？

でも、千代子さんが笑ってるってことは、面白いんだよね？

じゃあ、いいや！

電車の中で吊り革につかまってもゆらゆらが止まらない。

そうか。

吊り革がゆらゆらしてるからだ。

しっかり動かないもの・・・隣にいるじゃない、龍之介が。

片手は吊り革につかまったまま、バッグを肩にかけて、龍之介の左腕に後ろから手を通してつかまってみる。

「どうした？」

頭の上から龍之介の声。

「吊り革がゆらゆらするから。」

・・・うん、動かない。

これなら大丈夫。

“安全で安心”　。

何かのキャッチフレーズみたい。

「ふふふ。」

楽しくなって前を向いたら、窓に腕を組んだあたしと龍之介の姿が映ってる。

あーあ。

これじゃあ、恋人同士って思われても仕方ないね。

そうだ。

あたし、今日は龍之介の彼女なんだっけ。

じゃあ、これでいいんだ！

ちょっとすり寄ってみると、龍之介がこっちを向いた。

「紫苑。」

また困った顔？

背伸びをして龍之介にささやく。

「今日は彼女だもん。いいんだよ、これで。」

ふふふ、と笑う横で、龍之介が小さくため息をついている。

もう。
そんな態度、失礼だ！

駅からの道はいつもと同じ。
人も車も通らない道は、ふらふら歩いても危なくない。
龍之介から離れてくるりと一回り。
楽しい♪

龍之介は片手をポケットに突っ込んで、ゆっくりと歩いてる。
黒づくめの服装は、夜の景色の中でもそこだけくっきりと浮かび上がる。

「真っ黒な、龍之介。」

口に出したら可笑しくなって、自分で吹き出してしまう。

「なんだよ？」

「なんでもない。」

龍之介には教えないよーだ。

右側の小さな公園。
道に沿って低いブロックで囲まれた花壇がある。
周りには・・・誰もいないね。

「よいしょっと。」

花壇の端のブロックに乗る。
ずっと前からやりたかった。このブロックの上を、向こうまで歩くの。

「紫苑？」

龍之介が気付いてそばまで来た。
心配？　呆れてる？

「大丈夫。」

笑顔で答えて歩き出す。・・・けど、２歩めでぐらり。

「わ。」

サッと差し出された龍之介の右手につかまって、また一歩。そのまま最後まで。

「やった！」

飛び降りようとしたら龍之介がもう片方の手も差し出してくれた。
そっちにもつかまって、ふわりと着地・・・あれ？　視界が真っ暗。
何も見えない。

顔に当たってるのは・・・ボタン？　もしかしたら龍之介のコート？
なんで、こんなに近くに？
おかしいな？
手につかまっていたはずなのに？
あたしの手はからっぽで、龍之介の手は・・・あたしの背中・・・？

・・・んん？
なんか、これって、もしかして？
あらら・・・、どうしよう？
イヤっていうわけじゃない・・・けど。
むしろ、あったかくてほっとするし。
そうだよね。
龍之介はセキュリティ・サービスだもん。
あたしを守るのが役目なんだから、ほっとして当たり前だ。
でも・・・。
「龍之介？」
そっと呼んでみる。
「ごめん、紫苑・・・。俺も飲み過ぎた。ちょっとつかまらせて。」
そうか。
飲み過ぎか。
つかまってるだけか。
でも、ハスキーな声がいつもよりかすれて・・・ちょっとセクシーかも。
・・・うわ。まずい。
そんなこと考えたら、ドキドキして来ちゃった。
ど、どうしよう？
龍之介に伝わっちゃうかな？
そりゃあ、今日は・・・今日は龍之介の彼女、なんだけど、だって

それは・・・、それは・・・・。

「あの、」

「紫苑。」

見上げたら、目が合った。

こんなに近い。

龍之介の腕の中で、龍之介をみつめてる。

まるでほんとうの恋人同士みたいに？

龍之介・・・？

「紫苑。もし俺が・・・」

もし龍之介が・・・なに？

「もし・・・・なんだ？　足元が・・・？」

足元？

そういえば、なんだか柔らかく押されてるような・・・・。

「ねこっ！！」

ねこ・・・猫？

「んにゃお。」

あ、猫だ。

白い猫。

片耳と尻尾の先が黒い。

あたしのブーツにすり寄りながら、ぐるぐると足元をまわってる。

あれ？

龍之介？

「紫苑っ！　猫っ！　俺、猫はダメっ！　特に夜はっ！」

5メートルくらい離れて、龍之介が小声で叫んでいる。

あらら。

可愛いのに。

「ほら、怖いって。しっしっ。」

追い払うと、猫は公園の植え込みの中へと振り返りながらもぐっていき、龍之介がそろりそろりと戻って来た。

「早く離れよう。」

龍之介がチラチラと猫の行方を確認しながら言う。

「はいはい。」

ガサ。

肩にかけていたバッグが揺れて、コートのポケットで音がした。

あれ？
なんだっけ？
ポケットから出てきたのは・・・白い紙袋。
「あ。これ。」
「なんだ？」
龍之介が覗き込む。
「お昼に秋月さんからもらったの。」
「優斗から？」
眉間にしわを寄せて警戒した顔。
「うん。御守り。スキーで怪我しないようにって。ほら、身代わりと、厄除けと、交通安全。」
お昼休みに急いでて、ここに突っ込んだんだっけ。
「厄除け・・・。」
「全部違う場所で買ってきてくれたんだよ。いい人だよねー。」
「マタタビが入ってるんじゃないだろうな？」
「え？　マタタビ？」

「いや。・・・効果が高そうだって言ったんだ。」
「そうかな・・・。ああ！　龍之介、たいへん！」
「何が？」
「スキーの荷物、これから詰めなくちゃ！」
ため息をつく龍之介。
「やっぱり優斗が呪いを・・・そうか。じゃあ、さっさと帰ろう。」
さっきのはお酒のせい。
ゆうべのあたしも同じ。

一気に酔いがさめた気分で龍之介と並んで歩く。
街灯の下を過ぎるたび、だんだん短くなった二人の影が向きを変えて伸び始めて・・・を繰り返す。
・・・そうだ。
「龍之介。」
「なんだ？」
「今日、分かったことがあるの。」

「なに？」

「あのね、あたし最近、友達から『龍之介とは本当にただの友達なの？』って言われてたの。」

「・・・うん。」

「でね、こうやって送ってもらったりしたらいけないんじゃないかって思ったりしたの。」

「紫苑。それは俺の考えでやってることで、紫苑が」

「うん、分かってる。」

「なら、そんなこと気にするな。」

「うん、ありがとう。あたしも分かったの。」

分かって、決めたの。

「ほかの人の言葉で、龍之介とあたしの関係が変わったりするのは変だって。ほかの人が何て言ったって、龍之介とあたしの関係は、龍之介とあたしが決めるんだって。ね、そうでしょう？」

龍之介が笑う。

「そうだ。俺と紫苑の問題だ。」

よかった。

あたしも笑顔、だよね？

「これからもよろしくね。」

「もちろん。」

龍之介が手を伸ばして・・・あたしの髪をぐしゃぐしゃにした。
いつもなら文句を言うところだけど、今日は笑って許してあげた。

マンションの前で別れるとき、ポケットの御守りの入った袋がガサガサと音を立て、秋月さんを思い出した。

「ねえ、龍之介。秋月さんて、大学のときはどんな人だった？」

「優斗？」

龍之介が不満そうな顔をする。

「なんで、今？」

「え？　思い出したから。」

ダメなの？

「・・・・優斗は、何でも思ったことを黙っていられないヤツだった。」

「何でも思ったこと・・・。」

独り言とかもそれなんだね。
じゃあ、あれも・・・？

「紫苑。」

「あ、はい。」

「優斗が口に出すのは、ほんとうに思ってることだけだ。あいつはウソを言えるような性格じゃない。」

龍之介。
そんなに真剣に言うの？

「うん。わかった。」

ふざけてるわけじゃないんだね。
あの優しさも、言葉も、全部本物なんだね。

でも・・・。

今は決められない。
自分の気持ちがよくわからない。
だから、もうしばらく待ってください。

「あ！　荷物詰めなくちゃ！」

「お、そうだな。早く行け。」

「うん、ありがとう。また明日ね。おやすみなさい。」

手を振って、玄関のガラス扉へ。
２つのドアを抜けてエレベーターの前で振り返る。

バイバイ、気を付けてね。

今日は・・・楽しかった。
ありがとう、龍之介。
また行こうね。

39　スキーに行こう！

１２月２６日、金曜日。
今年の仕事は今日で終わり。
年明けも、例年は４日から仕事だけど、今回は１月４日が日曜日に当たっているから、年末年始で９連休。
こんなに長い休暇はめったにない。すごく嬉しい！
秋月さんに会うのも、しばらくはお休み。
だから、
「紫苑さん、明日からの準備で忙しいのは分かってるけど、今日、夕飯食べに行こうよ！」
と、頼まれるように言われたら、断れなかった。

「年末年始の予定は？」
秋月さんがサラダをフォークでつつきながら尋ねる。
早く帰らなくちゃいけないあたしのために、秋月さんは駅前のパスタ屋を選んでくれた。
「ええと、明日から２９日まではスキーでしょ。次の日から実家に帰ってお正月の支度の手伝い。年明けは２日か３日に戻って来ようと思ってるの。」

「忙しいね。じゃあ、こっちに戻ったら初詣に行こうよ。」

「初詣か。そうだね。」

「そうそう。年末は龍之介と出かけるんだから、お正月は僕が優先。」

秋月さんたら、また龍之介と張り合うつもりだ。けど、楽しそう。

「秋月さん。」

「なに？」

いつものカワイイ笑顔。
こうやって、秋月さんは自分の気持ちを真っ直ぐに伝えてくれる。
あたしはそれを見ないようにしていたけれど、もう、そんなことはやめようと思う。

「あたし、まだ自分の気持ちがよく分からなくて、何も決められないの。秋月さんの気持ちに応えることができるかどうか分からない。それでもいいの・・・かな？」

秋月さんの笑顔がもっと・・・静かでいたわるような微笑みに変わる。

「紫苑さん。正直に言ってくれてありがとう。僕はそれでいいよ。」

「何も約束はできなくても？」

「うん。構わない。今は紫苑さんが僕のことを友達だって思って、

一緒に出かけるのもいいなって思ってくれるだけでも十分。だって、まだ会ってから2か月ちょっとだよ？　うーん・・・そう考えると、僕の方が変？」

「え？　いえ、そんなことないけど。」

「あはは。前から言ってるよね、『気にしないで。』って。僕はこういう性格だから、たまにそれをプレッシャーに感じる人もいるって分かってる。でも、紫苑さんは、」

「あたしだってびっくりしたよ。でも、秋月さんはいい人だから。」

秋月さんがまたにっこりした。

「そうやって、僕全部を見ようとしてくれる。そして、僕に対して自分の正直な気持ちを伝えてくれた。・・・内緒だけど、」

秋月さんがすっと身を乗り出したので、つられてあたしも顔を寄せる。

「ますます紫苑さんのことが好きになっちゃったよ。」

秋月さん？！

どこが、誰に内緒なの？！

驚いて何も言えないあたしを見て、秋月さんが笑ってる。

「あはははは！　紫苑さんのそういうところ、ほんとうに可愛いよねえ。」

もう・・・やだ！　恥ずかしい！
絶対、顔が赤くなってる！

「あ、でも、一つだけ約束して。」

「な・・・何を？」

真面目な顔。
やっぱり何か？
ちょっと怖い。
そんなに都合よくはいかないよね・・・。

「お正月は僕と初詣に行くって。」

は？
初詣？

「そんなこと？　もう！　何を言われるのかと思って緊張しちゃったよ！」

「あはははは！　ＯＫ？」

「もちろん。それはＯＫです。」

「約束だよ。龍之介より先に、僕と会うって。」

「え？　そういう意味なの？」

「そうだよ。」

「うん・・・わかった。」

もしかしたら秋月さんって、あたしのことよりも、龍之介と張り合うことが楽しいんじゃないだろうか・・・？

「あ、そうだ、もう一つ。」

「なあに？」

「僕のことを重荷に感じたら、遠慮なくことわってほしい。紫苑さんが僕のせいでつらかったりするのは悲しいから。」

「秋月さん・・・。」

やだ。涙が・・・。

秋月さんの優しい笑顔が、涙で揺れている。

こぼれないように、慌ててまばたきを繰り返す。

「うん・・・、わかった。」

秋月さん。

ほんとうにありがとう。

12月27日。

メールの着信音で目が覚めた。

・・・・４時２３分?！　うそ?！　二度寝した?！
お迎えは４時半って言ってたよね?！
メール?　龍之介?
『今から出る。』

まずい！
とりあえずトイレ！
最後に詰めるもの、なんだっけ?
充電器。ドライヤー。化粧品。それから・・・?
ああ・・・顔を洗わなくちゃ。・・・うわ、寝ぐせが！　やだ、もう！

もう４時半?
着いてる?　前のときは５分くらいで来たんだから。
ちょっと見てみよう。
来てたら、とにかく起きてる合図だけでも。
急いでベランダに出て・・・寒い！　って、パジャマで裸足だったよ！
まあ、暗いし、どうせ肩から上しか見えないよね?
・・・いた。
まだ暗い道路に、屋根の上にスキー板を積んだ小型車。
ああ、ごめん、龍之介！
と思ったら、運転席の窓が開いて、頭を出した龍之介が上を見上げ

た。

（ごめん！）

身振りで伝えて、急いで引っ込む。

着替え着替え・・・。

必要最低限の身支度で、とにかく忘れちゃいけない荷物を確認して部屋を出たのは４時４０分。

寝ぐせはスキー用に買った帽子をかぶってごまかすことにした。

起きてから１５分ちょっとで出られたなんて、自分でもすごいと思う。

キャリーバッグを引いてエレベーターを降りたあたしを見て、龍之介が車から出てくる。

「おはよう。お待たせしてごめんなさい。」

申し訳なくて小さな声で言うと、龍之介はキャリーバッグに手をかけながらニヤリと笑った。

「何時に起きたんだよ？」

「・・・龍之介のメールが来たとき。」

「えぇ？　ついさっきじゃないか。それでパジャマ姿だったんだな。」

後ろの荷台を開けてバッグを積み込みながら、龍之介が呆れた顔を

する。

「あ、わかった？　暗くて見えないと思ったのに。」

「部屋の光でわかったよ。写真に撮ろうとしたらすぐに引っ込んじゃって・・・。」

「当たり前でしょ！　・・・龍之介、朝ご飯は？　途中で買う？」

「そのつもりだけど。もしかして、腹減ってんのか？」

龍之介が運転席に乗り込むのと同時に、あたしはその後ろの席へ。

「うん。昨日、夕飯が早かったら。」

「わかった。全員そろってからコンビニに寄るつもりだったけど、最初のコンビニで朝めしを仕入れよう。」

「ありがとう。」

出発したとたんに、龍之介の携帯が鳴る。

龍之介が運転席のドアポケットに入っていた携帯をちらりと見て、肩越しに差し出しながら言った。

「紫苑、出て。真鍋さんから。」

鳴り続ける音に焦りながら応答ボタンを押す。

「もしもし。」

あれ？　このあと、何て言ったらいいのかな？

「ええと、龍之介の携帯です。」

ワハハ、と龍之介が笑った。
電話の向こうでも、同じような笑い声。

『紫苑ちゃん？　もう出発したんだね。』

ああ・・・笑われた。朝から。

「はい。おはようございます。」

寝坊はするし、変なこと言うし、ダメだよね・・・。
秋月さんは、よくあたしのことを気に入ってくれたよね。

『俺は今から家を出るところなんだ。高木にそう伝えてくれる？』

「はい。」

『あと、高速に乗れそうな時間がわかったら連絡をくれるようにって。最初のパーキングエリアで合流する予定だから。』

「わかりました。」

『じゃあ、またあとで。』

「はい。気を付けていらしてくださいね。」

『ありがとう。』

電話を切って顔を上げると、バックミラーで龍之介と目が合った。

「紫苑、真鍋さんには優しいんだな。」

「え？」

なんでいきなりそんなこと？

「そうだった？」

そんなにしゃべってないけど・・・・。

「そうだった。」

そうなのか・・・・。

「真鍋さんて、優しいもんね。」

廊下で会うといつも爽やかに声をかけてくれるし、いろんなことをよく気付いてくれる。
美乃里ちゃんを名前で呼ぶことだって、うまく収めてくれたし。
そういう真鍋さんと話してると、こっちも優しい気持ちになるのかも。

・・・・？

そういえば、返事がない。

あ。

もしかして、また拗ねてるの？

龍之介って、どれだけコンプレックスのかたまりなんだろう？
今まで全然気付かなかった。

車のスピードが落ちて、前を見たらコンビニに入るところ。
不機嫌になりながらも、ちゃんとこういうことを覚えててくれる。
龍之介のこと、信用して、頼りにしてるのにね。

駐車場に車を入れている途中で、真鍋さんからの伝言を伝える。

「わかった。」

ひと言で終わり？　そんなに拗ねてるの？
もう！
それほど気にするようなことじゃないでしょう？

「もういいよ、龍之介。」

「え？　何が？」

ブレーキをかけてエンジンを切り、運転席と助手席の間から龍之介が振り向く。

「あたし、龍之介にスキーを教えてもらうのやめる。」

「なんで？」

「だって、そうやってすぐ不機嫌になるんだもん。無理だよ。」

「無理って、」

「だって、きっと無理だもん。できないとすぐに怒るに決まってる。」

「そんなことないよ。」

「絶対そうなる！　だから、教えてくれなくていい！」

「紫苑。」

「一人でスクールに入って教わるからいいの！」

しゃべっているうちに気持ちが昂ってきて、自分で泣きそうになってしまう。

初めはそんなつもりじゃなかったのに。

日の出前で、まだ暗いのが有難い。

シートに寄りかかり、顔を見られないように外を向いて、口をきゅっと結び、深呼吸。

「紫苑・・・、ごめん・・・。」

今ごろ反省しても遅いよ。

急に笑えるわけないじゃない。

「龍之介なんて嫌い。」

あ。

「紫苑。」

龍之介、悲しい声？

違う。

「ごめん！　違うの、龍之介。ごめん。」

両手で口を覆っても、すでに出た言葉は消せない。

「ごめん・・・、あたし、そんなつもりじゃなくて・・・。」

「紫苑。わかってる。俺が悪かった。ごめん。」

龍之介が右手を伸ばして、あたしの頬に触れる。

大きくて温かい手。

「もう不機嫌になったりしないから、一緒に練習しよう。な？」

そうっと視線を上げたら、心配そうな龍之介が見えた。

コクン、とうなずく。

それからおずおずと笑って。

「お腹空いた。朝ごはん、買おう。」

龍之介も笑ってうなずいた。

コンビニに入りながら、一つ心に誓った。

もう絶対に“嫌い”なんて言葉は使わない。

相手と一緒に自分も傷つけるほど嫌な言葉だったなんて。

４０　≪もう一人？≫

まったく。

龍之介もしょうがないね。
半分は紫苑に甘えたくて、わざと拗ねてるんだから。
あんなふうに紫苑が怒ったのは、ちょうどよかったと思うよ、僕は。

でも、龍之介が焼きもちやいてることに、紫苑は全然気付かないなんて。
紫苑もほんとうにしょうがないね。
まあ、龍之介が何も言わないんだから、仕方ないか。

ああ、そういえば、言いかけたんだっけ。あの夜。
残念だったね。

あ、念のために言っておくけど、僕は猫をけしかけたりしてないよ。
あれは偶然。
僕は紫苑が幸せになればいいんだから、その邪魔はしない。
もしかしたら、ほんとうに優斗の呪いかもよ・・・。

・　・　・　・　・

――　ねえ、あなた、紫苑ちゃんの恋風でしょう？

誰？

ああ・・・、きみ、何日か前から紫苑の会社にいるね。

――　そう。わたし、レイナ。弘晃（ひろあき）・・・真鍋弘晃の恋風。

真鍋さんの？

じゃあ・・・。

――　弘晃はよく耐えていると思う。とてもつらいのに。

そうだね。

――　あなたは・・・、

僕はユウ。

――　ユウは紫苑ちゃんとどれくらい一緒にいるの？

もう１０年以上になるよ。

――　１０年以上？　じゃあ・・・ユウもつらいこと、ある？

・・・そうだね。

紫苑と別れることを思うとつらいよ。

それに、見ていることしかできないことも。

――　やっぱりそうなの・・・。

仕方ないよ、僕たちの運命だから。
それに、紫苑が楽しそうなときは、見ている僕も楽しいよ。

――　そうね。でも・・・。

でも？

――　わたし、弘晃にはなるべく早く相手を見つけてあげたいの。

そんなに急ぐの？

――　だって、あまりにもつらそうなんだもの。

でも、レイナはまだ・・・。

――　そうよ。わたし、４日前に生まれたばかり。

なのに？

――　弘晃は４日前に決定的に愛する人を失ってしまったんだけれど、最初からずっと、その恋は悲しかったの。

ずっと・・・。

――　だから、なるべく早く癒やしてあげたいの。悲しい期間が長すぎるから。

うん。そうなのか。

――― でね、紫苑ちゃんを第一候補に考えてるの。

え？　紫苑を？

紫苑は今・・・。

――― わかってる。弘晃以外の幸せになれる相手は見分けられないけれど、観察していたから。候補者は2人、ね？

そうだよ。

そのどちらかを紫苑は選ぶと思うよ。

――― でも、弘晃とだって、幸せになれるでしょう？

それはそうだけど・・・。

――― 試してはいない。

うん・・・。

僕は龍之介を選んだから。

真鍋さんだって、紫苑以外にもいるはずじゃないか。

――― いるわよ。たとえば美乃里ちゃん。

美乃里ちゃん？

彼女なら申し分ないよね？

一緒にここに来てるし。

――― そうね。でも、わたしはできれば恋風がついている人を選びたいの。

恋風がついている人？

――　そう。悲しい恋をしたことがある人。そういう人の方が、きっと優しいでしょうから。

優しい・・・。

――　それに、紫苑ちゃんには、どこか人を和ませる雰囲気があるから。可愛らしい人よね？

それはそうだけど。

――　ユウ。紫苑ちゃんが幸せになれるなら、今の候補者以外だってかまわないでしょう？

・・・紫苑がその人を愛するようになるなら。

――　だから、この旅行中に試させてもらう。

もう決めてるんだね。

――　ええ。

わかった。邪魔はしない。
でも、手伝いもしないよ。

――　わかった。見ててね。

・・・・・・

レイナ。
きみは焦ってるんだ。
僕みたいになることが怖いから。

・・・うまく行く可能性は、もちろんある。
真鍋さんはいい人だし。

だけどね、レイナ。
きみは分かっていない。

僕たちの力はとても小さいってこと。

きっかけを作ることはできるけれど、心を動かすことはできないってこと。
きっかけを作っても、うまくいかないことがどれほど多いのか。

まだ生まれたばかりじゃ仕方ないけど・・・。

それに、龍之介が紫苑から目を離さないよ。
しかも、紫苑は鈍いから、きっと難しいと思うよ。

41　スキーは滑るもの

スキーにするか、スノーボードにするかと訊かれて、迷った末、スキーを選んだ。
両足が一つの板に固定されているスノーボードよりも、スキーの方が普通に動けそうだから。
それに一応、ほんの少しだけど経験があるから。

スキーのセットを借りるところから、龍之介がずっと面倒を見てくれた。

スキーブーツを履いただけでヨロヨロしているあたしは、建物から外に出るたった5段の階段さえも、手すりにつかまって降りるしかない。
龍之介は自分のとあたしのと、二人分の板とストックを担いで、のしのしと歩いて行く。

年末の休みに入ったスキー場は混んでいて、おいて行かれて迷子になったら大変だ。龍之介の服装を頭に叩き込んでおかないと。
ウェアは黒に茶色と白が少し。カーキ色のヘッドバンド。・・・背が高いから、どこにいても目立つかな？
もしかしたら、あたしが見つけてもらえないかも？
こんな普通の水色とグレイの組み合わせじゃなくて、もっと派手な色にすればよかった？

雪の上の方が少し歩きやすいと気付いて、龍之介に追いつくために走ろうとしたら、深くなっていた雪にずぼっと踏み込んでしまい、

ますます遅れてしまった。
板をはいて立ったところで龍之介が尋ねる。
「紫苑。スキーはどのくらい知ってる？」
“できる？”　と訊かない龍之介は正しい。
「ええと、斜面に対して板を垂直にすると、滑らない。」
「うん。」
「あと、立つときは山の下側にある足に体重をかけておく。」
「うん。」
「それだけ。」
「ああ・・・そうか。基本中の基本、だな。」
うんうん。
大事なことだよ。
「だけど、それだと、立ってることしかできないよな？」
「そうだね。」
「じゃあ、止まり方を教える。」
「止まり方・・・？」

滑れないのに？

「止まり方を知ってれば、滑って怖くなったら止まれるだろ？」

「なるほど！」

“止まり方”　さえも、あたしには長い道のりだということを、そのあとに知ることになった。

「こわいこわいこわいこわい！　動くよ、ほら！　止まらない！」

ほとんど傾斜がないように見えたのに、スキー板をちょっとずらしただけで、ずるずると滑りだしてしまう。

龍之介があたしの板の前に立って止めてくれながら大きな声で笑う。

「ははは！　紫苑。すごいへっぴり腰だぞ！　怖いからって体重を後ろにかけちゃだめなんだ。板がどんどん滑っちゃうから。」

「そんなこと言ったって～！」

予想外の動きをするから怖いんだよ・・・。

「わかった。ちょっと移動しよう。歩け・・・そうもないか？　いや、歩け！　ほら、斜面に垂直になって！」

うわーん。

厳しいよ、龍之介。
歩くって言ったって、靴も板も重い！
片足を前に出すと、残りの足が後ろに滑る。
歩いている動作はしているのに、前に進まない！
ほんの5メートルくらい移動するのに大汗をかいた。息も切れた。
「いいか？　初心者の止まり方は、まずこの形、“ハ”の字だ。」
龍之介があたしと向かい合って、板の後ろ側を大きく開いてみせる。
どれどれ、あたしも・・・重い！
足をバタンバタンと踏み替えながら、なんとか板の後ろ側を外向きに。
「もっと大きく開けないのか？」
「これで精一杯だけど？！」
「ふん。脚が短いんだな。」
「余計なお世話だよ！」
何度か練習してポーズができたら、今度は緩やかな斜面に移動して、また止まる練習。
「いいか。下側の足にしっかり乗っかってれば、上側の板を動かしても大丈夫だから。」

理屈はわかるけど、体がそのとおりには動かない。
斜面の下に向こうとすると、ずらした板が勝手に進み始める。
「龍之介っ！　滑っちゃうよ！　ほら、だめ・・・！」
どすん！　と思いっきり後ろに転んで、気付いたら、目の前には青い空が広がっていた。
ああ・・・いい天気。
「大丈夫か？」
声と同時に視界に龍之介の顔があらわれて、それに「うん。」と頷き返す。
雪の上って、転んでも痛くないんだ・・・。

だけど。

転ぶと、起き上がるのに一苦労。
“体重を前に”　っていうのも、なかなかできない。
うっかりするとすぐにスピードが出る。スピードが出ると、板に上体がついて行けなくて転ぶ。
龍之介は常にすぐそばに付き添って、支えてくれたり、つかまらせてくれたりしている。
根気のいい先生で、怒らないし、投げ出さないで教えてくれた。
怒らないどころか、上機嫌だ。

あたしのみっともない姿を見るのがそんなに面白いのか、優越感に浸れて嬉しいのか。

「ＯＫ、紫苑。今度はここまで真っ直ぐ滑って来い。」

最初は下を向くこともできなかったあたしが、どうにかストックをつっかい棒にしながら斜面に立てるようになると、龍之介はあたしから離れても大丈夫だと判断したらしい。

横歩きで龍之介が指示する場所まで登り、ストックを突きながら、板をハの字になるようにずりずりと下向きになる。

そこで顔を上げたら、手を振っている龍之介が見えた。

ええと。

板は後ろを開いてるね。・・・で。

膝を曲げる。

体重は前の内側。

滑って行く先を見る。

龍之介はあそこ。

１０メートルもないような距離が、ものすごく長く見える。

よし。

少しだけ踏ん張る力を緩めると、ズズズ・・・と“ハ”の字型にした板が動き出す。

やった！

この速さなら大丈夫！

ズズズズズ・・・と、かたつむりのスピードで、板が緩やかな斜面を滑って行く。

滑ってるよ！

一人で！

すごい！

頭の中は板の角度を同じ状態に保つことと、体重のことで精一杯。視線は板の先にくぎ付け。

でも、滑ってる。

「紫苑！　ブレーキ！」

しばらく集中して滑ったところで龍之介の声が聞こえて顔を上げたら、2、3メートル先に龍之介が見える。

「わっ？！」

姿勢を変えたせいか、気が緩んだせいか、板のコントロールが利かなくなって、いきなりスピードが！

「わ、わ、わ、だめ！」

「紫苑！」

止まらない！　避けられない！

どすん！！

・・・止まった？

頭はどこにもぶつからなかった。

つまり、転ばなかった？

「くふっ。あはははは！」

頭の上で龍之介の笑い声が聞こえる。

「あはははは！」

目を開けてみたら、あたしの目の前には大笑いしている龍之介の顔と、その背景に青い空・・・？

空が正面に見えるってことは、あたしは仰向けになってるってこと。

でも、背中は雪の上じゃない。

どうなってるの？

「紫苑。ほら、立て。」

背中から持ち上げられる感覚。

・・・ってことは。

もしかして、ぶらさがってる？！

龍之介に支えられて？

つまり、あたしは龍之介の股を半分くぐるような状態で、仰向けに抱えられてるわけ・・・？

かっこ悪い！

急いで板を体重が乗せられる場所まで動かそうとするけど、焦れば焦るほど、板がすべって逃げてしまう。

龍之介が大笑いしながら、両手であたしを「どっこいしょ。」と持ち上げてくれて、そのタイミングに合わせてなんとか立ち上がる。

しっかり立てたところで深呼吸をしたら、龍之介がまた大きな声で笑った。

「紫苑。やったな。」

満足そうな顔をした龍之介が、肩をギュッと・・・。

「危ないよ、龍之介！　バランスが崩れたら・・・うわわ！」

「おっと！」

転ぶ！　・・・と思った・・・けど、転ばなかった。

お腹のところに龍之介の腕があって、夢中でそれにつかまっていた。

背中・・・というか、ウェアの首の後ろを持ち上げられているような感じもする。

猫・・・？

「大丈夫だ。ちゃんと見てるから。」

「うん・・・。」

態勢を戻すのにまた暴れてしまい、龍之介が大笑いする。
そんなに笑わなくても・・・。

でもね、スキーってけっこう楽しいみたい。

龍之介はあたしにどうにか止まり方を教え込み、昼食までには横歩きで斜面を登り、“ボーゲンでなんとなくカーブしながら滑る”
というところまでレベルアップさせてくれた。
2時間少しでここまでできたのは、まさに龍之介の努力のたまものだと思う。ほんとうに頭が下がる。

「よし。午後はリフトで上に行ってみよう。」

みんなで食べた昼食のあと、龍之介がいきなり宣言。

うそ？
あんな斜面だよ？
あの人混みだよ？

絶対に無理だと思う！

「さっきくらいできれば、初心者のコースならちゃんと降りられるよ。歩いて登って滑る練習をするよりも、リフトで登ってコースを滑って来る方が、長い距離を練習できるから楽だぞ。」

そんな龍之介の理屈に、たしかにそうかなとうなずいた。

でも。
問題はコースだけではなくて、リフトもだった！

まず、そこまで歩くのが大変！
龍之介みたいに滑るように歩ければいいんだけど・・・。龍之介の板って、あたしのよりも軽いんじゃないだろうか？

乗り場の列に並んだら、乗り口に向かって少し傾斜していた。
超初心者のあたしは、大きくハの字に開いてストップする方法しか知らない。
でも、リフト乗り場は混雑していて、板を開いたりするような場所はない。
ストックを前に向けて突いてブレーキ代わりにしようと思っても、板はずるずると前へ進む・・・。

ああ・・・、前の人の板に乗っちゃってるよ。ごめんなさい。

「龍之介、どうしたら・・・あれ？」

龍之介、どこ？　この隣の人、だれ？

「紫苑。」

後方から龍之介の声が。
振り向くと、はしに寄れと手で合図している。了解。

『了解』って言ったって・・・難しい！　板が重い！

周囲の人にペコペコ謝りながら、必死で横に抜け出す。

あたしを助けてくれる人は龍之介しかいないと思うと、ほかの人の冷たい眼差しも構ってなんかいられない。

「紫苑が止まらないでどんどん行っちゃうから。」

「そんなこと言われても、ここが坂になってて止まれないんだよ。ブレーキかけられないし。ずるずる滑って、ほかの人の板に乗っちゃったよ。」

ぶつぶつ言いながらも、龍之介に一つひとつ指示されて、支えられながら、どうにかリフトで上までたどり着く。

長いゲレンデを上からのぞき込んだら、ものすごい急斜面に見えて足がすくんだ。

初心者用のコースだけど、上に中級用のコースがあって、そっちから降りてくる人たちと合流することになる。

うしろからやってくるスピードの速い人たちが怖い。近付いて来る音でさえ。

それでも、来てしまったら滑って行くしかない。

龍之介に従って、比較的緩やかな斜面を選んでのろのろと滑る。

何度もバランスを崩して転ぶ。

でも。

転んだら起きればいい。

龍之介がちゃんとついててくれるんだから。

そう思ったらだんだん気持ちに余裕が出てきて、2回目には一度転んだだけで、そのコースを滑りきることができた。

嬉しくて、龍之介と顔を見合わせて大笑いした。

42 ≪レイナ≫（1）

もう！

弘晃（ひろあき）のために頑張ろうと思ってるのに、なかなかチャンスが来ない。昨日一日、紫苑ちゃんには高木くんがつきっきりで、別々だったのはお風呂と寝るときくらいしかないんだもの。

高木くんが紫苑ちゃんをおいてナイターに行くときには、弘晃も一緒に行っちゃうし。

今日はなんとしてでも弘晃と紫苑ちゃんの二人だけの時間を作るんだから！

「あれ？　真鍋さん、今日はこのコースなんですか？」

「うん。ほかのコースに行くのに、一度このリフトで登った方が楽なんだよ。連絡用のコースがあるから。紫苑ちゃんは今日もずっとここ？」

「ほかのコースは無理だよね、龍之介？」

「様子を見て、午後から別なところに行ってみてもいいぞ。」

「自信があったらね。真鍋さんは上級・・・。」

「きゃ・・・、あのっ、あららら、ごっ、ごめんなさい、あ！」

どすん！

「おっと！」

「うわ！」

「あ、大丈夫？」

「すみません・・・、あれ？　立てない・・・。ああ、ごめんなさい。」

「ほら、つかまって。」

「すみません。ありがとうございます。よい・・・しょ。すみません、まだ2日目で・・・。（うわ、かっこいい！）」

「2日目？　付き添いは？」

「ええと、友達は先に上で待ってるんです・・・。うわわわわ、すべる・・・。（彼女いるのかな？）」

「危ないな。一人でリフト乗れますか？」

「ええと・・・。（乗れないって言ったら、一緒に乗ってくれる？）」

「龍之介、一緒に乗ってあげたら？」

「え？　（呼び捨て？　この人が彼女なの？）」

「紫苑はどうするんだよ？」

「（やっぱりそうなんだ。）あの、一人でも大丈夫です。たぶん・・・。」

「紫苑ちゃんは俺が一緒に乗って行くよ。」

「うん、真鍋さんが見てくれるなら大丈夫かな。」

「でも、悪いです・・・。（うーん、どういう関係？　この人、美人じゃないけどモテるのかしら？）あれれ？　また・・・うわ。」

「ああ、無理そうですね。じゃあ、俺が付き添います。真鍋さん、紫苑をお願いします。」

「すみません・・・。（ラッキー！　でも、やっぱり彼女・・・？）」

やった！

邪魔な高木くんを追い払ったわよ！

・・・弘晃。

もう少し寄り添って座れなかったの？

それに、どうして高木くんの話題で盛り上がってるのよ？

弘晃なら、いろんな楽しい話題があるじゃない！

「真鍋さん、ありがとうございました。」

「高木みたいに上手くサポートできなくて悪いね。」

「そんなことありません。　安心して降りられました。」

「あ、来たね。じゃあ、またお昼に。」

えええええぇ？！
これで終わり？！

もう少しなんとかならないの？
弘晃、紫苑ちゃんに興味なし？

いいえ！
負けないんだから！
次のチャンスはお昼よ！

「紫苑ちゃん、ずいぶん上手くなったね。」

「わあ、そうですか？　真鍋さんに言われるなんて、嬉しいな。龍之介の教え方がいいのかな？」

「紫苑ちゃんが高木を信頼してるからかも知れないよ。きっと相性がいいのかもね。あはは！」

「相性って、そんな・・・。」

弘晃！
せっかく話してるのに、高木くんとの相性を褒めてどうするの？！

あーあ、もう。

あ。
次はお風呂上がりの紫苑ちゃんと鉢合わせね♪

うーん。
ジャージ姿っていうのが色っぽさに欠けるけど、濡れた髪とか、せっけんの香りとか、独特のものがあるものね。
弘晃だけ遅れるように・・・。

「あれ？　グローブ落としたみたい。見てくるから先に戻ってて。」

やった！
あ、紫苑ちゃんも。

「あれ？　靴下が・・・。」

さあ、がんばれ、弘晃！

「あ、真鍋さん。今、上がったんですか？」

「ああ、紫苑ちゃん。あれ？　3時に上がって、今までお風呂？」

「はい！　ここのお風呂、気持ちがいいですよねー。」

「うん。やっぱり温泉はいいよね。」

「わたし、体中が筋肉痛なので・・・。」

「ああ、俺も。」

「真鍋さんでもですか？　あんなに上手なのに。」

「普段は運動してないからね。」

「わたしも運動不足で。でも、今回はさらにすごいんですよ。」

「なにが？」

「手の指まで筋肉痛なんです。ここのところ。こんなところにも筋肉があるんだなあって、実感しました。」

「あはははは！　よっぽどすごい力でストックを握りしめてるんだね。」

筋肉痛の話題じゃ、ちょっと・・・。
紫苑ちゃんの指が筋肉痛っていうのが、もしかしたら手を握るチャンスだったかも知れないけど・・・。

はあ・・・。
この二人って、恋愛系のお付き合いは無理なのかしら？
もう明日は帰るのに・・・。

「紫苑さん。ナイターのゲレンデで写真撮りませんか？」

あら、美乃里ちゃん！
ナイスアイディア！

「あ、いいね。あたし、夜のゲレンデって初めて♪」

「寒いからたくさん着て行かないと。帽子もあった方がいいですよ。」

「は～い。ともちゃん、まん丸になっちゃってるよ？　歩けるの？」

「でも、寒そうだから・・・。」

夜のゲレンデはロマンティックだから、なんとかして・・・。
弘晃〜！　早く降りてきて！

「あ、高木さんだ。」

「龍之介？　どこ？」

「ほら、あそこの赤いボードの。」

「え、あれ？　上手いんだね。」

「そうですよ。きのうも今日も、紫苑さんが3時に上がったあとご一緒しましたけど、スキーもボードもすごく上手いんですよ。」

「真鍋さんより？」

「ああ、真鍋さんにはかなわないかな？　ねえ、ともちゃん？」

「そうですね。一緒に来た中では、真鍋さんが一番お上手ですね。あ、あそこに・・・。」

美乃里ちゃん、知世ちゃん、ナイスよ〜〜〜〜！
ほんとうに弘晃はかっこいいんだから！

・・・紫苑ちゃん？　見てる？
高木くんじゃなくて、弘晃の方よ・・・あ。

「ねえ、美乃里ちゃん。龍之介って、誰かと一緒にすべってる？」

「え？　・・・あら？」

「あ、女の人と一緒ですね。」

「と、ともちゃん、しいっ！」

「やっぱりそうだよね？　龍之介、ナンパしたのかな？」

「たっ、高木さんにかぎってそんなことはないと思いますよ！　絶対！　わたし見てきます！」

「え？　美乃里ちゃん・・・？」

確認なんてしなくていいわよ！　浮気したってことでいいの！

あ・・・美乃里ちゃん。
ほんとうは、あなたが気になるのね？
紫苑ちゃんなら仕方ないけど、って思ってるのね？

・・・人を好きになるって、誰にでも少しは悲しい部分があるものなのかもしれない。
何もかも順調に進む人なんて、ほんとうにラッキーな人だけなのかも・・・。

「高木さ～ん！」

「よう！　どうした？」

「あ。（あれ？　すごく可愛いじゃない！　真沙美の情報では“普通”　のはず。あたし、負けてるよね・・・。）」

「わたしたち、3人で写真撮ろうと思って出てきたんです。夜のゲレンデはきれいだから。こちらの方は？」

「あ、あの、わたし、（まさか逆ナンとか言えないよ～。）」

「途中でぶつかりそうになって、足を痛めたみたいだから一緒に降りてきた。」

「ああ、そうなんですか。」

「え、ええ、はい。（その笑顔、綺麗だけどけっこう怖い・・・。）」

「わたしたち、高木さんが降りてくるところを見ていたんです。そうしたら、紫苑さんが、高木さんが誰かと一緒にいるって気付いて・・・。」

「え？　紫苑が？」

「（あ、その名前だ。じゃあ、この子は違うのか。でも・・・睨まれてるよね？）ええと、わたし、これで失礼します。」

「あ、足は？」

「あ、その、大丈夫でした。はい。ありがとうございました。おや

すみなさい。（この人には、もうちょっかい出すのやめよう。）」

「・・・紫苑、何か言ってたか？」

「『ナンパしたのかな？』って。」

「はあ・・・。俺、そういうキャラに見える？」

「わたしはそうは思いませんけど。」

「紫苑にそう言っといてくれよ。」

「ふふ。ご自分でどうぞ！」

美乃里ちゃん・・・優しくて、強い人ね。
悲しいのに笑ってる。
悲しくても笑える。

・・・弘晃もそうだった。

「あ、美乃里ちゃん、寒くなってきたから写真撮って戻ろう。」

「はい。高木さん、逆ナンパされたみたいですよ。ご本人は気付いてないようですけど。」

「へえ、そうなんだ。龍之介って、かっこいいもんね。」

「あ、そう・・・ですか。はっきり言いますね。」

「うん・・・そうだね。でも、そうじゃない？」

「まあ、たしかにそうですけど・・・。」

紫苑ちゃん。平気な顔してそんなこと言うなんて・・・。
つまり、高木くんのこと、普通のお友達としか思ってないってこと？
それとも、そういうことを言ってもいいくらい、近い存在ってこと？

「あ、真鍋さん、ほんとうにお上手ですね。うっかり見とれていて、体が冷えてしまいました。さむ・・・。」

あら！　面と向かって褒めてくれるなんて！
弘晃。
紫苑ちゃんて優しくて可愛いわよね！

「ありがとう。３人とも、もう一度風呂に入った方がいいよ。今日はこっちの部屋で宴会だから、・・・そうだね、４０分くらいしたらおいでよ。」

「「「はーい。」」」

あーあ。
また集団行動か。
もう無理なのかしら・・・？

43 ≪レイナ≫（2）

明日は帰るのよね・・・。
今日一日やってみて、わたしたちの仕事って、そう簡単なものじゃないって分かったような気がする。

でも、まだあきらめない。
今夜の宴会で、チャンスが作れるかもしれないもの。

「「「おじゃましまーす。」」」

え？
あら、やだ。
これって、どうなの？

「あー！　ちょっと待って！」

「きゃ！　ご、ごめんなさい！」
「失礼しました！」

「え？　どうしたの、二人とも？　なんで行っちゃうの？」

「・・・紫苑。ちょっと来い。」

「龍之介？　なに？　どうしたの？」

「いいから早く。」

「・・・・・なに？」

「真鍋さん、着替え中だったんだぞ。」

「あ、うん。見て分かったよ。」

「服着てなかったじゃないか。」

「え？　パンツはいてたじゃん。」

「はぁ・・・・。」

「なによ？」

「恥ずかしいだろう？」

「ええ？！　だって、うちではお父さんも弟もパンツ一枚で歩いてるよ？　男の人のパンツって普通の短パンみたいだし、海とかプールに行けば、みんなそんな格好してるじゃん。」

「でも、普通は見せないものなんだから。」

「へえ、そうなんだ・・・。あたし、男の人は恥ずかしくないんだと思ってたよ。」

「じゃあ、紫苑は下着姿を見られても平気なのか？」

「なんで？！　平気なわけないいでしょ！」

「だって、海とかプールとかでは、みんなそんな格好してるじゃないか。」

「下着と水着は違うよ！　女の子の下着は見せない前提で作られてるんだから。」

「いや、そこじゃなくて、そういう・・・その、露出度の高い・・・。」

「ああ、そうか。ダメだよ、女の子のを見ちゃ。」

「男のはいいのか？」

「だって、それを見て犯罪に走ったりしないでしょ？」

「紫苑・・・。つまり、紫苑は男の裸に何も感じないと・・・。」

「やめてよ、変なこと言うの！　あたしだって、何も着てなかったらびっくりするよ！」

「“びっくり”　ね。よーく分かった。でも、一応、見ないようにするのが礼儀だぞ。」

「うん・・・。分かった。」

紫苑ちゃん。

あなたって、なんていうか・・・そのままの人なのね。

紫苑ちゃんを相手に選んで、この旅行中にいきなり結果を出そうなんて、ちょっとせっかちすぎたのかも知れないな・・・。

「ともちゃん、あたしちょっと飲み過ぎたかも。廊下で涼んでくるね。」

「え？　紫苑さん、一人で大丈夫ですか？」

「うん、平気。この部屋の前から離れないようにするから。」

あら。

高木くんは・・・向こうで盛り上がってる！

弘晃。

紫苑ちゃんがいないことに気付いて。

「あれ？　このハンドタオルって・・・？」

「ああ、紫苑さんのです。」

「ああ、そう・・・いない？」

「さっき、廊下で涼むからって・・・。」

「一人で？　もう遅いから、一応見て来るよ。」

やった～！！
でも・・・この二人だと、あんまり期待できないかしら。

「紫苑ちゃん。」

「あ、真鍋さん。」

「寒くないの？」

「はい。ちょっと飲み過ぎたみたいで。」

「そう。たしかにここは気持ちいいね。」

「はい。それに、夜の雪景色もきれいですね。静かだし。」

「そうか。紫苑ちゃんはスキー場には来ないから・・・。」

「そうなんです。高校生のときは、夜の雪景色なんて考えてもみなかったし。」

「あははは、そうだよね。夜は友達と遊ぶ方が楽しいもんね。」

「はい。それに、疲れきってましたから。ふふふ。」

「今回は余裕だね。」

「余裕っていうか、無理にやってるわけじゃないので・・・。午後も早く終わりにしてるし。」

「楽しい？」

「はい！　すごく楽しいです。真鍋さんはナイターまで、目いっぱい滑ってますよね？」

「うん・・・。ほんとうは、来るのをやめようかと思ったんだけど・・・。」

「え？　真鍋さんが、ですか？」

「うん。だけど、俺が言い出した話だったし、一人でいるよりも・・・。実はね、失恋しちゃったんだよ、つい最近。」

あら。

こんな話ができるなんて、もしかしたらいい雰囲気に・・・？

「え？　あの、ええと。」

「ああ、びっくりさせてごめん。」

「いえ・・・・・。」

「うちの兄の婚約者だったんだ。2年前に紹介されたときに一目惚れしてね。最初から望みがなかったんだよ。」

「・・・・・。」

「半年前に兄が海外赴任になって、結婚式の準備を俺が代行していたんだけど、望みはないのに、彼女と一緒に結婚式の準備をするのが楽しくて。で、5日前にとうとう結婚して、兄と一緒に行ってしまったよ。」

「悲しいですね・・・。」

「うん。もう二度と笑えないと思った。でも・・・仲間っていいね。それと、思い切り体を動かすことも。」

「元気になりますか？」

「うん。笑えるってわかった。まだ5日なのに。・・・ああ、俺、どうして紫苑ちゃんにこんなことを話してるんだろう？」

それは、お互いに解りあえるからよ！

「・・・きっと、夜だから、です。」

え？

「夜だから？」

「はい。夜は、昼間とは違います。」

「ああ・・・、そうかもしれない。無防備になるっていうか。」

「はい。自分の心の深いところと向き合うような。」

「紫苑ちゃん・・・？」

「夜って、不思議ですよね。いろんなことを考えてしまいます。」

「・・・そうだね。」

「でも、朝になると元気になることが多いです。」

「そう？」

「はい。悲しい気分の夜でも、次の日になってみるとすっきりしていたり、悩んでいたことが、朝になると簡単に解決しそうに思えたり。」

「ああ・・・わかるな。」

「きっと、眠ることが体だけじゃなくて、心にもいいのかも知れないですね？」

「うん・・・。そうだね。」

「もちろん、単に、明るさの問題なのかも知れませんけど。ふふふ。」

「そうだね。」

・・・ユウ。

これが、あなたがやってきたことなのね。
紫苑ちゃんが悲しかったり、淋しかったりするときに、なぐさめてあげること。一緒にいてあげること。
紫苑ちゃんが、できるだけ心安らかに、楽しく日々を過ごせるようにしてあげること。

それが、わたしたち恋風の、もう一つの役割なのね。

役割・・・というよりも、そうしないではいられないよね？
自分たちが生まれた理由を知っているんだから。
その人間が、どれほどつらい思いをしたのかを知っているんだから。

だから、幸せを願うんだから。

弘晃。

きのうまでは毎日、あなたと夢の中で話していたけれど、もしかしたら今夜は、わたしの出番はないかもね。

でも、いつも一緒にいるから。
弘晃が幸せになるまで、ずっと一緒にいるからね。

４４　スキー帰りのサプライズ

１２月２９日。スキー最終日。
今日はお昼まで滑って、お土産を買いながら帰る予定。

みんなに「景色がいいから」と誘われて、きのうのコースよりも高いところにある中級のゲレンデまで行ってみることになった。
龍之介も、ゆっくり滑ることができれば、中級はどうにか降りて来られると言ってくれたから。

リフトを降りると、頂上に近いスタート地点は、たしかに景色がきれい。
真っ青な空に、真っ白な山並みがくっきりと映えている。
それを背景に、全員で記念撮影。　なんだか嬉しい！

でも。
下を見て、あたしの頭の中も真っ白になった。

急過ぎる。
傾斜が７０度くらいあるように見えるんだけど？
どうやって滑って行けばいいのか、まったくわからない。
ほかの人たちが、どうしてこの斜面で下向きになれるのかもわからない。
心の中で、下りのリフトって乗れるのだろうかと考えたけど、実際にやったらそうとう恥ずかしいと思うと言い出すことができなかった。

龍之介に付き添われ、斜面を横切るように滑る。
下を向くのが怖いからなかなかターンができなくて、ゲレンデの端から端まで使って、まるで機織りの横糸のようなコース取り。
転んだ回数は、ターンの回数よりも多い。
先に降りて行ったほかの人たちが、また後ろから追い抜いて行った。

「疲れたか？」

何度目かの転倒のあと、起き上がったあたしに龍之介が声をかけてくれた。

ほんとうなら龍之介だって、もっと何回も滑れるはず。
だけど、あたしに教えるって約束したから、こうやって付き合ってくれている。
そんな龍之介に、弱音を吐いたら申し訳ない。

「大丈夫。」

どこも怪我してないし。

「ほら。もうこんなに降りてきたんだぞ。」

え？

龍之介がストックで指した方を見上げたら・・・。
あたしのうしろには、ゲレンデが高々とそびえていた。

こんなに？
いつの間に？

あたし、自分で滑って来た？

・・・嬉しい。

「うん。ありがとう。」

龍之介はいつものようにニヤリと笑った。

「ねえ、秋月さんのお土産って、お酒でもいいかな？」

帰りに寄ったお土産店で、龍之介に訊いてみる。

「優斗に？」

「だって、御守りをもらったよ。あれ、３つともいろんなポケットに詰めておいたんだ。」

だから無事だったのかもしれないよね？

「・・・優斗は酒なら何でも飲むぞ。」

「え？　そうなの？」

「うん。日本のでも、外国のでも、甘いのでも、強いのでも、何でも好きだな。」

「へええ、知らなかった。」

意外だ・・・。
あの見た目だし、お菓子なんか作ったりするから・・・。
あ、これなんかどうだろう？　名前がお洒落な感じがするけど。
「一緒に飲んだことないのか？」
「うーん・・・。一緒に出かけたのは2回とも昼間だったんだよね。」
「ふうん、“2回とも昼間”　ね。」
「ねえ、龍之介。これどう・・・あれ？」
いなくなっちゃった。
お酒ってよくわからないなあ。
何でも好きだって言うなら、この地酒っぽい雰囲気のでいいか。
お父さんにも買って行こう。

龍之介はお店の外で真鍋さんと話していた。
帰り道の相談らしい。
「上り方面は混んではいないから、順調に帰れるよ。」
真鍋さんの言葉に、龍之介が付け加える。
「紫苑を降ろすのは7時か8時くらいだな。」

「うん。いつもありがとう。」
お礼を言うと、龍之介は少し照れた顔。
このくらいでそんな顔をするなんて、あたし、そんなに普段は龍之介に何も言ってないんだろうか？
いつも感謝してるんだけど。
「帰る前に、優斗の家に寄るか？」
「秋月さんの？」
「嶋田さんと竹田を送ったあと。少し遠回りになるけど、寄ってもいいぞ。お土産買ったんだろう？」
あ、そうか。
お正月に渡そうと思っていたけど、早いうちのほうがいいかも。
「そうしてもらおうかな？」
「優斗の都合もあるだろうから、電話してみれば。」
「そうだね。かけてみる。」
電話をかけると、すぐに秋月さんの楽しげな声が聞こえてきた。
「あ、こんにちは。今ね、スキーから帰る途中なの。」
『そう。楽しかった？　怪我しなかった？』

相変わらず優しいな。

「うん、元気。御守りの御利益があったみたい。ありがとう。」

『どういたしまして。』

「秋月さん、今日はお家にいる？　お土産を買ったんだけど、龍之介が帰りに寄ってくれるって言うからお届けしようかと思って。」

『龍之介が？　年内はもう紫苑さんに会えないと思ってたよ。ありがとう。僕は家にいるけど、何時頃になりそう？』

「時間？　ちょっと待って。龍之介に訊いてみる。」

隣の龍之介を見上げると、話の流れを聞いていたらしい龍之介が「6時半から7時半の間」と言った。

「6時半から7時半の間だって。」

『わかった。あ、そうだ。その時間だったら、うちで夕食を食べて行かない？』

「え？　夕食？　ええと・・・。」

龍之介と目が合う。

『もちろん、龍之介も一緒でいいよ。実はね、きのう、スーパーの福引でフォンデュ鍋が当たったんだよ。』

「フォンデュ鍋？」

あたしの言葉を聞いて、龍之介はわけがわからない顔。

『せっかくだから3人でやろうよ、チーズフォンデュ。3人くらいいた方が楽しいんじゃないかな？　僕は初めてなんだけど。』

あたしもだ。

自分たちで作るなんて、面白そう♪

龍之介に相談すると、龍之介は「俺だってそんなもの食べたことない。」なんて言いながら、楽しそうにOKした。

『じゃあ、材料は買っておくから。到着時間がはっきりしたら、また電話して。』

「はーい。」

みんなで旅行して、帰ったらまた美味しいものが食べられるなんて、この年末はなんて楽しいんだろう！

幸せだ～。

「優斗は、転勤で留守になってる実家に一人で住んでるんだよ。」

嶋田さんと竹田くんとさよならしたあと、秋月さんの家に向かいながら龍之介が教えてくれた。

「大学を卒業するときに、親父さんが九州に転勤することになって、

おふくろさんが一緒について行ったんだ。で、家を留守のままにしておくと傷むし、不用心だからってことで、優斗が下宿を引き揚げて戻ったんだ。通勤にはちょっと不便な場所だけど。」

「ふうん。」

職場からは遠いって聞いていたけど、一軒家に一人暮らしかあ・・・。

贅沢な感じがするけど、お掃除とか、けっこうたいへんかも。

着いてみると、けっこう大きなお家。

生け垣はさざんかで、門の横に夏蜜柑がなっている。

白い壁の洋風の二階建て。

車庫は2台分。片方に赤い車があって、その隣に龍之介が車を入れる。

車の音で気づいたのか、インターフォンを押す前に、白いセーターにジーンズ姿の秋月さんが玄関に出てきた。

「いらっしゃい。」

「よお。」

「こんにちは。急に来たりしてごめんね。これ、お土産です。あと、ちょっとおかずを買って来たの。」

お土産の地酒と途中で買って来たシュウマイの箱を差し出すと、嬉しそうに笑ってくれた。

「どうもありがとう。寒いから中へどうぞ。」
案内されながら中に入ると、カウンター式のキッチンにきれいに切られた野菜が並んでいる。さすがだ。
「こたつの方がいいんじゃないかと思うんだけど、それでいい？」
秋月さんが深緑色のエプロンをかけながら尋ねる。
想像していたとおり、秋月さんて、エプロンが似合ってるね。
リビングのこたつの上には、茶色のフォンデュ鍋。そのまわりに取り皿とグラス。
龍之介はさっさとこたつにあたりに行ってしまった。
「シュウマイか。これもチーズをつけたら美味しいかもね。お皿は・・・。」
「あ、手伝うね。」
秋月さんが電子レンジで野菜を蒸し、あたしは指示にしたがってお皿を出したり、できたものを運んだりする。
手伝いながら、旅行中の楽しかったことや失敗したことをたくさん話して。
キッチンで、秋月さんとあたしの笑い声が重なる。
こたつの上には人参、じゃがいも、ブロッコリー、ウィンナー、フランスパンが次々に並ぶ。それにシュウマイ。
「龍之介はたくさん食べるから、ご飯もあったほうがいいかと思って、炊き込みごはんを炊いておいたよ。」

「お！　優斗の炊き込みご飯？　久しぶりだな！　来た甲斐があったぜ。」

それまでぼんやりしていた龍之介が嬉しそうに反応した。

「上手なの？」

「すごくうまいんだ。あれが毎日食べられるなら、優斗と結婚してもいいくらい。」

「龍之介とじゃ、やだよ。」

今度は三人の笑い声が重なる。

こたつにあたってみんなで食べるチーズフォンデュは、美味しくて楽しかった。

炊き込みご飯もほんとうに美味しくて、チーズフォンデュでお腹を一杯にしてしまったことが悔やまれるほど。

お皿洗いは龍之介が引き受けてくれて、大学時代のアルバイトで培った手際の良さで、あっという間に片付いた。隣でお皿を拭いていたあたしは、たくさんダメ出しをされてしまったけれど。

片付けの間に秋月さんが淹れてくれたコーヒーをこたつでいただきながら、のんびりと楽しくおしゃべり。

なんて心地よい空間・・・。

「あ、紫苑さん？」

「え？　ああ、そろそろ帰った方がいいな。」

あれ？

ああ、いけない。

ちょっと、こっくりこっくりしてた・・・。

「紫苑、帰ろう。」

龍之介に肩をたたかれてうなずいたけれど、まだ頭はぼんやりしている。

立ち上がると、秋月さんが上着を着せかけてくれた。

「先に行って車出しておく。」

上着のボタンを閉めながら、廊下へ出て行く龍之介に応えてうなずく。

まだ目がちゃんと覚めないのか、手元がおぼつかない。

もたもたしているあたしの隣では、秋月さんがあたしのバッグを持って、待ってくていれる。

「・・・気を利かせてくれたのかな？」

・・・・ん？

小さくつぶやかれた言葉の意味は・・・。

頭の中で答が出るより早く、秋月さんのセーターが目の前に迫ってきて、きゅっと抱き締められて・・・、

「うわ！　あ、あのっ・・・。」

一気に目が覚めた！

チュッ！

おでこに～～～～？！

「龍之介が待ってるね。」

うんうんうんうん！

そうだよ！　待ってるの！

たぶん、ほんの1、2秒のこと。

だけど。

よろけながら廊下を玄関まで歩き、大急ぎで龍之介が待つ車へ。

お礼とあいさつを交わしてようやく車が動き出したとき、どっと疲れが出て、シートにもたれかかってしまった。

秋月さんには何度も驚かされているけど・・・今日はまた・・・びっくりした。

45　新しい年はどんな年？

年末はスキーから帰った翌日３０日に実家に戻った。

お母さんを手伝いながらお正月の買い物や料理をして過ごし、年越しには夜中に家族全員で近所のお寺にお参り。

夜中のお参りは寒いけど、静かで厳かな感じがするので好きだ。

境内でふるまわれている甘酒も、毎年の楽しみ。どこのよりも美味しいような気がする。

1月2日は真由と一緒に初売りへ！

福袋に殺到する人たちを笑っていたつもりが、いつの間にか自分たちも仲間入りしていた。

それぞれ3つの大きな袋を抱えてお昼を食べながら、おしゃべりに花が咲く。

真由は結婚式の準備がだんだん本格的になってきたらしく、細々した決めごとが多くて疲れるとため息をついた。

「エステにも行かなくちゃいけないし。」

「あ、やっぱりそういうのやるんだ？」

「もちろん！　一生のうちで一番注目される日なんだから。」

たしかに。

「ドレスは決めたの？」

「それがねえ・・・。」

真由がまたため息をつく。

「6月だし、あたしは肩が出るドレスがいいの。でも、うちの母親がさあ、そんなのは下品だって反対するの。古いんだよね。」

「試着してみせたら納得してくれるんじゃない？　真由なら何を着ても、下品になんかなるわけないもん。」

あたしの言葉に真由は幸せそうに微笑んだ。

どんなに愚痴をこぼしていても、心の底では幸せなんだ。

知佳ちゃんもそうだったけど、幸せな人の笑顔は、見ているあたしも楽しい気分になる。

「紫苑はどうなの？」

「なにが？」

「秋月さんとは、その後、どうなってるの？」

やっぱり来た、この話題。

クリスマスの前にタルトを秋月さんのために作ったことを話してあったから、次に会ったら絶対に訊かれると思っていた。

「明日、初詣に行く予定。」

「あら。」

「とりあえず、そんなところ。」

「なによ、それ？　なんだか、気が乗らないみたいだけど？」
「うーーーん、そういうわけじゃないんだけど・・・。」
なんて言ったらいいんだろう？
「何か心配なの？」
「心配っていうか・・・その・・・。」
「どうしたの？　紫苑らしくないね。」
「だって・・・、その・・・、」
真由の方に身を寄せて。
「びっくりしちゃうんだもん。」
「は？　何が？」
・・・わからないよね。
「あのね、秋月さんて、何でも口に出しちゃう人なんだよ。」
「ああ。最初は独り言がきっかけだったって・・・。」
「うん。そういう感じで、その、あたしのことも・・・。」
「・・・なるほど。『好きだ。』とか言うわけね。」

「うん、そう。」

ほんとうはもっと具体的なことも、なんだけど。

「で？　言われるのが嫌なの？　もしかして、昔のことを思い出してつらいの？」

「あ、ううん、そうじゃなくて・・・。ええと、言葉だけじゃなくて、行動に出ちゃうっていうか・・・。」

「え？！　そんなに積極的な人なの？　まさか人前で・・・？」

「え、いや、そうじゃなくて。」

「じゃあ・・・無理矢理・・・？」

「いや！　それもないから！」

そんなことになってたら、即、お断りしてるよ！

「そうだよね。」

真由がほっとした顔をする。

「じゃあ、どのくらいのことなの？」

「あの・・・おでこにちょっと・・・。」

「おでこ？　え？　おでこにちょっと・・・って、おでこにキス？

それだけ？」

“それだけ？”　って、それだけのこと・・・なの？

「あと・・・ギュッて。」

「抱き締められたの？」

「・・・うん。」

「それ、いつのこと？」

「スキーの帰り・・・。龍之介も一緒に秋月さんの家に寄ったの。」

「ああ、年末の。」

「うん。」

「そうか。で、二人きりになったときに？」

「・・・うん。」

「うーん・・・、それくらいなら、たいしたことないような気がするけど？」

う・・・でも・・・。

「いきなりなんだもん。」

「ああ、びっくりするのね？」

「うん、そう。」

「ふふふ。でも、紫苑、そういうときって『いいですか？』とか訊かない人の方が多いんじゃないかな？」

・・・だから困ってるんだよ。

そりゃあ、あたしには昔、婚約者がいたし、今さら何も知らないふりをするつもりはない。

だけど・・・あの人以外でお友達以上のお付き合いをするのは初めてなんだもの。

・・・いや。

きっと何人目でも、その人との関係を作っていくときには“初めて”になるんだよね。

だから戸惑ってしまう。

「紫苑はいやなの？」

思考を中断する質問に、ちょっと答えるのが遅れた。

「・・・・いやっていうか・・・・わからない。」

遅れても出ないこたえ。

「どうしたらいいのかわからない。明日、会うけど・・・・、」

「また同じようなことをされるのが怖い？」

「怖い？　ううん、怖いっていうのとは違う。でも・・・わからない。」

「紫苑。ずっとそのことを考えてた？」

「うん、まあ、かなり。」

忙しいときは忘れてたけど。

あたしの返事を聞いて、真由はくすくすと笑った。

「じゃあ、秋月さん、大成功だ。」

「何が？」

「紫苑に自分のことを考えてもらうってこと。」

「え？　そうなの？」

「まあ、そういう意味もあると思うよ。紫苑にとってはかなり強烈な印象だったみたいだもんね。うふふ。」

強烈過ぎるよ・・・。

「スキーに行った帰りに寄ったんでしょう？　龍之介くんと仲良くした思い出のまま、紫苑を帰らせたらまずいと思ったんじゃない？」

「真由まで龍之介のことを言うの？」

「これは、あくまでも秋月さんがそう思ったんじゃないかっていう

憶測。」

・・・たしかに、秋月さんはいつも龍之介と張り合おうとするけど。

「だとしたら・・・、明日は心配ないのか。」

休み中は龍之介と会ってないし。

年が明けたら龍之介よりも先に秋月さんに会うんだから。

「そうかもね。でも、あたしの憶測だよ？」

真由がまたくすくすと笑う。

憶測だとしても、けっこう納得がいく。

いくら口でいろんなことを言う人でも、実行するにはそれなりの覚悟が必要なはずだもの。

秋月さんがあたしのことを・・・好きだって思っているという理由だけじゃなく、龍之介への対抗意識であんな行動に出たって考える方がしっくりくる。

「紫苑。」

呼ばれて顔を向けると、さっきとは打って変わって真面目な様子の真由に少しドキッとする。

「なに？」

「ほんとうに、秋月さんのことは怖かったり、嫌だったりしないのね？」

「ああ・・・うん。そういう感じはないよ。ほんとうにいい人なの、秋月さんは。」

「それならいいけど・・・。」

真由が視線をいったん下に向けてから、もう一度あたしを見る。

「あたしね、『成り行きにまかせなさい。』なんて言ってしまったこと、今になって心配になっちゃったの。」

「そんなこと・・・、大丈夫だよ。大丈夫って言うよりも、その言葉のおかげで秋月さんともお友達になれたんだから、感謝しなくちゃね。」

「でもね、成り行きにまかせて進めば進むほど、断ることが難しくなってしまうかも。」

「ああ、それなら大丈夫だと思う。」

「そうなの？」

「うん。秋月さんにはちゃんと言ったの、『秋月さんの気持ちに応えられるかどうかわからない。』って。それでもいいって言ってくれた。『重荷に感じたら、断ってほしい。』って。」

「そう・・・。秋月さんって、ほんとうにいい人なんだね。」

「うん。」

いい人なんだよ。

・・・びっくりさせられてばかりだけど。
そんなことを考えているあたしを真由が笑う。
「けっこう積極的な秋月さんは、紫苑にはちょうどいいかもね！
明日はどんな予定なの？」
「午前中に秋月さんが車で迎えに来てくれるって・・・。」
「え？　ほんと？　あたし、見に行ってもいい？」
見に？！
「いいじゃない、近所だし。・・・あ、今日、紫苑の家に泊ろうかな？」
「まあ、泊るのはかまわないけど・・・そんなに見たいの？」
「見たい！　紫苑の彼氏候補だもんね♪」
彼氏候補・・・か。
たしかにそうなのかも知れないけど・・・しっくりこない。
まだ決心がついていないから、なのかな？
まあ、いいや。
だんだんとあたしの気持ちも分かってくるだろうから。
「そんなこと言って、真由、ほんとうは隆くんとののろけ話をしたいんじゃないの？」

「あ、わかる？」

「当たり前だよ！　何年親友やってると思ってるの？」

「そうだよねえ。」

「ちゃんと聞くけど、あんまり過激な内容は控えてね。」

「大丈夫！　あたしたちピュアな関係だから。」

そう言うと、あきれ顔のあたしを見て、真由が楽しそうに笑った。

幸せな真由の笑顔を見たら、やっぱりあたしも楽しい気分になって・・・自分も幸せになれるような気がした。

46　新しい関係は戸惑いとともに（1）

1月3日。
朝の9時半ごろ、秋月さんから電話。
「もう近いと思うんだけど、目印はある？」
同じような家が立ち並ぶ住宅街にある我が家では、曲がる場所を説明するのも難しい。
家の前まで来てもらって家族に紹介するのはまだ早い気がしていたから、これ幸いと、近所のコンビニで待っていてもらうことにした。
真由は自分の家とは反対方向なのに、ちゃんとくっついて来た。・・・反対方向と言っても、コンビニはうちからほんの2、3分なんだけど。
コンビニがある道路に出たところで、急に落ち着かない気分になってしまった。
どうしよう？
会ったら急に抱き締められたりしないよね？
でなければ、またおでこに、とか？
昼間だし、外だもん、大丈夫だよね？
「紫苑。そんな顔しなくても大丈夫だよ。」
真由が呆れてる。
そんなに困った顔をしてた・・・？

コンビニの狭い駐車場・・・いた！
一番端に停めた赤い小型車の前で、秋月さんは手に持っていた携帯から顔を上げると、あたしに気付いて微笑んだ。

駆け寄って来ない・・・。
よかった。
これだったら熱烈なあいさつはなさそう。

「あけましておめでとうございます。」

少し小走りに近付いて新年のごあいさつ。

「あけましておめでとう。今年もよろしくね、紫苑さん。」

ああ・・・この声。
引き絞った弓のイメージ。
久しぶりに思い出した。
やっぱり、何日も・・・って、たった4日だけど、会わなかったから？

ゆっくりと追いついた真由が隣に立つ。

「秋月さん、こちら、友人の三崎真由です。」

「初めまして。紫苑がいつもお世話になってます。」

「初めまして。秋月優斗です。」

穏やかにあいさつを交わす様子は、落ち着いた大人同士って感じ。

なんだか自分だけが、あれこれ心配し過ぎる子どもみたいに思えてしまう。

「秋月さん、真由はパティシエなんです。最初のアップルパイのときは、真由に教えてもらったの。」

「ああ、じゃあやっぱり、最初からうまくできてたんだね。食べられなくて残念だったなあ。」

「でも、紫苑が一人で頑張ったのは食べたんですよね？　初挑戦のタルトも？」

真由の笑顔の質問に、秋月さんが少し驚いてあたしを見る。

「・・・真由には話してあるから。」

どこまで話したかは言いづらいけど。

照れくさくて何も言えなくなってしまった秋月さんとあたしを、真由はくすくすと笑った。

「紫苑。じゃあ、行くね。秋月さん、紫苑をよろしくお願いします。」

真由が手を振って、軽やかに歩いて行く。

その先には・・・隆くん？

「バイバイ！　またね！」

声をかけると真由が振り向いて手を振り、その向こうで隆くんも手

を上げた。
二人が声を掛け合って歩き出すのを見送る。
離れた場所からでも、二人を自然な優しい空気が包んでいるのが感じられるよう。
真由の隣には隆くん。
そして、あたしの隣には・・・秋月さん？
「荷物は後ろに入れる・・・ほどじゃないね。」
「あ、うん、足元で平気。」
コンビニで飲み物を買って、いつものように後ろの座席に乗り込もうとしたら。
「あれ？　紫苑さん、後ろがいい？　この車、後ろはいっぱいで・・・。」
いっぱい？
「これ、姉の車でね。結婚して近所に住んでるんだけど、1才と2才の子どもがいるからチャイルドシートを乗せてるんだよ。」
チャイルドシート？
ほんとだ。2つ。
「だんなさんの車はマンションの駐車場があるんだけど、自分用のを借りるのがもったいないって言って、うちの車庫に入れてるんだ。そのかわり、僕が使っていいことになってて。」

どうしよう・・・？
わざわざはずして欲しいなんて、わがまま言い過ぎだよね・・・。

「あの、じゃあ、助手席でいいや。」

大丈夫。
隣は秋月さんだもの。
これから一生、助手席を避けて過ごすわけにはいかないかも知れないし。

助手席へと乗り込んで深呼吸。
大丈夫大丈夫大丈夫。

「紫苑さん、シートベルトを。」

あ、そうだった。

緊張しているのか、金具がなかなかはまらない。

「あれ？　おかしいな？」

変なのはあたしの手の方なんだろうけど、こんなところにまで不器用が影響するなんて・・・。

「ああ、ちょっといい？」

気付いた秋月さんが長い指のきれいな手でやってみると、何事もなくベルトの金具は落ち着いた。
こんなにも違うものなのかな・・・。

「あーあ。あたし、何をやっても不器用で。」
ため息をつくと、秋月さんがエンジンをかけながら笑った。
「そんなに違いはないと思うけど？」
「ほんとうに違うの。今みたいなこともあるし、前に話した料理も、道具を使うスポーツも、楽器もダメ。」
「でも、アップルパイもタルトも美味しかった。」
「あれは・・・味はね。本と秋月さんのおかげ。」
「スキーだって、中級のコースを滑ってきたんだよね？」
「あれは龍之介のおかげ。それに、“滑ってきた”って言うよりも、“転げ落ちてきた”の方が近いかも。ほんとうに数え切れないほど転んだの。立ったと思ったら、すぐにバランスを崩して、とか。」
思い出すと笑ってしまう。
「怪我をしなかったのは、秋月さんの御守りのおかげかも知れないな。3つとも、ウェアのポケットの3か所に入れておいたの。」
「役に立ってよかったよ。」
秋月さんも笑ってる。
一緒に笑えるって、楽しい。

「秋月さんはスポーツは得意？」

「得意っていうほどではないけど、普通には。体育の成績は中の上くらいだった。」

「球技が得意でしょう？」

「うーん、そうだね。走るのよりは向いてると思ってたよ。テニス部だったし。」

「ああ、やっぱりね。」

「どうして？」

「だって、器用だもん。」

「関係ある？」

「あるよ。あたし、球技は全然ダメなの。バレーボールもバスケットも、授業の初日のパス練習でつきゆびしちゃうの。必ず。」

「ええ？　それ、誇張してない？」

「違うよ、ホントのこと。『ボキ』って音がして、すごく痛いんだよ！　いつも薬指なの。治ったころに、またやっちゃうこともあるし。」

「うわ・・・。」

「テニスとかバドミントンとか卓球とかだと、ラケットとボールの距離感がなかなかつかめなくてね。」

「ああ。でも、それは慣れで・・・。」

「そうかもしれないけど、あたしと同じように普段は運動をしない子たちが、最初の授業からちゃんとラケットにボールを当ててるのを見ると、落ち込むよ～。」

「くくく・・・。そうだね。」

「あ。想像してるんでしょう？」

「わかる？　紫苑さんが豪快に空振りしてるところ。」

「もう！　・・・いいけどね。あきらめてるし、もう体育の授業はないから。」

それでも不器用が情けなくなることは、今でもたびたびある。

ため息をつきながら、ハンドルに置かれた秋月さんの手をちらりと見ると・・・指が長くて綺麗な手。

それに比べてあたしの手は・・・。

両手を広げて裏、表と、ひっくり返しながらながめてみる。

小さい。

指が短いし。

婦人用の手袋は、必ず指先が余ってしまう。

指先がほっそりしてないから、爪なんか丸っこいもんね。ネイルを

やるような形のいい爪にはならないよ。

「あーあ。この手でどれくらい損してるんだろう？」

また、ため息。・・・・え？！

視界の端から、すっと、もう一つの手が現れて、あたしの右手が包まれた。

一瞬だけ込められた力の温かさを残して、すぐに元の場所へ・・・・。

手、手を・・・握られた？

握られた右手をかばうように左手で覆って胸元に引き寄せる。

また、いきなり？！

なんで、いつもいきなりなの？！

秋月さん！

「だって、小さくてかわいいんだもん。」

そんな。

だからって、いきなり。

「悩んでる紫苑さんもかわいいなあ。あはははは。」

そんな！

やっぱり、助手席に乗ったのは間違い？！

「やだなあ、紫苑さん。いきなり襲ったりしないよ。」
そっ、そうだよね?!
「昼間だし。」
うそ?!
じゃあ・・・暗くなったら・・・?
「あ、あの、あたし、今日は早く・・・。」
「ぷ・・・。冗談だよ、紫苑さん。あはははは!」
「・・・ホントに?」
この前のこともあるし、そんなに簡単に信用していいんだろうか?
「んーーー。もしかしたら、ほんのちょっとだけ。」
正直に言われちゃってるよ・・・。
秋月さん、笑ってるし。
困っちゃう。
でも・・・ちょっと可笑しい。
そうか。
嫌だったら、あたしも遠慮なく怒っちゃえばいいんだ。

秋月さんだったら、分かってくれるはず。

うん。

きっと大丈夫。

安心したら、一緒に笑うことができた。

47　新しい関係は戸惑いとともに（2）

「午後は一緒に何か作ろうと思うんだけど、どう？」

車を運転しながら、秋月さんが尋ねる。

「何かって、どんなもの？」

「ケーキかパイでも。」

あ、楽しそう。

「うん、いいね。あたし、いつも一人で真剣勝負だから、誰かと一緒にやるのは嬉しいな。」

「え？　最初のアップルパイは、さっきの友達と一緒に作ったんじゃないの？」

「あ、真由？　あれは一緒に作ったとは言えないの。真由は腕を組んで口を出すだけで、まるっきり鬼教官みたいだったんだから。」

「へえ。優しそうな子なのに。」

「いつもは優しいよ。でも、あのときは厳しかった～。半分は仕事みたいなものだからかも知れない。」

「そう。じゃあ、今日は一緒に。」

あー。
この笑顔。
こんなにカワイイ笑顔だけど、油断しちゃいけないのよね・・・。
まあ、いくらなんでもパイやケーキを作りながら何か・・・なんてことはないか。

というわけで、初詣は有名な大きなところではなく、秋月さんの家の近くにある神社へ。
車は家の車庫に入れて、ぶらぶらと歩いて。

車から降りるとき、助手席に乗っていたことにあらためて気付いた。
大丈夫だった。なんともなかった。
もう・・・大丈夫なんだろうか？

そのまま買い物にも行く予定なので、秋月さんが家から持って来たお菓子の本をのぞき込みながら相談。

「今日中に食べられるもの？」

「そうだね。この時間だったら、夜には食べられると思うけど。型からはずせなければ、紫苑さんが全部持って帰ってもいいよ。」

「それはちょっと食べきれないよ。明日まで仕事はお休みだし。」

そうだ。
龍之介にあげてもいいな。

家が近くなんだから、取りに来てもらえばいいもんね。

・・・でも、一緒に作った秋月さんが食べないのは変だよね？

「ああ、そうだ。あたし一人じゃ作れないものがいいな。」

「どんなもの？」

「デコレーションが必要なもの。あとは・・・シュークリーム、かな。」

「スポンジケーキを焼いてみる？　僕もあんまり自信ないけど。」

「そうなの？　二人とも自信がないっていうのが面白いかも。」

「たしかに。あ、じゃあ、スポンジの方は失敗しないようにセットのを買おうか。今日はデコレーションを楽しむってことにして？」

「あ、いいね。」

自分で食べるなら、下手でもいいもんね。楽しみ～♪

神社でお参りのあと、おみくじを引いてみると・・・中吉。今年は良い年になる？

『恋愛・決断して吉』

これは、現在の人に決めろという意味？

でも、一年は始まったばかり。
いつまでに決めろとは書いてない。

「秋月さんは？」

「末吉。まあまあ、かな？」

そう言って、おみくじをこちらに向ける。

恋愛、恋愛・・・『相手次第』？　なんだこりゃ？
誰でもそうだよね？

もう一度、自分が引いたおみくじを見る。

『結婚・よろし』

つまり、自分が決めた相手と今年中に結婚するのがいい？
・・・まあ、決心するだけでもいいんだっけ。焦るのはやめよう。

あれ？！

あたしがこんなことを考えてる！
普通の女の子みたいに！

すごい進歩！！
苦しくなったり、頭がガンガンしたりしないなんて。
さっきも助手席に乗っても平気だったし。

・・・やっぱり、秋月さんだから・・・なの？

大きなスーパーで買い物のついでに、フードコートでお昼を済ませる。

「ケーキでお腹がいっぱいになっちゃうと思うから、夕飯は軽くでいいかな？」

「簡単なサンドイッチでよければ、あたしが・・・。」

「え？　ほんとう？」

「あ、あの、見た目はきれいじゃないよ。珍しくもないし。ハムとチーズときゅうりをただ挟むだけだから。」

「十分！　紫苑さんが作ってくれるなら、それだけでも美味しいよ！」

あんまり喜ばれると、ちょっとプレッシャーだ・・・。

少しでもマシになるように、高いチーズを買ってみる。

逆効果だったら困るけど・・・。

お正月の住宅街は静か。

たぶん、車が少ないから。

毎年、お正月になると、普段は気にならない車の音が、実はけっこう大きいのだと気付く。

小さな公園で遊んでいる親子の笑い声。

生け垣を渡る小鳥の声。

――――　あたしたち、もしかして夫婦に見えたりしてる？

スーパーの袋を下げて、笑いながら歩いて。

二人とも“お出かけ！”　みたいな服装じゃないから、いかにも普段通りで当たり前なカップルに見えそう。

これで、さっきのチャイルドシートがついた車に乗っててても、誰も不思議に思わないかもしれない。

ほんとうは何も決まっていないのに。

・・・変なの。

「もう少し、もう少し・・・・・あ、ストップ！」

秋月さんの合図でハンドミキサーを止める。

「ほら、角が立つ。これでＯＫ。」

泡立てた生クリームをゴムべらでたしかめながら、秋月さんが微笑む。

「うわー、ホントだ。あたしはこのタイミングがわからないんだよ

ね。」

「少しずつ様子を見ればいいんじゃないかな？」

「だめ。少しずつだと、途中で面倒になっちゃうの。で、もういいやって思ってやめると早過ぎて、一気にやると通り過ぎちゃう。」

「紫苑さんて、面倒くさがり？」

「うん、そうだよ。それに不器用がくっついてるから、どうにもならないの。」

「そこは僕がフォローできるから、気にしなくていいよ。」

秋月さん・・・。

「そういうこと、サラッと言うんだから。」

だいぶ慣れてきたけど。

「だって、言わなくちゃ、紫苑さんに気付いてもらえないよね？」

「う・・・。どうせ察しが悪いですよ！　イ～～だ。」

「あ。そうやってふくれるところも好きだな。」

や～～～ん。

何を言っても平気なの？

笑ってばっかり！

先に作って冷ましておいたスポンジケーキに生クリームとスライスした果物をはさむ。
スポンジケーキを上下に切り分ける秋月さんの手際の良さに感心する。

「そうかな？　誰でもできると思うけど。」

そんなことありません！

全体にも生クリームを塗って、さらにトッピング。
絞り出し袋を使って生クリームを絞りだそうとしたけど、力加減が分からない。

まず、出ない。
出ても、一定じゃない。
狙いが定まらなくて、位置が変。

「ぷ。」

隣で秋月さんが笑ってる。

「じゃあ、やってよ。」

ムッとして秋月さんを見上げると、弓なりの眉を上げて、得意そうにニヤッとした。

「そうやって、得意気な顔する・・・・・。」

「じゃあ。」

しまったーーーー！！

「右手はここを押さえて、左手はこう。」

油断した。

手を握る口実にされた！

「で、ゆっくりと押しながら、慌てないで・・・・。」

いや、慌てます！

「あの、ちょっと待って。」

「手首じゃなくて、腕を使って。」

無視？！

「あ、あとは自分で。」

「まあ、いいから。」

聞こえてるよね？！

「こんな感じで少しずつ・・・・。はい、ちょっと移動。」

「動くときくらい離して。」

手が止まる。

秋月さんがこっちを向いた。

「移動したら、もう一回？」

「・・・だめ。」

「じゃあ、やだ。離さないもーん。」

そんな笑顔で・・・。

負けた。
今回は。

肩から力を抜くと、秋月さんが小さく「やった！」とつぶやいた。

呆れるあたしを促して生クリームを飾りながら、くすくす笑っていた秋月さんが楽しそうに言った。

「初めての共同作業です♪」

それって、ケーキを切るんだよね？
でも・・・似てるかも。

笑いがこらえきれなかった。

48　新しい関係は戸惑いとともに（3）

あたしが作るサンドイッチは、薄切りの食パンにマヨネーズとマスタードを塗って、薄切りのハムときゅうりとチーズを挟むだけ。超簡単。
でも、切ると、具の色がピンクと黄色と緑だからきれいだし、きゅうりのぱりぱりした食感が気に入っている。
いつもあたしの手料理をけなす妹と弟でも喜ぶ、数少ないメニューの一つ。

「トマトをはさむ人もいるみたいだけど、水分が出るから、うちではこれだけなの。」

今日は小さめに4つに切ったサンドイッチを、秋月さんがすばやく口に入れる。

「あ、美味しい。紫苑さん、料理が不得意だなんて、謙遜しすぎだよ。」

そう言いながら、きれいにお皿に並べてくれた。
それだけで、いつもよりも美味しそうに見える。

「そう・・・かな？」

褒められた。
・・・嬉しい。

「うん。明日の朝食にもう一度食べ・・・」

「ちょっと待って！」

「え？」

「今日、作り置いて、という意味？」

「違うよ。明日の朝。」

やっぱり。

「作りません。明日の朝は自宅にいます。」

「だめか・・・。」

あたりまえ！

「うーーーん、白ワインでも開けたいけど、紫苑さんを送って行かなくちゃいけないからなあ。」

いちごが山盛りに載ったケーキとサンドイッチ、それにサラダが並んだこたつにあたりながら、秋月さんが言う。

「そうそう。今日は我慢してね。」

「もし、間違えて飲んじゃったら？」

「電車かタクシーで帰れるよ。駅って、昼間行ったスーパーのところでしょう？」

秋月さんの言うことをあしらうのも、だんだん上手くなってきた気がする。

あたしがダメって言うことが分かっているから、秋月さんも安心してあれこれ言うんじゃないだろうか？

要するに、これは言葉のゲーム。

恋人候補の男の人と、そのつれない相手役を二人で演じて楽しんでるんだ。

「ああ、その手があるか。残念。」

大袈裟にため息をついてみせる秋月さん。

まったくね・・・。

「あ、でも、ダメだよ、それじゃ。」

「どうして？」

「紫苑さんが無事に帰り着いたかどうか分からないから。」

「じゃあ、どうするの？　秋月さんも一緒に来てくれるの？」

「うん。一緒に行って、帰るのを見届ける。」

「どうもありがとう。」

「だけど、それだと遅くなっちゃうな。電車が終わっちゃうかも。」

「ああ、ちょっと遠いもんね。仕方がないから」

「泊めてくれる？」

ほら来た。

「違います。帰りのタクシー代を出そうと思って。いくらなんでも、お酒を飲んだ男の人を泊めるわけにはいかないもの。」

残念でした！

「あ、飲んでなければいいの？」

「飲んでないなら、車で送ってね。」

「・・・・負けた。」

勝った！

ケーキはスポンジがかなり甘かった。

まあ、全体としてはそこそこの味だったし、作るのを楽しんだから十分だったけど。

「半分は割り当てだからね。」

取り分けた分を食べながら、秋月さんが言う。

「半分食べなくちゃ、帰れないのかな？」

もしそう言うなら、意地でも食べなくちゃ。

「あ、紫苑さん、もしかしてそれを口実に、うちに泊まろうと・・・。」

「違います。」

「僕は『持って帰って』って言おうと思ったのに、紫苑さんて意外に積極的・・・。」

「違うってば！」

もう！

そんな色っぽい目つきで見ないでよ！

「あははは！　紫苑さんをからかうとおもしろいよ。はい、あ～ん。」

フォークに刺した大きないちごを顔の前に差し出されて。

「・・・ふん。」

横を向いても、いちごはそのまま。

秋月さんは上機嫌。

・・・食べるしかないじゃないの。

しょうがない。
一回だけ。
パクリとひとくち。
「・・・・紫苑さん。」
フォークを引っ込めながら、秋月さんが笑いをこらえてるのがわかる。
なんでしょう？
いちごが大きくて返事ができないんですけど。
「大きな口。」
何も言えなかったので、テーブルにあった紙ナプキンを投げつけてやった。

そんな調子で、秋月さんとあたしはおかしな攻防と笑いを繰り返しながら楽しく過ごした。
秋月さんはサンドイッチをとても気に入ってくれて、たくさん褒めてくれた。
「マヨネーズが多すぎないところがいいね。きゅうりも上品な感じがするし。」
家族はただ「美味しい」としか言ってくれなかったから、こんなコメントもとても嬉しい。

「いつか、朝、会ったときに、『はい、お弁当。』とか言って渡してくれないかなあ。」

リクエスト？
そんなに気に入ってくれたんだ・・・。

でも。

「朝は忙しいから無理かな。」

それに・・・まだ、そういうことをするほど親しい関係じゃない。
・・・つもりなんだけど。

今日はあたしがお皿を洗い、秋月さんが拭きながら片付ける。
学校時代のことや仕事や家族の話、いろいろな話題でたくさん笑いながら。
こうやっていると、ほんとうに楽しい。
隣に立たれて、最初は緊張していたけれど、笑っているうちに忘れてしまった。

いつもこうだったら安心なんだけどな・・・。

あたしのマンションまで３０～４０分くらいだろうと見込んで、８時半過ぎに秋月さんの家を出ることにした。
上着を着ながら、前回の秋月さんの行動を思い出して、思わず身構えてしまう。
警戒していれば、びっくりしないで対処できるはず・・・だよね？

そんな心配を知ってか知らずか、秋月さんは自分も仕度をして、ガスやコンセントを見回っている。
そのまま一緒に玄関を出て、鍵を閉めて。

よかった・・・。
これでもう警戒する必要はないね。

後ろのドアに近付く途中で、後ろには乗れないことを思い出した。
助手席に乗り込みながら、ぼんやりと考える。
あたしはこれから、ほかの人の車の助手席に乗るだろうか？

龍之介の車では？

龍之介の車では、あの席が好きだ。
運転席の後ろ。
バックミラー越しに話したり、龍之介の後ろから話しかけたりするのが好き・・・。

「紫苑さん、・・・疲れた？」

「あ、ううん。」

ちょっとぼんやりしちゃった？

「・・・いや、やっぱりちょっと疲れたかな？　笑い過ぎかも。ふふ。」

「緊張して疲れてるんじゃない？　僕の・・・冗談に警戒しなくちゃいけないから。」

「ああ、あれ？　なんだか慣れちゃったよ。」

「気にならない？」

「うーん・・・、秋月さんはそういう人だって分かったから大丈夫。」

「“そういう人”？」

「言葉ではいろいろ言うけど、・・・それに、ちょっと行動にも出すけど、一定のラインを引いてくれるって。」

そう。

秋月さんは信じていい人。

「あたしを傷つけるようなことはしないはずだって。」

秋月さんはちょっとのあいだ、じっと前だけを見ていた。

それから。

「うん。僕は紫苑さんのことを傷つけたりしない。絶対に。」

うん。

だから、あたしも秋月さんのことをちゃんと考える。

でも・・・もしも・・・。

「秋月さん。あたし、まだ、」

「紫苑さん。」

赤信号で止まった車の中で、秋月さんがあたしを見て優しく微笑む。

「急いで決めなくていいよ。それに・・・覚悟もできているから。」

覚悟？

秋月さんの覚悟を見つめ過ぎないようにしたいけど・・・。

こんなに優しい秋月さんの気持ちに応えられればいいのだけれど・・・。

今は何も言えない。

秋月さんが好き？

好き・・・だと思う。

一緒にいると楽しいし。

でも・・・わからない、と思ってしまう。

「紫苑さん。」

「・・・はい。」

「今度、一緒に飲みに行こうよ。」

「お酒？」

「うん。」

そういえば。

「龍之介が、秋月さんはどんなお酒でも飲めるって言ってたよ。強いの？」

「そうだなあ、けっこうたくさん飲めるよ。」

「酔っ払うとどんな？」

「誰にでもキスしちゃう。」

「うそっ？！」

絶対に飲み過ぎないようにさせなくちゃ！

「うそだよ。あはははは！　飲んでも変わらないって言われる。」

「びっくりした・・・。」

やりそうなウソっていうのが、また・・・。

「大丈夫。ちゃんと紫苑さんを送って行けるくらいにするから。」

「うん、いいよ。いつごろ？」

「そうだなあ・・・、来週の金曜日は？」

「そのころなら仕事も落ち着いてるかな。いいよ。」

そうやって一緒の時間をたくさん過ごしたら、あたしの気持ちもはっきりするかも知れない・・・。

マンションの前で止まると、あたしと一緒に秋月さんも車を降りた。

まさか、部屋まで・・・？

「ええと、秋月さん、ここで・・・。」

慌てて断ろうとするあたしを秋月さんが笑う。

「はいはい、分かってるよ。」

よかった・・・。

では。

「今日はお邪魔しました。送ってくれてありがとう。」

深々とお辞儀をして、頭を上げた・・・ら。

肩に手が、そして、おでこに秋月さんの唇が。

また〜〜〜?!!
しかも、外だよ?!

「おやすみ、紫苑さん。」

文句を言おうと口を開いている間に、秋月さんは車に乗りこんでドアを閉めてしまった。
あたしは文句を言う相手を失い、口をパクパクするばかり。
秋月さんがにこやかに手を振り、赤い車が走り出す。

・・・やられた。
うっかり警戒を解いたのがいけなかった。

よし。
次は最後まで気を抜かないぞ!

2枚のガラス扉を抜け、エレベーターのボタンを押して外を見る。

・・・誰もいない。
一人で帰って来たときと同じ。

秋月さんとの新しい関係。
誰かを好きになることが怖くなくなった。
助手席に乗れるようになった。

秋月さんのおかげ？
秋月さんだから？
いったいあたしは・・・どうなるんだろう？

49 ≪やっと≫

紫苑。

やっと気付いたね。
誰かを好きになることは怖くないって。

少しずつ少しずつ、氷が解けるように、紫苑の心は柔らかくなってきていたのに、紫苑の頑固さがそれを認めようとはしなかった。
優斗のあの性格は、紫苑にとっては一種のショック療法みたいなものだったけれど、紫苑にはちょうどよかったみたいだね。

あとは・・・紫苑次第。

紫苑が誰を愛するようになるのか。
ほんとうは、もう紫苑の心のどこかでは決まってるんだろうか・・・？

僕が紫苑と別れる日も近いんだろうか・・・？

そういえば、おみくじが。

『恋愛・決断して吉』だっけ？
まさに、紫苑の今の状況かもね。

でもね、紫苑。
断ることも決断の一つ。

優斗でも、龍之介でも、紫苑は幸せになれるよ。
だけど、それは紫苑も相手を愛していれば、の話。

愛せなければ、断ってもいいんだよ。
いや、愛せないなら断らなくちゃダメだ。

紫苑と別れるのがいやで言ってるわけじゃない。
愛せない人と、愛しているふりをしたまま一緒にいるのは不幸だからだよ。
もしそんなことになったら・・・僕は不幸な紫苑をずっと見ていることになる。助けることができないまま。

それは僕も悲しいよ。

世の中には憎んでいると思っている相手を、心の底では愛している、なんていうこともあるみたいだけど・・・。
紫苑にはまっすぐな恋をしてほしい。

紫苑。

勇気を出して。

愛することも、断ることも。

そうしたら、きっと幸せになれるから。

紫苑が幸せになれるまで、僕はそばにいるからね。

いつも一緒にいるよ、紫苑。

50　どうして？

1月4日、日曜日。

明日から仕事が始まる。
今日はお正月の最後のお休み。
スキーで始まった9連休も今日で終わる。

不安だったスキーは、龍之介のおかげでとても楽しかった。
帰りに秋月さんの家で夕飯を食べたことも。

秋月さん・・・とは、ちょっとだけ進んだかも。
あたしが秋月さんの気持ちと正面から向き合えるようになった分だけ。
でも、これからどうなるのかは、自分でもよくわからない。

ただ・・・、やっぱりわからないな。

今日はいいお天気。
このお正月は、元旦からずっと穏やかな日が続いている。
もったいないから、お散歩でもしてみようかな？

・・・・そういえば、あの公園。
去年、龍之介が夜景を見に連れて行ってくれたところ。
歩いて行ける？

携帯のナビで確認・・・これかな？

どれくらいの距離だろう？
３０分以内で行けるなら、一時間くらいの散歩コースでちょうどよさそうだけど。
まあ、無理そうだったら、途中で引き返せばいいか。行ってみよう。

軽めの上着とスニーカーを選び、小さいキャンバス地のバッグに最低限のものを入れて出発。
通い慣れた駅への道とは反対方向へと曲がって。

日差しは弱いけど、風がなくて暖かい。
のんびりと見回すと、門の門松のほかに、周囲の家の庭木にはいろいろな色の実がなっている。
黄色い夏蜜柑、ゆず、オレンジ色の金柑、赤い千両。
プランターや花壇には青や黄色や赤紫のパンジーに、薄桃色と淡い緑の葉ボタン。
冬だけど、にぎやか。

ナビで確認した曲がり角を数えながら前を向いたら、坂の入り口に赤い鳥居が道路に向かって立っていた。
その向こうに続く林の中の階段を、年配のご夫婦が下りてくる。

神社があるんだ・・・。

行ってみる？
ナビでは、目的の公園はその林の向こう側。神社を抜けて行けば近

いかも知れない。
でも、林が薄暗いし、あんまり人が歩いてないみたいだし・・・やめよう。

林を迂回して上る道。
あの日、龍之介の車で通ったのは、きっとこの道。

龍之介、どうしてる？
家はこのあたりだって言ってたけど・・・。

坂道を上るのって意外にキツい。
最近、そういうことって全然やってなかったもんね。
自宅と駅、駅から会社までの平らな道を往復してるだけ。
いつもより歩くのは、デパートやショッピングセンターへ行くときだけ。
坂道って、ほぼ無縁。

―――　着いた。

ちょっと息が切れたな。
ここまでで２５分。

小さい公園だ。
すべり台とブランコと砂場。ベンチが一つ。
こんなに小さいのに駐車場があるのは、併設のテニスコートのため

なのかな？

龍之介と一緒に景色をながめたのは・・・あの辺？

行ってみると、今日は白っぽい灰色のような景色が広がっている。

あれが、龍之介と二人で出かけた一回目だった。
車の中でアップルパイを食べて。

「ふふ。」

あたしはアップルパイのことを何て言われるか心配で、叫び出したいくらいだったっけ。

もう一度、夜の景色を見たな。工場の明かりだって。
あの日はたいへんだった。
龍之介にはすごく面倒をかけちゃって。
ほっぺにキスくらいじゃ、お礼は足りなかったかも。

そうだよね。

あたしは龍之介にたくさんお世話になってる。
スキーだって、ずっと見捨てないで付いていてくれた。
お酒を飲んだあとも、必ず送ってくれる。

・・・あれ？　ここまで２５分？

あたしはのんびり歩いて来たし、龍之介は歩幅があたしよりも大きいだろうけど・・・近くはない。
“あたりまえ”　って思っちゃいけないんじゃないだろうか？

・・・龍之介。今、何してる？

そろそろ帰ろう。
家に着くころにはちょうどお昼。
お汁粉でも食べよう。

道路へ出ようと振り向くと、公園にはいつのまにか人が。
黒いジャージ姿でストレッチをしている。ジョギングの途中？
一人でぼんやりしてるところを見られたかな？
変な人だと思われたら困る。早く立ち去ろう。

顔を伏せ、急ぎ足で公園と駐車場の間を通り抜ける・・・と。

「紫苑？」

呼ばれた？
こんなところで呼ばれるってことは・・・龍之介？
もしかして、あのジャージの人？

やっぱり。

―――　会えた。

浮かんだ言葉にドキッとする。

“会えた”　なんて・・・まるで、会いたがっていたみたい。

そのために、ここまで来たみたい。

その解釈にますます鼓動が強くなる。

近付いて来る龍之介の顔をまっすぐ見られない。

「あ、あの、あけましておめでとうございます。」

顔を見ないで済むように頭を下げる。

「あ、そうだな。あけましておめでとう。」

龍之介も律義に返してくれて。

「どうしたんだ、こんなところで？」

「ええと、ちょっとお散歩。体がなまっちゃって。」

視線を合わせないように、奥に広がる景色を見るふり。

「ああ、俺も。年末年始で食って寝てたら３Ｋｇも増えた。」

「そうか。だからジョギング？」

会話が進みだしてほっとする。

振り向いて龍之介を・・・見ようとしたけど、顔を上げられずに視線が泳ぐ。

龍之介は少しの間、静かに立っていた。
それから。

「紫苑。」

「はい？」

「アップルパイは、もういいよ。」

え？

驚いて龍之介の顔を見た。
静かな表情。
穏やかで、何もない・・・。

「アップルパイ？　でも、あれは・・・。」

「この前もらったので十分。うまかったから。約束は完了。」

「そう・・・なの？」

どうして、急に？

「それだけ。じゃあな。気を付けて帰れよ。」

龍之介が去っていく。動けないままのあたしを残して。

もういい。
約束は完了。
それだけ。

それだけ・・・。

この、胸の中の重たいものはなんだろう？
約束から解放されたのに、心が軽くならないのは何故だろう？

・・・風が冷たい。

帰ろう。
ここには居たくない。

日差しの暖かさも、生け垣や花壇の色も、なんだか薄れてしまったみたい。

やっぱり、冬は冬。
寒くて、冷たい。

スニーカーなんか履いて来るんじゃなかった。

足が冷たいよ。
手袋をしている手も指先が冷える。
風が強くなった？
髪がなびくと、耳が寒い。
坂道を上って汗をかいたんだろうか？
背中が冷たいような気がする。肩も寒い。
風邪をひいたら困るな・・・。

龍之介。

どうして、急にあんなこと・・・。

気にするのはやめよう。

美味しかったから十分だって言った。
要するに、あたしの実力を認めたってこと。

ね？

そうだよね、龍之介？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9926x/

風が吹いたら恋をしよう。

2011年12月13日20時54分発行